

三木清全集  
第十六卷

岩波書店刊より



時代と道德・現代の記録  
他



## 目次

時代と道徳	1
現代の記録	一八五
續現代の記録	三六三
コラム『東京だより』他	五一七
コラム『東京だより』	五一九
コラム『窓 外』	五五三
コラム『一朝一夕』	五七三
コラム『大波小波』	五九四

コラム『銃眼』……………	五九八
後記……………	六〇三

## 時代と道徳

- 序(三) 政治の過剰(五) 外來思想の今日(七) 閑暇(九) フレッシュマン(一二) 標語の力(一三) 郊外風景(一六)  
原因と結果(一八) 儒教復興其後(二〇) 瑣末主義の弊(二二) 英雄崇拜の顛倒(二五) 改組の効果(二七) 生活條件と時間(二九) 詩のない時代(三二) 世界の現實(三三) 世代の速度(三五) 國民文化の實力(三七) 現代の語彙(三九)  
日本人の非合理性(四二) 外人の日本發見(四四) スポーツと自然(四六) 哲學と文藝(四八) 不使用の獨占(五〇)  
人間の再生(五二) 隨筆時代(五五) 人物拂底(五七) 學位問題(五九) 雜誌文化(六一) 級長選舉の教訓(六三)  
佛教と翻譯問題(六五) 「汝自身を知れ」(六七) 東洋人に還る(六九) スポーツと健康(七一) 一つの日支問題(七三)  
日本と支那思想(七六) 倫理の喪失(七八) 悲劇を知らぬ國民(八〇) 「養老」の傳説(八二) 日本文化の方向(八四)  
歳末風景(八六) 新世代の意欲(八八) 暗示の影響(九二) 「舉國一致」(九三) 肅正時代(九五) 國民的と國際的(九七)  
政治と教育(九九) 試験の明朗化(一〇一) 詩の復活(一〇三) 社會の常識(一〇五) 競技と政治(一〇七) 停年制(一〇九) 公衆の解消(一一一) 新個人主義(一一三) 文化の公共性(一二五) 教員の道徳(一二八) 漢字の效用(一二〇)  
文學者の不遇(一二二) 地方と文化(一二四) 國語國字の問題(一二六) 低調な世の中(一二八) 制度と人(一三〇)  
人民の聲(一三二) 生産者の立場(一三四) 明治の再認識(一三六) 思想のない政治(一三九) 養生の説(一四一) 宗教の改革(一四三) 世界の認識(一四五) 「轉向」の性格(一四七) 開いた心(一四九) 愉快な義務(一五一) 「哲學のない日本」(一五三) 派閥の醜争(一五五) 英雄主義の待望(一五七) 素人の説(一五九) 二律背反の問題(一六一)  
人文教育の矛盾(一六三) 知識と傳統(一六五) 青年日本(一六七) 保健問題の深刻性(一六九) 古典と檢閲問題(一七一)  
故郷なき市民(一七三) 現代教養の困難(一七五) 取締政治(一七七) 統制と空想(一七九) 原版後記(一八二)



## 序

この書を作品文庫に入れるに當つて、私は何の修正も行はないで元の儘に留めておくことにした。時代のクロニクルの意味を有する本書の如きにおいては、それが正しいと考へたからである。その論ずるところは、現在ではやや不適切になつた點もなくはないが、また現在において一層適切になつた點もあるやうに思ふ。

嘗て芳賀矢一はその『國民性十論』（明治四十年）を次の言葉で結んだ。「嗚呼この過渡の時代、佛が出るか鬼が出るか。眞に傀儡子の手箱の様な感がある。凡そ個人としても、その人の長所は直に短所である。我民族の美德の底には亦必ずその缺點の潜んで居ることも知らねばならぬ。世界の舞臺に出た以上は亦それだけの覺悟が必要である。變へるべき所は變へねばならぬ。守るべきところは守らねばならぬ。よく我過去を知つて、よく新來の長所を探る覺悟があらば、今の時は眞に多望の前途を胚胎し得る時代である。今の時に之をなし遂げ得ぬ日本人は祖先に對しても濟むまいとおもふ」。現代は芳賀がこれを書いた時よりも一層重大な意味において過渡の時代で

ある。「嗚呼この過渡の時代、佛が出るか鬼が出るか」、我々の覺悟に依存するところが多い。この時代の一時期の風俗と精神的ミリユーとモラルとを批評的に記録したのが本書であり、私自身としては、今讀み返してみながら若干の感慨を禁じ得ない。

一九三九年五月

東京に於て

三 木 清

## 政治の過剰

一法律學者の學說が政治問題化した。私は法律學上のことを論ずる資格を有しないが、假りにその學說が間違つてゐるにしても、そのためにその人が曲學者、非國民であるかの如く云ふのは、いかがであらうか。そこにすでに政治の過剰が見られ、かかる政治の過剰が思想の惡化の一原因となつてゐはしないかと疑はれるのである。

すべては政治化する。これが現代の特徴である。單に一法律學說のみではない、經濟學說も、社會學說も、哲學說も、文學や藝術も、政治化する傾向を有し、また政治化してゐるのが現代である。かやうな現象の原因が根本的に究明さるべき場合、徒らにかやうな現象に追隨して政治の過剰を惹き起すことは危険である。

一定の思想に基いて政治的に他の學說を非難し壓迫しようとするとき、それは單に政治的問題に留まり得るものではない。他を政治的に問題にすることによつて、自己が學問的に問題にされる立場におかれるといふことに注意しなければならぬ。論者は政治的權力によつて他に沈黙を命

令し得るかも知れない。しかし同時に自己が、欲すると欲せざるとに拘らず、問題の據つて立つ論理上及び方法論上の諸法則の前に引出されることになるのである。

かやうにして中世の終り、近世の初めにおいて、キリスト教神學は新しい科學的思想を非難し壓迫すればするほど、却つて自己が科學的に批判される傾向を激成したのであつた。それは西洋のこと、過去のことであると云つてはならぬ。比較はすべての學問研究に要求される一法則である。

「命令的な人間は、いかに彼等が自分たちの神に仕へてゐると信じてゐるにしても、自分たちの神に對してもまた命令するであらう」とニーチェは書いてゐる。

政治家は事件を好みがちである。ちやうど醫者が病氣を好むやうに。病氣をなくすることを目的とする醫者が病氣を好むやうに、事件を少くすることを目的とすべき政治家は事件を好む。政治家は事件によつて思考するといふ習性を持つてゐる。それだから政治が過剰になると、國民は神經質にされ、事件によつて刺戟されることを求めるやうになる。さなくとも今日のやうな社會的不安の時期においては、その不安の心理からとかく事件が期待されがちだ。物を不必要に政治問題化することなく、寧ろ政治の過剰の除かれることが望ましい。

政治の過剩は政治的思考の充實を示すものでなく、反對に政治の科學性の沒却、政治哲學の貧困を語るものである。(一九三五年三月十九日)

## 外來思想の今日

正規の教育を受けた者と獨學した者との間に相違があることは、普通の人間の場合には、たいてい認められることである。獨學者においては、學問上の常識が缺けてゐるとか、その知識が有機的でないとか、その學問にゆとりがないとか、などと屢々云はれてゐる。このやうな相違は、獨學者の多くが速修者であること、また彼が學校といふやうな學問的傳統の雰圍氣を知らないことに基いてゐる。

明治維新以後の日本の社會的發展は實に目覺しいものであつた。この發展は西洋の學問の輸入によつて爲されたのであるが、その發展が急速であつただけ、日本は西洋の學問を絶えず速修することを餘儀なくされてきた。ところがこのやうな必要から、日本の學問はいつしか速修者の學風とも云ふべきものを作り出したのである。

或る思想について、その傳統、一般的背景、歴史的關聯を度外視して、ただその結論だけを覚え込もうとするのは、速修者の學風の特徴である。一定の思想が作られ、また動いてゐる具體的な過程には興味を持たないで、ただその結論らしいものを捉へて議論したがるのも、速修者の學風の特徴である。かうしてただ結論だけが關心されるところから自然に形式主義が生れる。我が國に蔓延してゐる形式主義は日本が従來西洋の學問を速修しなければならなかつたといふ事情と關係がある。そしてかかる思想上の形式主義は形式化された儒教道德と結び附いて助長されたのである。

外來思想の排斥が頻りに叫ばれてゐるが、さういふ西洋思想の弊害は、よく考へると、西洋思想そのものの有する制限を正確に指摘したものでなく、却つてそれは我が國における速修者の學風の弊害に基くものが多いと思ふ。そして實は、外來思想の排斥が盛んになつた今日、我が日本の學問はそのやうな速修者の弊を克服し得る段階にまで生長發展してきてゐるのである。特に傳統や背景を必要とする文化科學哲學等に關しては、西洋思想のほんとのものは一般にはこれからやつと理解され消化され得る地盤が出来たのであつて、もちろん排斥など云ふべき場合ではない。ただ今日必要なことは、速修者の學風、就中その形式主義を矯正することである。

道元は日本最大の思想家の一人であつた。この道元は支那崇拜を露骨に述べてゐるが、そのことは彼が支那人も及ばない獨特の思想を生むことを妨げなかつた。日本精神といはゆる日本主義とは同じでない。日本精神は主義以前の事實である。それは過去に固定したものでなく、發展してゆくものであり、それを發展の方向において眺めることが大切である。（三月二十六日）

## 閑暇

七十年の昔、或るドイツの哲學者は自國民の特徴を記して、第一に、ドイツ人は閑暇を持つことを理解しない、と云つてゐる。また次に、ドイツ人はあまりに澤山讀み、そして支配的な黨派に對して屈從的であることに熱中する、と書いてゐる。

ドイツ人はヨーロッパ人のうち最も勤勉な國民であると稱せられてゐる。しかしそれは彼等が閑暇を持つことを理解しないからであると云はれる。ドイツは世界中で本が最も多く出版される國として知られてゐる。ドイツ人は澤山讀む。讀書はもとより甚だ必要有益ではあるが、ただあまりに澤山讀んでゐると、その思想がブッキッシュになり、抽象的理論に流れ、高い識見、こま

かな直観が失はれ、廣い批判力が養はれるどころか、却つて意外に近視眼的になり易い。支配的な黨派に對して屈從的であることに熱中してゐるといふ言葉も、ドイツの現状を考へれば間違つてゐるとも云へぬであらう。

しかるに右の如きことがまた現在日本人の特徴と見られはしないかと危まれるのである。日本人の勤勉は世界的に有名である。出版される本の多いことにおいても日本は世界有數の國である。あまりに澤山讀むといふ批評は日本人の場合にもあてはまらなくはないやうである。

勤勉が美德であることには異論があり得ない。けれども、ただ勤勉であることは人間を知らず識らず屈從的ならしめる。ただ勤勉な人間は精神を失ひ、善き常識を、またエスプリを無くするのがつねである。我々は閑暇を持つことを理解せず、閑暇の價値を知らないのではないか。それは怠けてゐることではなく、大局に目をつけ、大きなものを捉へるために必要である。閑暇を持つことを理解し、閑暇の有する深い意味を知るのではなくては、眞にすぐれた文化は生れ得ないのである。

日本人の勤勉によつて日本の商品は世界の市場を風靡した。日本人の勤勉によつて無數の書物が翻譯され、著述され、文化の華は開いてゐるかのやうに見える。けれども、前の場合には閑暇

を持ち得ずに低い賃銀で働く勞働者があるやうに、後の場合には閑暇も知らずに働かざるを得ないインテリゲンチヤがある。日本人の勤勉は稱揚されてもよいが、また我々は閑暇を持つことを理解し、且つ閑暇を持ち得るやうにしなければならない。いつまで我々の文化は熟しない果物のやうな状態を持続するのであらうか。

ドイツ人の勤勉はドイツ帝國を興隆せしめた。しかし彼等はあまりに勤勉で近視眼的となり、政治的智慧を有しなかつたために、世界大戰の大不幸に見舞はれた。國民がただ勤勉を誇りとすることもまた危しと云ふべきである。

(四月二日)

## フレッシユマン

到る處、新入學の諸君に出會ふ季節になつた。大學の新入生を意味するフレッシユマンといふ語は我が學生諸君の間でも日常化してゐる。さういふフレッシユマンがいま全國各地方から東京へ集まつてきて、この都會に新鮮な氣分を漂はせてゐる。

この光景に接しつつ、私は古代ギリシアのアテナイを想見する。そこには諸地方から、イタリ

アから、アフリカから、小アジアから、あらゆる身分の人間が知識を求めて集まつてきた。今日の諸君には奇異に思はれるにしても、プラトンやツキデイスの頃にはどこにも本屋がなかつたことを考へ給へ。書物の賣買はアウグストウス時代に至るまで存在しない。アテナイによつて供給された教育は、學生が實地に視るもの、聴くもの、心で捉へるものであつて、讀むものではなかつた。もちろん近世の大學の如き組織は存しなかつた。いな實に、アテナイそのものが大學であつたのである。

ユニヴァーシティといふ語の示すやうに、大學のもとの意味は普遍的な知識の學校といふことである。このことはあらゆる地方から出てきた人々の一つの地點における集合を意味してゐる。あらゆる地方から來るものでなければ、どうして知識のあらゆる分科の教師と學生とが見出されるか。一つの地點に集まるのでなければ、どうして學校といふものがあるか。このやうな、言葉の根本的な意味において、古代のアテナイ、近代のパリやロンドンは、これらの都市そのものが大學である。

大學の意味が限られた建物に存しないとすれば、今日の東京は、そのものが大學である。ここでは新聞、雜誌、書肆、圖書館、展覽會、講演會、様々のものが事實において大學の機能を、即

ち普遍的な知識の學校の機能を營んでゐる。知識を求める者、そして知識を職業とする者が全國からここに集まつてゐる。

印刷術の發達は大學の意義を失はせると云ふ者がある。だがさうではない。多數の人間が集合することによつて作られる知的雰圍氣の中に入り、思想を交換するといふことは有益である。話される言葉は書かれた書物とは違つた多くのものを與へる。人間的な接觸、談話の價値は極めて大きい。しかし今日の大學の實際では、教師と學生との接觸、談話は稀なこととなり、書物の代り得ない部分は少くなつてゐる。それらのものは寧ろ大學以外で與へられる。今日の大學の不幸は、東京の如き都市では社會の知的水準が甚だ高まり、知的職業が擴大し、多様化し、知識人が集中し、言葉の根本的な意味において大學の機能を營みつつあるものが事實上大學の外にあるといふことである。

このやうな事實は、教育者諸氏はもとより、學生諸君も反省すべき多くの問題を含んでゐる。

## 標語の力

(四月十六日)

標語がどのやうな力を有するかは、今日誰でも知つてゐる。靴屋も、洋服屋も、理髪屋も、みな何か新しい標語を掲げて人の心を引かうと努力してゐる世の中だ。うまい標語が掲げてあると、その言葉の力で、ついその方へ引かれてゆくといふのが我々の心理である。とりわけ政治は多くの點でこのやうな人間心理を利用してゐる。

人間は政治的動物と定義され、また言葉を有する動物と定義される。かくの如き人間の特徴を最も鋭く現はしてゐるものは標語であらう。政治的動物は標語を有する動物である。

標語は政治的な言葉である。といふことは、それはつねに或る意圖を含んだ政策的な言葉であり、その意圖を正確に觀て取ることが大切だといふことである。言葉は或る魔術的なものを有するが、言葉の魔術性は標語において發揮される。といふことは、標語の魅力に盲目的に従ふのは屢々甚だ危険だといふことである。

例へば、西洋文明は物質文明であるといふ言葉は、標語的に繰返されてゐる。なるほど科學は西洋で發達したものである。しかし科學文明と物質文明とは必ずしも同一でない。西洋文明を科學文明と云はないで物質文明と云ふところにこの標語の魔術性がある。科學の發達には大なる精神的力が要求されるのみでなく、そのほか西洋にもすぐれた精神的文化が存在する。もし西洋文

明を物質文明と稱するならば、それは却つて從來日本が西洋文化のうちただその科學文明の輸入にのみ力を注いできたといふことを現はしてゐる。即ち物質的であつたのは却つてこちらの態度である。明治以來の政府は、自然科學の方面は獎勵したが、精神的文化の發達のためには殆ど何等積極的な努力をなさなかつた。これでは綱紀肅正の標語を掲げた内閣がみづから綱紀問題で倒れるのと同じやうな結果にならぬとも限らない。

非常時といふ標語が掲げられてから既に久しく、人心の倦怠を傳へられてゐる。しかし我々の必要とするのはただ別の標語ではない。すべてが政治化する今日のやうな時代はまた既に標語過剰の時代である。學問上の問題ですらも單なる標語によつて置換へられ、判斷されるといふ状態である。標語に引かれて國民が分析と批判の力をなくすることの危険であるのは云ふまでもなく、またあまりに多くの標語は、あまりに長く續く雄辯と同様、却つて我々を倦怠せしめ、無關心ならしめるものである。もとより政治と實踐は標語を必要とする。過剰な標語を一掃して明朗な大衆の魅力を有する標語を掲げることが大切であらう。

(四月二十三日)

## 郊外風景

誰でも云ふことだが、大震災以後東京は郊外の發達が著しく、そのために以前場末であつた新宿、澁谷等が繁昌し、ほんとの中央、麴町邊は却つて寂れる傾向がある。次第に郊外へはびこり、そこに特殊な賑やかさをもつ郊外風景或ひは郊外文化を作つてゐるが、中心地は弱つてゆくやうに見える。

これは家屋を始め、我々の種々の生活様式と關係があることはもちろんであるが、併しかうやたらに外にばかり擴がつては、不利不便も色々生じてくる。交通政策にもつと思慮を費すならば、中央の繁榮も回復し、そのことはまた郊外の健全な發達のためにも必要であらう。

私は郊外居住者の一人として、かかる郊外風景を見ながら、考へる、日本の現在の文化はこの東京の状態がよく象徴してゐはしないかと。文化上の大地震は關東大震災よりずっと古く、明治の初めに溯られる。この大地震以後日本の文化は新しいものを追うて外へ擴がり、ここに特殊な「郊外文化」を現出したが、その中心は衰弱してゐないであらうか。丁度大樹の枝は繁茂してゐるが、伐り倒してみると髓が腐りかけてゐたり、中がうつろであつたりするのと同じやうに。

ジュベールは書いてゐる、「毎年我々には樹木についてのやうに節が出来る、何か智慧の枝が伸び、或ひはうらがれ、また枯死する」。青年には青年の智慧の枝が出てゐる。中年になると新しい節が出来、そこから中年の智慧の枝が出るが、そのために前の枝は日蔭になつてうらがれる。それぞれの年齢には、他の年齢のため、或ひは他の年齢になるとうらがれてしまふ智慧がある。一國民の文化にも同様に年齢があり、新しい節から枝が出ると前の枝が枯死するのは自然であるが、しかし樹心がうつろになつてしまつては、新しい智慧の枝も茂り得ないであらう。

現在日本の文化が中心の衰弱した都會の「郊外文化」の如き有様であるには種々の理由がある。外國文化の主に新しいところが取入れられて、その根柢をなすギリシア文化やキリスト教についての根本的理解が缺けてゐることも一つの理由である。西洋の文化には、神の問題、意志自由の問題の如き中心問題がつねに存在して、哲學者も文學者もこれと格闘することによつて自分の思想を發展させ、深化させてゐる。然るに今日の日本の文化にはこのやうに決定的な中心問題がはつきり存しない。實はかかる中心問題を明瞭に設定することが今日我々の任務である。尤も我々に無意識的にせよ執拗につきまといつてゐる東洋的な「自然」の如き問題もあるのであつて、これと新たに格闘するなど、今日の文化の中心問題である。

いづれにせよ、郊外と中央とを活潑に結び附ける文化上の交通政策は思想の自由である。特に日本の文化に對する批評の自由であつて、さうでなければ現に見られる如く徒らに末梢的なことにとらはれ、せいぜい「和魂洋才」といふぐらゐが落ちであらう。

（四月三十日）

## 原因と結果

最近非常な歡迎を受けたのは小原法相の似而非愛國主義者に對する取締についての演説である。私も法相の言明に大いに敬意を表するものであるが、同時にそのやうな似而非者流の輩出するに至つた原因を考へてみる必要があるであらうと思ふ。

いつたい愛國心を持つてをらぬ人間は先づないと云つてもよいので、もし自分には愛國心がなと云ふ者があれば、虚勢を張つてゐるに過ぎぬと考へて間違ひないほどである。自分の國のことをいろいろ批評する者も、根本において自分の國を愛してをればこそ批評するのであつて、もし何の愛もなければ批評する興味すら起らないであらう。しかるに自分の國のことを批評する者は愛國者でないかの如く非難されるとすれば、それは言論の自由が認めらるべきものでないとい

ふ前提の下においてでなければならぬ。言ひ換へると、似而非愛國主義者の出たために言論が壓迫されたといふのみでなく、寧ろ言論の壓迫があつたために似而非愛國主義者も生じ得たのである。言論にもつと自由が認められてゐたならば、そのやうな似而非者流の輩出する筈もなかつたであらう。

また似而非者流の出てくるといふことは、偏狹な道德主義乃至精神主義の弊害の現はれでもある。金持は自分は金を持つてゐるとは滅多に云はぬものだが、狹隘な精神主義の存する場合、ひとは誰でもが持つてゐるものを自分だけが持つてゐるかの如く稱したがるものである。そしてそのやうに自稱することが更に政治的意義を有し得る場合、なるべく早く名乗る者が勝つといふのが政界の常道であるので、似而非者流も生じ易い。似而非者流をなくするには偏狹な道德主義乃至精神主義に陥らないやうに、國民に科學的な或ひは哲學的な見方を教へることが必要である。客觀的眞理と主觀的信念とが必ずしもつねに一致するものでない限り、主觀的に純眞でありさへすれば足りるとは云ひ得ないのである。

道德主義者において屢々見られる缺點は、猜疑心が強いことである。これは彼等のいふ道德が歴史的現實から離れて主觀的なものとなつてゐる證據である。精神教育を盛んにするのも結構で

あるが、愛國心の如き事柄について國民が互ひに猜疑するといふやうな結果に陥らぬ、偏狹な主觀的なものでないことに留意しなければならぬ。

論語に「三人行必有<sup>二</sup>我師<sup>一</sup>焉」といふ句がある。どんな人の行ひでも、自分の手本とならぬものはないといふ意味である。それのみでない、どんな人も他の師であるかのやうに振舞ひたがるといふのが人間普通の心理である。言ひ換へると、人間はとかく説教したがるものだ。愛國主義者もその例だが、かかる人情を抑制することがまた人間にとつて大きな修養である。尤も説教心が人間に具つてゐるのは、各人いづれも何かすぐれたものを持つてゐる兆しであるとも見られ得る。他人に説教するのもよからう、ただ他人の説教も大いに聴くことを忘れてはならぬ。

(五月七日)

### 佛教復興其後

佛教復興が唱へられてから既に時を経たが、實際に佛教がどれほど復興したか、疑問である。近年最も盛んになつたものと云へば、佛教でなく寧ろいはゆる類似宗教を挙げねばならぬ。人或

ひはこれと呼んで「新興宗教」と云ふ。そのやうに類似宗教の勢力の伸張にはめざましいものがあり、かやうな現象のうちには社會學的考察を要する種々の問題が含まれてゐる。

むろん或る意味では佛教の勢力は次第に強化してきた。佛教が思想善導の道具として用ひられることは多くなり、佛教家の側でもこれを大いに徳とするといふ傾向である。先日、地方長官會議の席上で松田文相は、「一般大衆の思想を啓發し、國民精神の作興を圖るには宗教團體及び宗教家の自覺を促す」ことが必要であると述べてゐるが、このやうな訓示が地方長官の前でなされるといふことは、すでに宗教家にその用意のあることを示してゐるとも云へる。また佛教家の間でファッショ的政治團體に類する組織も作られたさうである。政治に結び附いた勢力としては佛教も確かに強化してきた。

けれども、佛教家が修身教科書にあるやうな國民道德を説いて廻つたところで、佛教は復興するであらうか。もしそこに何物かの復興があるとしても、それは斷じて佛教のことでなく、或る他のもののことである。佛教家が國民道德の説教者になるとき、彼等は自分自身で佛教を無用ならしめてゐるのである。もしも佛教が道德論と異ならないならば、佛教は無用であらう。またもし今日佛教家が國民道德を説いて廻る内部の必要があるとすれば、それは教團自體が「株式會社」

などと全然同様のものとなつてゐる證據でなければならぬ。

今日の社會において眞の宗教家として生きることは極めて困難なことであらうと思ふ。しかるに我々は教團内部の醜い紛争については屢々聞かされるに反して、そのやうな精神的困難、これに對する苦惱、破綻については殆ど何事も聞かないのである。現代において眞の佛教家として生きる事が如何に困難であるかが正直に告白されるだけでも、佛教に對する人々の關心をもつと喚び起し得るに相違ない。

明治以來佛教はあまりに道德論化し、宗教としての特質を失つてきた。今日佛教が復興するとすれば、それはそのやうな道德論化から自己の純粹性へ還ることに始まらなければならぬ。それは恐らく現實の社會においては甚だ不利な、危険な結果にならう。併しもし現實の政治的勢力と結び附いて現世の繁榮を計ることがすべての問題であるならば、佛教とは名のみのものである。

(五月十四日)

## 瑣末主義の弊

官公の諸役所の瑣末主義のために事務が滯滞し、一般市民の蒙る迷惑も少くないといふ非難を聞くことは既に久しい。その改善もなかなか行はれ難いやうであるが、この頃はまた新たな瑣末主義が特に思想や教育に關する方面において見られるやうになつた。

先日、來客の話に、今度佛英和女學校が改稱されて白百合女學校とかなつたといふ。佛英和といへば、東京でもかなり評判の好い女學校と聞いてゐたが、立派な傳統のある名稱が變更されるに至つた理由は、佛英和と云へば、日本がフランスやイギリスの下に立つてゐることになるから善くないといふ非難があつたからださうである。まるで言葉の遊戲だ。それが何處で眞面目に考へられたか私は審かにしないが、ともかく改稱が行はれた點から見ると、その非難は有力な筋から出たものであるに相違なからう。私はこの學校と何の關係もない、ただ現今の瑣末主義の一例として擧げるまでである。

國粹主義が盛んになると共に、この種の瑣末主義が流行するやうになつた。ほんとの日本精神はもつと潤達澄明なものであると思ふが、この頃ではさうでなく、日本主義は瑣末主義に陥りつつある。外國文化の移植は外國崇拜にもとづくといふはれるけれども、それは、もし欲するならば、文化上の外國侵略であると考へてもよいわけだ。「東方からの光」と云へばもとキリスト教のこ

とを意味したが、その「東方からの光」は西洋を侵略した。或ひは寧ろ西洋によつて侵略されて、その文化の血肉となつた。同じやうに日本はインドの佛教を侵略してきた。ところが近年ではその佛教が學術的研究の方面では多くヨーロッパに侵略され、更にそのヨーロッパの學術的研究を日本が侵略してゐるといふ有様である。

外國への伸張の意圖が猛烈である場合、政治上の場合にも見られる如く、文化上の場合にも國內のことが疎略にされるといふことは起りがちであつて、この點を警戒すべきであると云ふのは正しいことである。しかし同様の警告は、特に政治上の場合についても、絶えず發せられねばならぬことなのである。

瑣末主義が形式主義であることは云ふまでもない。しかるに現今流行の瑣末主義の一因は、日本主義が外國流の獨裁主義にかぶれて、獨裁者氣取の風を作りつつあるところと存すると云へなくはない。權力を欲する獨裁者氣取の者が自己の狹隘な權力を示すには瑣末主義が甚だふさはしいのである。

教育及び文化のことは特にいはゆる百年の大計を樹立することが大切である。しかるにこの方面における瑣末主義の流行が今日注目すべき一特徴となつてゐるのである。（五月二十一日）

## 英雄崇拜の顛倒

ひとを攻撃するのは、その人を重んじてゐるからである。その人を何等重んじてゐなければ、攻撃の相手にするといふ氣にもならないであらう。だから社會的に活動する者にとつて最も恐しいことは、他人から攻撃されることでなく、全然黙殺されるといふことである。攻撃を受けてゐる間は社會的生命があるわけだ。

今日は名士の受難時代であるといふことを屢々聞かされる。實際、血盟團事件以後、名士の災難に遭つたものは一々記憶できないほどである。現に名士の身邊警戒のために使はれてゐる人の數を調べてみれば、意外に大きな數字が出てくるかも知れない。警視廳の今度の暴力團狩によつてそのやうな警戒をどこまで減じ得るに至つたか疑問であらう。

名士の受難は、今日我が國において廣く見出されるところの顛倒された英雄崇拜の一つの現はれにほかならない。社會が少數の英雄たちによつて動かされてゐるかのやうに考へればこそ、名士を襲撃する氣にもなるのである。またそのことが何か英雄的行爲でもあるかのやうに考へ

ばこそ、暴力も振はれるのである。すべては逆立ちした英雄崇拜にもとづいてゐる。ファッショ的傾向が盛んになると共に、かくの如く逆立ちした英雄崇拜が種々の形をとつて現はれてゐる。そしてそのことはまた、我が國のファッショのうちに眞に崇拜されてゐる英雄が存しないといふことを間接に證明してゐるわけだ。

警視廳の暴力團狩はまことに結構なことであるが、その一方、政府の近來大いに奨勵してゐる精神教育とか國史教育とかいふもののうちに英雄崇拜の氣風を助長するものが少くないとすれば、矛盾であると云はねばならぬ。暴力團的行爲をなくするためには、歴史を動かしてゐるものが少數の英雄たちでなく大衆であるといふことを徹底的に教へ込むことが何よりも必要なのである。とりわけ今日の我が國の情勢においては、英雄崇拜は逆立ちする危險が甚だ多いことを考へねばならぬ。英雄崇拜が逆立ちすると、眞の英雄も作られないのであつて、現代の日本に大人物がないといふことも日本人があまりに英雄崇拜的であり、自由主義的なところがないといふことにも大きな原因がある。

人間はあらゆる場合に自分を現はすものだ。この頃の外國思想攻撃なども逆立ちした英雄崇拜の一例であり、攻撃者自身が却つて外國思想を極めて重大視してゐるのであつて、これに反し外

國の善いところをどしどし取入れて自分を養つてゐる者は外國をそれほど崇拜もしてゐないのである。

(五月二十八日)

## 改組の効果

帝國美術院の改組を繞つて描かれる波紋は次第に擴大してゆく。それがどのやうに落着するにしても、所期の目的を達することは覺束ないのではないかと思ふ。といふのは、この改組自體が根本的に新しい原理に立つたものでなく、依然として展覽會本位に考へられてゐるやうに思はれるからである。

これまで帝國美術院は展覽會を開くだけの能しかなく、従つて世間ではただ「帝展」といふ名で通つてゐた有様であつた。このやうに展覽會本位であるといふことが、いろいろな弊害の生じてきた最も大きな原因であつた。その會員はいづれも多數の門下生を擁して、帝展といふ組織を利用して勢力を張つてゐた。そこに多くの情弊が生じてゐたのであつて、文部省がその打開に乗り出したものとすれば、理由のあることである。ところがその後の紛擾を見れば、今度の改革も

やはり展覽會本位といふことを離れてゐないことを示してゐる。しかるに帝國美術院の改革は實はこの展覽會本位といふことの打破でなければならなかつた筈である。

すべての組織は、いつたん出來上ると、獨立の生命を具へたものとなり、それ自身の運命を有するものとなる。しかもその運命はその組織が生存してゐる社會的環境との關係において決定されることが多いといふことに注意しなければならぬ。その運命が社會的環境に依存してゐる場合、どれほどそれ自體の組織を改良しても到底再び榮えることができないことは、例へば或る事業會社にどれほど政府が保護を與へても更生發展しないといふことによつて屢々實證されてゐる。そのやうな場合にはその組織の局部的な改良をやめて新しい組織を新しい原理の上に立つて作ることが却つて成功の近道である。

帝展が行詰つてゐたのは單に内部的原因からのみでなく、また社會的環境との關係においてであつた。そしてそのやうに社會的環境との關係において行詰つてゐたのは單に帝展のみでなく、どの展覽會中心の美術團體にもそれと同じやうな行詰りが感ぜられてゐた。そのことが、今度文部省が在野有力展覽會の代表者たちを引抜いてくることに成功した大きな原因であると思ふことができる。帝展のみでなく、あらゆる美術團體が、早晩そのやうな行詰りを打開する必要があつた。

文部省の投じた一石によつて美術界に分解作用が行はれて、今後どのやうに發展してゆくかに興味のある問題である。それによつて美術界に新しい機運が生ずるならば、文部省の意圖したと云はれる美術統制とは反對の意味において今度の改組には大きな効果があることになるのである。

(六月四日)

## 生活條件と時間

昨日は時の記念日であつた。最近毎年、時の記念日の宣傳が行はれてゐるが、その宣傳の目的は主として時間の正確とか時間の厲行とかの奨励にあるやうである。

集會、訪問、出勤、その他いかなる場合にも、時間が正確に守られることは大切であり、善いことである。その意味で時の記念日はまことに結構な企てである。しかしそれと共に我々は時間が決して抽象的なものでないことを考へなければならぬ。

一般的に云つて、都會人は田舎者よりも時間の觀念が強いであらう。ちやうど都會人の會話が

速く、田舎者の談話が緩やかであるやうに、そこに生活の速度の差異があるからだ。また労働者は農民よりも時間の觀念が強く、會社の従業員は個人商店の使用人よりも時間の觀念が強いであらう。このやうに生活條件の異なるに應じて、人々の時間の觀念もおのづから異つてゐるのがつねである。そして時間の觀念の強い者はあらゆる場合に時間を厲行するといふのが普通である。だから西洋人が我々よりも一層時間の觀念が強いといふことは、彼等の生活がいはゆる「機械文明」に滲潤されてゐるためだとも云へる。そして我々日本人も、そのやうな機械文明が次第に滲透してくるに應じて、おのづから時間の觀念が強くなつてきてゐるのである。これは時の記念日の宣傳などとは獨立に進行する社會的發展の事實である。

具體的な時間は我々の生活時間である。労働者にとつて時間の問題は何よりも労働時間の問題である。時間の厲行などと云つても、抽象的に考へらるべきことではない。そこでまた農村の工業化が擴大することになれば、農村生活者の時間の觀念も一層強くなるであらう。或ひはまた都市の商店が、外國において見られるやうに、特殊なものを除いて、一般に夜間は閉鎖するやうになれば、少くとも日曜日は休業するやうにでもなれば、都市居住者の時間の觀念も更に強くなるに相違ない。

近年各個人の家の時計の時間がたいへん正確になつた。これはラヂオの普及がもたらした最大の効果のひとつである。時間の厲行の方面において公私の生活の改善さるべき點はなほ多く、時の記念日がその改善を目差してゐるのは有意義なことである。しかしこのやうな機會に時間の問題が生活時間の問題として具體的に人々の活潑な關心の對象とならなければならぬ。時間の嚴守によつて他人の時間を無駄にしないことも大切だが、また他人の時間をやたらに搾取しないやうにすることが甚だ大切である。

(六月十一日)

## 詩のない時代

日本は詩人國だと云つて誇りにされてゐる。なるほど和歌や俳句を作る者はどこにもゐる。しかし以前「新體詩」と云はれた種類のもの、和歌や俳句から區別される固有な意味での詩は、次第に衰微してしまつた。今日の日本は詩のない時代である。

外國では詩と文學、詩人と文學者といふ語はしばしば同じ意味に用ひられ、文學の中で詩は高い位置を占めてゐる。我が國の現代文學は多分に外國文學の影響のもとにあるが、詩の位置、詩

人と作家との關係に至つては外國の如くでない。そして詩がないといふことが今日の日本の文學全般の、いな、單に文學のみでなく文化全體の缺陷を極めてよく象徵してゐるのではないかと思ふ。明治時代にはもつと詩があつたのではないか。いはゆる「文藝復興」も詩の復興から始まらねばならぬと云へるであらう。

現代の青年が和歌や俳句にどれだけの關心を有するか、問題である。恐らく彼等は今日の四十代の人が持つたやうな感興をそれに對して持つてゐないであらう。そのやうな青年も年を経るに従つて次第に和歌や俳句に興味を持ち、自分でも作るやうになると云はれるかも知れない。そのやうになることには確かに我々日本人の持つ好きがある。しかし同時にそこに我々の精神的發展の制限があるといふことも考へねばならぬ。そこに我々の間からスケールの大きな文學者や思想家の出てこないひとつの理由が隠されてゐるのでもある。

もちろん和歌や俳句の世界においてもいろいろと革新の努力がなされてゐる。それは喜ぶべきことだ。けれどもそれだけでは不十分であり、新しい詩の興ることが要望される。我が國の現代語は詩に不適當であるといふ意見（萩原朔太郎氏）もほんとであらうが、しかし他方詩が盛んになることこそ我々の言葉が淨化されるために最も必要なことであると考へられるのである。和歌

や俳句の革新にしても新しい詩が勃興することによつて容易に實現されるであらう。一部の人々の間で唱へられる浪漫主義の運動なども詩の復興運動として具體的になれば遙かに有意義であらう。

新しい詩が興るといふことは何よりも若い世代が自己自身の感情を率直に表現し、自己自身の意欲を大膽に確立することである。今の若い世代に詩がないといふことは日本の社會と文化とにとつて大きな不幸である。彼等をして詩を失はしめたものは誰だ！詩のない今日の社會において「詩吟時代」（正宗白鳥氏）が現出した。詩吟と浪花節とが返り咲き、そしてあの感傷的な、頽廢的な小唄が氾濫してゐる。かくて眞の詩はいよいよ失はれてゆく。これが現代の文化政策であらうか。

（六月十八日）

## 世界の現實

人類の歴史は「世界」が生成しそして擴大してゆく歴史である。むかし世界征服を企てたアレクサンドロス大王が夢に描いた世界も、今の小學生が知つてゐる世界に比してなほ甚だ小なるものであらう。そのやうに世界は擴大した。或ひは同じことだが、そのやうに世界は縮小された。

嘗て世界はひとつの「理念」に過ぎなかつた。しかるに今では世界は一個の「現實」である。このことを無視する限り、國民主義も抽象的な、非現實的な理論に過ぎない。

現代は國民主義の時代だと云はれる。なるほど國民主義は今日顯著な世界的風潮である。といふことはまた、國民主義は、一國だけが國民主義的であり得るものでなく、一國の國民主義は必然に他國の國民主義を誘致し、激化させるといふことを意味する。このやうに國民主義が「世界的」になつてゐる一方、かかる國民主義を限界する「世界」が一個の現實として存在し且つ發展しつつあるといふことも動かし難いことである。國民主義にとつての脅威は、今日恐らく、他の國民乃至國家であるよりも世界である。そこに今日の國民主義の焦躁がある。

國家は個人の總和以上のものであると云はれるやうに、世界は國家間の關係以上のものである。従つて世界的といふことは單に國際的といふことではない。舊い自由主義は國家を個人間の關係と考へたやうに、世界主義を單なる國際主義と考へた。しかし世界が現實的になるといふことは世界が一全體として成立するといふことである。全體は部分の和以上のものであり、部分間の關係に盡きるものでもない。全體主義は國家主義の論理であると云はれる。しかるに世界が現實的となるに従つて、全體主義は單なる國家主義であることができなくなり、そして同時に全體主義

の哲學そのものが破産せざるを得ない。

國民的自覺が喚起されることは、それ自身としては喜ぶべきことである。けれどもそのために世界が今日においてはもはや單なる理念ではないといふことを忘れてはならぬ。「世界史」は次第に現實化してゆく。

『世界に於ける希臘文明の潮流』『概觀世界史潮』などの好著を世に示された坂口昂先生が逝かれてから既に數年になる。先生の歿後、我が國において先生の如き世界史的眼光を有する歴史家が殆ど見られないことは寂寥の感に堪へない。

(六月二十五日)

## 世代の速度

この二三年來我が國で流行してゐるものは、ドストイェフスキーにせよ、ニーチエにせよ、ベルグソンにせよ、以前我が國において一度も二度も流行したことのあるものである。さう云へば、日本文化の内部における西洋的なものもすでに歴史を持ち得るまでになつたことがわかる。やがて日本におけるドストイェフスキー研究の歴史、ニーチエ解釋の歴史などといふ論文が書かれる

やうになるであらう。

しかし他方特徴的なことは、それらの文學者や哲學者の場合にしても、以前の研究と今日のそれとの間に殆ど何等連續的な方面がないといふことである。解釋の相違はもとより、研究する者も、深く關心する者も、さほど長くもない時期の間に違つた世代へ移つてしまつてゐる。我々は世代の推移のあまりに速かなるに驚かされるのである。

外國ではかなり年をとつてから初めて世に出る作家も少くないが、日本の新進作家と云はれる人々はいづれも若か過ぎる。これは作家に限らず、評論家にしても學者にしても同じである。そしてそのやうなことにも理由があるのであつて、世代の推移の速度を語るものである。

人間の一世代即ち親子の間に規則的に觀察される年齢の差異は平均三十幾年かであり、三世代がほぼ一世代にあたるとされる。しかしこれは生物學的意味における世代のことであつて、歴史の意味における世代の形成は、人間が特にその感受性の豊かな青年時代に經驗する社會的及び文化的諸事件の影響によつて決定される。従つて社會上及び文化上の變化が甚だ急速に行はれた現代日本の如き場合には、世代の推移も速いわけである。そのうへ我が國ではこれまで正直に見て、青年はつねにより多く西洋的なものに親しむに反して、年をとると次第に東洋的なものを好むや

うになるといふ一般的傾向があるために、世代の推移も特殊な調子を持つてゐる。

世代の移りゆく速度は大きい。しかもこの國において特に老人が幅をきかしてゐるのである。現代日本の政治が青年の心に訴へることのないのも當然であらう。老人と青年とが互ひに理解できない言葉を語つてゐることが如何に多いか。しかもこの國において格別に思想問題がやかましいのである。そこにさまさまの悲喜劇が見られる。そしてまた世代の速度を考へるとき、いつまでも若くて新しいものに良き理解を持つ少數のすぐれた年長者は、この國においては特別の尊敬に値する理由がある。

世代の速度を考慮しなければならぬ。それは就中文化や思想の問題において我々が如何にあり、また何を爲すべきかについて種々の示唆を與へるであらう。

(七月二日)

## 國民文化の實力

最近唱道されてゐる選舉肅正が歡迎さるべきものであることは論を俟たない。選舉は國民がめいめい獨立の判斷を有し、それを自由に發表し得る場合に意味がある。ところが選舉肅正運動が

企てられてゐる一方、思想統制を強化し、國民を一つの思想色で塗りつぶさうといふやうな運動が行はれてゐることは、少し奇妙である。皆が同じ意見になれば選舉も不要ではないか。

官僚の手で行はれる選舉肅正運動がいつのまにかこのやうな思想統制運動と結び付き、結局選舉など無意味にする政治的傾向を助長することになりはしないかを、政黨は注視すべきであらう。

統一は力であるといふ意味で、統制も時には必要である。しかしまた統一の力は統一されるものの力に依存する。日本は國家的統一においてはつねに誇るに足るものを持つてゐた。改善を要するのは寧ろ、國民が政府に頼り過ぎる結果、個人的完成を有せず、獨立心に乏しいといふことであつた。自由主義は個人主義として非難されるけれども、それが獨立の個人としての完成をもたらしものである限り、我が國の如きにおいては、まだまだ效力もあるのである。

哲學者は多様の統一と云ふ。ただ一色のものの集まりは却つて力が弱く、統一とも云へないであらう。「その平和が恰も家畜の如く單に奉仕することをのみ學ぶやうに導かれる國民の無氣力に依存する國家は、國家といふよりも荒野と呼ぶべきである」とスピノザは云つた。

外的強制による統一は國民を無氣力ならしめ易い。この頃の思想統制にしてもそのやうな結果になりつつあるのではなからうか。統制強化のために知的文化的生産が不安にされ、不活潑にな

つてゐるはしないか。しかも現代日本文化の特殊な事情において、我々自身の文化的生産が衰へる場合には、外國の文學や思想の輸入が或る意味では寧ろ盛んになるといふことが考へられる。

翻譯書の洪水は今に始まらないが、失業インテリゲンチヤの唯一の武器が語學であるといふことと伴つて、自分の自由を奪はれた思想を外國人の口を藉りて表現するために、我が國自身の文化的生産の萎縮のために満たされない要求を外國のもので満たすために、ますますそれが激しくなるといふこともある。そこに現代日本文化のおかれてゐる特殊な事情がある。

かくて思想統制は却つて外國思想輸入を助長するといふ日本主義者の欲するのとは反對の結果になる。もつと思想の自由を認めることによつて、自國民の文化的生産活動を活潑ならしめることが、やがて我が國獨自の強力な文化を築き上げ、外來思想から獨立し得る道ともなるのである。統制のみが國民文化の實力を作るものでないことを理解すべきである。

(七月九日)

## 現代の語彙

ソヴェート・ロシヤでは、子供の集團的生活が彼等の語彙を貧弱にするといふ事實が問題にな

つてゐるやうだ。今日のロシヤは集團的生活を最も重んずる國と考へられてゐるが、子供を託兒所、幼稚園等に委ねておくことは子供の言葉を貧困にするといふ結果を生じてゐる。絶えず集團的に生活するために皆が同じやうな言葉を語り、各人がそれぞれ特殊な經驗を表現する言葉を學ぶことが少くなる故であらう。

この事實は我々にとつても種々教訓的である。それは直接には幼稚園教育の問題に關係をもつてゐる。幼稚園の利益は我が國でもなほ疑問とされてをり、出てから數年たつて惡影響が現はれると論ずる者がある。特にその子供は饒舌家になるといふことが注意される。しかし右の事實は廣く家庭と學校の問題、學校における教育方法の問題を含んでゐる。それは更に一般的には社會と個人の問題について示唆的なものをもつてゐる。社會と個人の問題が公式的理論によつて考へられるほど決して單純なものでないことを暗示するのである。

だが語彙の貧困化はもつと悪い條件のもとに大人の世界においても見られはしないか。社會的といふことは今日あらゆる方面で合言葉となつてゐる。これは疑ひもなく重要なことに相違ないが、他面において、丁度集團的生活に委ねられた子供の語彙が貧弱になるやうに、それが思想の貧困を結果してはゐないかを省みることが必要である。社會的といふことが、社會に個人が徒ら

に追隨するといふ意味になつて、個性的な言葉を少くしてはゐないか。眞に社會的であることと社會の風潮に追隨することは同じでなからう。封建的事大思想は我が國ではなかなか抜け切らない。個人主義は排斥さるべきものであるにしても、個性の尊重といふことがそれと一緒に蔑視されるのは間違つてゐる。

そのうへ様々なタブーがある。日本は世界唯一の伏字國でもある。その他枚舉にいとまがない多くの理由によつて現代の語彙は貧困化しつつあるやうに見える。もとより世界における國民主義が人類思想の語彙を豊富にしたと考へることはできないので、事實は寧ろ反對だ。嘗ては世界第一の哲學國と云はれたドイツの新刊書の如何に多くが、一々繙くを要しないほど類似の内容のものであるか。

思想的語彙は貧弱になり、若干の政治的スローガンが代用される。思想的語彙の貧困化によつて饒舌家が減じたわけでない。思想の貧困が却つて饒舌の根源であり、あらゆる饒舌を可能にするのである。

(七月十六日)

## 日本人の非合理性

日本人は理窟が嫌ひだと云ふ。理窟を云ふのは野暮なことだ。日本は昔から「ことあげせぬ國」である。理詰めで、合理的であることは非日本的なことのやうにすら考へられてゐる。

政治家にしても、人氣のあるのは志士風の、豪傑肌の非合理的な人間であつて、合理的な、従つてほんとは政治的力量のある人間は一般に人氣がない。近年最も人氣のあつた人物と云へば、多くの者が國際聯盟退當時の松岡洋右氏を想ひ起すが、この人の政治的手腕は問題でなく、ただその非合理的なところが好かれたのであらう。

日本人がほんとに非合理的な國民であるかどうかは疑問である。西洋の小説に出てくるやうな非合理的な人間のタイプが我々の間に見出されるであらうか。その非合理主義は、合理主義をどこまでも突詰めた末に生れたものとは云へないであらう。むしろ私は、日本人が理窟嫌ひで非合理的だといふ意味は日本人が實際的であるといふのと同じでないかと思ふ。従つてそれは却つてそれ自身の意味における徹底した合理主義でもある。ともかくこの實際的といふことは我が國民

性の重要な一要素であつて、日本人の強さと共にその弱點を現はしてゐる。

理論は非現實的だと云ふが、ほんとに非現實的になるまで純粹に理論を追求した日本人があるであらうか。合理追求の激しさがなければほんとの非合理主義も生れてこない。日本主義者は非合理的といふことを精神的といふのと同じやうに考へてゐるが、さうすれば日本人が特別に精神的であるかどうか、甚だ疑問になる。

國民性の問題は別として、合理的な政治家はこれまで人氣の點でとかく損をしてきた。しかしながら國民性と雖も不變のものではない。日本人が非合理的な人物を好んだのは、この國の社會の特殊性のために封建的イデオロギーが殘存してゐたからである。社會の變化するに應じて國民性も變化する。そして政治家にしても合理的といふことが次第に喜ばれるやうになつてくる。

例へば、荒木前陸相はどこか非合理的なところがあつて人氣を得たが、今の林陸相はもつと合理的な政治家のやうに感ぜられる。林陸相今回の人事行政は果然好評を博した。それが一般政治問題として客觀的に何を意味するかについては相反する見解がある。ファッシズムの場合にしても、封建的非合理的要素を清算して資本主義に適合した形態へ變化しつつあるのである。ただファッシズムはその本質上合理性を發展させることができぬ。そして今後その合理性を破壊せざ

るを得なくなる場合、危険は以前の封建的非合理主義の場合に倍加するであらう。(七月二十三日)

## 外人の日本發見

輕井澤を始め、この頃の有名な避暑地には、外人によつて開發されたものが少くないやうである。今私の逗留してゐる山中湖などもさうのやうで、外人の避暑客も多く、またこの一帯の風景にもどこか「日本離れ」のしたところがある。近年登山者が頗る殖えた日本アルプス等の如きも、外人によつて初めてその美を發見されたものであると云ふ。

自然は藝術を模倣するといふのは、オスカー・ワイルドのよく知られた言葉である。自然の美も人間によつて發見される。私どもがいはゆる「日本的な」自然の美とはやや異なる新しい自然の美を知るやうになつたのは、徳富蘆花の『自然と人生』の影響によることが多い。その中の武藏野の風物を敍した文章など中學時代には暗記してゐたもので、初めて東京へ出てきた私がこの平野の美しさを味ふことのできたのは蘆花の感化によつてゐる。その蘆花にしても恐らくイギリスの文學や藝術の影響を通して關東の平野の美を發見するやうになつたのだらうと思ふ。

西洋人の發見した自然が近年日本人に好まれるやうになつた大きな理由の一つには、我々の生活そのものが種々の方面において西洋的になつてきたといふことがある。我々の感ずる自然の美の如きも生活と全く無關係であるとは云へないのである。

自然のみでなく藝術などにおいても、浮世繪の場合のやうに、外人によつて發見されてから日本人が高く評價するやうになつたものも少なくないであらう。我々はそのことを必ずしも恥とするにあたらないので、寧ろ外國人を感心させ得る立派なものを我々が所有してゐることを誇りにしてよいのである。進んで考へれば、我々が我々自身の東洋的な眼をもつて西洋のものを大いに研究して、西洋人がこれまで氣附かずにもたやうなものをそのうちから發見することに努めるのが、人類文化にとつて有意義なことであり、またそのことは我々自身の文化の發達向上にも役立つのである。或ひは我々自身が西洋の學問や藝術をしつかり身につけて、その眼で東洋のものを見直すことによつて從來注意されなかつた好いものを發見するやうにしなければならぬ。現に山岳の方面では、日本アルプスの美を西洋人から學んで以來、この種の新しい美を日本人自身が自分の國において到る處發見するやうになつてゐる。

この頃國際文化振興會などによつて日本的なものを外國に紹介するといふ努力がなされてゐる

が、右のやうな事情を考へてみることはその事業にとつても必要であらうと思ふ。

(七月三十日)

## スポーツと自然

西洋人は自然を征服しようとするに反し、東洋人は自然に順應する。そこに兩者の生活態度の對立があり、東西文化の本質的な差異が存すると云はれてゐる。このやうな差異は醫術の方面においても認められるところで、西洋の醫藥の學は理知的、分析的、局部的であるが、漢方、本草の學は直觀的、綜合的、有機的であることを特色とすると稱せられる。

しかし今日我が國においても西洋流の醫學が支配的となり、我々の身體や健康についての考へも變つてきた。一般に自然の見方、自然に對する心にも變化が生じてゐる。これは單に學問や實生活の方面においてのみでなく、我々の生活の周邊をなすに過ぎぬやうに見えるスポーツの如きにおいても認められることである。

登山、キャンプ、ハイキング等、自然を對象とするスポーツは年を逐うて盛んになつてきた。

これらのスポーツのうちには、古人が自然に遊ぶと云つたのとは異なる、自然に對する新しい心が動いてゐるであらう。そこには自然から分離し、自然に對立するやうになつた精神がある。そこにはこの對立と獨立とを意識してゐる人間がある。これは自然に順應すると云はれる東洋的な心とは違つたものである。これは寧ろ自然を征服しようとする西洋の近代科學の精神に通ずるものを有するであらう。スポーツそのものにも知的な、科學的なところがあるのであつて、このやうな理知性、科學性を無視しては近代的なスポーツの快味も味はひ得ないのではないかと思ふ。

自然の征服においても自然に對する從順を必要とする。自然に従ふのでなければ自然は征服されぬ。ただこの從順は東洋的な自然への順應とは異なる新しい道德である。そして自然に順應することを根本的な生活態度としたと云はれる日本人も、このやうな新しい種類の順應においてはなほ甚だ缺くところがあるのでなからうか。山の遭難者が多いのもそのためである。

尤も、醫學の方面で西洋醫學に對し東洋古來の醫學の價值が顧みられねばならぬと云はれてゐるやうに、我々の生活において東洋的な自然への順應を想ひ起すことも時にとつて有意義であらう。現代日本人はこのものをも忘れてしまはうとしてゐる。毎年夏になると、昔の物語にある一夜城のやうに、海にも山にも「何某銀座」といふものが出現する。都會からの避暑客が田舎へ都

會の生活をそのまま持ち込むが如きことは、東洋的復古主義の盛んな今日、やめた方がよい。

(八月六日)

## 哲學と文藝

先年文部省の思想問題調査會が何かで、フランス思想の研究を獎勵せよといふ案が答申されたと報道されたことがある。いはゆる思想問題の對策の一つとして、フランスの「ソリダリテ」(連帶性)の思想を鼓吹するがよろしいといふのであつた。その後これがどうなつたか知らない。ただ確實に云ひ得ることは、今日ではこのやうな、なまやさしい説をなす委員は一人もないであらうといふことである。

政府の方針などとは無關係に、近年我が國の文學に、特に若い世代の文學に最も顯著な影響を與へたのは、外國文學のうちフランス文學である。不安の文學、新リアリズム、行動的ヒューマニズム等、近年の注目すべき文學現象は、主としてフランス文學の影響のもとに現はれた。他の外國の作家に對する關心でさへ、フランス文學を通じて喚び起された場合が少くない。このやう

な事實には一般に文化上の、社會上の、また特に文學自體に關する、種々の理由があるであらう。一つの實際的な理由として、大學の佛文科の卒業生は、英文科はもとより獨文科に比してさへ少數であるにも拘らず、英獨文科の卒業生の大多數のやうに教師として就職する見込が少いために、却つて文學に専念するといふこともあるであらう。

我が國でフランス文學が盛んになつたのは、もとより單にかやうな外的な理由にのみよるのではなく、それが若い世代の心に内面的に通ずるものを多く有するからであるに相違ない。ところが文藝の隣の哲學はと見ると、これはまた依然としてあまりにドイツ的だ。今日の日本の學問で哲學ほど一面的にドイツ的なのは他に類例がないのではなからうか。哲學の重要な顧客先が教員であつて、その影響が普遍化しない理由がこの邊にもあるやうに思はれるほどである。いかにもドイツ哲學は學校教師的に出來てゐる。私自身主としてドイツ哲學的教養を有し、またドイツ哲學の長所を十分に認めようと欲する者である。しかし同時に今は日本の哲學の偏頗なドイツ依存についてまさに反省すべき時機であらうと考へる。

最近のドイツ哲學は何と云つても昔日の面影を有しない。「ドイツ哲學」はもはや終結した一體系ではないかとさへ感じられる。現代哲學の研究者がもつとフランス哲學の如きに注目するこ

とが必要である。この非合理主義の時代に、傳統的に主知的な、合理主義的なところのあるフランス哲學を知ることが望ましいのである。私は決して西洋模倣を勧めるわけではないが、そのことは文藝の場合から推しても日本自身の哲學の發展のために有益であらうと信ずる。

「人間を彼の祖國に限ることは事實を否定することである。そこまだけなら我々は動物であらう。ヒューマニティ（人類性）によつて我々は人間である」。これはこの頃我が國でも有名になつたアランの、あの世界戰爭當時の言葉である。だから、今日こそ哲學は益々ドイツ的にならねばならぬと云ふ人もあることであらう。

（八月十三日）

## 不使用の獨占

特許といふものは使用の獨占を意味すると考へられるであらう。ところが専門家の話によると、特許の規定が今日では屢々、大會社で新しい發明を買つて、自分がそれを使用するといふのではなく、却つてただ他がそれを使用するのを防止する目的に利用されてゐることである。新設の會社に新式の機械をもつて競争されてはたまらないからである。特許の規定はかやうにして使用

の獨占から不使用の獨占の意味に變化する。折角の發明も利用されることなく、しかも獨占される。これは社會的に見て重大な問題でなければならぬ。

しかし單に特許の場合に限らない、不使用の獨占は到る處にある。就中すべての特權といふものはつねに何程か不使用の獨占の意味を含んでゐる。特權者が「高貴に」、「貴族的に」見えるとすれば、それは多かれ少かれ不使用の獨占にもとづいてゐる。使用の獨占だけでは高貴さや貴族らしさは感じられないであらう。

ところで私に特許の話をしたのは或る大學教授であつたが、私はそのとき、いつも夏になると考へることを思ひ出した。それはあの大學の圖書館である。學校ほど長い夏期休暇を有するものはないが、その間圖書館も殆ど使はれてゐないやうである。平生は無理であるとしても、せめてこの期間はそのを公衆に解放してはどうかと思ふ。さうすれば、そこで有効に銷夏のできる者も少くないであらう。ここにも一つ不使用の獨占が存在するのではないか。それとも大學の「高貴さ」の一部分はかくの如き不使用の獨占に依存するのであらうか。

尤も、このやうなことを考へねばならぬのも、いはば一種の應急策としてであつて、我が國では公共圖書館があまりに貧弱であるからにほかならない。研究に用ひ得る唯一のものと見られる

帝國圖書館も、建築設備において東京帝大圖書館に、藏書數において京都帝大圖書館に及ばない。パリの國民圖書館、ロンドンの大英博物館文庫等、外國の著名な公共圖書館に比しては、もちろん全く問題にならぬ。新興ロシヤのレニングラード公共圖書館が今や藏書數において世界第一と稱せられるのも、注目すべきことである。最近對外的な文化宣傳に多額の費用が投ぜられてゐるが、日本も世界の文化國に伍して恥しくない公共圖書館を持つことなど、一層急務でないか。

公共圖書館がこのやうに貧弱な一面、我が國では書物に對する思想にもなほ根本において骨董趣味に通ずるものがある。骨董趣味は不使用の獨占の要素を含み、それが貴族的に見えるのも一つはそのためである。かかる骨董趣味からの脱却は、美術館はもとより圖書館の發達のためにも必要であらう。公共的な美術館や圖書館の未發達は、社會性を有する藝術や思想の未發達を端的に象徴するものであり、またその一原因でさへある。

(八月二十日)

## 人間の再生

今月(九月號)の諸雜誌は先般の國際作家會議について報告してゐる。それは去る六月二十一

日より二十六日まで三十八ヶ國を代表する多數の文學者によつて文化擁護の目的のためにパリで開かれたものである。この會議がファッシズムを文化の敵として、これに對する鬭争を決議したことは特に注目すべきことである。

その席で種々の傾向に屬する文學者によつてなされた演説のうちジードの演説がやはり最も興味深い。彼の言葉にはヒューマニズムの精神が溢れてゐる。私は飽くまでフランス人でありながら、飽くまで國際主義者である、私は衷心からコンミュニズムに賛同しながら、飽くまで個人主義者である、と彼は云ふ。今日は人間を、新しい人間を獲得することが先づ緊要だと云ひ、そして彼は、ソヴェート同盟がその新しい人間を作りつつあることに熱意を寄せてゐる。しかし彼は、ソヴェート文學において現在作られつつある新しい人間が未だ形をとつて現はれてゐないことを遺憾としてゐる。永續する藝術作品の中には、單に或る階級や或る時代の一時的要求に應へたものよりも、より多くの、より善い内容がある、ソヴェートにおけるプーシュキンの新たな刊行、シェークスピアの上演等はその一時的意義しかもたぬ無數の出版よりも、文化に對する眞の愛をよりよく示す、とも彼は述べてゐる。

このやうな考へ方はむろん政治的見地からは種々非難され得ることである。そしてその非難に

も道理がある。しかしまた最近ソヴェートでも「プロレタリア人道主義」といふやうなことが問題になり、さしあたり子供、結婚、家庭等について新しいヒューマニズム的な考へ方が起つてゐると云ふ。

社會的とか歴史的とかいふことを強調するのは重要であるが、それがこの頃とかく、あまりに政治的な、時事的な見地にとらはれて理解されてゐはしないであらうか。社會的とか歴史的とか云つても、そのうちにはより永續的な、ヒューマニスティックな問題も含まれるのであつて、かやうな問題を見逃さないことが文化にとつては大切である。時事問題が重要でないといふのではない。ただあまりに時事的な見方が却つて種々なる形態の反動を誘致する危険が感ぜられるのである。

現代ヒューマニズムの根本問題は人間再生の問題である。人間再生などと云へば、政治的な考へ方をする人々からはあまりに甘い、浪漫的なこととして笑はれるであらう。しかしまた反對に、一時的な問題に熱中してゐる者が却つて、人間性の眞實を知る者からは、あまりに甘い、浪漫的なこととして笑はれるかも知れない。

(八月二十七日)

## 隨筆時代

隨筆は日本文學において特色あるものと見られてゐる。日本人は短歌や俳句を好むやうに隨筆を好む。そして短歌や俳句が西洋の詩と比較して日常性の文學として特色づけられるやうに、隨筆文學の根柢をなすのは日常性の思想であらう。隨筆と云はれるものには西洋のエッセイと違つたところがある。日常性の尊重は東洋思想の一特色をなし、その基礎には東洋的な自然の思想が横たはつてゐる。

しかし時代は變つた。この時代において、我々の思想的課題は、東洋古來の「自然」と如何に對質するかといふことにある。西洋思想の理解が徹底的になればなるほど、我々自身の思想に對する要求が運命的になればなるほど、この課題は愈々切實なものとなるであらう。今後日本の思想は恐らくそのやうな「自然」との對質乃至格闘において發展するのほかないのではないかと思ふ。

隨筆と云はれるものも變りつつある。西洋のエッセイに類する文章が我が國でも次第に作られ

るやうになつてきた。いな、ほんとはそれにもなり切ることができないで、新しいタイプを意識的に或ひは無意識的に求めてゐるのが現状であると云へるであらう。

近年我が國は隨筆時代をもつた。それはマルクス主義の流行が種々の原因から衰へるに従つてやつてきた。社會科學書の後に隨筆書の流行が續いた。多少とも名を知られた者は誰でも隨筆らしいものを書き、もしくは書かされた。このやうな隨筆流行が我が國の隨筆文學の發達にどれほど貢獻したか問題であるが、確實に云ひ得ることは、このやうな隨筆流行が思想の彈壓と共に生じてきたといふことである。

さうだとすれば、今日なほ、寧ろ今日益々隨筆時代が來てゐるとしても、不思議はないであらう。言論の抑壓のために、ひとは甚だ屢々隨筆的に書くことを餘儀なくされてゐる。單にかくの如き外的事情によつてのみでなく、最近インテリゲンチヤの内的な思想的困惑の結果、思想そのものが隨筆的となつてゐる。更にこの頃流行の日本主義は、思想と云ひ得るほど組織的なものを有せず、それ自體もともと隨筆的である。かくて日本人に傳統的な隨筆趣味に助けられて、隨筆として書かれたのでない文章までもが著しく隨筆的傾向を有するに至つてゐる。

ここに謂ふ隨筆的傾向が眞の隨筆文學の精神とかかはりのないものであることは云ふまでもな

い。この猥雑な隨筆時代に克つて理論的意識に生かされた活潑明朗な思想的文章が興るときは、同時に新しいタイプの眞の隨筆が現はれるときでもあらう。

(九月三日)

## 人物拂底

床次竹二郎氏が急逝された。私は氏について特別に知ることなく、氏がどれほど大きな人物であつたか分らないが、どうやらその一派にとつて氏に代るべき人間がゐないらしい。人が死ぬる毎に人物拂底と云はれる。後輩は先輩よりも、後任者は前任者よりも、人物が小さいといふのが常則であらうか。ともかく人間の型が段々小さくなるやうに感ぜられる。單に政界のみでなく、官界でも、學界でも、社會のあらゆる方面において、型の大きな人物が次第になくなつてゆくやうに感ぜられる。これは何に因るのであらうか。

私の中學生の時分『成功』といふ雑誌が出て、廣く讀まれてゐたやうに記憶する。成功と名のつく書物もたくさん出版されたやうである。「成功」といふ語がいはいはその時分の合言葉であつた。それは日露戦争後における日本資本主義の急激な發展時代であつて、飛躍的に成功することも實

際に可能であつたのであらう。今日はもとより、もはやそのやうな「成功時代」でない。時代は變つたが、しかし人間のイデオロギーはつねにそれに應じて急速に變るわけではない。今日も立身出世主義といふものが、儒教的功利主義もしくは實際主義と結び附いて、なほ甚だ多く存在してゐる。

立身出世主義は通俗道德の根幹をなしてゐる。通俗雜誌の主なる内容の一つがそれであることは云ふまでもなく、家庭において親が、學校において教師が、社會において先輩が説く道德も、立身出世主義が意識的に或ひは無意識的にその基調となつてゐることが極めて多い。

立身出世主義の説教は、それを聽く者の利己心または功利心に訴へるといふ強味をもつてゐる。ところがそれは、實は、それを説教する立場にある者にとつて最も好都合な道德なのである。下級の者、支配されてゐる階級の者、後れて来る者が、みな立身出世を夢みて勵んでくれれば、これほど御し易いことはないであらう。立身出世主義者は權力を有する者に對してつねに従順である。

かの「成功時代」においては、それでもなほ冒險的な、野心的なところがあつた。しかるに現實において立身出世の可能性が益々少くなるに従ひ、立身出世主義にはもはや浪漫的なところも

なくなつて、愈々卑屈となり、阿諛的となり、事勿れ主義となる。人間の型が小さくなるといふことには、もとより種々の原因があらうが、立身出世のイデオロギーも注意すべきものである。

人物拂底は立身出世主義の通俗道德の結果である。この通俗道德の批判が我が國では種々の意味において必要である。

(九月十日)

## 學位問題

さきほど文壇は賞金問題で賑はうた。その後を承けてといふわけでもあるまいが、いま一學位論文に端を發して學園騒動が起つてゐる。先達では文藝懇話會の賞金の出所がだいぶん問題にされたが、今度は論文審査の教授會における白票問題が議論の出發點となつてゐる。

賞金は或る「業績」に對して與へられるものであらうが、學位は一定の「人間」に對して與へられるものであらう。だから賞金は、學術上の業績に見られる如く、數人の共同研究の結果である場合には、それら數人に共同に與へられる。しかるに學位は分割されない、それは業績といふよりも人間に對して與へられる。もし數人の共同研究に成る論文が學位論文として提出されたと

すれば、どうなるであらうか。私は學位に關する規定を詳しく知らないが、もしも學位が業績に對して與へられるものであるならば、その場合それら數人がその論文によつて同時に博士になり得る筈である。賞金は、同じ人間が自分の業績によつて數回受賞することも可能であらうが、學位は、一度授けられると、生涯保持されることになつてゐる。

尤も、業績と人間とは全く別のものでなく、或る人が學者として資格があるかどうかは業績によつて判別するのほかないから、學位授與も論文によるのは當然であるが、對象は人間である故に、なにもいはゆる學位論文だけでなく、その人の過去の業績及び將來に豫期され得る業績が考慮に入れられなければならない。學位が人間に與へられるところから、診療とは無關係な研究で醫學博士になつた人間も、診療の名手であるかの如き誤解を世間に與へるやうなことも生じてゐるわけである。

學位が人間に與へられるものとすれば、その決定に際して白票は無責任なことを云はねばならぬ。問題の杉村助教授の論文が哲學に關係してゐるため、自分たちには分らないとして白票を投じたといふ當局者の釋明もあつたやうであるが、同じ學校にゐる者には杉村氏が學者として博士に値するかどうか、平素の仕事からも分かつてゐなければならぬ筈である。それも分らないとす

れば、同じ教授會は同氏を助教授に推薦する資格もなかつた筈である。或る専門學者の書いたものを他の専門の者が残りなく理解できないとしても、その人が學者としてどれほどのものであるかは、學者としての常識で判斷できる筈である。

福田博士、左右田博士の時代、日本の經濟學界をリードした東京商科學も、今や元の「専門學校」となり、「専門學者」ばかりとなつてしまつたのであらうか。  
(九月十七日)

## 雜誌文化

今日我が國にどれくらゐの種類の雜誌が存在するか、正確には分らないが、大取次店東京堂で調べたところによると、現在一般雜誌が九百四十七種は發行されてゐることである。實に夥しい數である。しかもこれは東京堂で扱つてゐる雜誌だけで、學會の機關雜誌、文藝の同人雜誌、地方で賣出してゐる短歌や俳句の同覽雜誌、商店の宣傳用雜誌などは、この數字には殆ど入つてゐないのである。九百四十七種のうち教育雜誌が最高位を占め、百二種ある。これによつて見ても、教育ジャーナリズムの問題がもつと一般的な關心と批判との對象になることが緊要である。

雜誌は現代人にとつて殆ど必需品となつてゐる。今日の學生は雜誌ばかり讀んで本を讀まないといふ非難は、私どものよく聞くところである。この非難にも確かに正當な理由がある。しかしそれだけ雜誌が現代人の嗜好に適したものであることも明かである。

雜誌は一般に現代文化の特徴をなしてゐるが、特に我が國の現代文化は雜誌文化として特徴附けられることができる。これはこの文化がその主要な要素においてなほ「啓蒙的」であることを意味してゐる。或ひは啓蒙的といふことが現在我が國の雜誌の大きな特徴である。書物や雜誌の廣告が毎日新聞の一面に出るといふことは、西洋では見られない、我が國特有の現象である。かうなことは、我が國の文化が啓蒙主義的であつて、主要雜誌にしても、毎月、種々の立場における論說、種々なる種類の讀物を何でも雜多に包含してゐることからも、必要なのであらう。「雜誌」といふ言葉がまことに適切にその特徴的な内容を現はしてゐる。

日本の雜誌はもつと根本的に我が國の文化の特徴、いはばその隨筆的傾向を示してゐると見られ得る。それは我が國では古來西洋的な意味における科學や哲學が發達しなかつた丁度その傾向に相應してゐる。これまで屢々日本人の特徴として模倣性が擧げられてきた。しかしこの國の文化も外國の模倣を含まないものはなく、また日本文化にしても單に外國の模倣に留まるもので

はない。私は寧ろ「流動性」が恐らく日本文化の根本的な特質であつて、日本人が模倣を好み、流行を追ふといふやうなこともこれに關係してゐるのではないかと思ふ。雑誌はこの流動性の表現に最も適してゐる。かやうに見ると、雑誌文化は日本の場合特に検討さるべき重要な問題となつてくるのである。

(九月二十四日)

## 級長選舉の教訓

小學校生徒の級長選舉が問題になつてゐるやうである。級長選舉の運動資金を得るために、學生が板の間稼ぎをしたり、また落選したのを恨んで放火を企てたりしたといふやうな事實があつて、級長選舉の弊害が叫ばれ、その廢止が唱へられてゐることである。

級長選舉の弊害が、自治といふものを形式的に考へ、小學生にまで認めるのに由ることは、過日、本紙の論説欄において指摘されてゐた通りであらう。そのやうな選舉の弊害は小學校だけでなく、大人の社會においても見られるところで、寧ろ子供は大人の爲すことを單純に、率直に眞似たに過ぎぬとも云へる。

日本人の形式主義について屢々語られるが、この形式主義はかなり特殊なものである。形式主義は抽象的な考へ方からくるのが普通である。然るに物を抽象的に考へることが日本人の特性であるかどうか、疑はしい。過去の歴史において「科學」を持たなかつた日本人は、純粹に抽象的に、理論的に考へてゆくことは寧ろ不得手なのである。理論を抽象的だと云つて非難し得る資格があるほど、我々は嘗て純粹な理論を發展させたことがあるであらうか。

日本人は物を距離において見ることができない。だから物を客觀的に見ることができず、科學が發達しなかつた。どのやうな理論を學んでも、すぐ實際に當嵌めて、自分自身のことと直して考へないと承知しない。理論を理論として見ることができないために、どのやうな抽象的な理論でも、そのまま實際に行はうとする形式主義が生じてくる。何でも實際の意味にとられる我が國では、純粹な學說の發表も危險となるのである。理論を理論として尊重することを知らないために、理論そのものの具體的な展開に努力しないで、抽象的な理論で満足するといふことも起るのである。

どのやうに抽象的な哲學問題を論じても、それがすぐに個人的な道德、修養論に結び附けられる。深遠な哲學の裏に極めて通俗的な道德論が潜んでゐる。それが日本人の實際主義である。こ

の實際主義はどのやうな理論をもすぐ實際に直して考へる。それが却つて抽象論や形式主義の生ずる原因となつてゐる。智育の過重などとはなかなか云へないので、物を客觀的に見ることを教へるためにもつと純粹に智的な教育を行ふことが必要である。日本人の實際主義そのものが批判的に反省さるべきである。

級長選舉は形式的自治主義の弊を現はすものと云はれるが、このやうな弊は日本文化一般に廣く擴つてゐるのである。

(十月一日)

## 佛教と翻譯問題

さきには宗教團體法案が問題になり、最近はまだ學校における宗教教育が問題になつてゐる。宗教が政治的にも思想的にも新たな關心の對象となつてきたことは事實である。佛教が將來の思想の唯一の基礎であるかの如く考へることは問題であらうが、東洋古典としての佛教に對する興味は一般に増してきたやうに思はれる。

しかるに一般人が佛教に近づかうとするとき障礙になるのは、先づあの龐大な教典である。こ

れは何とか整理のできぬものか。尤も、各宗派ではそれぞれ要典が決つてゐるやうであるが、宗派的立場からでなく佛教を知らうとする者にとつて必要な教典が佛教家の手で選定されることが望ましい。これは學校における宗教教育の見地から云つても、この際問題になることである。

我々の有する佛典は殆ど凡て漢譯であるが普通の者には近づきにくい。そのうへ佛教特有の讀み方があつて、書いて貰はないと、發音だけでは我々には分らないことがある。これも思ひ切つて改めて、他の場合一般に行はれてゐる讀み方に従ふことにしてはどうか。いづれは翻譯なのだから、普通の讀み方でいけない場合には、むしろ進んでサンスクリットなりパーリなりの原語を用ひるのがよからうと思ふ。難かしい讀み方をしなければ有難味が分らない佛教でもあるまい。

近年大部の佛典の國譯が刊行されたのは、注目すべき文化的事業である。しかしなほ一步を進めることが必要である。これは漢籍の場合にも云ひ得ることであるが、單に返り點をなくして讀みくだしたといふだけでは眞の翻譯とは云はれない。ほんとの國譯であるならば、西洋人が漢文を翻譯するときのやうに、原文を解釋しその意味を取つて、誰にも分る現代語に直さなければならぬ。漢籍は凡て支那音のままで讀み、國譯は純粹な現代語にするがよいと云つてゐる漢學者もあるが、正當な意見である。漢字の制限、一般に國字國語の問題が我が國の將來の文化にとつて

重大な問題になつてゐるとき、ただ讀みくだせば翻譯であるといふやうな考へがなくなることが必要である。國粹主義の盛んな今日、インドや支那の典籍についても、純粹な國譯が企てられてよかりさうに思ふ。それは若干のディレッタントにのみ委ねらるべき仕事でない。

葬式や法要の場合、一般人には意味がまるで分らない經文が讀まれることも、宗教的には却つて効果のあることかも知れない。しかし佛典のほんとの翻譯が出来ることは、一時の政治的意圖と結び附いた宗教教育などよりも文化的にもつと重要なことである。

(十月八日)

### 「汝自身を知れ」

「汝自身を知れ」といふ言葉は、哲人ソクラテスの名と結び附いて世界的になつた標語である。これほど古い起原と同時に普遍性を有する標語はないであらう。今日我が國において、西洋文化を排斥し國粹主義を唱へる者が我々に向つて掲げる標語も、「汝自身を知れ」といふことである。ひとの知るやうに、それはデルフォイの神殿の壁に記されてゐた言葉である。その元の意味はかうであつた、「汝等驕れる者よ、汝等は人間に過ぎぬことを考へよ、我れは神なり、我れに従へ」

と。即ちその言葉は自己を神化せずにはやまぬ古代ギリシア人の驕り（ヒュブリス）に對する警告と訓戒であつたのである。そしてまさにこの原初の意味に従つて、我々は今日多くの國粹主義者に向ひ反對に、「汝自身を知れ」と叫ぶべきではないか。

この哲學的標語は後の詩人や思想家によつて、そのときどきの自覺や必要の相違に應じて種々の意味に解釋され直した。この標語とつねに結び附けられるソクラテスは、それによつて一方、我れ知れりと誇れる者の無知を自覺せしめ、他方それによつて、あらゆる人間に自己の價値を自覺せしめようとした。このやうにして「汝自身を知れ」といふ言葉は、二つの相反する意味を一つに統一し、辯證法的に理解さるべき言葉となつた。自己の無價値の自覺による謙虛と自己の價値の自覺による矜持とが同時に必要である。それがこの哲學的標語の眞の意味であらう。

ところが國民の自己認識を要求する現在の國民主義はどうであるか。自國のものは何でも文句なしに善いもの、比較なしに最上のものと認めるのでなければ満足されず、愛國者とは見られないのである。「汝自身を知れ」といふことは、全く一面的な抽象的な意味においてしか考へられない。そこに現在の國民主義の一面性と抽象性が示されてゐる。

「汝自身を知れ」といふことは、人間を徒らに反省的懷疑的ならしめるとして、ゲーテはこの

言葉を好まなかつた。人間は、自分が何であるかを、單なる自己省察によつて知り得るものではない。「ひとりの人間は多くの人間のうちにおいてのみ自己を知る」と、彼はアントニオをしてタツソオに語らしめてゐる。「汝自身を知れ、そして世界と平和に生きよ」と、ゲーテは自分自身に忠告した。詩人のこの言葉は、今日の國民主義に對して最も適切な標語となり得るであらう。

(十月十五日)

## 東洋人に還る

支那人は利己主義者だと云はれる。尤も、彼等は必ずしも近代的意味における個人主義者でなく、家族主義的なところをなほ多分に持つてゐるであらう。併し支那人は國家のこと政治のことなど殆ど考へないで、自分や家族の安全ばかりを考へてゐるといふ點で利己主義者であると云はれる。彼等には信賴し得る國家や政治が存しなかつたために、何はともあれ一身の安泰を計るやうになつたと見られてゐる。このことが道德的に理由づけられて、明哲たる者は保身の道を講ぜねばならぬといふが如き道德的イデオロギーを生じたとも考へ得るであらう。

しかるに今日我が國において、特に知識階級の間では、各自がそのやうな保身の道を考へることに次第に著しくなつてきたのではないかと思はれる。今のやうな時代には何も云はないで黙つてゐるのが賢明だ、と一人は云ふ。今のやうな時代には論文などは書かないで隨筆でも書いてゐるのだ、と他の一人は述懐する。今のやうな時代には理論など云はないで歴史でも調べてゐるのが得策だ、と更に他の一人は勸説する。かかることが知識階級の思想的混迷ないし無確信によることは云ふまでもない。しかしそこには必ずしも思想的苦悶もしくは知的絶望があるのでない。却つてそのことは、我々がいつのまにか承け繼いでゐる明哲保身のイデオロギーとも云ふべきものによつて、知らず識らず道德化され、合理化されてゐる。これは注目すべき事態である。

現在、大多數の學生の腦裡に去來するのは何よりも就職問題である。しかも野心的な成功の望みを絶たれた彼等は、むしろただ、無意識的にせよ、傳來の明哲保身のイデオロギーに助けられて、思想問題や社會問題の如きに深入りする危険を避け、先づ就職だと考へるのである。

人々は東洋人に還る、東洋的イデオロギーに還る。しかしこれをもつて東洋主義の勝利と考へることは、女優が式部袴を着けて外出するやうになつてから、それを模倣して、近頃女學生の袴姿が流行してゐるのを見て、日本主義の勝利と考へると同様に皮相的であらう。人々は積極的

に東洋主義に賛成してゐるのでも信頼をおいてゐるのでもない。むしろ思想的自由の抑壓、社會的希望の喪失、現在の政治に對する懷疑、等々が、人々をして知らず識らず、消極的に明哲保身のイデオロギーに還らしめたのである。それが時世への追隨を示してゐるとしても、實質は利己主義にほかならない。かくの如きことは國家のために慶賀すべきことであるか。

嘗てニーチェは、新しい人間の出生に對する熱意から、西歐の人間の徹底的な批判者として現れた。今日我々の間では東洋の人間の根本的な批判が必要ではないか、眞に新しい日本人の生れんがために。

(十月二十二日)

## スポーツと健康

スポーツの秋だ。どこでも運動會が開かれた。神宮體育大會もちやうど終つたばかりである。そこでは様々な美技妙技が見られ、種々の新記録が作られた。まことに新興スポーツ國日本の偉觀であつた。

スポーツは明朗だ、秋の空のやうに。卓越せる者がなんの嫉妬も成心もまじへずに讚美され喝

采されること、スポーツの如きは稀であらう。この陰惨な世界情勢のうちにおいて、スポーツは我々の心を明朗にしてくれる恐らく唯一のものであらう。

この明朗なスポーツの秋に、國民健康の憂慮すべき状態を想ひ起すことは一種の不道德であるやうにさへ感ぜられる。だが現實は回避さるべきでない。學生、生徒の近視眼が驚くべく多數であることは、さきほど報告されたばかりである。結核患者の数はどうであらう。以前はしばしば話題に上つた神經衰弱の如きに至つては、今では問題にもならないほど普遍的になつてゐるのではないか。

大衆の健康状態は改善されたか。女工の健康状態は。労働者の健康状態は。インフレ景氣と云ひ、軍需景氣と云ふも、かかる景氣は労働する男女の健康状態の改善に何等か貢獻したのであるか。その反對でなければ幸ひである。

スポーツは單に少數の人間を目標とする秀才教育の如きに陥り易い。一人の天才が生産した精神的文化は全人類共同の財産となり得るであらう。しかし健康はただ各人のものである。我々はそこに身體とその健康との有する或る宗教性をさへ認めることができる。宗教においてのやうに各人が銘々その責任を負はねばならず、そしてその前ではあらゆる人が平等である。

我が國の文學者が比較的短命で、その活動の期間も短いことについて、彼等の過勞が指摘されてゐる。過勞！このものこそ單に文學者のみでなく殆どすべての人について云ひ得ることではないか。過勞——それは現在を見れば病氣ではない。しかしそれは慢性的だ。そしてそれはその結果を將來に向つて徐々に現はしてくるものである。かかる過勞の社會的原因がどこにあるかを考へねばならぬ。

健康は最も日常的なものである。もしも日常的なものを尊重することが東洋思想の特色であるとすれば、我々はこの點において東洋人に還ることが必要であらう。またもしも精神を主とし肉體を輕んずることが東洋思想の特色であるとすれば、我々はこの點において東洋的であることから脱却しなければならぬ。

(十一月五日)

## 一つの日支問題

傳へられるところによると、日支問題も最近いよいよ重大性を加へてきたやうである。政治上のことはよくは分らないが、日支間に何か事件が起るたびに、私が考へる一つのことは、あの支

那人留學生のことである。彼等の數は以前から相當に多いが、特に近年爲替その他の關係でますます増加してゐるやうである。先達ても某私立大學の學生は、この調子では我々の教室はやがて支那人に占領されてしまふであらう、と云つてゐた。

ところで、やや不思議に思はれることは、これらの支那人留學生が本國へ歸ると、多くは排日家になり、少くとも親日家とはならないといふ話を、しばしば聞くことである。日本の留學生の場合には、ドイツへ行つた人はドイツ鼯鼠になり、フランスへ行つた人はフランス鼯鼠になるのが普通である。尤も、極端な國粹主義者になつて歸つてくる人もあるが、さういふ人は大抵、あちらで神經衰弱に罹つてゐた人だと云はれるくらゐである。

かくの如きことは日支兩國國民の國民性の相違によるのであらうか。必ずしもさうだとは考へられない。なぜなら支那人の場合でも、アメリカで勉強した者は親米家となり、イギリスで勉強した者は親英家になることが多いやうに見えるから。

實際、支那人に對し、我々が外國で経験したと同じやうな親切を示し、心のくつろぎを與へる教授が我々の間にどれほどあるであらうか。私立大學の如きは、むしろ、彼等留學生をただ營利の對象として取扱つてゐるといふことがないか。かやうなことは彼等にとつては固より、日本人

學生にとつても甚だ迷惑なことであらう。この間報道された不正入學問題の如きも、罪は支那人にのみあるとは云へないであらう。

しかし問題を單に學校内部のことだと考へると、大きな間違ひである。外國へ行くと誰でも敏感になり、身體と精神のあらゆる器官が働くやうになるものだ。留學生は廣く社會から影響される。原因は、日本人の世界的大國民としての資格に關係してゐないか。日本の社會の文化生活の水準に關係してゐないか。我々のところへ學びにきてゐる留學生に日本を眞に理解させることができないやうでは、日本文化の海外宣傳も意味がないであらう。かかる宣傳も、依然たる西洋崇拜に基き、その消極的な形態だと云はれても、致し方ないであらう。

留學生の問題は小さい問題かも知れない。しかしそこに日支問題の一つの大きな示唆がある。我々が眞に日支親善の意圖を有するならば、先づこのやうな小さなことに關して我々の誠意を示さなければならぬ。彼等が排日的になつて歸る理由と責任とについて十分反省しなければならぬ。

(十一月十二日)

## 日本と支那思想

先日、本欄で支那人留學生のことを書いたが、その後會つた人々から、彼等にしてなほ毎日的排日的であるのは、あの中華思想、即ち自己を中華として他の民族を夷蠻戎狄とする思想が依然として殘存するためではないかといふ意見を聞いた。もつともな議論である。

だが翻つて考へるに、大多數の支那人は現在、西洋で學ぶのと同じことを、ずつと安價にこの地で學び得るといふ理由から日本へ來てゐると見られ得るところがある。日本の文化は勿論それ以外の特殊性を有するが、しかしこのものは日本人が古來支那から教へられたものを多分に含み、またそれ以外の特殊性と云へば、單なる特殊性で、國際的普遍性に乏しいと考へられてゐはしないか。

現代日本の文化が、支那人がここで西洋的なものを簡便に學ばうと考へるほど西洋的であることは、決して我々の恥辱ではない。我々が勇敢に勤勉に西洋文化を移植したことが今日の日本を支那に對して優越ならしめた一つの大きな理由である。

問題は第一に、この頃日本精神として日本主義者によつて強調されるものが、この國に遊學する支那人にとつても當然有意義と考へられるやうな普遍性を持つてゐるかといふことである。單なる特殊性では價值がない。日支親善などと云つても、その政策の政治的經濟的實質は別にしても、思想的にも眞に支那人を納得させ得る普遍的な理念があるであらうか。

問題は第二に、逆に見れば、この頃の日本主義者が日本的なものと支那思想、特に儒教とをあまりに無難作に結び附けて考へるところにある。なるほど日本は有史以來支那の影響によつて發達してきた。それは日本がおかれた歴史的環境の必然的な制約であつた。しかし支那思想は果して日本的なものを發展させ發揮させるにつねに好い影響のみを與へたのであるか。寧ろ反對の場合が常識的に考へられるよりも遙かに多くはなかつたか。

ただ文字だけについても、もし我々の祖先が支那の影響のもとになかつたとすれば、どうであつたであらう。昔から今に至るまで、日本の官僚的イデオロギーは主として支那思想、特に儒教によつて組織されてきた。それが現在もなほ我が國の支配的イデオロギーの性格を規定し、そこから例へばその特殊な形式主義を生じてゐる。そしてそれが現在の對滿對支政策のうちにも種々指摘することのできる形式主義の一つの根源であるとさへ云へるであらう。

從來の歴史的環境の制約から離れ得る今日、眞に日本的なものを發見し將來に向つて發展せる立場から云つても、我々は日本と支那思想との關係について徹底的に反省すること、或ひは支那思想そのものを批判的に新たに研究することが必要であらう。今後の支那に働きかけ得る思想が昔ながらの乃至日本化された支那思想であるかどうかさへ問題である。（十一月十九日）

### 倫理の喪失

今日の社會及び人間生活を見て痛切に感ぜられるのは倫理の喪失といふことである。現代の多くの青年によつてほんとに擱まれてゐる倫理はデカダンスぐらゐるものであるかも知れない。もちろん今日も、いな特に今日は、修身教科書的倫理や修養論は大いに説かれてゐる。しかしそのやうな通俗倫理は眞の倫理でなく、これに比してはデカダンスが寧ろ人間性により深く根差す故により倫理的であるときへ云へるであらう。

現在の社會不安、生活不安、思想不安において躓いたとき、青年たちは何に彼等の行爲の據り所を求めるであらうか。私は次の如きことが今日次第に著しくなりつつありはしないかと思ふ。

先づより功利的な青年は小學校以來習つてきた倫理、儒教的倫理に據るであらう。併し彼等はそれに眞に共鳴してゐるのではない、むしろそれはどうでも好いことなのである。ただそれを守つてをれば非難もなく、立身出世の便宜もあるからである。この場合彼等にとつて好都合なことは、かかる儒教的倫理はヒューマニティ（人間性）に關はることが少く形式的なものである故に、精神的苦悶もなく全く形式的に従ひ得るといふことである。私はもとより支那における禮の思想が重要な特色を有すること、また如何なる倫理も禮的なところを有せねばならぬことを認める。しかし詳しい議論は措いて、ともかくそれが人間性を抜きにして形式化される傾向を多く有することは争はれない。それがまた今日もなほ日本の政治及び倫理的生活の官僚的性質を助けてゐる一つの力ではないかと思ふ。

他のより思索的な青年は東洋古來の「無」、支那思想の、特に佛教思想の無に還るであらう。そこではいつでも安心立命することができ。これは確かに我々東洋人にとつて大きな力である。この無はあらゆるものを自己のうちに入れることができる。その代りにここでは結局あらゆる現實がそのまま肯定され、従つて現實に對する批判がない、つまり倫理がない。特に文化に對する積極的な倫理が缺けてゐる。佛教は偉大な宗教である。併し佛教本質論はともかく、少くとも今

日の佛教は何か特別の倫理を持つてゐるであらうか。寧ろあらゆる現實に隨順して現實批判の倫理を有せず、倫理を説くとすればやはり修身教科書の倫理であるといふのが實狀ではないか。

かくて敢へて云ふ、倫理は喪失した。いはゆる日本主義は國際的普遍性を有する人間的倫理となり得るか。私は何物の惡口をも云はうとは欲しない。しかし新しい倫理の確立は我々が今後眞の文化を作つてゆく上に特に重要なことであるのを感じざるを得ない。(十一月二十六日)

### 悲劇を知らぬ國民

日本文學には悲劇がないと云はれる。樗牛であつたかが、世界的な悲劇文學と評した近松にしても、義理人情の世界を多く出でず、あまりに美しいロマンスとあまりに速かなあきらめとがあつて、眞に悲劇的であるかどうか、問題である。

悲劇を知らぬ日本人は樂天的だと云はれる。この樂天性にどれほどの根據と大ききとがあるのか知らない。一方日本人は神經質でもあり、またその樂天性にはあきらめの要素も多く含まれてゐる。殊に今日の如き時世においてひとは眞に樂天的であり得るか、疑問である。

それにしても日本人は一種の樂天家に相違ない。我々はどうなるのか。「どうにかなるだらう」と考へる。日本の將來は。——どうにかなるだらうと考へる。國家の財政は、支那問題は。——どうにかなるだらうと考へる。日本の國策も突詰めれば、この「どうにかなるだらう」を多く出ぬのではないか。

つまり追求が足りないのである。日本人の樂天性は風土にも關係するであらう。そのうへ我々の歴史は現在まで大きな悲劇を経験しなかつた。これは幸福なことに相違ない。しかし人間の世界における不幸はその實幸福であり得るやうに、幸福も他面不幸であり得る。悲劇を知らぬ者には追求が足りない。悲劇的精神は追求の精神であるとも云へる。

ギリシア人は世界最大の悲劇文學を作つた。そのギリシア人は同時に世界最高の哲學を作り、そして科學の歴史の先頭に立つた。彼等の科學も哲學も、運命の前に問ひ續けて立停まる彼等の悲劇的な追求の精神と相通ずるところがあつたであらう。

幸か不幸か、大きな悲劇を経験したことのない我が國民は、今日も「どうにかなるだらう」で濟ませてゐる。もちろん若い世代は彼等の生活經驗に強要されてそれほど樂天的でない。いはゆる不安の思想は彼等の心に深く巢ひ、悲劇的精神を形成するやうに見えた。それは、その追求が

單に自己の内部に向つて社會的現實に向はなかつた點で非難さるべきであつたにしても、ともかく我々に悲劇的な追求の精神を味はせた點では意味があつた。しかしそれも今では「流行遅れ」になつてしまつたかのやうに見える。不安は克服されたのであるか。眞の再建の代りに日本人傳來の「どうにかなるだらう」に還つたのではないか。

もし今後なほ何時までも、どうにかなるだらうで濟ませ得るとすれば、日本人こそ、果して偉大と云はれ得るか疑問であるが、ともかく幸福な國民である。

(十二月三日)

### 「養老」の傳説

改訂國定教科書にはかの有名な「養老」の傳説が削除されてゐる。それは酒好きの病父に酒を飲ませたい一念から孝行息子が汲んだ水が美酒であつたといふ話で、從來久しく國語教科書に親孝行のかがみとして載せられてゐたものであつた。禁酒運動の人達は、親に酒をすすめるのは眞の孝行でないといふ理由で、この話を教科書から削除せよと主張した。然るにそれを聞いた養老の瀧の地元では承知せず、酒造組合などとも呼應して、その復活を文部省に陳情したといふ事實

もあつた。

養老の傳説の削除について禁酒主義者の運動がどれほどあつて力があつたのか、私は知らない。文部省側の意見として傳へられるものによると、この削除はその運動の影響によるのである。「養老」は實話物として書いたのではいささか妙なところがあるから省くことになつたのだといふことである。これが誤傳でないとするれば、これまで小學校では養老の話を「傳説」としてでなく「實話」として教へてゐたのであらうか。もしそれを傳説として教へてゐたのであれば、禁酒主義者の反對も理由が薄らぐわけで、この有名な傳説をしひて子供の頭からなくしてしまはねばならぬ理由もなからうと思ふ。好くないのはむしろ傳説と史實とを混同することである。

親に酒を飲ませることが眞の孝行であるかどうかといふ議論になれば、醫學的問題でもあるが、道徳的問題としては、少し考へるといろいろ煩瑣道徳的問題を派生してゐることである。國語教科書の中にある傳説から煩瑣道徳的問題を引出してくるにもあたらず、またもしその議論になれば、國語でも修身でも教科書には突詰めると煩瑣道徳的議論に陥らねばならぬ材料が遺憾ながら多過ぎるやうに思はれる。傳説は純粹に傳説として教へるがよい。

傳説と史實とを區別せよといふことは、傳説をすべて破壊せよといふことではない。傳説には

傳説としての深い意味がある。私はむしろ我が國の少年にとつて傳説が豊富でないことを悲しみたいほどである。西洋で酒の神ともされたデイオニュソス傳説は如何に多くの藝術と思想との源泉となつてゐるか。

しかし他方近代歴史學の批判的方法を尊重し、これによつて史實と傳説との區別を明確にすることが特に大切である。ところが我が國の歴史に關しては一般國民にとつてその區別があまり明瞭に示されてなく、しかも今日では益々その混同が行はれてゐはしないであらうか。養老の傳説を史實と見るが如きことは、むしろ無邪氣な部類であるかも知れない。

(十二月十日)

## 日本文化の方向

故島地大等師は三國佛教を比較して、インド佛教は戒律支持に特色があり、支那佛教は慧學の發展に特色があり、日本佛教は定學の傳持に特色があると述べられた。即ちインド佛教が倫理的なことを、支那佛教が哲學的なことを特色とするに對し、日本のその特色は佛教を宗教として純粹化した點にあると云へるであらう。日本においてはかやうに佛教は純粹化されると共に、實

實際化され、單純化された。單題目や單念佛、單信心、單圓戒等の思想はその傾向を現はすものである。

ひとり佛教のみでない。支那文化にしても、日本において純粹化されたが、しかし同時に實際化され、單純化されて、そのとぼけた面白味、馬鹿氣た大きさをなくしたと云ひ得るであらう。かく純粹になるが、その代りに小さくなることが、少くとも過去の日本文化の一特質であるやうに見える。俳諧は發句に、長歌は短歌に、純粹化されると共に詩形を小さくした。能は謠に實際化され、單純化された。

純粹化されることはそれ自身としては好いことである。しかし能を劇の方向に發展させるやうな試みが眞面目になされても好かつたであらう。短歌や發句に純粹化された詩を再び逆の方向に更に大きな詩形に發展させる努力が眞劍になされても好かつたであらう。大きさの足りないのは島國の特徴であつたであらうか。

日本帝國主義の雄飛を欲する者は、日本の精神的文化の同様の偉大さを望むべきであらう。然るに事實は、皇道主義等の美名のもとに、純粹性すらない實際化と單純化とが種々の方面に行はれてゐるのである。例へば類似宗教の驚くべき流行は、現在の社會不安に基く民衆の社會

心理の反映であるが、ここには現在の社會情勢に相應して宗教の純粹性といふものはなく、ただ實際化と單純化とによつて民衆を引き寄せてゐるのである。類似宗教に彈壓が加へられるにしても、他方において日本精神の美名のもとにやはり非合理的な、實際的な、單純な思想が宣傳されてゐるのでは、役に立たないであらう。科學思想の發達こそ却つてそれらの類似宗教に對する強力な武器である。

今日我々に必要なことは、純粹性を或る程度犠牲にしても、西洋文化を學ぶことによつて知的構成力、理論的組織力を養ひ、我々の文化に大ききを作ることであればならぬ。日本精神の純粹性に固執してゐる間に、日本人の專賣のやうに云はれる東西文化の綜合といふやうな組織的な構成的な仕事も、他に先鞭を着けられてしまはないとも限らない。

(十二月十七日)

### 歳末風景

歳末の風景はあわただしい。街は賣出しの最中である。ネオンサインの色はいよいよ毒々しく、いよいよその數を増してゆく。看板、旗、幟、ちんどん屋、その他、その他。日本の街を見ると

まるで植民地のやうだといふ感じは、洋行歸りの者が誰でも感じるものであるが、その植民地的風景が歳末になると、いよいよ濃厚になり、露骨になる。

しかし見よ、そのあわただしい街の中に、毒々しいネオンサイン、その他の下に、昔ながらの傳統に従つて、商家の入口には軒並にすでに門松が立てられてゐるではないか。何といふゆかしさであるよ、と或る者は云ふであらう。何といふ不調和であるよ、と他の者は云ふであらう。

そして一層思索的な人は、そこにも日本文化の根本的な特徴と考へられる重層性（和辻哲郎氏）の一つの例を見るであらう。洋風の商店の内には角帶をしめた番頭がをり、外ではコンクリートの道の上に門松が立てられてゐる。亭主は洋服で、細君は和服で、子供はまた洋服で買物に出てゐる。日本文化の重層性を示すものと考へられるであらう。

佛教の發達は神社崇拜を廢棄しなかつた。大抵の家は神棚と佛壇とを共に持つてゐる。また同じ展覽會で、第一部には日本畫が、第二部には西洋畫が陳列されてゐる。かやうなことは一ドイツ人の評して云つた如く、日本が文化の並在の國であることを示すものであるか。それとも、そこには單なる並在以上に深い統一があつて、むしろ重層性を意味するものと解すべきであるか。我々が日本畫を鑑賞する場合と西洋畫を鑑賞する場合において心の統一がないとは云へない

であらう。だから重層性が認められる。しかしそれは心の上での統一であつて、客觀的に表現された文化の上での統一ではない。従つて客觀的に見て單なる並在或ひは折衷主義と評されて致し方のないところがあることも事實である。たしかに、客觀的に矛盾したものを心の上で統一することにおいて日本人は比類のない才能を持つてゐる。だから現在のやうな矛盾した社會においても人々は案外平氣でゐられるのである。それは日本人の美點であると云ふことができる。

しかし他方において、そのやうな並在にも、重層性にも満足することなく、單なる折衷とは異なる眞の綜合的統一を客觀的に示すやうな文化が作られることも甚だ望ましいことではないか。歳末のあわただしい風景を見ながら私はこのことを特に痛切に感じるのである。(十二月二十四日)

### 新世代の意欲

年末から年頭にかけては、あらゆる方面において回顧と展望がなされるならはしとなつてゐる。今度もこの種の論説がたくさん現はれたが、そのうち私は新進科學者のピカ一、物理學の菊池正士と數學の末綱恕一氏との文章を特に興味深く讀んだ。

世界の物理學界は現在非常な發展をなしつつあるのに、日本人の力がその中にどれほど貢獻されてゐるか。皆無と云つて差支へない。一般に日本の科學は専門以外の人達によつてひどく買ひ被られてゐる。他のことでは日本は何でも一流なのか知らないけれども、科學少くも物理に關する限り日本は二流の下或ひは三流の國である。かう云つて、菊池氏は研究家の無責任と怠慢とを戒めてゐる。

科學のほかのことに關しても、日本は何でも一流であるのではない。この頃の民族主義的風潮が自國のものは何でも最善であるかの如く國民に買ひ被らせるやうにする傾向があるとすれば、極めて不眞面目なことを云はねばならぬ。

近年の國粹運動の結果、科學的業績に關しても日本的特質を特に問題にして、日本民族の科學的能力について大眞面目に議論する者があるのに對して、末綱氏は、かくの如き議論は時期甚だ尙早であると云ふ。我が國に佛教が渡來して日本的佛教が出來上るまでには六世紀を要した。しかるに我々が西洋の學問を始めて以來、『解體新書』から數へても百六十年ばかりしか經過してゐない。かかる僅かな期間に日本人の科學的能力を判定すること、殊にその民族的特徴を限定することは不可能であり、まして所謂日本の科學を要求することは全く無意味である。すべては今

後の歴史に俟たねばならぬ。慨歎すべきことは國粹運動がメートル法等にまで累を及ぼすが如きことであり、また非常時と稱して科學の利用の方面のみが強調され、純理論的方面の輕視されることである、と末綱氏は述べてゐる。

確かに日本人の科學的能力、科學における特質はなほ歴史的に未知數である。一般に西洋文化の移入以後、我々が如何なる大きさと高さとを有する文化を創造し得るかは、今日その實驗の過程中にある。我々の世代はこの實驗に身を投じなければならぬ。まだまだ西洋文化の弊害などについて議論すべき時期ではない。支那やインドの文化の傳承から日本人が何を作り得るかは、我々の祖先によつて既に或る意味で實驗済みである。しかるに西洋文化に關しては、それはなほ全く實驗の途上にある。能、歌舞伎、その他、過去に如何なる勝れたものを有するにしても、今後それをそのままの形式で發展させることは不可能であらう。

新しき世代よ！身をもつてする實驗者としての自己の意欲を確立せよ！

(一九三六年一月七日)

## 暗示の影響

三原山自殺が一時流行したが、最近にはまた青酸加里自殺が流行してゐる。實にいろいろなことが流行するものである。自殺の意識的な模倣といふわけでもあるまい。何か絶望的な氣持に陥つた者が、青酸加里自殺のことを讀んだり聞いたりしてゐて、ついそれに暗示され、殆ど無意識的に模倣することになるのであらう。

人心が不安焦躁の状態にある場合、暗示の力は特に大きい。あの大震災の時に朝鮮人や社會主義者が放火して歩くといふやうなことが眞面目に信ぜられたのも、人々が暗示にかかり易い精神状態におかれてゐたためである。今日の所謂邪教の流行にしても、或ひはまたドイツにおけるユダヤ人排斥などにしても、同様の心理を利用してゐるところがなくはないであらう。

現在のやうな社會状態では、簡単な事柄も種々複雑な暗示を與へ、人心をいよいよ不安にすることが多い。先達て本紙に、日本理科教育聯盟理事長の談として、地方では國體明徴運動に理科教育は不必要だとして見當違ひの迫害を受ける事實を度々聞くといふ話が載つてゐた。何も文部

省あたりで國體明徴のために理科教育排斥をあらさまに唱へてゐるわけではなからう。けれどもこの頃のやうに日本精神作興、智育偏重排斥が無理論に叫ばれてゐては、そのやうな見當違ひの暗示となる危険は十分存在するのである。

暗示の行過ぎや穿違ひは、暗示が権力者から與へられる場合特に多いであらう。とりわけ平生あまり獨立の判斷力を働かせることができないやうな状態におかれてゐる者においてはそれが多いのである。例へば俗吏根性といふのがそれで、権力者の一言によつて種々の暗示にかかり、その心をいろいろ付度して行過ぎたもしくは穿違へたことをして大衆に迷惑を及ぼすことが少くない。しかもこの頃では政黨人の或る者までがそのやうな俗吏に似たところがあつて、軍部の意向といふものから種々の暗示にかかり、困つたことをする。

不安な社會では凡てが暗示になる。このやうな時には益々明瞭な理論が必要な筈である。ところが實際には却つてただ暗示を刺戟するやうなことが多くなされてゐる。他方明瞭な理論を有する者も明瞭に云ふことができず、單に暗示するにとどめることを餘儀なくされてゐるといふ有様である。

まことに現代は種々の意味において暗示が横行し、暗示によつて不安にされてゐる時代である。

(二月十四日)

## 「舉國一致」

各々の時代において社會はそれぞれ自分に特徴的な特別の言葉を持つてゐる。我々の時代におけるこのやうな特別語彙を蒐集することは、たとひ現代の眞の政治史や文化史の認識に役立たないにしても、風俗批評の見地からでも興味ある材料となるであらう。

最近政友會は、すでに數多い現代の特別語彙に新たな一つを加へた。「擬裝的舉國一致」といふのがそれである。これは言葉としても「類似宗教」などといふ語と好一對をなし、まことに面白い。

ナポレオンは警句の天才であつた。今日常用されるイデオロギーといふ語の實用的意味を初めて作り出したのもナポレオンであつた。政治家や軍人には特殊な言葉の天才がなかなか多い。いよいよ選舉となれば、今日の政黨にだつてそのやうな天才がいろいろ現はれることであらう。

ともかく今度の選舉の特徴は「舉國一致」の爭奪戰にあるかのやうに見える。政府もそれを云

つて議會解散を行つた。民政黨もそれを唱へてゐる。そして政友會も政府の擬裝的舉國一致を攻撃して、みづから舉國一致を叫ぶ。ただ政治的警句は必ずしも論理的でない。その意味が曖昧なところに却つて實際的效果があるのであらうか。

政府が舉國一致のために議會解散を行はねばならぬとすれば、それは政府が政黨を地盤としてゐないからである。政友會や民政黨が舉國一致を云ふとすれば、その前提には政黨連繫が必要と思はれる。けれども政黨連繫は少くとも選舉戰のスローガンとしては魅力がない。しかも政黨人の殆ど誰もが實際に考へてゐるのは、選舉後たとひ岡田内閣が退却しても、やはりこの式の舉國一致内閣が出来るに過ぎないといふことである。選舉における政黨の問題は多數黨であつて舉國一致でないであらう。憲政の常道は多數黨内閣であつて舉國一致内閣ではなからう。しかも現實においてはただ舉國一致のみが問題になり得る。それが非常時なのである。

「多數者」から「舉國一致」へ——それはただ喜ぶべき量的増加を意味するに過ぎぬかのやうに見える。しかし實は、それは量の問題でなく質の轉化である。だから舉國一致は政黨政治の否定であることができる。舉國一致は場合によつては獨裁政治の別名となり、従つて舉國一致は場合によつては眞の多數者としての「大衆」に對立するものであることができるのである。

擬裝的學國一致と云はれるが、學國一致はとかく擬裝の名手である。これは論理であり、また世界歴史の現實によつて既に示されてゐることでもある。我々の望むのは強要されない下からの學國一致である。政府も政黨も學國一致の論理を先づ明示せねばならぬ。（二月二十三日）

## 肅正時代

今日は節分。昔ながらの豆撒きは私どもの心をも何となくなごやかにする。人生に祝祭は必要だ。春の立ちそめるのを祝うて、「鬼は外、福は内」と愉快に一夜を過すのも結構であらう。

本年は選舉肅正と並んで宗教肅正が唱へられ、豆撒きに對してもいろいろ嚴しい取締が行はれるやうである。これも確かに必要であるが、他方またこの頃官僚的形式主義によつて民衆の生活があまりにも窮屈にされ過ぎてゐるところも少くないやうである。

尤も少し心を澄して、「鬼は外、福は内」と年男が叫ぶ聲を聞くと、私は人間性のどん底の叫びを聞くやうに感じて慄然とせざるを得ない。幸福、むしろ幸福に對する人間の欲望の如何に激しいかを思ふのである。

宗教は幸福に對する人間の限らない渴望を出發點とする。もとより宗教はそれ故にこそ幸福についての高い觀念をもつてをり、現世的幸福を人生の目的と考へることを欲しないであらう。迷信邪教の排撃は最近の流行題目となつてゐる。いはゆる類似宗教が病氣の治癒その他の現世的利益を説くことをインチキとして宗教家は攻撃する。けれども今日多くの神社佛閣は、「鬼は外、福は内」と呼ぶ聲のうちに露骨に現はれてゐるやうな現世的利益の迷信によつて繁昌してゐるのが事實である。

無邪氣な民衆は問はず、社會の幸福に對して責任のある政治家は果して迷信的でないと云へるであらうか。先勝や大安の日に立候補の届出が多かつたといふが如き、御幣擔ぎのしるしにほかならない。選舉肅正運動でさへも今日は宗教化されてゐる。認識や理知を離れて、政治も次第に迷信の要素を加へつつあるのではなからうか。

宗教肅正のために藝妓、女給、ダンサーなどが年男になることは禁ぜられた。しかるに傳へられるところによると、今度東京では山の手十二花街組合がちやうどこの節分の日から藝妓にお座敷で「選舉音頭」を唄ひ踊らせることに申合せが出来たさうである。お祭騒ぎであつても結構な豆撒きは嚴格にされ、他方嚴肅であるべき選舉はお祭騒ぎになる。宗教家も、政治家も、官吏も、

それぞれ自己にとつて第一義的なことは顧みず、末梢的なことにのみ力を入れてゐるのが「肅正時代」といふのであらうか。

(二月四日)

## 國民的と國際的

文學者の中にも、本國よりも外國で先づ一層有名であるやうな人がある。アナトール・フランスなどさうであつたと云はれるし、アンドレ・ジードの如きもさうであると云はれるかも知れない。先年のゲーテ百年祭は我が國でもずぶん盛大に行はれ、現在また邦譯ゲーテ全集が刊行されつつあり、ゲーテに關する勝れた研究書も次々に出版されてゐる。しかるにシルレルは、今日のドイツで國民的詩人として騒がれてゐるに拘らず、日本ではそれほど人氣がないやうである。

我が國において所謂大衆文學は純文學に比して遙かに多數の讀者を持つてゐるが、外國人が讀む段になると、恐らく純文學の方が讀まれるに違ひない。このやうな區別が純文學そのものの内部においても認められるのである。一般に外國人が好む作品は、純粹に國民的なものよりも國際的色彩の濃いものであらう。もちろんゲーテがドイツ的で、ジードがフランス的であることは確

かである。假に全く國民的特色を含まぬ文學があつたとすれば、それは外國人にも讀まれないに違ひない。しかしシルレルとゲーテとを比較すれば、そこに國民主義的と世界主義的といふやうな差別がある。

日本の文學や思想も今後大いに世界に飛躍しなければならぬとすれば、このやうな問題についても十分考へてみなければならぬ。これまで日本の物はエキゾチズムから外國人に讀まれてゐたために純粹に國民的なものが却つて彼等に喜ばれるといふ傾向があつたが、今後はそれも變つてゆくであらう。日本人の作品がたくさん外國に翻譯紹介されるやうになれば、諸作家の文壇的地位にも多少變動が生ずるのではないかと思はれる。

學問でも藝術でもあまり國民主義的になると、外國人には無用になり、歡迎されなくなる。ドイツは書籍の輸出が一つの重要な貿易であることを誇りにしてゐたが、それがナチスになつてから、近年次第に減少してきたことを、統計的數字は示してゐる。ここにも知識の國際性が窺はれる。

餘のことは問はず、少くとも文化上の侵略に關しては國民主義には大きな制限がある。日本文化の特殊性については固より何等の問題も存しない。併し我々の文化が單なるエキゾチズムから外國人に喜ばれるといふのでは躍進日本の恥辱である。我々の文學や思想がその本質的普遍的

な價值に従つて彼等から歡迎されるやうに努力しなければならぬ。

(二月十一日)

## 政治と教育

肅正運動の壓力によつて選舉に對する國民の關心が萎縮した觀があるのに鑑み、政府は漸く政治教育の必要を悟つたと云はれてゐる。

元來、選舉肅正は選舉そのものに關しどこまでも手段であつて、目的であるのではない。手段を目的であるかの如くやかましく云ふことは、官僚的瑣末主義に屬してゐる。選舉が政治教育の絶好の機會であることは常識であるが、政治教育が行はれるためには政治の動向と目標とについて明確な認識が必要である。現在の政治家は果してそのやうな認識を有するのであらうか。寧ろそれについて何等確固たる信念がない故に、手段に過ぎぬ選舉肅正を恰も目的であるかの如く幻想することになつたのではなからうか。試験におけるカンニングばかりやかましく云つて、答案に對して何等の規準も有しない者が教育家と云へるであらうか。

選舉に限らず、政治はすべて教育である。これは詭辯でなく、單なる哲學論でもなく、社會の上昇期においては政治家は皆このことを意識してをり、またこのことをつねに實行してゐるのである。政治が教育であることをやめるのは、社會の發展が行詰つた證據である。

かう云はれてゐる。凡庸な政治家は、人間が彼の國家にとつて必要であるやうな風でないことを不平がるのをつねとする。一層善い政治家は、與へられたままの人間から彼の欲する國家形態を組合せる術を心得てゐる。しかし最大の政治家は、單に政治形態のみでなく、この政治形態のうちに、またこの政治形態によつて、このものを擔ふに適する人間のタイプを、創造的に作り出すものである。

最大の政治家は同時に最大の教育家である。なぜなら彼は大衆から新しいタイプの人間を創造的に作り出すものであるから。しかも人間は社會から生れるのであるから、新しい人間を作るためには社會を變化することが必要である。眞の教育家は彼の教へることに大衆の關心を力強く引き寄せることを知つてゐる。なぜなら彼は大衆のうちにある要求を客觀的に表現し形成することを目的とするものであるから。

それは抽象論でも理想論でもなく、歴史の事實に合致したことである。社會の上昇期におい

ては政治家はつねに新しい社會形態に適するやうな新しい人間を作ること而努力してゐるのである。抽象的形式的に選舉肅正を唱へ、國民の政治的無關心を不平がつてゐる現狀は、今日の社會の行詰りの一つの象徴にほかならない。

(二月十八日)

## 試験の明朗化

小學校から大學まで、あらゆる學校において試験の行はれる時が來た。生徒學生はもとより、家庭にとつても、まことに憂鬱な季節である。

アランの『教育論』は學校の先生がたに讀んで貰ひたい書物の一つであるが、その中で彼は試験についても意見を述べてゐる。「試験は意志の訓練である。この點においてそれはすべて善い」と、アランは云ふ。自分はあの場合臆病であつた、心が亂れてゐた、などといふ辯解は惡しき辯解であつて、人間のそのやうな缺點は最も大きな缺點だ。平生は完全に答へることのできる問題を、試験の日に間違へたり、最初に正しい答を見出しておきながら突然逆上したりするやうな子供を、私はどう考へよと云ふのか。それはちやうどボール紙で作つた猪に對してよく練習した射

手が、自分の生命を救はねばならぬ日に適確に撃つことができぬのと同じである。知つてゐて、知つてゐることを使はないのは、知らないのよりも一層悪い。知らないことは精神の如何なる惡德をも現はさない。これに反し感情の動搖による過失は教育されてゐない精神を、いな、正しくない精神をすら現はするのである、とアランは書いてゐる。

私は試験の單純な反對者ではない。それには意志の訓練、或ひはその他の道德的效果も含まれてゐる。しかし現在の日本の憂鬱な試験を見れば、アランにしても先づ大いにその弊害を指摘したくなるであらう。あらゆる德は心の朗かさを豫想する。試験から教育的意義を期待するならば、何よりも試験を明朗化しなければならない。

簡単に云ふと、試験のうちにスポーツの精神が、コンクールの精神が導き入れられなければならない。試験のスポーツ化、もしくはコンクール化は今日我が國の状態においても或る程度まで不可能なことではなからうと思ふ。現在の制度の儘では試験は男らしい競争心の代りに陰險な敵對心を、優秀な者に對する讚美の代りに嫉視を、協同の精神の代りに利己主義を、要するに道德的にも種々の惡德養成の源泉となる。

試験が一般に有害であるのではない。或る種類の、或る方法による試験は智育上德育上必要で

あらう。弊害は今日の如く試験が教育的目的以外のものに制約されてゐるところにある。即ち社會的條件に原因する入學の困難、就職の困難は、教育機關を單なる入學準備機關、或ひは就職機關と化し、試験もそれに從屬せしめられてゐる。かくして試験の明朗化は、カンニングの取締の如き「試験肅正」によつて達せられ得るものでなく、根本において社會の明朗化に俟たねばならぬ。入學の困難、就職の心配が存しなかつた昔は、試験制度の弊害も問題にならず、試験勉強家は「點取り蟲」として輕蔑された。

(二月二十五日)

## 詩の復活

詩の復活は最近注目すべき現象である。もちろんそれが確固たる地盤を獲得したと云ふにはまだ早い、この頃同人雜誌などにおいても詩が以前には見られなかつた位置を占有するに至つたことは事實である。

この現象はいろいろに評價されることができであらう。思想が彈壓されてゐる結果、或ひは

思想が無くなつた結果、いづれにしても文學が内容をもち得なくなつたために、形式的な、感覺的な文學として詩が復活するやうになる。詩の復活は思想的に無内容な新形式主義もしくは新感覺主義の文學の流行の先驅にほかならない。このやうな見解も成立するであらう。

かかる見方にも一理はあるが、私はそれに全部は賛成することができぬ。詩の復活が何を意味するかについての意見の相違は、恐らく、知識階級の、特にその若い世代の最近の精神的情況を如何に考へるかといふことに依存するであらう。そして私の見るところによれば、若い世代は、あの不安の時期の後にこの頃、極めて徐々にではあるが、確實に立直りつつある。かかる立直りは注意深く觀察するとき種々の徴候において現はれてゐる。詩の復活も立直りつつある知識階級の一つの表現と解することができる。

文學においても心境小説などの復活と詩の復活とは、そこにおのづから意味の相違がある。詩の復活がたとひ感覺的な、形式的な文學への傾向を示すとしても、そこには少くとも近代性への意欲がある。新しいモラルへの意欲が動いてゐる。自己の感情に形式を與へようとする意欲がある。いはば新しいクラシズムへの意欲が含まれてゐる。詩の文學における位置は、自然科学における數學や哲學における論理の位置に比較することもできるであらう。本格的な文學の復興

は詩の復興に俟たねばならぬ。私は詩の復活をもつて本格的な文學に對する要求が次第に現實的になつてきたことの一證左と見、そして一般的には漸く立直りつつある知識階級の一表現と見ようと欲するものである。

もちろん現在の詩がどれほど新しいもの、積極的なものを示してゐるかは疑問である。なほ思想性が足りないことは確かであらう。しかし詩の復活はそのこと自身少くとも心の一定の態度を示してゐる。我々はそこに新しい出發を見てはならないであらうか。

春はまだ遠い。けれども我々は希望を棄ててはならない。希望は徳である。希望を持つといふことの大きな徳であることが今日ほど忘れられてゐる時代はないのである。 (三月三日)

## 社會の常識

或る種の改革家は社會の常識を蔑視する。エミール・ファーストによると、あの空想的社會主義者といはれるブルードンなど、さういふ人であつた。

ブルードンは、或る觀念が民衆の間に擴つてゐるものであるといふだけで、もしくは彼の同時

代の大多數に信じられてゐるものであるといふだけで、殆ど本能的に、その觀念をくだらないものであると結論した。この民主主義者はその點で甚だ貴族主義的な精神をもつてゐたと云ふ。

かやうな貴族主義は、改革家が社會的組織の聯關の客觀的認識を基礎としないで、道德的感激乃至確信から出發する場合、極めて普通である。彼等は社會の常識を輕蔑して、ひとり自ら高しとすることによつて自己の道德的感情に媚びる。從來の觀念論者が好んで口にした精神的貴族主義といふものも、社會の常識のうちに含まれる眞理を無視して個人主義的立場に立つてゐる。かやうな貴族主義は、社會の常識がそれに反抗すればするほど、自ら悲壯になり、興奮を加へるをつねとする。

もとより社會の常識が決してその儘全部眞理であるのではない。しかし民衆が絶對的に間違ふことはあり得ず、大多數の人間が眞と信ずるもののうちには一つの中心的な眞理が含まれてをり、多くの蔭に包まれて一つの内的な眞理が横たはつてゐる。少くともそこには或る瞬間にとつての相對的な眞理、その時に適切に役目を果し得る眞理が含まれてゐる。

最近我々は、社會の常識が如何に大きな力を有するかを二度まで經驗した。しかもそれが二度とも消極的な形でその壓力を現はしたことに注意しなければならぬ。

一つは先般の總選舉である。政友會の近來の態度に對する不滿が消極的に民政黨の勝利となつて現はれた。無産黨の進出は、今日の風潮に對する大衆の批判が、これもまた消極的抵抗の形をとつて、現はれたものである。次に二・二六事件の際に、國民が騒がずに靜かにしてゐたといふことも、その力強い批判を消極的に現はしたものである。

あらゆる方面に互り徹底的な改革が要求されてゐる。このとき大衆の批判がただ消極的にしか現はれ得ないといふことは遺憾である。先づそれが自由に積極的に現はれるやうに改めなければならぬ。炯眼な政治家は少くとも消極的な形で現はれた社會の常識のうちに隠された積極的な眞理を捉へて、改革を斷行すべきであらう。道德的改革家の知らず識らず陷る貴族主義は空想的に終り易いのである。

(三月十日)

## 競技と政治

次回のオリンピック大會が東京で開催されることは全國民の熱望であるが、今夏のベルリン大會は種々問題を惹起してゐるやうである。

さきにはドイツにおけるユダヤ人排斥に絡んでアメリカでオリンピック不参加運動が行はれ、今度はドイツ軍隊のラインランド進駐に對してフランスでベルリン大會不参加の叫びがあがつてゐる。更にイギリスにおいてもオックスフォード大學では、ドイツ政府當局がスポーツに對して餘りに政策的で、スポーツを政治的目的に、言ひ換へれば戰爭の目的に従屬させてゐるといふ理由で、ベルリン大會には参加を拒否すべきであるといふ論が起つてゐることである。

スポーツが政治的目的に従屬させられるのは確かに好ましくないことである。スポーツは戰亂時代の武技が平和の時代に變質したものであるとすれば、今日それが戰爭の目的に使用されることはスポーツの先祖返りとも云ふべきものであつて、このやうなアタヴィズム（先祖返り）は今日の如き反動時代には他の方面においても多く見られる現象である。

しかしたとひドイツの政治的行動には非難さるべきものがあるにしても、その理由からオリンピック大會に参加しないといふことは、自分自身スポーツを政治化するものであつて、賛成できない。寧ろ現在の如き世界の情勢においては、スポーツを通じてでも國際親善の行はれることが望ましいと考へられる。政治と競技との混同は避けたいものである。

ナチスの理論家カール・シュミットは、政治的なものを規定する根本概念は、敵・味方といふ

範疇だと述べてゐる。しかるにオリンピック競技の淵源をなした古代ギリシアにおいては、凡ての生活が競技的な根本性格を有し、ギリシア人とギリシア人との血腥い衝突にあつても戦ひは「アゴーン」（競技、試合）であり、相手は試合の相手であつて「敵」ではなかつた。

社會の統一が維持されてゐる間は、政治も何等か競技的性格を具へてゐる。自由主義の華かであつた時代には、政治におけるスポーツマンシップについて屢々語られた。ところが社會における内部的對立が激しくなると、政治はあらゆる競技的性格を失ひ、全く敵・味方の關係で規定されるやうになり、スポーツマンシップなどもはや問題にならない。そしてスポーツも、體操の如きも、政治的目的に従屬させられることになる。これは獨りドイツのみのことでなく、あらゆるものが政治化する必然性を有する現代の特徵的傾向である。

（三月十七日）

## 停年制

「硬骨」眞鍋嘉一郎學士は、大學で内規として行はれる教授停年制に對して爆彈を投げ、衝動を與へた。これは、人事刷新とか官吏の身分保證の法律とかが問題になつてゐるこの頃の世に

桃戦したものとして「硬骨」の面白さもあらうが、その趣旨には賛成し難い。

なるほど停年で退職するのは惜しい教授もある。けれどもそれは寧ろ例外であつて、この例外を認めるならば、他の遙かに多い例外はどうすれば好いのか。世の中には現在の教授以上の學力を持ちながら教授になれない者がいくらもある。高等教育を受ければ立派な學者となり得る素質のある者で、大學に入ることのできぬ者に至つては、無數にある。また適當な後任がないから退職しないと云ふのであれば、自分の在職中にそのやうな弟子を作らなかつたことが却つて自分の責任問題である。

何も大學のみが學問の場所ではなからう。眞鍋學士の如き「硬骨」の士が、停年後には純民間人として研究所の如きものでも作つて、民間の學問の發達に盡力されることを期待したのである。教育の方面においても停年制は寧ろ大いに擴張されることが至當である。それは高等學校の如きにまで擴張されて好い。殊に高等學校では、あの學校インフレ時代に就任した教授の中には若朽も多く、今日高等學校教育不振の原因となつてゐると云はれるほどであるから、老朽と共に若朽の淘汰も必要であらう。

この革新時代においては青年の力が用ひられねばならぬ。使はれない力が下層に鬱積してゐる

といふことは、社會にとつて不健康な状態である。人事刷新は我が國においては一の生理的な必要であるときへ云へる。最近統制といふことが頻りに唱へられ、それが必要な方面もあらうが、そのために國民が萎縮してしまつて、その力が使はれないで鬱積するといふやうな結果になつてはならぬ。

かかる弊害は、我が國の如く自由主義が十分に發達せず封建的なものが多く殘存してゐるところでは、特に生じ易いのである。この頃青年文學者の間で云はれてゐるデカダンスなども、自由に伸びることのできない力の鬱積といふ謂はば生理的な現象から來てゐると見られ得る。思想統制とか文化統制などにしても、かやうなデカダンスを益々甚だしくする危険を含んでゐる。

(三月二十四日)

## 公衆の解消

公衆は解消した、もしくは解消しつつある。最近我々はかやうなことを特に強く感じないであらうか。

公衆とは輿論といふ知的表現をもつたものである。輿論と公衆との關係は精神と身體との關係である。近代においては輿論を作り、輿論を代表し、輿論を再生産するものは主としてジャーナリズムである。だが輿論形成の根柢にはつねに談話がある。いかに新聞雜誌が発行されても、ひとが談話しないならば、それらは精神的な滲透的な作用を及ぼすことができないであらう。ジャーナリストは寧ろ公衆の談話の書記であると云つてよい。かくて、言論の自由或ひは談話の公共性の存在が公衆の存在の基礎である。

あの二・二六事件以後の著しい變化は、民衆の政治的關心の昂揚であると云はれる。この點においてそれは過般の總選舉などとは比較にならぬ重要な意義をもつてゐる。事件の突發はあらゆる談話を無用にした。しかし突發した事件の結果はあらゆる談話の動機となつた。このやうな談話は輿論として表現され、かくて政治的關心の昂揚は公衆の發達を齎したであらうか。寧ろ反對に公衆は解消されつつあるやうに見える。

報道や言論の自由が甚だしく制限され、公共性をもたぬ流言蜚語が蔓延し、民衆の政治的關心といふものがそのやうな流言蜚語によつて刺戟されてをり、そして彼等の意見が輿論として表現される公共の場所をもたないとき、公衆は解消する。

公衆は解消されて集團としては「群衆」に還る。群衆は一層自然的な集團であつて、自然的な力に縛られてゐる。彼等を結合するのは知的な公共的な判斷でなく、恐怖憤慨等の情緒衝動であり、また群衆は晴雨寒暖等の物理的環境に依存する。バイイは、パリの市長であつたとき、雨の日を喜び、空の晴れるのを見て悲しんだとのことである。

尤も、公衆は歴史的範疇としては自由主義と結び附いたものであるとも考へられる。現代の社會においてはゆるる公衆は「身體をもため精神」であり、現實的な政治的力とはなり得ない、公衆に代つて階級的な物理的力を有する「大衆」といふものが現はれてゐると云はれる。しかしながら大衆も單なる群衆でないならば、或る公衆性を有するものでなければならぬであらう。

談話の公共性が存しないとき、ジャーナリズムが本來の機能を發揮し得ないとき、公衆或ひは大衆の公衆性は失はれる。それは何を結果するであらうか。深く考ふべき問題である。

(三月三十一日)

## 新個人主義

この頃私の出會つた一團の青年は、新個人主義提唱の必要を大いに語つた。最近のファッション的全體主義の非合理性に對して個人主義、合理主義を昂揚すべき必要を痛感してゐる者は恐らく少くないと思はれる。

實際、我が國の社會及び文化における諸弊害が個人の人格を重んぜず、個性の意義を認めないといふことに起因してゐる場合は、想像以上に多いであらう。個人主義といへば單なる利己主義のやうに解され、人格の尊嚴、個人の自由といふが如きことは社會常識として十分徹底してゐない。封建的思想の殘存物は考へられるよりも多く、近頃流行の統制主義などもそのやうな封建的なものの強化となつて現はれる危険をもつてゐる。かやうな事情において個人主義の本質及び價値の再認識の必要は確かに存在するのである。

しかしながら私は翻つて考へる、人格の自由と尊嚴は力説さるべきことであるにしても、現代人——それは我が國においては青年と云ふのと同意味である——には、一體「人格」といふものがあるのか、と。人間の人格的觀念が失はれてゐる。現代文化の混亂と、この混亂のうちにおける知性の實證主義によつて、人間の人格的觀念は失はれた。

誰も近頃の子供の早熟に驚くであらう。早熟は現代の一つの特徴である。しかも早熟な現代人

は眞に成熟する暇を有しないのである。現代文化の混亂、その動搖の速度は、我々に成熟する暇を與へない。成熟しない早熟からマンネリズムが生ずる。例へば今日の若い文學者においてそのやうなマンネリズムを感じしめない者が幾人あるであらうか。また青年哲學者における辯證法的マンネリズムを見よ。成熟することのない人間は必然的に無性格である。そのうへ今日の著作家たちは、昔の人の徳であつたやうな、後世とその判斷に對する信仰をもつてゐない。

かくて堅持、固執、責任、不滅性等、從來の人格觀念の主要な要素が現代人にとつては失はれてゐる。このとき個人主義を主張することは無政府主義、虛無主義に陥る危險を含んでゐる。それ故に新個主人義も新しい人間の觀念を確立すること以外のものであることができないであらう。新個人主義も人間の觀念の新たな確立といふ現代人の最深の希求の現はれである。この希求は普遍的である。現代日本の教育や政治は何によつてこの希求に應へようとするのであるか。

(四月七日)

## 文化の公共性

先達て洋行から歸つた人に會つたら、日本の街を歩いて氣附くことは、外國のやうに藝術家、科學者、哲學者などの彫像が建つてゐないことである、と話してゐた。外國から日本へ來た人のうちにもこのことを不思議に感じる人もあるらしい。

尤も日本でも大學へ行けば學者の彫像が建つてゐないではないが、しかしそれは總長であるとか、學部の創設者であるとか、特に行政的功績のあつた人のものであるやうだ。

私はあながち街の廣場や公園の中に、彫像を建てることを勧めようとする者ではない。それは惡趣味に流れ易い。建てるのならよほど立派な彫刻でないと困る。それに日本の空氣、光線等の條件が問題になることでもある。しかし、いつか喧しく論ぜられたやうに文學者の社會的地位の向上といふことが問題であるとしたならば、これなど、その一方策となり得るであらう。またその場合、彫像を建てるのが不都合であるならば、外國の例にあるやうに、街の名に文學者の名を附けるのもよいであらう。獨歩通、四迷町、一葉廣場など、なかなか面白いではないか。

もちろん銅像建立や町名改正などはどうでも好いことである。必要なことは、そんなことでもして日本の文學、その他の文化を民衆の面前に持ち出すことである。これによつて民衆に自國の文化に對する愛、文化貢獻者に對する尊敬を絶えず喚起させることも好いし、もつと大切なこと

は、それによつて民衆に文化の公共性を意識させることである。

我が國には文化の公共性の意識が缺乏してゐた。永い間、風流、冥想、祕傳等の觀念が支配してゐた。今日でも美術品の如きは個人に私有されて公開されないものが多い。作品の社會性については色々難しい議論がなされてゐるが、最も簡單には文化の公共性の意識の問題であるとも云へる。

公共性はあらゆる文化にとつて本質的な規定であるとすれば、文化の公共性の意識は本質的な文化意識である。藝術家、科學者、哲學者の彫像を建てるといふにしても、英雄崇拜の氣風を養ふためにでなく、それによつておのづから文化の公共性の意識を高めるために考へられることである。

圖書館、美術館、その他、更に好い方法はいくらかもあるであらう。學制改革ばかりが、或ひは文化統制ばかりが、文化政策ではない。本質的な文化意識の向上のために必要なことが他に多いのである。文化政策の貧困も既に久しいことではないか。

(四月十四日)

## 教員の道德

東京市における小學校長視學等の賄賂事件は世人の記憶になほ新たなことであるが、最近また二三の風紀問題が起り、男女教員に對して相互の接近交際を制限乃至禁止する嚴重煩瑣な命令が發せられたと傳へられてゐる。

男女間の道德の混亂は現代社會の一般的な事實である。それが特に教師の場合に取立てて喧しく云はれるのは、酷に過ぎ、氣の毒なことだと思ふ。「弱き者よ、汝の名は教師なり」と歎ずる者も少くないであらう。

もとより教師は人の師表となるべきものとすれば、その行爲も模範的であることが望ましい。しかし模範的に行爲するといつても、現に道德の規準が存在しないとしたらどうであらう。今日の社會においては舊い道德は次第に毀れて未だ新しい道德が確定してゐないといふ状態である。このとき眞に人の師表となり得る者は新しい道德を、思想的にも實踐的にも、創造的に樹立する者でなければならぬ。「男女席を同じくせず」といつたやうな封建的道德を復活させてみたところ

ろで、それが今日何等か指導的な意味を有し得るであらうか。

道德の混亂は必ずしも道德の頹廢と同じでない。我々は現在舊い道德を一見忠實に守つてゐる者の間に寧ろ精神の失せた、人間性の褪せた形式主義、便宜主義、功利主義等の頹廢を見、道德の混亂と云はれるもののうちに却つて或る健康なものを感じることが稀でないのである。問題はかやうな混亂の中から新しい道德を建設することであつて、封建的道德の強制的復活によつて、さなきだに師範學校の特殊教育のために禍されてゐると考へられる教員を一層因循姑息ならしめることではない。

昔は仁術と云はれた醫術も今では全く一個の職業となつてゐるやうに、教師も現在では單なる一個の職業となつてゐる。今日の教師にとつての矛盾は、社會からあらゆる機會に自己が一個の職業人に過ぎぬことを意識するやうに餘儀なくされながら、同時に社會から人の師表となるべきことを要求されてゐるといふことである。併し更に大きな矛盾は、人の師表となるべき教師にとつて道德の規準が與へられてゐないといふことである。かやうな矛盾の根源が社會にあるとすれば、社會は教員に對して同情的であるべきであるが、他方教員も現代社會について認識を深めなければならぬ。これが今日の教員の第一の道德である。

(四月二十一日)

## 漢字の效用

支那は文字の國であると云はれる。かう云はれる意味にはもちろん支那における文字の豊富、修辭の發達等を稱揚する意味が含まれてゐる。しかし他の反面には支那人は、ただ辭令に巧みで誠意が缺けてゐるとか、行爲が言葉に伴はないとか、などいふ非難の意味も含まれるのである。

日本人の作つた漢文や漢詩は支那人に遠く及ばないであらう。しかし漢字や漢文は莊重、簡潔、威嚴、等々の特色を有するといふ傳統的意見が存し、口語文の發達した今日においても、そのために漢文口調が用ひられる。官廳の文書の如き、その例である。だが果して口語文には莊重、簡潔、威嚴などが缺けてゐるかどうか、疑問である。寧ろ反對に考へられる場合も少くない。それに漢字や漢文口調は何となくそろしい感じを抱かせることがあるものである。自分のほんとの感情や意志を隱すためには漢字や漢文口調によるのが都合の好いことがある。官廳の文書も漢文口調では大衆に親しみがなから、口語文にするやうにとの要求が起り、近年それが部分的に次第に實現されつつあつた。

現内閣は「聲明内閣」とあだなされるほど屢々聲明を出したが、私どもの氣附くことは、この内閣になつてから「更始一新」とか、「拔本塞源」とか、「吏道振肅」とか、「秕政」とか、「庶政」とか、色々むづかしい漢字が現はれるやうになつたことである。近年國民教育の負擔の輕減と實質の向上のために漢字の制限が唱へられ、また實行されてきたのであるが、それがこの頃では逆轉しつつあるやうに感ぜられる。それらのいかめしい言葉は何となくそらざらしく感ぜられないまでも、大衆に親しみが無い。庶政の一新も、秕政の改革も、大衆とは無關係であるが如くであり、大衆の協力を俟たず上から政府や官吏がやるのだといった官僚イデオロギーが無意識的にその中に現はれてゐるやうにさへ感ぜしめる。

あの二・二六事件當時の『兵に告ぐ』といふ一文を想ひ起してみよ。それはまことに平明な口語文であり、難解な漢字など使用されてゐない。この文章は人々に感銘を與へた。それには當時の民衆の心理的状況、ラヂオによる生きた言葉での放送等の原因もあつたであらうが、しかし何よりも、ほんとに兵隊に訴へようとする切實な要求がその基礎にあつたのである。

大衆の協力を訴へることなしには如何なる改革も行はれ難い。現内閣の聲明が、徒らにいかめしい漢字をならべて、何か大きなことが行はれてゐるかの如く思はせて、實は何も行はれてゐな

いといふ「支那式」修辭に終らないことを望む。

(四月二十八日)

## 文學者の不遇

最近一二の目立つた事件をきっかけにして文學者の生活上の不遇が問題にされてゐる。かやうな不遇はもとより今に始まらないであらう。しかし昔はそれが「天才の不遇」などと云はれて、却つて若い人々のロマンチックな、英雄的な氣持を唆るものであつたのに、この頃ではそのやうな事件に出會ふ毎に若い人々までが生活について考へるやうになつたところに、變化があり、問題の深刻さがある。

他人の作つた過去の作品について講義をして暮す學校の教師は、たとひ十分優遇されてゐないと云つても、そのやうな作品を實際に生産する文學者に比しては生活の安定を與へられてゐる。幾年文壇で働いても、そのために原稿料が上るのでもなく、年金が貰へるわけでもなく、そのうへ常に後から來る若い作家と自由競争をさせられてゐるといふのでは、文學者が生活の不遇を啣つことがあるのも當然であらう。

尤も、このやうに生産者が尊重されないといふことは、一般的に見れば、單に文學の世界のみではない。學問の世界にも同様のことがある。例へば、毎年學士院賞の受賞者は、文化科學の部門では、その殆ど凡てが東洋に關する歴史的研究に限られてゐるやうである。この方面の研究も大切には相違ないが、現代の生きた問題に直接關係する文化科學や哲學における本來の生産的な仕事があまりに無視されてゐる。學士院の存在が社會と全く沒交渉になつてゐるのもそのためにならぬ。

更に廣く眺めるならば、生産者の不遇は現代社會の一般的狀態であることが知られるであらう。それは單に精神的文化の生産者の場合においてのみでなく、却つて何よりも農民や勞働者の如き物質的生產に従事する者の場合において認められる。二つのことは決して無關係ではない。物質並びに文化の兩方面において生産者尊重の倫理を確立することは今日の社會の急務でなければならぬ。

文學者の不遇が社會的原因にもとづくことは明かである。しかし今日注意を要することは、自己の問題をただ社會に歸して、これを主體的に把握する勇氣が失はれつつあるといふ傾向である。凡てを社會的に客觀的に見ることは今日の常識となつてゐる。これはもとより極めて重要なこと

であるが、そのために却つて俗物根性が次第に廣く發生しつつあるといふことがなからうか。かかる俗物根性に對して英雄的精神の誕生が待望されるのである。そこに我々は生産者自身の倫理を要求する。

(五月五日)

## 地方と文化

東北地方の災害は行政上の畫一主義の弊を漸く認識させるに至り、東北廳の如きものの設置が問題になつてゐるが、同様の問題は文化の方面にも色々あるのである。

我が國の文化は東京に集中してゐる。芝居、音樂、美術、その他學校、出版、等々、殆どすべて東京に集中し、この都會と地方の都市との懸隔は甚だしい。封建的文化の殘存物ならともかく、現代的文化に關しては東京が我が國唯一の都會であると云つてもよい有様である。それぞれの地方に特色のある文化が發達してゐないために、現代日本の文化は多様性に乏しく、豊富さを缺いてゐる。

地方に文化が發達してゐないことは、我が國の文化が絶えず流行の暴威に委ねられてゐる原因

の一つである。各地方に獨自の文化が存在しないから、東京の流行は何等の抵抗にも出會ふことなしに地方を席卷する。内地を旅行して、一ヶ月遅れの、或ひは一ヶ年遅れの東京の流行しか文化的には經驗し得ない場合、私は憂鬱になる。もしもそれぞれの地方に獨自の文化が發達してゐたならば、我々の國民性に基くかのやうに慨歎されてゐる流行も、そんなに恐るべきものではないであらう。

また地方に文化が發達してゐないことは、我が國において新しい文化の成熟が困難にされてゐる一つの原因である。新しいものが流行することは決して悪いことでない。しかし必要なことは、そのうちの何物かが眞に成熟するといふことである。成熟するためには、特殊な傳統の故にその物にとつて特別に足溜りとなり得るやうな場所が必要である。もし地方の都會に各々獨自の文化があつたならば、新しい流行にしても、或るものは或る地方で、他のものは他の地方で、それぞれ自己に適した土地を見出して成熟し得るのである。

更に地方に文化が發達してゐないことは、我が國に文化上の自由が少い一つの原因である。流行の暴威が如何に甚だしく文化的自由を抑壓してゐるか。何處にも一様の文化しか存しないために、或る處で容れられないものは他の處でも容れられず、自分を自由に伸ばし得る文化的環境を

見出すことができない。個性のある文化が作られないのもそのためである。

かくの如き弊害は日本における政治上の畫一主義、教育上の畫一主義等の結果である。今日世界的畫一主義に對して日本の獨自性を自覺することが必要であるとすれば、我々ほもつと手近に日本の内部における畫一主義の打破について考ふべきではないか。

(五月十二日)

## 國語國字の問題

平生文相の漢字廢止論が議會において非難攻撃を蒙つた。文相はこれに對して漢字廢止は自己の個人的意見に過ぎぬと釋明して濟ませたが、國語國字の問題は教育上文化上極めて重要な事柄である。それは我が國多年の問題であつて、從來も種々論ぜられてきたが、最近においてはまた標準語の確立、外來語の整理等、國語統制論が新たに現はれてゐるやうである。

言語と社會とは密接な關係を有し、社會の變化するに伴つて言語も變化する。更に同じ社會の内部においても世代の相違に従つて言語も異り、若い世代は自己の感覺、感情、意欲を表現するために舊い世代とは異なる新しい言葉を用ひる。このやうなことは一般的眞理に屬するが、國語統

制論者によつてとかく見逃されがちである。

今日我々の國語の改善、統一等が問題であるとすれば、それは單なる統制主義の立場からでなく、文化生産の立場から解決さるべきことである。この點で傳統と創造との激しく格闘する場面につねに身をおいて制作に従事する文學者の如きから最も多くを期待しなければならぬ。明治時代において言文一致體を確立するに與つて大いに力のあつたのは文學者であつた。

國語國字の問題が我が國で特別に複雑な、そして困難な問題となつてゐるのは、嘗て本欄で論じたやうな日本文化の重層性といふ特殊な事情に基いてゐる。我が國においては種々なる文化、支那文化、西洋文化などが並在し、それらは客觀的に眞の統一をなしてゐないに拘らず、主觀的には何等矛盾として感ぜられてゐない。このやうなことは言語文章の方面においても認められる。單なる便宜主義の立場から漢字廢止を唱へても無力であるのはそのためである。また外來語の統制を主張する者が、西洋の言葉をそれ自身實は一つの外來語にほかならぬ漢語に譯して用ひるだけで外來語の整理であるかのやうに思ひ誤るのも、同じ事情によるのである。

私はいはゆる文化の重層性を日本の特殊性である故にそのまま尊重せねばならぬと考へる者ではない。我々の文化は客觀的にも眞に統一ある表現に達しなければならぬ。そこで國語國字の問

題は、日本の場合特に將來の文化の統一的精神を何處に求めるかに關係してゐる。かやうにしてその問題是一個の思想問題でもある。

言語の民族的純粹性はイタリアやドイツなどでも唱へられてゐることであるが、國語國字の問題が今日我が國において新たに問題になつてきたのも、社會的に見て意義深いことである。

(五月十九日)

## 低調な世の中

尾久の殺人事件は近頃センセショナルな事件であつた。議會に對する關心などは、この事件に對する興味に比しては殆ど何物でもないやうであつた。この殺人事件に何か變態的なものがあつたとすれば、それに對する社會の興味にも更に變態的なものがなかつたであらうか。

「センセイショナル」といふ語は今日の社會に最も特徴的な言葉の一つである。爆發、偶發、突發の事件は我々の生活の日常的な状態となつてゐる。それらのものは多くの人々においては眞實の欲求とさへなつてをり、彼等の心は突然の變化、つねに新たにされた刺激によつてのほか樂

しまされない。センセイショナルな事件は絶えず起り、どのやうな事件もなるべくセンセイションを喚び起すやうな仕方で傳へられる。好奇心は新しい事件を求めて不安である。かやうな状態は一の病理學的な状態ではなからうか。

物に對する不安な好奇心のうちに隠されてゐるのは自己自身の存在の不安である。今日かくもセンセイションが求められてゐるといふことは、この社會の不安を語るものにほかならない。

センセイションを求める人々において失はれたのは驚異の心である。彼等は今日の事件の何物に眞に驚異を感じてゐるであらうか。何物にも驚異しないといふことは虚無主義の心理であると云はれてきた。しかるに、何物にも驚異しない心がなほ絶えずセンセイションを求めてゐるといふところに、今日の虚無主義の低俗さがある。驚異の心が貞潔であるに反して、好奇心は反對である。好奇心は一つの物の側に留まることを欲せず、さきざきへ彷徨する。それは何處にもゐて何處にもゐない。好奇心は宿無しである。

「驚異こそ哲學者の感情である」とプラトンは云つた。しかるに驚異の心の貞潔を失つてセンセイションを求める低俗さに墮した好奇心の結果は、たかだか懷疑主義に過ぎない。懷疑主義は實踐的には功利主義、便宜主義となるのがつねである。少くとも、現實に對して極めて妥協的で

あるといふところに、今日の懷疑主義の低俗さがある。

我々の周囲には歴史に稀な、眞に驚異すべき大事件、大變化が起つてゐる。しかるに、この世の中の低調さはどうであらうか。好奇心を最大の惡と見做した昔の宗教家や哲學者の人間心理の理解の深さが今更の如く思ひ出されるのである。

(五月二十六日)

## 制度と人

制度が變つても人が變らなければ、眞の改革は行はれない。制度は人が作るものであつて、人が變らなければ制度も變らない。併しまた制度が人を作るのであつて、制度が變らなければ人も變らない。

どのやうな制度も、それが現存する限り、それを支持してゐる人間がある。現在の制度は全體としてブルジョワに支持されてゐるといふところまで云はなくても、現存する個々の制度には、それによつて生活し、それと利害を共にする人間が結び附いてゐる。彼等はその制度の廢止や縮小を欲せず、却つて反對のことを願つてゐる。制度の改革はかやうな人的要素の問題を無視し得

ない。

行政改革とか學制改革とか、制度の改革が最近の題目として唱へられてゐる。ところが實際は、かかる制度そのものの改革については問題はなく、問題はむしろ制度に結び附いてゐる人間である。制度の改革に關する智慧は缺けてゐないであらう、改革を困難にしてゐるのは人的要素である。

先年拓務省を廢止しようとしたとき、その官吏の反對に會つて中止になつた。また先年高等師範學校を廢止しようとしたとき、その教師や卒業生の反對に會つて中止になつたのみでなく、新たに文理科大學の如きものを附け加へるといふ結果になつた。これらの例は極めて教訓的である。かやうにして制度の改革が唱へられても、調査會に次ぐに調査會を作るのみで改革は一向行はれず、改革といつても母體はそのままにしておいて只新しい瘤を附け加へるだけのことに終るのがつねである。調査會を作るといふこと自體がすでに瘤を一つ附け加へることであり、官吏その他の關係者のために只新しい地位を殖してやることに過ぎぬ場合が少くない。

それだから根本的な行政改革が行はれるためには、全部の官吏が一度自己の身分を奉還する必要があるとすら考へられる。官吏の身分奉還が庶政一新の前提であるといふ急進的な意見も生じ

得るであらう。

しかしそこに現實的な問題がある。現在膨大な軍事費を豫定した上で行政改革を行はうとすれば、それは官吏の生活を脅かす危険を含んでゐる。そして現在他に新しい職業を求めることが困難であればあるほど、自己の犠牲において制度の改革を斷行する勇氣は失はれるであらう。かくて今日の社會の行詰りが根本的な行政改革を要求すると共に、この行詰りがその實行を困難にしてゐる。ここにも我々は資本主義社會の矛盾を見るのである。改革は根幹に觸れねばならぬ。

(六月二日)

## 人民の聲

旅行すれば人は多少は利口になるものと云はれてゐる。併しこれは誰についても云はれ得ることでない。馬鹿は旅行することによつて一層馬鹿になるだけだ。社會學者テンニースは書いてゐる、「旅行すれば、利口な者は益々利口になり、馬鹿は愈々馬鹿になる」。我々はこの言葉を特に官吏の旅行について想ひ起す。

旅行者は短い期間の狭い見聞から概括論、一般論を立てたがる。何等かの報告の義務を負はされてゐる役人においてこの弊害は生じ易いであらう。殊になるべく上司の氣に入るやうな報告を持つて歸らねばならぬ者は、旅行してもその眼は塞がれてゐるに等しい。出先の官憲によつて豫め作られた行程に従ひ視察して廻つたとして、民間の實情が知られるであらうか。誰も自分の郷里の悪い方面を旅行者に見せることを好まない。まして自分の治績を吹聴することを利益とする地方の役人の案内によつて、その地方の現實が完全に知られ得るであらうか。年度末になると、その年の豫算の残りを費ひ盡してしまふために、急に殖えるのが例となつてゐる出張旅行の如きは、全く論外だ。

後藤前内相は「行脚政治」を唱へた。併し官吏の行脚によつて民間の實情に即した政治が果して行はれるやうになるかどうか、疑問である。旅行すれば、馬鹿は愈々馬鹿になるばかりでなく、利口な者も馬鹿に化する危険がある。官尊民卑の風のある國において、地方へ出掛けて閣下とか先生とか云はれて歓迎されてゐると、少々利口な人間も馬鹿になつてしまふ。始終地方へ行く講習會學者に見られるやうに、行脚官吏も低調になり易いであらう。

民間の實情を知るには、視察旅行だけでは足りない。人民をして自由に自己の實情を語らしめ

ねばならぬ。醫者は患者にその症狀を訴へさせる。患者の話を聴き、それを自分の醫學的知識で分析して、醫者は病氣に對する治療法を見出すのである。政治に携はる者も醫者と同様に先づ人民の聲を聴くことが大切である。人民の聲が自由に自分に達するならば、そして自分が十分に社會に關する科學的知識を具へてゐるならば、行脚に出掛ける必要もそれほどないのである。

言論の自由を抑壓し、人民に沈黙を強制しておきながら、どれほど視察や調査を行つても、眞に民間の實情に卽した政治は行はれ難いと云はねばならぬ。

(六月九日)

## 生産者の立場

パリの博覽會における日本館について、建築家と當局との間に意見の相違があると云はれてゐる。建築家が現代日本的な建築の設計をしたのに對し、當局はフジヤマを控へてゲイシャがサクラを眺めるといつた風の建築を要求してゐることである。私はこの場合専門建築家の意見に賛成したい。

なるほどフジヤマやゲイシャやサクラは日本の特性を現はしてゐる。併しそれらによつて象徴

されるものは現代日本の文化の現實とは距離がある。建築にしても、特に公共的建造物は現在殆ど凡てが、西洋式でなければ西洋式の基礎の上に日本的なものを示すことに努めてゐるのである。そして西洋人が實際に知りたがつてゐるのも、かかる現代日本的なものである。

フジヤマやゲイシャやサクラが象徴するやうなものを西洋人が喜ぶのは、異國趣味としてであり、従つてディレッタントの立場においてである。私どもの外國滞在の經驗から云つても、多くの西洋人は最早そのやうな異國趣味の域を脱して、寧ろ現代日本人が彼等と同様の文化に關してどれほどの力量を有し、且つそのうちにどのやうな特殊性を發揮し得るかを知らうと望んでゐる。東洋の諸民族の日本に對する關心もその點にかかつてゐることは、支那人留學生についても知り得るであらう。

聞くところによると、國際文化振興會などに向つても、日本の社會や思想の現状を紹介してくれといふ諸外國からの註文がかなり多いさうだ。然るに振興會あたりでは、過去の古典的な日本の紹介には熱心であるが、現代日本の文化の實情の紹介に對しては甚だ臆病に見えるのは、何故であるか。

我々も日本の過去の文化を尊重し、愛好する。併しそれが如何に美しいにせよ、ひとたび生産

の立場に立つとき、我々はそこに留まり得ない。我々は最早それと同じものを、それに匹敵し得る高さにおいて自ら作り得ぬであらう。現代の社會生活並びに文化的環境はそのことを不可能にしてゐる。我々自身の文化生産にとつては現在の現實がその地盤であり、この上に立つてのみ將來に對して意義ある日本的文化を生産し得るのである。ひとは過去の文化を愛玩し、鑑賞し、解釋しさへする。併しそれだけではディレッタントに終り易い。生産者の立場は一層困難で、一層眞剣なものであることを知らねばならぬ。

この頃日本主義の宣傳に伴つて、過去の日本の文化のディレッタントが多數に生じつつある。日本主義は文化上では復古的ディレッタンチズムに化してゐる。かかるディレッタンチズムが文化の新たなる生産の立場を壓迫しつつあるのは、日本の將來にとつて、これこそ眞に憂ふべきことである。

(六月十六日)

## 明治の再認識

文教一新の立前から平生文相は、義務教育八年制の實施とか、藝術局の設置とか、いろいろ計

畫を立ててゐるとのことであるが、さてその財源はと云ふと、なかなか問題であらう。ただ現代美術館の設立は、その基金の一部を民間からの寄附に求め得る性質のものである故に、これだけは平生文相の事業としてぜひ實現して貰ひたいものである。

現代美術館の設立は國民の年來の希望である。このやうな希望が廣く存在するといふことは、次の事實に基くであらう。即ちそれは、

第一に、明治以後における日本の藝術がそれ以前の藝術と性質的に違つた新しいものであるといふこと、

第二に、このやうな新しい藝術が我が國においてもはや一つの傳統となり得るまでになつたといふこと、

第三に、今日の人々がこのやうな新しい傳統をすでに傳統として尊重し、その意味を新たに認識する必要を感じずるに至つたといふこと、  
を前提してゐるのである。

このやうな事實は、我々の眼を美術の世界から文學の世界へ向けるととき、容易に認められる。あの圓本時代を一轉期として明治大正文學の全集物の刊行が盛んになつたが、その原因のうちに

は、國民が明治大正の文學を一つの傳統として、即ち「新しい古典」として尊重し、再認識し始めたといふことが含まれるであらう。いはゆる愛國者は、我が國民はつねに西洋の新しいもののみを追うてゐる、と云つて慨歎する。けれども事實はさうでなく、我が國民は彼等の考へるよりも遙に健全であり、この頃の日本主義が唱へられるに先立つて、民衆は明治大正の文化を一つの尊重すべき「傳統」として顧みることを知つてゐたのである。

近頃、明治時代のことは何でも悪く云ふのが一種の流行となつてゐる。併し國民の常識は、明治以來我が國の文學が、西洋文學との接觸によつて、獨自の、日本的な、新しい古典を作り出したことを知つてをり、この新しい傳統の意味を考へ直す必要を感じてゐるのである。

文學の場合には現代美術館に匹敵するやうなものを各人が自分の家の中に手軽に作り得る便利がある。最近における『鷗外全集』『花袋全集』の刊行など、喜ばしいことである。森鷗外の如き、生前文壇からはディレッタントと見做され、その眞價は十分に認められなかつたのであるが、今後その偉大さが愈々分つてくる人であると思ふ。帝國美術院長になつたこともある鷗外が生きてゐたら、今日の美術界において何を考へ、何を爲したであらうか。ともかく彼は、我々の現代文學文庫の中で最高の位置を占める人となつた。

(六月二十三日)

## 思想のない政治

政治は面白くない——かう云つても、我が國では問題なしに當然のことのやうに考へられる。このやうに政治が面白くないといふ理由の一つには、我が國の政治に思想がないといふことがあるであらう。

現内閣の成立根據はいはゆる「時局認識」であつた筈だが、その時局認識の思想が如何なるものであるか、今もつて明かになつてゐない。最近政府は種々の政策を擧げてゐるにも拘らず、政治が依然として甚だ不透明で、鬱陶しく感ぜられるのも、そのやうな政策を指導する思想が明瞭でないためである。否、政策の思想性を故意に蔽ひ隠さうとしてゐる場合も見られるのである。思想のない行動はその場かぎりの不徹底なものになり易いのは勿論、公共性を缺いたものになる。思想性は公共性の要素である。最も公共的であるべき性質の政治が公共性を缺いてゐるといふところに、國民が政治に對して興味の持てない理由がある。

尤も、どのやうな人間の行爲もその人の信ずる神が何であるかを現はすと云はれるやうに、思

想のない或ひは故意に思想を避けようとしてゐるやうに見える政治のうちにも思想が現はれてをり、従つてそれを思想的に批判することが大切である。その思想性を追求することなく、個々の政策にはゆる是々非々主義をもつて對してゐると、思はぬ誤謬に捲き込まれることになる。これは文學者や美術家を始め、政治に素人である一般人の近頃特に警戒を要することであらう。

思想のない政治が無数の無性格な人間を作り出してゐる。今日の人間が無性格であるのは思想を失つたためであり、そしてそれは思想のない政治のうちに一つの重要な原因をもつてゐる。生活に思想はいらない、日本人は思想がなくても生きてゆかれるやうに云はれてゐた。しかし現代人、特に現代青年の無性格は、もはや我々も思想なしには生きてゆかれぬことを示してゐる。政治の思想性が今日特に問題でなければならぬ。

文學の思想性については從來繰返し論ぜられてきた。思想のある文學を、といふことは今日の一般的要求となつてゐる。然るに思想のある文學は、政治に思想がない限り、社會人の生活そのものに思想がない限り、生れてくることが困難である。文學についてのみ思想性を問題にしても、抽象的に留まらねばならぬ。

(六月三十日)

## 養生の説

我が國の昔の儒者や佛敎家の著述には養生について書いたものが少くない。益軒の『養生訓』、澤庵の『骨董錄』、等々、有名なものがある。それは勿論支那思想の影響によることであらうが、日本精神史にとつて注目にする事實である。

特に興味深いのは、隱遁思想と養生思想とが極めて屢々結び附いてゐるといふことである。世を遁れる者が養生に努めるといふことは一見矛盾のやうである。しかし世を遁れることがそれ自體、人壽を全うし長命を樂しむために大切な手段であると考へ得るであらう。

ところで近頃、少壯乃至中堅と云はれる人々の間にさへ、長生きせねばならぬ、養生をせねばならぬ、といふやうな談話が交されてゐるのを多く耳にするやうになつた。勿論、人生において、早く死ぬるのは負けであるに違ひない。しかしこの頃の養生論にはもつと複雑な意味が含まれてゐると思はれる。

社會の不安のために、地位も、財産も、その他何物も頼み得ないことが次第に感ぜられ、頼り

になるのは結局自分の身體だけだといふ風に考へられるであらう。或ひは現在の社會の風潮が自分の志を遂げるに不利なのを見て、長生きして、あまり遠いことでない社會の變革の來るのを待つてゐようといふやうな氣持もあるであらう。また社會の動搖のために自分の思想の方向が決定されず、徒らに焦躁を重ねることに疲れて、社會の動向が明瞭になるまで、いま少し待つことにしようといふ氣持もあるであらう。

いづれにしても、近頃の養生思想には、一定の目的に向つての自己の現在の活動を成就するには歲月が必要であるとして衛生に留意するといふやうな積極的なものが乏しいと思はれる。理想と確信とに燃ゆる者にはまた自己の生命を顧みないところがある。しかるに近頃の養生思想はたいてい人生及び社會に對する消極的な、更に敗北主義的な態度と結び附いてゐる。隱遁思想との距離は遠くないであらう。我々はその養生思想のうちに東洋的な隱遁思想の復活の徴候を見ることができる。

最近政府は軍部の要望に基いて國民の衛生保健を國策として掲げてゐる。政治家はもつと心理學者でなければならぬ。養生思想は近頃決して乏しくはない。かやうな養生思想の發生の社會的原因の除去が却つて健全な衛生思想の發達の前提として必要なのである。

(七月七日)

## 宗教の改革

この頃宗教界にはいろいろ醜惡な事件が現はれて世間から齟齬されてゐる。そのやうな事件は既成教團の内部でも生じてゐるのであるが、また新興宗教乃至邪教においても最近崩壊作用が行はれてゐるやうである。いはゆる宗教復興も今や清算の時期に達したのであらうか。

注意を要するのは、かの新興宗教もその教説のインチキ性によつて没落し始めたのでなく、主として經濟的問題から自壊作用を起してゐるといふことである。この點でそれは正統教團の内部で發生してゐる事件と根本において性質を異にするものではない。

一體、現在の教團は世間の政治的經濟的組織と同様のものになつてしまつてゐるので、一擬似宗教が宗教株式會社として現はれたといふことは、偶々その點を露骨に示したに過ぎないとすら極言し得るであらう。だから一部の人の云ふやうに宗教家には社會的政治的關心が少いなどとは單純に云へないので、反對に今日の宗教家は世間の政治家、企業家、經營家と全く同じになり、社會的政治的關心があり過ぎて困るのである。そのやうな宗教家において、世間の政治家などに

見られるのと同様の醜事實が現はれたとしても、不思議はないので、偶々彼等がそのほかになほ「宗教家」であるために、特別に世間の注意を惹くに過ぎぬ。

もし宗教の復興が可能であるとすれば、それは教團の改革に始まらなければならない。教團の改革に觸れないで宗教の復興を欲しても無駄である。然るに現在の教團は世間の政治的經濟的組織と同じものとなつてをり、現在の全體の社會機構の内部においてその制約を受けてゐるのであるから、教團の改革を欲する者は、現在の全社會組織の改革を欲するのでなければならぬ。

勿論、宗教家は宗教家として單なる社會改革家でなく何よりも宗教改革家であることが要求される。併し彼の宗教改革的意見は社會改革的歸結を含むやうなものでなければならぬ。嘗てルターの宗教改革は封建制度に對して擡頭する新興ブルジョワジーに適合したものであつた。宗教家は現在その教説に改革を加へ、新時代に適する「新しい經典」を作るほどの勇氣と覺悟とを必要とする。かくて私の屢々云つてきた如く、「宗教改革」なくして宗教復興はあり得ないのである。

(七月十四日)

## 世界の認識

外國から日本へ來る觀光客は近年頗る増加した。それは日本に對する外國の關心が増大した一つの兆しとして喜ばしいことである。彼等の落してゆく金が我が國の國際貸借の帳尻に相當の結果を現はしてゐるとすれば、それも結構なことである。

外人觀光客の増加は喜ぶべきことに相違ないが、立場を變へて考へると、ただ喜んでばかりもゐられぬことである。我々が彼等と同様に容易に外國見物に出掛け得ないといふことは、彼等の國民の富、所得における懸隔を示すものである。しかも彼等と我々といづれが多く世界を知る必要を有するかと云へば、地理的並びに歴史的事情から考へて、それは寧ろ我々であらう。

日本人の「島國根性」といふことは永い間我々日本人の間で合言葉となつてゐた。この自己批判的な言葉のうちに本當に日本人の逞しい氣宇が表現されてゐたのである。ところが近來「日本精神」といふ言葉が流行し始めてから、あのやうに屢々聞かれた島國根性といふ言葉が殆ど全く聞かれなくなつてしまつた。しかもかかる日本精神主義者の思想や行動のうちに實は島國根性の

要素が多く殘存しはしないか、反省を要するのである。

現代の日本にとつて世界は甚だ擴大された。けれどその世界は今日も我々にとつてその多くの部分は觀念的存在に止まつてゐる。歐米人が交通によつて相互に知つてゐるやうな仕方では實際に歐米を知つてゐるのでない。日本の教養ある階級においてすら隣國支那を實地に知つてゐる者は意外に少數である。その意味で日本は現在に至るまで比較的に閉された社會である。

かかる事情に相應して、從來日本における外國文化の移植の如きも觀念的な仕方で行はれた。外國の風土、風俗、生活についての實際の知識を缺いた精神的文化の抽象的な輸入がなされてきた。そこから屢々外國に對する抽象的な崇拜が生じた。我が國民に古來外國崇拜の風ありと云はれるのも、右の如き文化移入の仕方における抽象性に一つの理由を有するであらう。しかも他方この頃の外來思想の排撃もその抽象的なことにおいてそれと同等以上である。かくの如き抽象性から脱却するために多數の日本人が外國へ見物や見學に出掛けるやうになることが望ましい。

それによつて今日の日本にとつて最も憂慮すべき國際的孤立の危險についての國民の認識が深められることは特に切實な必要である。それは「躍進日本」に對する外國の嫉視に過ぎぬかのやうに云つて自ら慰めてゐるべき問題ではないのである。

(七月二十一日)

## 「轉向」の性格

轉向といふ語も現代に特殊な語彙に屬する。それは勿論、左から右への轉向のみでなく、右から左への轉向をも意味してゐる。周知のジードの轉向の如き、後の場合である。轉向は日本のみの現象ではなからう。併しそれは日本的性格を示す特徴的な現象である。

嘗ていはゆるマルクス主義の華かなりし頃、多くの人々がそれへ轉向した。また近年ファッシズムが盛んになると共に、多數の者がこれへ轉向してゐる。左への轉向にせよ、右への轉向にせよ、甚だ安易に行はれる。かりに日本にヒトラー的政治が出現するとしても、あのドイツで見られたやうな悲劇は多分起らないであらう。自由主義者もいつしか國粹主義に轉向してゐるであらう。先程まで外國の最新學說の紹介に憂身をやつしてゐた學者が、今はもつと間に合はせの日本主義を唱へ、それについて彫大な著述をさへするといふのが現状である。人格とか道徳とかを喧しく言ふ教育界にかやうな現象が特に著しいといふことは矛盾であつて、注目すべきことである。左への轉向の場合においても、我が國の知識人にはジードの如く良心の永い試練を経つつ轉向し

た者は殆ど見當らない。

相反するものに直ちに轉向し得るといふことは日本の性格である。私はこの性格を無形式の形式と呼ぶ。それは形あるもの、客觀的なものに固執しない性格である。それは淡泊とも融通性とも云はれ、日本人の現實主義的な強さを現はしてゐる。併し他面それは日本人が主義的思想的には頼りのない人間であることを意味してゐる。日本の歴史には科學や哲學の如き客觀的文化が發達しなかつたと云はれる事實の原因も、そこにある。かかる日本の性格は、日本の社會が狭いために自由に乏しいといふこと、日本における自由主義の發達が不十分であつたといふこと等にも關係があらう。何にしても、そこに缺けてゐるのはヒューマニズムである。主義者が檢舉されると、官憲から轉向を勸説されるといふが如き、如何にも日本らしい好きがあるが、その一面には思想並びに人格の尊重の觀念の缺乏を現はしてゐる。

ところで轉向といふ語が普通に左からの轉向にその意味を奪はれ、多くのいはゆる轉向文學においてそれが客觀的表現に齎されたといふことは重要な事實である。そこに傳統的な日本の性格とヒューマニズムとの相剋が自覺されねばならない。轉向者の轉向は日本の性格によることが多くであらうが、彼等はそこに安んじ得ないで、人格の徹底、科學的眞理の尊重などといふヒュー

マニズムの要求する良心の問題を負はされた。主體の新たな鍛錬、新しい人間を作ることが必要である。だが最近右へ右へと轉向してゆく人々にかかる良心の問題が存するであらうか。

(七月二十八日)

## 開いた心

先年或る外國の新刊書を日本の學術雜誌に紹介してくれと頼まれたとき、私は、少くとも哲學や社會科學或ひは文化科學の方面においては、日本に果して眞の學術雜誌が存在するのかどうか、迷はねばならなかつた。

なるほど學術に關する雜誌は多數存在する。それは有力な校友會の存在する數だけ存在する。言ひ換へると、日本のいはゆる學術雜誌は學界の雜誌といふよりも校友會雜誌の性質をもつてゐる。それは各大學の各科で個別的に發行され、その執筆者も殆どその卒業生に限られてをり——なぜなら他の大學、他の科の出身者がその教師に採用されることは極めて稀である——、その讀者も主としてその同窓生を基礎としてゐるといふ有様である。それは學閥の機關であつても、

學派の機關であるのではない。學會と云つても學友會的性質のものであつて、眞に學界に屬するとは云ひ難い。

學界は世界性を有するものでなければならぬ。世界とは本質的には範圍の廣狹に關することではなく、開いたものの性質を有するものである。閉じたものはその周邊をどれほど擴げても開いたものとはならぬ。兩者の差異は量的でなく、性質的である。世界といふ言葉の意味する空間的な廣さも、閉じたものに對して開いたものの有する根本的構造の一つの表現乃至象徵にほかならない。専門といふものもかかる世界の中において眞の意味を有し得るのである。

いま學術雜誌は單に一例であつて、同様のことは我が國の社會において到る處に見出される。我々は日本人の心の深さを疑はない。併しそこに缺けてゐるのは開いた心である。開いた心は客觀的なものに向ふことによつて成立する。この「客觀への轉向」といふことが日本人に最も缺乏してゐるのではないかと思ふ。

近頃國策閣議の停頓は種々の理由によるであらうが、その重要な一つがまたかくの如き開いた心の缺乏に存する。各大臣がそのいはば専門の立場をめいめい尊重することは何等非難さるべきことでない。停頓はそこから來てゐるのでなく、日本の社會においてもつと日常的なことから來

てゐる。従つてその責任は大臣だけにあるのではなく、各省の官吏の全體にある。政策を綜合的に樹てるために無任所大臣を置くといふ説もあるが、眞の専門家が存在しないところに眞の綜合家が存在し得るであらうか。眞の専門的立場は開いた心において成立するのである。（八月四日）

### 愉快な義務

オリンピックのベルリン大會に日本のジャーナリズムは熱狂してゐる。武力による戦争が起つても、これ以上の熱狂は不可能であらうと思はれる程度に。國際的にはスペインの内亂、對支外交等の如き、國內的には謂はゆる國策の樹立、軍事費の捻出等の如き問題は、いづれもオリンピック競技とその重要性を競ひ得ぬものの如くである。或ひは人々は、それらの重大問題について考へるたびに襲はれざるを得ない陰鬱な氣持を散ずるために、かくもスポーツに熱狂してゐるのであらうか。

ベルリン大會で日本の代表選手が續々好成績を收めつつあることは、我々の感激するところである。そして次の大會が東京で催されることに決定したのは、とりわけ愉快なことだ。我が國民

の誰も喜んでこの愉快な義務を負ふであらう。それは確かに日本の獲得した權利であると共に日本に課せられた義務でもある。この義務をその全體の擴がりにおいて考へることが大切である。

「一九三五・六年の危機のために」といふことが、これまで日本の標語であつた。然るにこれからは、「一九四〇年の平和のために」といふことが我々の標語とならねばならぬ。次のオリンピック大會が不可能にならないやうに、世界平和の維持のために努力することが日本の第一の義務である。オリンピック競技こそ國際主義の眞の精神を教へるものである。

次に、我々はオリンピックを單なるスポーツとしてのみ理解してはならぬ。今ベルリン大會が我々に齎しつつある感激の如何に多くの部分が科學の力に負うてゐるかを考へてみよ。ラデオ、電送寫眞、等々の驚歎すべき發達なくして現在のオリンピックの熱狂は可能であらうか。一九四〇年を目差して科學日本の一大飛躍を期することが、これまた我々の愉快な義務でなければならぬ。

更に、もしまたオリンピック大會の東京開催が日本を世界に紹介するに絶好の機會であるとするれば、その時までに爲すべきことは限りなく多いであらう。博物館、美術館、圖書館などの擴張乃至新設の如きは云ふまでもない。しかし特に必要なものは健康日本である。健康日本を誇り得

るに至ることは我々にとつて、スポーツの眞の精神に合致した愉快な義務でなければならぬ。オリンピックに刺戟されて、スポーツが全く競技本位、記録本位、選手本位に陥ることのないやうに、今後特に戒心を要するのである。

オリンピックに伴ひ易いスポーツにおける貴族主義、英雄主義乃至天才主義の揚棄がオリンピックの新しい精神でなければならぬ。

(八月十一日)

## 「哲學のない日本」

「我日本、古より今に至るまで哲學無し」と、中江兆民は書いてゐる。西周も同様の意見を述べたことがあると聞いてゐる。日本に哲學がないと云へば、反對する者、憤慨する者も多いであらうが、それは哲學といふ概念の意味の相違によることである。

「哲學といふ概念を、西洋風にちやんと作り上げて來て、さてそれに當てはまるやうな物を、これまでの日本に捜し求めた時、あまり立派な物を發見し得ないのは無理もない話である」と、生田長江は書いてゐる。併し、この晩年一種の日本主義に轉向した批評家も、次のことは認めね

ばならなかつた。「從來日本に、偉大なる思想及び思想家がなかつたといふやうな、馬鹿なことを言ふ人間があれば、流石の私も聞き流しにしないつもりだけれども、我々の先祖に、偉大なる學問も學者もなかつたぢやないかと言ふ者に對しては、殘念ながら其の通りと、同ぜざるを得ないのである」。日本に哲學がないと云ふのは、長江のいはゆる「學問」としての哲學に關してゐるのである。

同じやうに、日本の文學には思想がないと云はれてゐる。日本の文學に一般に思想がなかつたのではない。むしろ思想といふ概念の意味が現代の日本人の常識にとつて變つてきてゐるのである。從來日本の小説は情事小説のみであつて、戀愛小説はなかつたといふこと(中村武羅夫氏)も、日本の文學には思想がないといふのと同様の意味において云はれ得ることである。

日本に哲學がないと云へば、そのやうな哲學は日本には不要だと考へられるかも知れない。併し事實は現在全く反對になつてゐることに注意しなければならぬ。

スペインの内亂を契機として愈々明瞭になつたヨーロッパの混亂は單にフランス、ロシヤ、ドイツ、イタリアといふやうな國と國との争ひとしてのみ見ることができぬ。それは階級と階級の争ひの意味を含んでゐる。しかもそれは特に思想戦争の意味をもつてゐる。それは昔の宗教戦

争に代る新しい思想戦争である。もしさうだとすれば、この世界的危機に、日本は如何なる思想、如何なる哲學をもつて對しようとするのであるか。いはゆる日本の思想は如何にして國際的妥當性を有するのであるか。

日支親善、日英同盟の復活などと云つても、それは今日もはや單に國と國との問題に留まらず、階級の問題、更に特に思想の問題を含むことを考へねばならぬ。日本に哲學があるかといふ問ひは、單に哲學者にのみ關はることでない。

(八月十八日)

## 派閥の醜争

先般九州帝大醫學部附屬病院において、重病の婦人患者手術中の一博士を數名の同僚が室外に拉致して暴行を加へたといふ事件が生じた。これは單に學内の不祥事件にとどまらない。人命を預かる醫者としての責任があくまでも追及さるべきである。

この不祥事件は派閥の暗闘に基くと傳へられてゐるが、近年多くの官立並びに私立大學における騒動がこの種の暗闘に原因を有することに注目しなければならぬ。由來、學校騒動は日本の名

物であると云はれてゐる。その學校騒動も、往年の思想問題に影響された學生ストライキ時代には幾分明朗なところもあつたが、この頃の如く教授自身の間の暗闘が原因であつては如何にも陰氣である。派閥の争ひといふやうな封建的なものが、最高の文化人と目せられる大學教授の間に存在するといふことは響響すべきことである。

派閥の醜争は我が國の社會の諸方面において認められる。その弊害はもとより少くないが、なかなか遺憾なことは、かやうな争ひのために社會から優秀な人物が失はれるといふことである。派閥の對立するところでは、特色ある人物は斥けられ、兩派のいづれからもあまり問題にならないやうな平凡な人間が用ひられる。また一つの派閥に依頼する者は、その埒内から食み出して自由に自分を伸ばすことができず、人間も學問も小さくなつてしまふ。今日我が國の社會の各方面において人物拂底が歎ぜられてゐるが、その重要な原因の一つは派閥關係にあると思ふ。

派閥は主義や思想の對立に基くものでない。それは客觀的な、公共的な原理に依る結合ではない。派閥の争ひの盛んな我が國においては、却つて、眞の意味での學派の對立の如きものは存在しない。反對者の立場といふものが認められず、重んぜられず、また無力であること、我が國におけるが如きは稀であらう。流行といふやうなものによつて總てが一色に塗られてしまふ。しか

も、いはゆる全體主義の思想で塗りつぶされたやうに見える今日においても、派閥の分裂、暗闘は依然として到る處に存在する。反對者の立場を認めて公けの場所を與へよ。これが派閥の弊をなくする道である。

(八月二十五日)

## 英雄主義の待望

青年論だの、道德論だの、ヒューマニズム論だのが相變らず論壇のトピックとなつてゐる。一體それらを問題にすることによつて何が期待されてゐるのであらうか。私はそこに英雄主義の待望を感じる。

何もかも衰弱してゐる。不健全などといふ比ではない。不健全と云はれるものは見方を變へると健全だとも云ふことができるが、衰弱してゐるものはどうにも辯護の餘地のないものである。とりわけ思想の衰弱は甚だしい。思想の混亂などと云ふのは、現在では誇張乃至虚榮に過ぎず、目立つて感ぜられるのは思想の衰弱である。

かやうな衰弱は局限された現實への追隨もしくは妥協から生じてゐる。局限されたといふのは、

發展的に見られてゐないといふことである。そして悪いことには、かやうな追隨または妥協が現實主義或ひは客觀主義の名において辯護されてゐる。現實主義は一つの思想であるが、そのやうな追隨または妥協はさうでなく、却つて現實主義の思想の衰弱から生じたものにほかならない。

不安の思想の衰弱が今日の不安であり、デカダンスの思想の衰弱が今日のデカダンスであり、ペシミズムの思想の衰弱が今日のペシミズムである。従つてそれらは何等人間性の高貴に價する不安でも、デカダンスでも、ペシミズムでもない。思想に生きる精神、抽象的なものに身を捧げ身を滅ぼす情熱が要求されてゐる。泥沼に落ち込んだ現實主義からの主觀性の昂揚が英雄主義の名において要求されてゐる。思想といふ抽象的なもののために生きまた死ぬるといふことは非現實的だと云はれるであらう。併し現在のあらゆるものの衰弱状態は、感覺的な現實性だけではどうにも救はれないことを示してゐる。思想が現實よりも具體的であることを知るのが辯證法の精神である。

政治の衰弱も著しいではないか。庶政一新とか國策の確立とか、いろいろ元氣のよいことが云はれてきたが、その庶政一新の國策が決定發表された今日において、誰もが痛切に感じてゐるのは政治の衰弱である。政治の衰弱は政治の無思想に由來する。ここでも要求されてゐるのは思想

に生きまた死ぬるといふ英雄的精神である。

主觀性の復權！ 現代の唯物論と現實主義にも拘らず、寧ろそれらの故に、主觀性の昂揚が要望されてゐる。それは現實が困難であればあるほど愈々要望されるのである。（九月一日）

## 素人の説

繪のことは分らんと云つた人が美術學校の校長になつた。それは多分謙遜から出た言葉であつたらう。繪のことは分らんと云つた人が美術院改組に手を著けた。だから問題は特定の個人に關しない。前文相川崎氏は文政については素人であつたが、今の文相平生氏も素人らしきがあると云ふので却つて好感を持たれてゐるやうだ。

由來文政關係では特にさういふ素人が多いことに注意すべきである。美術學校の校長が繪のことは分らんと云つても、それで通るのである。これが他の方面になると、大藏大臣が、おれには租税のことは分らんと云ひ、司法大臣が、おれには民法のことは分らんと云つて、それで通るであらうか。そこに少くとも傳統的な文政輕視が認められる。ただ思想問題だけは別のやうで、お

れには思想のことは分らんと公言する人はゐないのが不思議である。思想のことは繪のことよりも容易なのであらうか。

素人の長所は屢々説かれてゐる。専門家の限界が局限され易いに反して素人は大局に目を附けることができる。専門家が情實にとらはれるに反して素人はそれにとらはれない。専門家が臆病になりがちなのに反して素人は大膽に行動することができる。だから改革には素人が適任だ。確かにそんなところがある。今日の如く改革の要求される時代には各方面において大いに素人の意見を用ひることが必要であらう。

併しさういふ「素人」とは何であるか。もし素人といふ意味が或る事柄について元來無關心で、従つて全く無知であることならば、そのやうな素人の考へは用をなさない筈だ。また素人とは専門家の偏執を有しないものといふ意味であるならば、素人と云はれる人が實は素人でない場合が少くない。法科萬能の我が國では、或る事柄について素人と稱する人が何等素人でなく、却つて法律的な考へ方にとらはれてゐることが多いのである。何でも法律的な頭で考へてゆくのでは素人の好きは現はれない。特に法律的な頭は前例といふものを甚だ重んずる。だから素人であつても思ひ切つた改革は行ひ難いのである。

ほとんどの素人は治める者に對して治められる者、命令する者に對して命令される者、教へる者に對して教へられる者の中にある。後者は前者の行動について直接の利害と關心を持ち、しかも前者とは逆の立場、裏の側から物を見ることが出来る。つまり素人を重んずるとは大衆の考へを重んずることであり、素人であらうとする者は大衆の立場を代表する者でなければならぬ。さうすれば事に當るのは専門家であるのがよい。

(九月八日)

## 二律背反の問題

全國特高課長會議の結果内務省の邪教取締は強化されることになったが、一方文部省でも専門學者を動員して學問的に邪教批判を行ふと云ふ。いはゆる邪教の蔓延の如何に深刻であるかを思はせる。

學問的に邪教を批判するとなると、邪教と正教、迷信と正信の區別、進んでは知識と信仰、科學と宗教の關係を學問的に明かにすることが必要にならう。科學と宗教の問題は西洋においては重大なアンチノミーとして現はれ、キリスト教神學並びに哲學の發展を規定してゐる。我が國の

佛教は古來そのやうな二律背反を知らなかつた。そこに東洋的智慧の特色が形作られ、その具體性があると共にまたその韜晦性が生じてゐるのではないかと思ふ。

文部省の行はうとする邪教批判は宗教そのものの立場といふよりも思想國策の立場に立つものであらう。そこに宗教と政治の問題がある。一方陸軍でも廣義國防の見地から宗教家の動員を企て、佛教各宗の有力者をもつて組織される明和會と軍部との懇談會が先般開催された。宗教と政治の關係は愈々密接になりつつある。宗教と政治も西洋においては絶えず二律背反の問題として現はれ、それがキリスト教の社會哲學の發展を規定してゐる。我が國の佛教は同じやうな問題を殆ど有しなかつた。近頃日本佛教の特質として國家本位といふことが頻りに唱へられるが、もしさうだとすれば、それは日本佛教が政治と宗教の問題をアンチノミーとして知らなかつたことを意味するのだからうか。そこに日本佛教の現實主義の特色があると共にまたその現實主義が現實追隨に墮し易い理由があるのではないかと思ふ。

佛教は辯證法的だと云はれてゐる。ただその辯證法が科學とか政治とかといふ最もなまの現實に關はるものとの二律背反の問題に實際的にぶつつかつて戰つてゐないと思へば、その勝れた現實主義も、一方消極的には心境的なものになり易く、他方積極的には現實に對して批判的原理を

有せぬ現實追隨に陥り易いのである。例へば世間出世間といふのはひとつの二律背反である。この二律背反に固執すれば抽象性に陥る。併し抽象性に身を滅ぼす危険を冒し得る者のみがほんちに辯證法的な具體性を獲得することができる。眞の宗教家はかかる現實否定の冒險をした人であらう。現實主義の名のもとに主觀性の冒險がなくなり、辯證法の名のもとに抽象性の冒險がなくなり、かくて現實への屈從のみが今日目立つてゐるのは佛教界のみのことではないやうである。

(九月十五日)

## 人文教育の矛盾

我が國の中等學校高等學校などで一般に課せられてゐる漢文といふものは、西洋諸國におけるギリシア・ラテンの古典に相應すると云はれるであらう。それは人文教育と稱せられるものである。教育における單なる實利主義、能率主義の立場からかやうな人文教育の不必要を唱へる説には遽に賛成し難いが、しかし漢文乃至漢學と西洋古典との間には性質的な相違があり、我が國における人文教育上大いに反省を要するものがある。

先づギリシア文化の如きは、そこに學問の理念が生れ、諸科學の淵源が存し、かかる古典を基礎とする人文教育は知識や科學に反對しないけれども、漢學的教養の結果は今日も屢々智育を輕視もしくは排斥する傾向を生じてゐる。漢文で鍛へられた人間にはかかる人文教育の好きも確かに認められ得るが、科學に對して救ひ難い偏見を有する者が少くないことも事實であらう。

次に漢文は人文教育と見られ得るにしても、その内容は支那古典の一特性としてヒューマニスティックであるよりも遙かに著しく政治的イデオロギーを含んでゐることに注意しなければならぬ。人文的教養と考へられる漢文は人々の心におのづから一定の政治的イデオロギーを深く浸潤させる。いはゆる治國平天下式イデオロギーであつて、我が國の政治家、官吏、軍人等の政治思想は今日もこの種のものに止まつてゐるのが案外多いのではないかと思ふ。そしてそれが政治についての進んだ科學的見方の障礙となつてゐる。

漢學的教養のかくの如き弊害の影響は今日の支那問題にまで及んでゐはしないであらうか。それは特に支那についての、就中その政治的部面についての科學的考察を妨げてゐる。政治家、官吏、軍人等の「支那通」の科學性が疑問である。今日の支那の外交をいつまでも「以夷制夷」とか「遠交近攻」とかと批評してゐるやうでは、問題の解決は覺束ないのではないか。いづれの國

の外交に夷を以て夷を制すとか遠交近攻とかといふ要素を含まぬものがあらうか。問題の本質をもつと的確に捉へなければならぬ。日支親善と云つても、いつまでも治國平天下式イデオロギーを基にしてゐては無力に終らざるを得ないであらう。

これは單に對支外交にのみ關することではない。そこに我が國における人文教育について根本的に考へ直さねばならぬ問題がある。

(九月二十二日)

## 知識と傳統

ひとのみち教團に對する彈壓が遂に開始された。全國百萬と稱する信者の大多數は知識階級であると云はれてゐる。この教團に限らず新興宗教の信者には知識階級の者が多いといふことは注目すべき事實である。

かやうな事實は、他面から見れば、傳統的宗教即ち佛教の如きが現在知識階級にとつて魅力をもたないといふことを示してゐる。佛教家自身このことを知つてをり、知識階級に對して積極的に働き掛けることを怠つたばかりでなく、それを避けてゐたとさへ見受けられるのである。

知識階級が迷信乃至邪教に趨り易いといふことは、この階級が本來一個の階級でなく、いはゆる中間層として動搖的であるといふことに基くと考へられる。併しそれはまた我が國における知識と傳統との特殊な狀況に原因をもつてゐる。佛教の如き傳統的宗教が知識階級に對して特別に困難な状態にあるのもそのためである。

我が國の知識階級にとつて「知識」とは主として西洋的知性であり、このものは未だ根強い傳統となつてをらず、他方この國の古い傳統は彼等の知識に對してあまりに無力である。知識と傳統とは乖離して、その間に彼等は動搖し、眞の精神的郷土をもたない。かやうな乖離の故に彼等の知識は脆く、そこに巧に乗じてゐるのが新興擬似宗教であると見られるであらう。

迷信乃至邪教の流行はいはゆる「知性の敗北」からは説明されぬ。知性の敗北などと云ひ得るほどの知性の傳統は我が國には存しないのである。また迷信や邪教は自由主義者の説くやうな合理主義によつて救済することもできぬ。知識が歴史的でなく、傳統が知識的でないところに、今日我が國において迷信や邪教の蔓延する大きな原因がある。

知識と傳統との乖離をなくするには、何よりも傳統の科學的考察が必要である。知識が歴史的でないといふこと、即ち眞の「歴史的意識」が發達してゐないといふことも、我が國の傳統もし

くは歴史に就いての眞の科學的研究が抑壓されてゐる結果である。今日ほど歴史が喧しく云はれることはない。しかもまた今日ほど歴史の科學的考察が無視され乃至壓迫されてゐることの甚だしいこともないのである。この「歴史的」時代に歴史が存しないといふ有様である。この國における知識と傳統との乖離は保守的な態度によつては克服されない。傳統を毀すことを恐れない者のみが眞に傳統を活かし得るのである。

(九月二十九日)

## 青年日本

青年は人生において最も抽象的な時期だ。その思考は純理的で、また理想的で、その感覺も感情も新鮮で主觀的である。青年は理論のために身を破滅させることもできるし、學問や藝術のために實生活を犠牲にすることもできる。實生活から見れば理論は抽象的なものだし、日常生活の具體性に比しては學問や藝術、その他一般に歴史的と云はれる行動は抽象的なものだ。

抽象的なものに生き得るといふことが青年の特徴であり、青年性とは抽象的なものに對する情熱のことである。この情熱を失ふとき、ひとは老人になる。私は何も青年が感情に破滅すること

を望んでゐるのではない。今日の青年に對し特に望ましいものは科學とか理論とかといふ抽象的なものに對する情熱である。彼等の現在の精神的狀況にとつて極めて顯著な現實主義が彼等からこの情熱をも奪ひ去つてゐはしないかを恐れる。

一體、抽象的になり得るといふことが人間の特性である。動物も神も抽象的にはなれないであらう。人間のみが主觀主義的抽象性にも逆にまた客觀主義的抽象性にも陥り得るのである。主觀主義と客觀主義とは決して遠く離れたものではない。科學のやうな客觀的抽象的なものが發達しなかつた從來の東洋においては純粹な主觀主義も發達しなかつた。

東洋思想から見れば西洋思想はいかにも抽象的だ。東洋人の生活及び文化の具體性は高く評價されて好いと思ふ。併し抽象的になるといふことは、神もしくは自然と等しくなることでないにしても、極めて人間らしいことであつて、西洋思想の一般的基調がヒューマニズムであり、傳統的な東洋の自然主義乃至實相觀にヒューマニズムの要素が乏しいといふことも、そこに理由がある。西洋人の生活及び文化にとりわけ青年らしさが感ぜられるのも、そこに抽象的なものに對する情熱が動いてゐるからである。

もとより抽象的なものはどこまでも超克さるべきものだ。だが先づ抽象的なものを徹底的に追

求した上で辯證法的に達せられる具體性でなければ眞の具體性ではなからう。我々は東洋的人間として抽象的なものを最初から恐れ、斥ける性向を有するために、あまりに屢々無思想に、もしくは折衷主義的無理論に陥つてゐはしないか。「青年日本」は科學、理論、思想といふ抽象的なものに對する情熱から生れ得るのである。

(十月六日)

## 保健問題の深刻性

壯丁の體格、學生の健康の年々低下しつつあることが統計によつて示されてゐる。これは今日最深の憂ひである。この問題について關係各省が協力して衣食住の各方面に互り調査を遂げるこゝになつたといふのは、ともかく悦ぶべきことである。

この問題はどこまでも具體的に、廣い視野において考察されることが必要であらう。青年の健康状態は國民全體の健康状態と關係があり、國民の健康状態はその生活状態と關係がある。従つて問題は國民の生活向上の問題にまで溯つて考へられねばならぬ。青年の保健問題もそのあらゆる面において「國民生活の安定」といふ今日最も深刻な問題に接しつらなつてゐる。

現代青年の頽廢については屢々語られてきた。それは主として精神の頽廢の意味において語られてきたのである。しかし我々はそれが單に精神の頽廢でなく、また肉體の頽廢であることを知らねばならぬ。健全な肉體に健全な精神は宿るとすれば、肉體の頽廢から精神の頽廢が生じたのであらうか。頽廢は精神と肉體との別を知らない、そこに現代の頽廢の深刻性がある。頽廢において精神と肉體とを區別しなかつたところにニーチェの洞察が存した。

現代青年の現實主義についても屢々語られてゐる。彼等における東洋的な明哲保身の思想の復活も指摘されてゐる。しかし我々は次第に惡化してゆく彼等の健康狀態においてそのやうな現實主義の限界を認めねばならぬ。彼等の現實主義にも拘らず彼等の頽廢は遙かに深刻である。逆に云へば、今日の青年について非難もしくは稱讃される現實主義または東洋的智慧はそれほど彼等の身についたものでなく、考へられるよりも遙かに表面的であり、皮相的である。そこに我々は現代青年が依然として一つの新しい世代であり、彼等には新しいイデーが必要であることを知り得るのである。

近年いはゆる非常時にふさはしく總ての機關を動員して青年の訓練が行はれてゐる。しかしその指導方針がどれほど有力であつたか、年々惡化してゆく青年の健康の一事を考へてみても、甚

だ疑問になるであらう。肉體の頽廢と精神の頽廢とは分つことができぬ。社會に希望があれば人間も健康になる。自己の使命の確信があれば肉體の力も出てくるものである。いはゆる非常時意識が却つて青年の肉體の頽廢にとつてその原因となつてゐはしないかが危まれるのである。そこにまさに今日の保健問題の深刻性が潜んでゐる。

(十月十三日)

## 古典と檢閲問題

檢閲のことがこの頃また喧しく云はれてゐる。映畫に、出版に、ラヂオに、レコードに、繪畫に、その他各種の興行物に、言ひ換へると文化のあらゆる方面に互つて檢閲が強化され、論議を生じてゐる。これは主として現代物に關することであるが、古典に就いても同様、種々問題があるのである。

日蓮聖人の遺文には、今日の國體觀念及び社會情勢から見て不穩當な點が尠くないといふので、先にもその遺文集が數個所に互つて削除を命ぜられたことがあつたが、最近またまた、聖人の書を自敘傳風に編述した一書が檢閲にひつかかり、問題を惹起してゐる。日蓮といへば普通には最

も熱烈な愛國者と考へられ、且つ聖人の崇拜者には愛國主義者國家主義者と稱するものが多いのであるが、その遺文がかやうに度々削除の厄に會ふといふことは世間の常識に反することである。

尤も、聖人が現代の日蓮主義者と同じ型の愛國主義者國家主義者であつたかどうか、疑問である。その性格のみから云つても、宗教的人格日蓮は彼等の如く單純な人間でなく、日本人としては殆ど類のない複雑な深さがあつたやうに思はれ、その點で私などもひそかに聖人を思慕してゐる次第である。それはともかく、古典にして近年檢閲に關する災害を蒙るものは日蓮の書に限らないので、調べてみればなかなか多いのである。

いつたい古典とは種々の解釋を容れ得るほど豊富な内容を含むもののである。唯一通りの解釋しか許さないやうな書物は永續性を有しないと云つてもよいので、種々の時代において種々の立場から種々に解釋されて絶えず新しい意味が見出され、新しい影響を與へ得るものにして永續性を有し得るのである。古典はその解釋の歴史を有し、この歴史は一般の思想史と歩調を一にして變化するのがつねである。

或る時代に重要とされなかつた個所が後の時代に重要とされ、或る立場から問題にならなかつたことが他の立場から問題にされるやうになる。それ故にもしそれぞれの時代にそれぞれの立場

から不都合と考へるところを次第に削除してゆくとすれば、遂には原文の何物も残らないといふことになるであらう。今日不都合と見られる部分が後世の人には却つて甚だ貴重と考へられるに至るといふことはあり得ることである。従つて古典はどこまでも原形のままで傳へるといふことが文化に對する我々の義務でなければならない。

かくて一般に檢閲に關して無制限な自由があるとは思はないが、檢閲の強化が文化の破壊となるべき性質を有することは注意を要する。やがて「古典」となるべきものが現在作られてゐないと誰が保證し得るであらうか。

(十月二十七日)

## 故郷なき市民

市會議員の質の向上が東京にとつて焦眉の必要であるとは、久しく云はれてゐることである。都制が布かれて、市會議員が都會議員と名を變へようとどうと、この必要には變りがない。

智的に啓蒙された人間、政治的な關心を有する人間が最も多い筈の東京の如きにおいて、その市民の選出する議員の質が最も屢々問題になるといふことは、ちよつと解し難いことのやうであ

る。それには種々の原因があらうが、中にも、市民に愛市中心が乏しく、愛市中心が乏しいことは市民が自分の住む都市を故郷として感じないのに基くといふことが、その原因の一つとして擧げられてゐる。市民の多數は地方から移つて來た者であつて、その住居も常なく、東京に對し故郷の愛を抱いてゐないと云はれるのである。

近代都市の住民は故郷を持たない。これは彼等がこの都市で生れたものでないといふことにのみ依るのではない、そこで生れた者にしても故郷の感情といふべきものを持たないのである。故郷を持たぬといふことは近代的市民に本質的な意識に基いてゐる。なぜなら「故郷」と云はれるものは多く封建的なものと結び附いた感情であるからである。山河、墳墓、祖先以來の定着地、また祖先以來互に知り合つてゐる人間の生活、かやうなものが故郷の意識を形作つてゐる。それは根本において封建的な生活様式と結び附いたものであり、近代的生活と共に破壊されてゆく性質のものである。

従つて近代的市民の愛市中心は故郷に對する愛の如きものとは異なる性質のものでなければならぬ。それ故にまたその選出する市會議員の質が良くないといふことは、都市生活者がこのやうな新しい社會意識を有せず、却つて封建的なものを多く殘存せしめてゐるのを現はすことになるの

である。眞の愛市中心の基礎となるやうな新しい社會意識が作られるためには、公園、クラブ、會館、運動場、圖書館、消費組合等々の諸公共設備の發達が緊要なことであらう。

東京市民などが愛市中心に乏しいのは、彼等の中には市のことよりも國家全體のことに關心を有する者が多いためであるとも云はれてゐるが、併し愛市中心がもし「故郷」に對する愛の如きものであるとすれば、それは局限された、地方的利害を中心としたものとなるのであつて、かやうなことが實は從來地方の政治、延いては國家全體の政治にいろいろ弊害をもたらしてをり、これは地方においても克服されねばならぬ封建的意識である。

(十一月三日)

## 現代教養の困難

近來、教養について色々論ぜられてゐるが、それは單に議論の問題でなく、教養に對する要求は實際に活潑になつてきたやうである。青年たち學生たちの間から、「何を讀むべきか」といふ問が盛んに發せられるやうになつたことは、この頃の注目すべき傾向であると云はれてゐる。私はそこに我が國におけるヒューマニズムの問題が決して抽象論でない一證左を見る。

しかし現代において教養の問題もあらゆる他の問題に劣らず動搖し、困難な状態にある。「何を讀むべきか」といふ問が活潑に發せられること自體、この動搖を示してゐる。また最近、著名な社會評論家たちの戀愛事件が相次いで世間の注意を惹いたが、かやうな事件にしても、表面的な道德的問題にとどまらず、現代教養の困難を語るものである。

教養といはれるのは單に専門的乃至職業的知識のことではなく、人間が眞に人間らしくなるために必要な知識のことである。どのやうな専門家乃至職業人も先づ人間であり、また眞の人間とならねばならぬ以上、教養は凡ての人に要求される。かくして教養の觀念の根柢にはつねに人間の觀念が含まれてゐる。各時代において人間の觀念が變化するに應じて教養の觀念も變化し、そこから教養の方向も内容も變化するのである。

現代教養の動搖はそれ故にこの時代における人間の觀念の動搖を示すものにほかならない。或ひはこの根本的な意味における倫理の動搖が現代教養の困難の深い原因である。人間の觀念が確立されなければ教養の觀念も確立されない。或ひは現代的教養の要求は謂はば無意識的に新しい人間の觀念の確立に對する希求を現はしてゐる。

例へば、最も「現代的」と云ひ得る教養は科學的教養である。しかるに從來の人文主義的な教

養論は、教養の中で科學に高い位置を認めず、寧ろこれを固有な意味における教養的なものから除外した。今日のいはゆる智育偏重の議論の如きもそのやうな教養論に基き、その根柢にはそれに相應する人間の觀念が存するのであつて、決して單なる知識論にとどまらない。ひとはそれに對し單に知識の意義を力説するのみでなく、寧ろそのやうな人間の觀念そのものを根本的に批判することが必要である。

我々は實に、現代青年の教養に對する一般的な要求の中から、眞に新しい人間の觀念、從つてまた新しい倫理が確立されることを期待するものである。

(十一月十日)

## 取締政治

先夜自動車の中で私はふと考へた、一體この車内の電燈は何のために必要であらうかと。大抵の人は自動車の中では靜かな氣持を欲するであらう、私などただ電車やバスの騒々しさを避けるためにタクシーに乗るといふ場合が多い。靜かな氣持を欲する者にはこの電燈は邪魔になる、車内は暗い方が好いのである。

そこで私は、この電燈は車の運轉上必要であるのかと、運轉手に尋ねてみた。それは運轉にとつても却つて妨害になる、車内の電燈が車の前面のガラスに反射するために幻覺を起すこともあるさうだ。併しそれを點じてゐないと二圓の料料に處せられる。この電燈はただ全く乗客に對する取締のために必要なのである。運轉手は斯う答へた。

取締！それは我々の生活のあらゆる方面に立入つてゐる。それは外國人には考へられないやうな所にまで及んでゐる。かかる取締は近來益々強化される傾向にあり、そのために民衆の生活は愈々窮屈なものになつてゐる。およそ我々は「生の悦び」の觀念を持つてゐるか、また持ち得るのであるか。

取締政治は國民の道德心を向上させるものでなく、寧ろ反對である。取締の強化は人々に、法律にさへひつかからなければ何をして也好いといふやうな觀念を植ゑ附け易い。人間は、自由が認められてゐる場合却つて、自分の責任を強く感じるものだ。我が國において社會の道德的制裁が微弱であること、また公衆道德といふものが發達してゐないことなども、あまりに嚴重な取締政治が行はれてゐる結果であると考へ得るであらう。

取締政治は人間性の明るい方面を見ないで暗い方面のみを見てゆく。それは民衆に對する封建

的な考へ方であるが、官僚政治はとかくそのやうな傾向を有するのである。人間性に對する信頼に基いて民衆を信頼するといふことが、現在我が國の政治に要求されるヒューマニズムの精神である。

指導政治と取締政治とは、外見が類似するにしても、實質は反對である。政治に眞の指導精神が存しないとき、或ひはその指導精神と稱するものが大衆性を有せず、従つて眞の指導性を有しないとき、政治は取締政治となる。眞の指導政治は大衆性を有するものでなければならぬ。大衆性を有しない指導政治は何等指導政治でなく、いはゆる官僚的獨善主義の如きものに過ぎない。

近年頻りに指導政治といふことが云はれてゐるが、それが眞の指導政治であつて、取締政治の粉飾でないことを要望する。

(十一月十七日)

## 統制と空想

現在、統制主義といふのは、あらゆるものを一定の政治的目的に従屬させる政治主義である。統制經濟と云つても、純粹な經濟的原理に依つて經濟を統制することなく、寧ろ政治的見地に

従つて經濟を統制することであらう。それ故に統制主義は自然性を否定すると共に、自律性を否認することになる。

政治は最も實際的なものである。併しまた政治ほど空想的なものもない。統制主義が強化される場合、經濟の如き現實的なものも、その自然性を失ひ、自律性を奪はれ、そして謂はば空想的な基礎に立つことになる。空想的な基礎に立ちながらそれがとにかく維持されるのは、政治的權力に依る統制が強行されるためである。

現代における獨裁政治は、自然性と自律性とを基礎とする自由主義を否認し、この立場からは空想的と見えるやうな基礎の上に統制主義を實行してゐる。この政治的實驗は從來殆ど不可能と思はれたことが或る程度まで可能であることを示してゐる。

我々は必ずしも統制主義に反對しないであらう。我々の悲しむのは却つて、この場合政治家にヴィジョンがないといふことである。統制主義者は善かれ惡かれ空想家である。不幸は、どのみち空想家たらざるを得ぬ彼等に幸福な空想がないといふことである。政治的ヴィジョンを有しない統制主義が近頃官僚政治と云はれるものである。

馬場財政は三十億圓といふ膨大な豫算を編成した。我々はこの數字に驚きはしないであらう。

一度走り出したものは停ることができぬ、後戻りは絶対に不可能である。今や我が國家の經濟も空想的な基礎に立ち始めた。統制は愈々強化されるのほかない。我々はこのことをも敢て歎かないであらう。

だが如何なる統制主義も空想的なものを永續させるわけにはゆかぬ。現實は空想的なものに代われることによつて自己の没落を速める。現代の經濟が空想的な基礎に立つに至つたといふことは、それに從來とは全く異なる新しい現實性が與へられねばならぬことを意味してゐる。統制主義にはかかる新しい現實性を創造してゆくヴィジョンが必要である。ヴィジョンは單なる空想でなく、創造的であり、合理的な道によつて得られるものでないが本質は合理的なものである。

馬場藏相はかやうなヴィジョンを有するであらうか。政治家に何等のヴィジョンもなく、しかも彼等の政治の基礎とするものは次第に空想的なものになりつつあり、極めて實際的であるかの如く自任してゐる者が實は單なる空想家であり、他方空想家らしく氣取つてゐる者がその實没落しつつある古い秩序に固執する現實家に過ぎないといふのではないか。（十二月二十四日）

## 原版後記

ここに集められた小論八十四章は、筆者が讀賣新聞夕刊「二日一題」に寄稿したものである。昨年三月以來、筆者は毎週火曜日のこの欄の執筆を擔當してきたが、これらの文章は大抵その前夜または當日早朝に書かれた。今その順序に従つて收めたのは、それが筆者の眼に映じた時代のクロニクルの意味を有すると考へるからである。これらの小論がその發表の場所によつて制約されてゐることは云ふまでもない。しかし筆者は、一方一時的な現象を取上げながらその中により永續的な問題を考へ、他方より一般的な思想を時事的な問題に關はらせて述べることに、許された範圍内で努力したつもりである。この書の讀者は筆者が如何に深く日本を愛してゐるかを疑はないであらう。もしこの書において日本の現狀に對する不滿のみが目立つてゐるとすれば、語るに値するのはただ幸福を準備するもの、もしくはこれを破壊するものであつて、幸福そのものではないからにほかならぬ。幸福そのものは沈黙の貞潔を求める。時代の現象の分析と批判とを通じて筆者が主として問題にしたのはモラルである。これらの小論の多くが人間性の問題を基礎と

した時評であるのはそのためである。ここに再び版にするに當り、これまで屢々書信を寄せて筆者を勵ましてくれた既知及び未知の熱心な讀者に心から挨拶する。

一九三六年十一月



## 現代の記錄

序(一八七) 歴史の辯證法(二八九) ドイツ的偏向(一九一) 非常時と民主性(一九三) 知識は飢える(一九五) 新生活運動(一九七)  
 對外政治の優位(一九九) 婦人と學校(二〇一) 命令と指導(二〇四) 強力内閣(二〇六) 日本精神の限定(二〇八) 文政の一貫性(二一〇)  
 家族觀の混亂(二一二) 強國日本(二二四) 對外文化の國內問題(二二六) 世界の鏡(二二八) 大衆の良識(二三〇) 大道廢有仁義  
 (二三二) 國民の立場(二三四) 政治と説教(二三六) 學生の風俗(二三八) 單純化と綜合化(二三〇) 國民歌謠(二三二) 精神家(二三四)  
 大衆との距離(二三七) 官僚ディレッタンティズム(二三九) 政治と宗教(二四一) 文化の權威(二四三) 「新全體主義」(二四五) 心  
 の準備(二四七) 世界教育會議(二四九) 試験の矛盾(二五一) 政黨と文化運動(二五四) 大なる覺悟(二五六) 不運なオリンピック  
 大會(二五八) 文化工作の前提(二六〇) 事變と生活(二六二) 想像力と政治(二六四) 冷靜と冷淡(二六六) 宣傳と教育(二六八)  
 忘れられた問題(二七〇) 眞實は尊い(二七二) 支那語の學修(二七四) 世界の秩序(二七六) 北支文化の一礎石(二七八) 豫言の一年  
 (二八〇) 「黃禍」(二八二) 長期戰の覺悟(二八四) 官吏の再教育(二八六) 革新と實驗(二八八) 理想の再生(二九〇) 宗派運動と全  
 一運動(二九三) 政治と道德(二九五) 外國理解の困難(二九七) 叱られる知識階級(二九九) 文化政策の水準(三〇一) 「政界」の解  
 消(三〇三) 合理性と積極性(三〇五) 米國への關心(三〇七) 行動の哲學(三〇九) 科學思想の普及(三一) 遅れる政治(三二三)  
 新文相への期待(三二五) 革新の基準(三二八) 國民への信頼(三三〇) 學生狩り論争(三三二) 世界的日本人(三三四) 統制の社會  
 的意義(三三六) 自然と人爲(三三八) 「長期建設」(三三〇) 革新の連繫(三三二) 民間意見の重要性(三三四) 研究機關への希望(三三六)  
 職業と思想(三三八) 統制と倫理(三四〇) 天災の教訓(三四二) 淫祠邪教の蔓延(三四四) 新しい神話(三四六) 理論と行動(三四八)  
 國民心理の解明(三五〇) 事變の進歩的意義(三五二) 内鮮一體の強化(三五四) 不安な文化(三五六) 思想を越ゆるもの(三五八)  
 日本文化の自主性(三六〇)



## 序

この小論集は、曩に同じ書店から出版した『時代と道德』に續くものであつて、前集と同様、筆者が毎週火曜日讀賣新聞夕刊「一日一題」欄に寄稿した八十四章の短文から成つてゐる。今その校正刷を讀んでみると、私にはさまざまな記憶が甦つてくる。これまで日記といふものをあまり書いてゐない私にとつてはこれらの文章が殆ど唯一の生活記録であり、また近年用事以外の手紙を次第に書くことの稀になつた私にとつてはこれらの文章がおのづから知人に對する書簡の代りともなつた。長い日記や手紙を書くことのできた古人の生活は羨望に値ひする。私としてはたとひこのやうな形においてでも日記と書簡の代用物を遺すことのできたのをせめてもの慰めとするのほかに、これらの蕪雜な文章に對してなほ愛着を覺えるのである。ひとはそこに私の見地から見た現代の記録を見出すであらう。

この集は二年の歲月を記録してゐる。その間に世の中には大きな事件が次々に起り、政治も、經濟も、文化も、思想も、風俗も、社會心理も、もはや元の儘ではない。その激しい變化にも拘

らず、ここに收められた文章のうちになほ何か一貫したものとあるとすれば、それは私の性格的なものであらう。個々の議論としては現在訂正を要するものもないではないが、私は何よりも著者の性格的なものにここを留める讀者にこの本を送らうと思ふ。

一九三八年十二月

東京に於て

三木 清

## 歴史の辯證法

日獨協定の成立は、ともかく、今日においては思想のない政治はあり得ないといふことを實證した。それは政治を單なる事務、取引とさへ考へた從來の政治家に對して歴史が強制的に與へた重要な教訓である。

これまで日本主義者は、日本主義乃至日本精神はコンミニズムはもちろん、ファッシズムでもない獨自の思想であると主張してきた。更に彼等は、この日本精神をもつて東亞はもとより、全世界をさへ光被し得るとの雄大な抱負を述べてきた。然るに今や、彼等の主張も、彼等の抱負も、彼等自身によつてでないといふのであれば、他の何者かによつて、ともかく、裏切られるに至つたのではなからうか。

日獨協定の成立は、日本主義乃至日本精神と稱するものがそれほど獨自なものでないといふこと、少くともファッシズムに對して獨自性を主張し得る程のものでないといふことを示したやうに見える。日本精神が特殊性を有することは疑ひないとしても、その普遍的な、國際的な、世界

史的な意味内容においてはファッシズムと別のものでないことが明かになつたやうに思はれる。ドイツとの提携はファッシズムとの握手でないといふが如き詭辯を世界は眞面目に信じないであらう。かくして今後は日本精神の獨自性といふことも單に對内政策上の意味に止まらねばならなくなる。この際我々は日本主義者のために、彼等の從來の主張や抱負に鑑みて、日本精神の獨自性を對外的にも實證することをいよいよ希望せざるを得ないのである。

一國がコンミュニズムを採るかファッシズムを採るかは國內的問題であつて他國の關することでないといふやうな自由主義的考へ方は、もはや非現實的となつた。國民主義を標榜するファッシズムにしても、世界的ブロックを形成するといふのが現代である。

ところで將來の歴史を作るものは果してファッシズムであるか、それともコンミュニズムであるか、もしくは或る「第三の思想」であるか。第三の思想といつても、抽象的に第三のものであり得ないのはもちろん、二者の折衷でもなく、却つて對立する二者の一つが自己を發展させることによつて新しいものに轉態した形として現はれるものであらう。それとも第三の思想は空想に止まるか。ファッシズムとコンミュニズムとの世界的な鬭争は今後何を結果するであらうか。思想家も政治家も歴史の辯證法について大いなるヴィジョンをもたねばならぬ時代は來てゐるので

ある。

(一九三六年十二月一日)

## ドイツ的偏向

最近、東京の町の人の間に英語研究熱が起つてゐるといふことである。これは豫定されるオリンピック大會東京開催の一產物である。日本主義の立場から外國語學習の有害無益を唱へて、英語教授を廢止した學校もあつたが、必要はすべてを決定するものだ。今度の日獨協定の結果、ドイツ語の研究が案外盛んになるやうなことがあるかも知れない。

さなくとも、この頃の政府の統制政策を見てゐると、獨創性がなく、ドイツ模倣の傾向が著しいと批評する者がある。もしそれが事實であるとすれば、日本民族の名譽のために改めねばならぬことであらう。我が國の大學の學問などにおいてもドイツ的偏向が見られるとすれば、そこで教育されてくる官僚のドイツ模倣は考へ得ることである。

近年、我が國の知識階級はファナティックな思想のほか歡迎しないといふ傾向がある。ファッショ的統制主義或ひは獨裁思想もこれである。しかし元來、日本人がファナティックな國民であ

るかといへば、寧ろその反對であらう。知識人がファナティックであるといふことは、日本にはまだほんとに知識の傳統が存しない兆しであるともいへる。殊にドイツ思想の影響はファナティズムに導き易い傾向をもつてゐるのである。だがドイツ模倣的なファナティズムが果して窮極において日本の民衆に共鳴され、納得されるかどうか、甚だ疑問である。

現實的であつて、ファナティックでない點において、日本人はドイツ人よりも寧ろイギリス人に似てゐる。もちろん日本人は單に實際的で常識的であるとはいへない。しかしアングロサクソン人にしても決して單に實際的で常識的であるのではない。彼等のうちには清教徒の精神がある。自由と平和とを求めて新大陸を開拓したのはその清教徒であつた。今度のエドワード八世陛下の御結婚に關する事件の如きも、實際的で常識的だといふイギリス人についての一面の觀念を打ち破つて、彼等が遙かに深い心を有する大國民であることを表示したものと見られるであらう。

我々はもとよりアングロサクソン人ではない。私は彼等と同様にドイツ人を尊敬する。けれども我々のドイツ的偏向については大いに反省しなければならぬ。我が國の知識人には、もつと彈力のある、従つて眞に批評的な知性が必要だ。ダーウインのやうな人はドイツ人の間からは出て來ない。アングロサクソンの天才がこの時代に社會政治思想においてもはや何等新しいものをも

たらし得ないとは斷言し得ないであらう。

(十二月八日)

## 非常時と民主性

尨大な豫算、外交の行詰り、また支那の動亂、等、非常時の感はいよいよ深い。ところで非常時といふ言葉が現はれて以來、我が國の政治において次第に著しいのは、民主的性質が失はれたことである。

非常時と民主性とは一致しないか。一見それらは一致しないかのやうである。だが非常時こそ大衆の協力を最も必要とする時であらう。その意味で非常時は最も民主的でなければならぬ時である。下からの舉國一致に基かない非常時政治、眞の國民外交でない非常時外交の如きは、非常時を克服しないで、却つて非常時をますます非常時たらしめる危険が多い。

非常時は權力を必要とする。従つて民主的であり得ないと云ふであらう。しかし權威を有しない權力は暴力に等しい。權力の權威は大衆性を基礎として考へられる。權威を有しない如何なる權力も、結局において大衆に對抗し得ないことは、人口が國力の重要なものであると主張する者

の誰よりもよく知つてゐるべき筈である。

非常時は英雄を必要とする。従つて民主的であり得ないと云ふであらう。だが眞の英雄は民主的なものである。その背後に大衆が控へてゐないやうな英雄は英雄でない。英雄と豫言者とは異つてゐる。豫言者はその時代を超えて民主的でないであらう。哲學者は時に豫言者であり得るとしても、政治家は政治家としては豫言者に屬することはできぬ。

ファッシズムは眞に民主的であり得ないにしても、ムソリーニやヒトラーは、たとひ擬裝的であるといはれるにせよ、ともかくそのファッシズムに或る民主性を装はさせてゐる。今日の我が國の政治を官僚ファッシズムと評する者もあるが、民主性を擬裝する必要をさへ感じないところに、このものといはば英雄ファッシズムとの相違がある。あの「擬裝的學國一致」といふことでさへ、今日もはや不必要とされつつあるやうに見える。

民主性の名のもとに單なる自由主義を考へてはならぬ。事實としても、理論としても、言論の無制限な自由といふが如きことは認められないであらう。問題は、單なる自由でなくて寧ろ權威である。だが大衆性を離れて權威は存しないのであつて、大衆の意志の現はれるためには言論の自由が許されねばならぬ。

非常時は深化する。非常時と民主性とは矛盾するかの如き錯覺に陥らないことが肝要である。

(十二月十五日)

## 知識は飢える

或る本屋さんが来て話した。

第一の話。この秋東京で行はれた圖書館祭では、人を集めるために漫才や浪花節をやつた。日本の「文化祭」はこの通りである。

第二の話。自分の所で出した書物が文部省や茗溪會から推薦されるのは有難いが、すると早速圖書館からその書物の寄贈を申込まれて迷惑する。圖書館には金がないのである。

第三の話。自分たちは『キング』は主として田舎で讀まれるものと思つてゐた。ところがこの雑誌の關係者の話によると、その四割までが東京で賣れてゐるさうだ。これが知識人の最も多いといはれる東京の状態である。

かやうな例はいくらも殖すことができる。そこで先づ日本の文化政策とは如何なるものかと問

ひ、次に日本に知識階級ありやと問ひたくなるであらう。高級綜合雑誌が好んで知識階級向きの問題を取り上げるのも、その重要な顧客が學生であり、日本の知識階級とは學生であるからだと思はれてゐる。その學生も卒業して就職し、家庭でも持つやうになれば、一家一冊で皆が楽しめるといふ『キング』黨になる者が多い。

我が國における知識の傳統はこのやうに淺く、知識は實社會の生活から游離してゐる。彈力をもつた批評的精神の缺乏もこれに關係してゐる。勿論この際、本を讀む暇も金もない一般人の生活狀態も考へねばならぬ。

知識は人間に飢ゑてゐる。人間に飢ゑた知識は勢ひ抽象的になる。日本人は抽象的な知識を好むといふ意見には賛成できぬ、知識が人間に飢ゑてゐるのである。大衆の血をもつと吸ひ取らなければ、知識は具體的とならないであらう。

今日、例へば、純文學の讀者は殆ど文學青年に、即ち自分でも小説を書いて「文壇」に出ようとする人々に限られるといはれてゐる。文學はただ文壇の内部で回轉する。これは結局からまりである。我々は文學に飢ゑてゐる、と文學青年は云ふ。だが實は文學が人間に飢ゑてゐるのである。

近ごろ教養の問題が注意されたのは、このからまはりを止めることに幾分役立つであらう。しかしそれはあのやうに人間に飢ゑてゐる知識を満足させ得るものでない。日本に知識階級ありやの反問がここでも飛び出してくる。今日の問題は「教養」よりも「啓蒙」であるといはれるであらう。知識は大衆の血を吸ひ、これによつて自己を變化しなければならぬ。大衆の生理的な飢ゑがなくなるまでその血を吸ふことを待たねばならぬやうな知識は、實は、結局眞に人間的となり得ぬものである。

(十二月二十二日)

## 新生活運動

今年は喪中で年始の挨拶を遠慮したが、それでも思ひ掛けない人からだいふ年賀狀を貰つた。一般に年賀狀の數は毎年増加してゐることである。これはむろん、單に好景氣不景氣の反映といふものでなく、民衆の或る一定の生活意識の發達の表現と見らるべきものである。そこに現はれた生活意識が西洋的であるか日本的であるかといふやうな議論は、今日では意味がなくなつてゐる。

年始狀にまじつて私は「えすぷり團」設立趣意書といふものを受取つた。この團體の實際、その主唱者等について私は何の知識も持たないが、宣言によると、眞に人間的な新文化及び本格的な藝術の誕生のために、その土臺となるべき生活並びに生活雰圍氣の革新を行はうといふ青年藝術家の運動であるとのことだ。そのプログラムを見ると、住居、服裝、料理、話術、禮儀、戀愛について現代の風俗を批評し、藝術家の生活、交際、對社會的行動について若干の方針を掲げてゐる。

私は今このプログラムを問題にしようとは思はない。ともかく、藝術を志す青年の間から、現在わが國の「一般の惡風俗へ勇敢に挑戦」して新しい生活を建てようとする運動が現はれてきたことに興味を感じるのである。明治大正の頃には日本の社會にも種々の新生活運動が活潑に行はれた。藝術家に關係のあるものでも、あの青鞥派の運動など社會的影響が大きかつたし、武者小路氏の新しい村の如きも新生活運動として世間に知られたものであつた。今日新たにかやうな運動が起るといふことは、ヒューマニズムの擡頭とも關聯して意味のないことでない。新藝術運動が新生活運動と結び附いて現はれねばならぬ理由は、藝術そのものの立場からいつても、十分に存在するのである。

新生活運動はもとより單に藝術家に關することではない。それは社會のあらゆる方面において必要である。現在、非常時の重壓のもとに、民衆の生活意志の萎縮、生活意識の矮小化が見られないでない。遅しい生活意志、新しい生活意識の昂揚は文化反動、文化危機と闘ふためにも重要な意味をもつてゐる。

この歴史的時代に日常生活の改善の如きは大した問題でないといはれるであらう。しかし政治運動のみが運動であるのではない。政治上、科學上、藝術上の大事件、大事業のみが「歴史的」であるのではない。我々の日常生活も歴史的なもの、創造的なものである。それはいはゆる歴史的な事件や事業の地盤であるばかりでなく、そのものが實に歴史であり、歴史を作つてゆくのである。

(一九三七年一月五日)

## 對外政治の優位

今度の議會において政黨は外交問題を中心題目として取り上げ、廣田内閣の對ソ對支外交等の失敗を糾問すると傳へられる。これはまことに當然のことと云はねばならぬ。現在の世界情勢に

において外交問題がますます重要性を加へて來たことは明かである。

そのうへ、我々は、對外政治は國內政治を決定するといふ事實に注目せねばならぬ。それは、例へば日獨協定が直接に國內の思想政治に反映するといふが如きことのみではない。いはゆる庶政一新のうちにも、増稅案のうちにも、對外政策の決定的な意義が認められる。外交問題が優先的に論議さるべき理由は確かに存在する。

いまや我々は十九世紀の大歴史家ランケの卓見に敬意を表してもよいであらう。彼は「對外政治の優位」を考へ、對外政治は國內政治を決定するといふことを歴史研究の原則とした。そしてこのランケは、どの歴史を書かうとしても結局「世界史」になると云つてゐる。

今日、各國にとつて外交問題が重要性を増してきたといふことは、實にこの「世界」といふものが擴大し、擴大すると共に強力になつてきたことを意味する。如何なる國もはや世界を無視し得ないことを知つてゐる。しかしまた現在この世界を無視しようとする國が如何に多いであらうか。その力がいよいよ無視し難くなつたものを無理にでも無視せざるを得ない國があるといふことが世界の現狀である。かやうな矛盾はまさに世界史そのものの矛盾である。

この矛盾からしても、對外政治の優位といふものが表面的に理解されてはならぬことが知られ

るであらう。一國の對外政治は國內政治の失敗を隱蔽するために、もしくは轉嫁するために行はれることがある。我々は、今度の議會においても、外交問題の優先的論議によつて大衆課税、國民生活の安定の如き重要問題が看過されることのないやうに警戒しなければならぬ。しかし同時に對外政治の失敗がやがて一層強力に國內政治に轉嫁されるに至るものであることを忘れてはならぬ。

國內問題の行詰りは對外的に打開されるのほかないと云はれるであらう。國內政治が對外政治を決定するやうに見える。しかしながら注意を要することは、國內問題として現はれるものの多くが今日もはや單に一國のみにおける問題でなく、實は世界的な、世界的規模における解決を要求する問題であるといふことである。従つてここにも對外政治の優位は依然として認められる。眞の對外政治は世界史の進歩の方向に沿うてのみ行はれ得るのである。

(二月十二日)

## 婦人と學校

學齡に達した子供を持つ家庭には役所から就學通知書が届く頃である。そして特殊小學校では

入學考查が行はれようとしてゐる。役所から指定された以外のかやうな特殊小學校へ子供を入れようとする家庭ではマダムの心配が始まつてゐる。

大學や専門學校の場合とはかく、中等學校や小學校の場合には、家庭では婦人が決定的な役割を演じてゐる。殊に有閑の婦人はなかなか教育に熱心なやうだ。これはもちろん悦ぶべきことである。しかしその反面には我が國の家庭では男子が子女の教育について殆ど全く無關心であるといふことも含まれてゐるのであつて、これが先づ改善されねばならぬ。

有閑の婦人が教育に熱心であるのは結構なことであるが、熱心も方向を誤ると却つて害惡を生ずるのである。東京の小學校の如きにおいては彼女等が毎日のやうに學校へ押し掛ける。しかし彼女等の腦裡にあるのはクラスの全體の子供でなく、自分の子供だけであり、そして特に上級の學校へ入學させることである。彼女等の希望は、自分の子供を一般に「善い」學校へ、或ひは有名な學校へ入れて貰ふことだ。善い學校へ入れようとすることは一面我が國民の進歩的な性質を現はすものであるが、他面それは實質の問題であるよりも有閑の婦人の虛榮心の問題であることが多い。子供の素質などはあまり考へられないのである。小學校教育がかかる有閑マダムの影響から獨立な見識を具へる必要があらう。

上級の學校に接續した特殊學校へ子供を入れたかといふことには、將來の入學試験苦から救つてやりたいといふ母親の氣持もある。これは同情し得ることであるが、しかし教育には環境の變化も大切なのであつて、同じ學校にばかりゐることは子供の奮發心をなくし、新しい刺激による自己發見の機會を失はせる等の弊害がある。都會の有閑婦人よ、自分の愛する亭主が恐らく多くは田舎出であり、生れた村の小學校で學んできたことを考へてみよ。優れた學校で下位にゐるよりも少し劣つた學校で上位にゐる方が子供のために善い。

現在、小學校にも優劣があるのは遺憾ながら事實である。しかし教育に熱心な家庭が皆、役所から指定されたこの學校へでも子供を入れてその學校を眞に善くすることに積極的に働き掛けるならば、それは萬人の利益になる。それが愛市中心である。かやうな心掛けと、そして子供の素質に合つた學校へ入れるといふ心掛けとが一般にあれば、現在の入學試験苦の如きもよほど緩和されるであらう。

(二月十九日)

## 命令と指導

私の印象に残る宇垣氏は、嘗て私が一兵卒として姫路に入營してゐた頃、我等の師團長であつた字垣中將である。馬に跨つて練兵場に立つた堂々たる師團長閣下が今も眼に浮んでくる。

だが軍隊では宇垣閣下でも、政治家としては宇垣氏である。軍隊では寺内閣下でも、議會では寺内君と呼ばれる。民間の宴會、それも結婚披露か何かで、「閣下及び諸君！」と呼び掛けて挨拶されると席が急に冷くなるのを感じる。「閣下及び諸君！」では第一、語呂が悪い。招待した方でも客に甲乙があつてはならない筈である。ヨーロッパではドイツが特にこの敬稱をやかましく云ふやうだが、我々日本人がそれを眞似る必要もあるまい。

稱呼のことはどうでもよいが、「閣下」と「君」との相違は、政治は單なる命令でないことを意味する。政治において國民は單に服従する者でなく、却つて協力する者である。眞の舉國一致は單なる號令によつて實現され得るものでない。そこに「閣下政治家」の陥り易い誤謬がある。

政治に民主性を求めることは既成政黨を認めることと同じでない。既成政黨が果して國民の意

志を代表するか、疑問である。政治の民主性に對する要求は議會政治の單なる擁護と同じでないであらう。しかし政治は命令ではない、命令でなくて指導でなければならぬ。指導はつねに國民の納得を必要とするのである。

今度の政變は議會における軍部と政黨との對立から生じたといはれる。だがもし議會における辯論が單に大臣と若干の議員との間のものでなく、國民の前で國民に對して行はれるものであるといふ考へがあつたならば、今度のやうなことにはならなかつたであらう。議會はそれを通じて國民を指導する所でなければならぬ。

政治の民主性は自由主義とは同じでなく、命令政治でない指導政治こそ民主性を必要とする。今日のいはゆる全體主義は、國民から抽象された「國家」といふものが何かあるかのやうな幻想に陥つてゐはしないか。要求されるのは民主性を有する指導政治である。

新たに期待される内閣は軍部政黨等の摩擦をなくすべきものであるといはれてゐる。しかし單に諸勢力の摩擦を防がうとするばかりの内閣が役に立たないことは、既に前三代の内閣によつて證明済みだ。我々は眞の指導的政治家を待望する。嘗て我等の師團長閣下であつた字垣氏の組閣振りを先づ拜見しよう。

(二月二十六日)

## 強力内閣

近年政治上の合言葉として繰返されるものの一つに「強力内閣」といふ言葉がある。誰もがみな強力内閣の出現を希望してゐるやうに見える。けれども今日の社會では一致して唱へられることもその意味が分裂してゐるといふのが普通である。

現在、強力内閣の出来る可能性があるかどうか、すでに問題であらう。衆目の見るところ、宇垣大將はともかく強力内閣を作るに適任者であつた。その宇垣大將が挫折した。今度の林大將は中途で組閣方針を變更したと傳へられるが、これも強力内閣からの一種の後退と見られるであらう。かやうな事實は、日本の政治的現實のうちに、その支配的勢力のうちに、強力内閣の成立すべき條件が未だ十分に備はつてゐないことを示してゐる。

その出現の可能性は別問題としても、強力内閣なるものの意味が實は甚だ不明瞭なのである。野蠻人は文明人よりも強力であり得る。間違つた信念は正しい道理よりも強力であり得る。この非常時には何事も斷行する力が必要だといはれるであらう。それに相違ないが、しかし間違つた

ことは斷行されるよりもされぬ方が善いのである。強力そのものは質的規定を含まない。何について、如何なる方向において、強力であるかが問題である。

例へば外交の一元化は強力内閣でなければできないといふ。だが如何なる方向に一元化されるかが我々には問題だ。庶政一新は強力内閣を必要とする。しかし「庶政一新」といふ語は強力内閣といふ語と同様抽象的だ。或る者は二・二六事件以後現はれた政治的動向の強化のために、他の者は反對にこの動向を抑止するために強力内閣を求めてゐるとすれば、その意味は全く別のものである。また前の場合にもその行先は何處であるのか國民には示されてゐないし、後の場合にもそれを何處へ持つてゆかうとするのか明かでない。

いづれにせよ大衆の支持をもたぬ内閣は眞に強力であることができぬ。大衆を納得させるには公明な政治を行ふ必要がある。「不言實行」といふ言葉は強力を思はせるために慣用されるが、それが無策無方針と同意味であつたり、祕密政治の別名であつたり、要するに政治の公明性に反するものであり得ることは、我々のしばしば経験せるところである。單なる強力でなく、公明な政治が要求されてゐるのだ。公明な政治は道理に基かねばならぬ。道理ほど公明なものはない。しかるにただ強壓的であればあるほど強力であるかのやうに感ずるといふことは心理的にも生じ

易い幻想である。

(二月二日)

## 日本精神の限定

林内閣が發表した五大政綱は、當然のことを當然言つたままで、問題はこれを諸般の政策において如何に具現するかにある、と政黨方面では批評してゐる。しかし仔細に點檢すると、この政綱そのものにもやはり見遁せない特色がある。

國體明徴は從來の内閣ともしばしば聲明した重要政綱であるが、今度は進んで「祭政一致の精神の發揚」を高唱してゐることが注目される。これは從來ただ「日本精神の作興」といつてゐたものを限定したと見られることができ、いはゆる「我邦の獨特なる立憲政治」に對する説明も、そこに求めらるべきものであらう。復古主義の色彩はいよいよ濃厚である。

立憲政治に關することは措くとしても、日本精神がかくの如く祭政一致の精神として限定されたといふことは、先づ宗教界に深刻な問題を投ずるであらう。祭政一致の思想は明かに神道的である。從來も神道的日本主義の立場から佛教やキリスト教が排撃されたことは稀でないが、ここ

に更めて政府が日本精神を祭政一致の精神と解釋したといふことは、かくの如き排撃に公然の理由と動機とを與へることになりはしないか。これまで佛教家やキリスト者は日本精神に對し何とか解釋を施して時世に順應乃至追隨してきたのであるが、今やその日本精神は政府の手で彼等の解釋の限度を越える程度において神道的に規定されるに至つたのではなからうか。

日本精神の作興自體は反對さるべきことではない。問題はつねにその日本精神を如何に考へるかといふことであつた。そしてそれは學者や思想家によつて、或ひは儒教的に、或ひは佛教的に、或ひは復古的に、或ひは發展的に、種々解釋されてきたのであるが、今や政治的にその唯一の方向が明示されることになつた。何人ももはや政治の優位に對して盲目であり得ないであらう。

我々は政治の優位を率直に承認しよう。しかし同時に我々は對内政治に對する對外政治の優位を考へる。日本精神をかくの如く復古的に、餘りに復古的に限定するといふことは、他の多くの點はここで問はないにしても、すでに餘りに對内的な立場に囚はれたものでないか。單に日本から日本を見るのではなく、世界のうちにおいて日本を見ることが外交には必要であるやうに、日本精神もこの立場から限定することが大切であらう。林首相が文部大臣と外務大臣とを兼攝してゐるといふことも、從來單に日本から日本を見る立場において考へられた獨善的な日本精神論に對

して、世界のうちにおいて日本を見る立場を強調する場合、意味を有し得るのである。しかるに却つて反對の結果になつてゐるとすれば、それは日本精神の問題に止まらず、實に對外政治の問題にとつて注目すべきことである。

(二月九日)

## 文政の一貫性

現代の統制思想の特色は政治の計畫性を重んずるところにある。議會主義の排斥される理由の一つも、それが政治の計畫性にとつて不都合であるといふことにあるであらう。

勿論、計畫そのものが情勢、とりわけ國際情勢の變化に應じて變化し、發展すべきことは當然である。これは外交や經濟などにおいて特に著しく、政策の柔軟性を必要ならしめる。自主的外交といつても、國際情勢の變化を無視することであつてはならず、國際的孤立に對する美名に過ぎないやうでは困る。

今日わが國において最も計畫的に實行されてゐるのは軍備擴張である。反對に最も非計畫的なものはいへば、先づ文政に指を屈せねばならぬであらう。例へば學制改革の如き、いつも云は

れてゐて今に行はれない。審議會とか調査會とかは入替り立替り作られるが、大臣の替るたびに無駄になつてしまふ。平生前文相が計畫した義務教育延長案の如きも、林内閣では撤回したと傳へられたかと思ふと、再提出されることになつたといひ、その議會通過に對してどれほど熱意があるのか明かでない。すでに數代の大臣を経てなほ未解決の帝國美術院の問題等に至るまで、文政に一貫した方針のないことを示してゐる。ところが教育及び文化に關する政策ほど、一貫性を必要とするものはない。しかもそれは經濟や外交などとは違つて世界情勢の變化から比較的獨立に計畫され得るものである。

我が國の教育がかやうに一貫性を缺いてゐるといふことは、教育に自主性が乏しく、容易に政治化され、政治の惡影響を受けるといふことの一つの原因である。その結果、教育についての實質的な改善は行はれず、名目的なことばかりが喧しくいはれる。いはゆる思想問題の如き、教育を名目化して、非實質的ならしめてゐることが多い。教育が政治に影響されるのは當然であるとするれば、逆に政治は教育であるといふ考への徹底される必要がある。

文政に計畫性が乏しいのは、由來文部大臣が伴食大臣といはれるやうな位置にあり、且つ彼等がたいいてい文政については素人であるといふことによるであらう。そこで文部大臣は現在の軍部

大臣や司法大臣などの如く部内から出すが好いといふ意見も生じてくる。だがこの點には寧ろ全般的に考へ直さるべき問題がある。部内から大臣を出す結果は國家の政治が知らず識らず職業意識乃至職業思想に左右されるやうになる危険が尠くない。またそれは政治の計畫性に含まれねばならぬ政治の綜合性を害し易いのである。

(二月十六日)

## 家族觀の混亂

ファンク博士の日本紹介の映畫「新しき土」では、日本の家族主義が勝つて西洋の個人主義が負けることになつてゐる。日本の家族主義はよいとしても、西洋にだつて今ごろ單純に個人主義を唱へてゐる國はなからうではないか。西洋においても既にずっと以前から個人主義の弊害は指摘され、これを克服すべき思想が現はれてをり、他方日本においても家族主義は種々の矛盾を現實に示しつつあるのである。

家族を重んずることと家族主義を守ることとは同じでない。家族主義は封建的なものである。家族主義の封建的性質を打破するものとして個人主義にも意味があつた。しかし個人主義が家族

そのものをも破壊してしまふ危険を有するとすれば、これに反對するのは當然であるが、その際家族を護ることは家族主義に還ることなく、寧ろ家族に新しい社會性を持たせることでなければならぬ。家族主義的な日本の家族生活に缺けてゐるのは社會性である。

この社會性といふ言葉を先づ簡單に社交性といふ言葉に置き換へてみるが好い。日本の家族生活には社交性が乏しいのである。一族の内部において社交性が缺けてゐるのみでなく、一族と他の家族との間の關係も多くはなほ封建的儀禮的であつて、眞に社交的でない。青年男女の墮落が家庭内並びに各家庭間における社交性の缺乏から生じてゐるものが尠くないことはしばしば云はれる通りである。

家族は一つの團體として社會的訓練の場所である。我が國民の生活に社會道德が缺けてゐるといはれるのも、個人主義の結果でなく、寧ろ家庭がなほ多く家族主義的であつて、今日の社會に適した道德的訓練を準備し得ないといふことに一つの原因がある。特に街の社交機關、カフェーや喫茶店の無秩序と頽廢との主なる理由はそこにある。家族主義的な家庭における我儘を社會へそのまま持ち込まれるのも困るし、またその窮屈を社會で存分晴らさうとされるのも迷惑である。家族の社會性は強調されねばならぬが、しかしまた家族と「社會」とは同じでない。いはゆる

新しい婦人の家族観には家族を社會と同じに見ることに於いて間違つてゐるものが多いのではないかと思ふ。それは家庭生活に對して個人主義と同様破壊的である。個人が社會的に規定されてゐることは事實であるが、個人をただ社會的にのみ見ることが正しくないやうに、家族も社會的に制約されてゐることは明かであるにしても、家族が社會的結合として有する特殊性を無視することは許されない。いはゆる新しい結婚論、家族論には、今日の社會を家族主義で律しようとする考へ方が陥つてゐるのと同じ種類の誤謬に、反對の方向において、陥つてゐるものが尠くないやうに思ふ。

家族觀の混亂は現代の大きな不幸の一つである。

(二月二十三日)

## 強國日本

日本は世界の強國である。これは我々の大きな誇りだ。強國日本の我々には世界の大國民としての資格が必要である。明治大正の時代にはその資格について種々反省されたものだが、然るに近年躍進日本などと云はれる反面、何事もけちくさくなるやうに思はれるのは、どうしたことと

あらうか。

強國とは世界史の聯關の中における勢力を意味してゐる。強國日本にとつて政治とは外交であると云つてもよいほどなのであるが、このとき外務大臣の拂底がますます激しく感ぜられるのは、強國の資格上まことに困つたことである。

思想や文化の方面においても、この頃は何でも「日本的」といふ限定詞を附けて考へることになつてゐるが、これもやめることができないものであらうか。ファッシズムはファッシズムであつて、イタリー主義とは呼ばれない。それは國民社會主義といふ世界的な名稱をもつてゐて、ドイツ主義と呼ばなくても濟む。かやうなものである故にファッシズムは現在、善いにせよ惡いにせよ、一つの思想原理として世界的になつてゐるのである。それはわが國にも影響して日本主義を發生せしめた。日本主義は獨特のものであるとしても、それがただ「日本主義」と呼ばれ得るのみで、世界的な名稱で呼び換へ得るやうな普遍的内容を有しないとすれば、それは逆に世界へ進出し得る思想とはならない。日本精神とか日本主義とかが「日本」といふ限定詞を除いて世界の諸國が理解でき、同意でき、模倣できる内容を有するとき、日本は思想上においても強國である。嘗て支那思想は日本へ來て日本的になつた。それが日本に移植されて日本の文化を發展せしめ

得た限り、それは單に支那的でなく、少くとも東洋的であつた。ところがそれが一旦日本的なものになると、逆に東洋へ進出し得るやうな性格を失ふといふ傾向がなかつたであらうか。東洋的なもの、世界的なものが日本へ來て特殊化され、個別化されるのは當然である。しかし日本的なものの世界性は眞實に求められたことがあるであらうか。個別化されることは或る意味では完成されることである。けれども完成すると共に普遍性が乏しくなるといふことが日本的性格であるとすれば、考へ直さねばならぬ。

今日、日支關係の行詰りを打開するには、先づ文化提携から始めねばならぬといふ意見も出てゐるが、それが可能になるためには「日本」といふ限定詞を附けないで濟むやうな思想が日本に現はれて來なければならぬ。

(三月二日)

### 對外文化の國內問題

某私立大學の關係者から聞いたところによると、この頃支那では日本の「大學」の評判があまり好くないといふことである。そのわけはかうだ。

最近支那の大學では、嚴選方針を採つてゐるといふこともあつて、十人に一人の割合でしか入學できないやうな状態であるが、そのために學生の質は善くなつてゐる。日本へ来る民國留學生にはこの自國の大學へ入ることのできないやうな頭腦の者が多く、しかも日本の某々私立大學においては殆ど無試験で彼等を入學させてゐる。そして授業料を拂つてゐさへすれば、無事に免狀が貰へるのである。かうした結果、日本の「大學」の聲價は次第に失墜してゐる。

ついでに同じ人が話してゐたところに依ると、日本へ来る留學生の中でも優秀な者は支那の各省政府などから學資が出てをり、外務省の對支文化事業部から補助を受けてゐるやうな者はあまり優秀な學生でなく、かやうなことから日本の評判は好くないといふことである。

もし右の如き事實があるとすれば、日本の對支文化政策上大いに反省を要するものがある。

私立大學の或るものが單に授業料を目的として質を選ばずに支那人を入學させてゐるのは、それが營利會社化してゐる一つの證據であるが、その經濟状態のあまり好くないことを示してゐる。いつも議會の季節になると、私立大學では政府の補助金の増額運動を行つてゐる。近年日本文化の對外宣傳のために政府は莫大な金を使つてゐることを考へると、支那において日本の「大學」の評判を好くすることなど、日本文化の宣傳にとつて差當り最も大切なことである故に、その點

から私立大學の補助金を増額する理由もあるわけである。外國は日本の外にあるものとはかり考へてはならない。外國は日本のうちにもある。それが今日の世界の状態なのであつて、日本文化の對外宣傳などいつても外ばかり見て内を善くすることを考へなければ、その宣傳は片端から毀れてゆくのである。

尤も、私立大學自身の立場としては、政府の補助金ばかり狙ふボロ會社の眞似をして貰ひたくないものだ。現在すでに一、二萬圓の補助金のために私立大學の獨立性がずるぶん失はれてゐるのである。それとも私立大學精神などいふものはやがて全く消え去るべき運命にあるのであらうか。最近においても京都の同志社では御時世のために「新島精神」がなくされたといふので問題を起してゐるやうである。

(三月九日)

## 世界の鏡

社會は自分を見る鏡である。この鏡に自分を寫してみることによつて我々は自分を知ることができる。同じやうに、世界の鏡に日本を寫してみることによつて我々は自國を知ることができる。

のである。

最近ルックス・フィルム會社製作中の映畫「吉原」が問題を起してゐる。會社側ではその筋は決して侮日的のものでないと辯明してゐるのに對し、内務省では「問題は筋そのものよりも現代の日本が吉原や人力車によつて代表されることにある」と云つてゐる。ところが、もしこのやうに云ふならば、あの「新しき土」にしても、現代の日本があれで代表されては困るといふ意見をいくらか出すことができるであらう。

西洋人が日本を訪ねて來ると、歌舞伎や能へ案内すると共に吉原へ案内する。それが殆ど公式になつてゐるとすれば、映畫「吉原」に抗議するのは矛盾でないかとも云へるであらう。オリンピック東京大會を控へて改善すべきことはここにもある。

それのみでなく、日本主義者のうちには吉原讚美論者がなかなか多いことに注意しなければならぬ。

例へばこの方面で有名な紀平正美博士は、日本精神の本質は「つとめ」にあるとしてゐるが、その際博士は、私娼は西洋模倣の個人主義であり、公娼は日本固有の家族主義であると見ると共に、「つとめ」の論理の立場から郭を支持してゐる。博士によると、公娼は單なる犠牲として社

會の暗黒面を現はすのでなく、郭内における「つとめの身」として一定の積極性を現はすものである。「今日此の精神によつて更に改造せらるるならば、社會制度としてこれほどよきものはないであらう」と博士は云ふ。「つとめ」のこの積極性こそ、實にまたあの爆彈三勇士の精神であると博士は附け加へて論じてゐる。これが他ならぬ文部省の國民精神文化研究所の所員として思想善導の任に當つてゐる紀平博士の「哲學的」見解なのである。

映畫「吉原」に抗議する官憲はかやうな「毎日的」思想の國內における宣傳に對して矛盾を感じないのであらうか。

外國映畫に寫してみれば、誰も「吉原」に侮辱を感じる。幸か不幸か、思想は吉原の如く映畫として形象化されることはできないが、今日、日本精神とか日本主義とかいつて宣傳されてゐる思想の中には、世界の鏡に寫してみると、日本人の誰もが「毎日的」と感じるかも知れないやうなものが存しないのであるか、反省を要するのである。

(三月十六日)

## 大衆の良識

近代哲學の父デカルトの革命的な書物『方法論』が出版されてから三百年、ことしはその記念の年に當つてゐる。今日においても散文の模範とせられるこの美しい書物は、單にフランス人のみでなく世界のあらゆる國民の教養の基礎となるべきものである。

當時の文化史を顧みるならば、この哲學的著作が自傳的形式をもつて書かれたといふところにすでにヒューマニスト・デカルトが見られるであらう。更に彼はこの書物を當時の特權的教養階級の用語であつたラテン語をもつてでなく彼の國の一般市民の言葉をもつて書いた。これはその時代の學者の習慣に對して全く革新的なことであり、ここにもデカルトのヒューマニズムが認められる。彼の云ふところに依れば、古人の書物をしか信じない人々よりも自分の純粹な自然の理性もしくは良識をしか用ひない人々が一層よく彼の思想を判斷することができる、と彼は考へた。すべての眞の改革者がさうであるやうに、彼はその哲學的革新を教養ある専門家にでなく、大衆の良識に訴へたのである。

教養人はとかく傳統に縛られ、専門家は専門的或ひは職業的偏見に囚はれがちである。教養や博識は彼等をして「良識」を失はしめ易い。彼等の埒内に留まり、彼等に氣に入ることを求めてゐる限り、革新は困難である。それ故に眞の改革者は専門的職業人の教養よりも一般市民の良識

に信賴するのである。デカルトは、かやうな良識もしくは理性即ち「眞と偽とをよく判斷し識別する能力」は、世の中の物のうち最もよくすべての人間に分配されてゐる、と記してゐる。

職業的哲學者や哲學青年に氣に入ることを考へて書く哲學者は眞の改革者とはなり得ないであらう。文壇人や文學青年ばかりを相手にして書いてゐては、文學における眞の革新は望まれないであらう。眞の改革者であらうと欲する者は大衆に信賴すべきである。しかし信賴すべきは大衆の良識であつて、もとより一時の人氣といふが如きものではない。

これは單に文學や哲學のことに限らない。政治においても同様である。大衆の良識に信賴して改革を行ふ政治家こそ今日最も待望されてゐるのである。

(三月二十三日)

## 大道廢<sup>レ</sup>有<sup>リ</sup>仁義<sup>一</sup>

キリスト教は如何にして日本精神と一致し得るかがしばしば問題になつてゐるが、この頃では國學者平田篤胤がキリスト教の影響のもとに日本神話を解釋した説を逆用して、日本精神とキリスト教との調和を唱へる者さへ出てゐる。キリスト教神學者の仕事もいよいよ煩瑣哲學的になつ

てきたが、老子のいはゆる慧智出でて大偽ありの類とならねば幸ひである。

先達て同志社大學においては、六十年の傳統を誇る建學精神新島イズムから日本主義へ教育方針を轉換するに至つたのであるが、最近これに勢ひを得た國粹派教授は同學の一教授三助教授の思想が新教育綱領に反するといふ理由をもつて、その罷免を總長に上申し、ために學校騒動の危機を孕むと傳へられてゐる。

個人的な感情の纏れとか派閥の争ひとかに日本主義が利用されることを餘りにしばしば見聞してゐる我々は、今度この問題についても、その實體を究めた上でないと、公正に判斷できないわけである。日本主義を他の目的のために利用するのは日本主義に對する侮辱である。しかし假りにこの事件が愛國心とか愛校心とかの道義心から發したものであるとしても、いつたい何が日本精神に反することであるかは簡單に決定し得ることでない。我々は老子のいはゆる大道すたれて仁義ありといふことを近年絶えず痛感してゐる次第である。

平田篤胤は『古道大意』の中で老子のこの言葉を引いて我が國の古道即ち眞の日本精神が何であるかを説明してゐる。平田によると、眞の日本精神は老子のいふ大道であつて仁義でない、それは事實の上に具つて有るものであつて、教訓とか道德とかといふものではない。それを道德化

したり教訓化したりすることは却つて眞の日本精神を失ふことになるのである。平田の哲學には教へられるところが尠くないのであるが、この說など特に國粹主義者の猛省を促すに足るものであると思ふ。神ながらの道は事實であつていはゆる道德ではない。今日それを徒らに規範化し煩瑣哲學化することによつて他人を貶しめ、世の中をとかく面倒にしたがる者に果して眞の日本精神があるといへるであらうか。

教育の大道がすたれて教育は仁義化され、學問の大道がすたれて學問は道德化される。近年喧しい「日本精神」はすでに末世の產物であり、末世の象徴であるのであらうか。

(三月三十日)

## 國民の立場

國民の立場から考へると、今度の選舉は不可解なものである。すでに議會の解散そのものに不可解なところがあるのみでなく、この選舉が何を意味するかも不可解である。選舉は次第に意味の曖昧なものになつてゆく傾向がある。

常識によると選舉の結果は無産黨が進出するであらうが、やはり民政黨と政友會とで多數を占めるものと考へられる。實際にかうなれば、政府はいつたいどうするのであるか。政黨が肅正されなければ政府は再解散を行ふといふ口吻である。肅正とは政府の意の儘に動くことであるか。もしさうであれば、政黨存在の意味はない。政黨は再解散を恐れて政府にただ聽従することになるであらうか。政黨が解散を恐れる大きな理由が、選舉には金がかかるといふことにあるのは政府も承知してゐる筈である。してみれば政府は政黨を結局金の問題で嚇してゐるわけであらうか。

この解散は政黨に對する懲罰の意味を有するといはれてゐる。確かに政黨には懲罰に値するところがあつたであらう。しかし選舉後において再び解散が行はれることになるか。今度はそのこれらの議員を選出した國民に對する懲罰の意味を有することになるのであらうか。しかも國民は政府のいはゆる新黨が出来ない限り、かやうな懲罰を免れるためにどうすれば好いのであるか。政府は選舉後において新黨が出来ることを期待してゐるといはれる。もしかやうなことになれば、議員は選舉民を欺瞞したことになり、政黨を墮落させるものは政府自身であるといふことにならないであらうか。

この際政府は策を弄すべきでない。林首相初めみづから立候補して新黨を名乗るべきである。

かやうな新黨も作らないで選舉に臨むこと自體が選舉における國民の立場を無視したことである。選舉によつて政黨——いはゆる新黨即ち政府黨をも含めて——を懲らしめ得る立場にあるものは、政府でなくて國民である。政府は政黨を懲らしめるといつても、もし政黨が政府の意のままに動くならば、その政黨が果して國民の意志を代表してゐるかどうかなどは問題にしないのではないか。國民大衆を代表する政黨は政府の欲してゐるやうな「新黨」であり得るであらうか。

(四月六日)

## 政治と説教

政治が次第に説教に化してくる。思想が盡き、論理が窮まるとき、説教が始まるといふのが世の常である。

林祭政一致内閣は組閣の當初から説教が好きであつた。議會解散の理由とされるものも説教であつたが、選舉に對して掲げられた政府の標語もすべて説教である。説教することが悪いといふのではない。素樸な道德的感情に訴へることによつて政治的意見の對立を蔽ひ隠さうとするやう

なことがあつてはならないのである。「滅私奉公の士」であるからとて意見が同じであるわけはなからう。むしろ私心ある者こそ容易に妥協し、追隨し、阿諛するのが普通である。

林首相は、來るべき選舉において「正しい人物が選出され、野に遺賢なからしめるやうに」希望してゐる。これもまことに立派な説教である。ただ恨むらくは、國民に向つて説教するに先立ち政府みづから野に遺賢を尋ねて缺員中の大臣を補充し、國民に範を垂れなかつたといふことである。

歴史の實證するやうに、賢者といふものは時の政府や權力者に尾を振つてついてゆくものではない。だから賢者はたいいてい野にあるものと決つてゐるのである。野に遺賢なからしめようと欲する者は、反對者の聲に聽いて政治を行ふ覺悟がなければならぬ。反對者の立場を強壓してゐる限り、賢者はますます野に隠れることになつてしまふのである。

反對者の眼はつねに鋭い。反對者の批判を怖れず、反對者から學ぶことを知つてゐる者が眞の賢者であらう。ところが説教といふものは反對者の立場の含む「認識」を抹殺するために用ひられることが多いのである。反對者を沈黙させるために説教するのでなく、私を滅して反對者の立場を認めることこそ、今日の政治に必要な道德である。説教を認識に取換へることが政治の進歩

である。

野に遺賢なからしめるといふ古典的な政治道徳は、大衆の政治意識が低かつた時代のものである。それを今日の言葉に翻譯すれば、大衆の聲に聽いて政治を行ふといふことになる。大衆をして自由に語らしめる用意がつかねにあるならば野に遺賢はない筈である。選挙の結果の發表日に當るといふ理由でメーデーを禁止した政府が野に遺賢なからしめるなどと言ひ得るであらうか。

(四月十三日)

## 學生の風俗

風俗も時代に影響され、時代を反映するのは當然である。

昔は角帽に社會的價值があり、若い女性にとつても角帽は大きな魅力であつた。ところがその時代には却つて大學生の中にも角帽を被らない者がゐた。殊に文科の學生には角帽も持たず、和服即ち最近の流行語でいふと日本的服裝で登校する者が多く、私もその組であつた。しかるにこの頃の大學生はみな金ボタンの制服を着て角帽を被つてゐるが、皮肉なもので、さういふ現在で

は角帽も昔の價值や魅力を無くしてしまつてゐるのである。

近來、大學豫科生に對して斬髮令を發し、長髮を禁ずる傾向が次第に生じて來た。これも非常時風景の一つであらう。私どもが高等學校へ入つた時分には、今や諸君は一人前の人間になつたのだから何事も自治の精神でやつてゆかねばならぬ、と教師からも先輩からも教へられたものであつた。髮を長くすることは勿論自由であつた。その時代でも中學生には長髮が禁じられてゐたが、この頃大學豫科生に對して斬髮令が發せられてゐるのを見ると、學生の格が一段階下げられたやうに思はれる。これは頭髮だけの問題でない、研究の自由も生活の自由も大學においてさへ次第に縮小されて來たのである。

日本の大學で制服制帽が定められてゐるといふことは、この國においては學生が特別待遇されてゐるといふことも關係がある。以前は「軍人學生優待」といふ札が諸所に見られたものだ。その頃は軍事専門家の勢力は今日の如くでなかつたが、彼等の勢力が絶大になつた今日では學生の特別待遇の意味も變つて、あの「學生未成年者お斷り」といふ札が貼られるやうになつたのである。

社會が變つてもイデオロギ―は直ぐこれに應じて變るものでない。今日の學生の中にもなほ特

權階級意識をもつてゐる者が尠くなく、それに影響を與へてゐるものに制服制帽がある。學生だからといふので特別待遇されるのはあまり善くないことで、そのために彼等の社會的訓練が缺けて來ることもあるのであるが、現在の學校は學生を軍人同様なるべく社會から分離しようとしてゐるやうに見える。斬髮令もその一つの現はれである。いつたい我が國では綜合雜誌などにおいても「學生論」が盛んであるが、これも學生の特別待遇の一種である。それは社會的にはインテリゲンチヤが如何に乏しいかを、そして政治的にはデモクラシーが如何に發達してゐないかを示すものであつて、幸福なことだとはいへない。

(四月二十日)

## 單純化と綜合化

物價騰貴が次第に深刻な問題になつてきた。これに驚いて政府では物價對策委員會を設置することになつたといふ。物價騰貴はしかし孤立した問題でない。増税はインフレーションと、インフレーションは物價騰貴と、そして物價騰貴は再び増税と、なにかも互に關聯してゐる。だから問題は綜合的に解決されねばならず、ただ綜合的に解決されるのほかない。

ところで近年政府の遣り方を見ると、こちらで火の手が上つたといふので機關を一つ作り、あちらで火の手が上つたといふのでまた機關を一つ増すといふ有様だ。これが非常時の光景であらうか。現に企畫廳を始め、林内閣によつて新設される豫定の機關も一、二に止まらないやうである。何處に全體を締め括る力があるのか分らない。この頃の機關の増設は却つて全體的な「計畫」の、従つて眞の政策の無いことの現はれであり、改革の統一的な「思想」の無いことの證據である。庶政一新とはただやたらに官吏を殖やすことであるといふやうな印象を國民に與へてゐるといはれるのも無理はないであらう。増設は誰にも容易にできることである。庶政一新の實力とはむしろ單純化への能力を意味するであらう。庶政一新の掛け聲以來の業績を一度清算してみても然るべき時期である。

問題はなにもかも關聯してゐる。すべては綜合的に解決されるのほかないとすれば、種々雑多な機關を統一することが要求されてゐる。統一するとは或る意味で單純化することである。複雑であつては統制の機關となり得ず、却つて自分自身の統制される必要が生じてくる。もとより統制は單なる單純化でなくて同時に綜合的であることが要求されてゐる。

林内閣と共に廣義國防は狹義國防へ移行したといふ。もちろん國防第一主義がやめになつたわ

けではないであらう。廣義國防は本來綜合的なものである。そのうちには國民生活の安定も含まれてゐるし、外交の調整も含まれねばならない。従つて廣義國防の觀念は、その外觀においては極端な國防第一主義であるかの如く見えるにしても、實質においてはむしろ國防と國民生活の安定等々との間の調和が綜合的に企てられねばならぬわけである。狹義國防への「後退」といはれるものこそ、却つてそれ以上に極端な國防第一主義となり、政治の綜合性を破壊する危険を有し得ることに注意しなければならぬ。

機關の單純化と政策の綜合化——この原則を忘れて庶政一新はあり得ない筈である。

(五月四日)

## 國民歌謠

ドイツ人の好きなものが二つある、ギリシアと音樂とがそれだ。今日のナチスもこの二つのを巧に利用してゐる。ヒトラーはギリシア人を引合ひに出すことを忘れない。永遠の文化を作り得るのはアーリア人のみで、アーリア人のうち最も純粹なもの、ヘレニズムの眞の相續人はド

イツ人であるといふ。ドイツ人の天才を認めても好い音楽はもつと盛んに利用されてゐる。ナチスが政權を掌握した一九三三年の選舉戦はまるで音楽の洪水であつた。ヒトラーは極めて劇場的な雄辯家であるが、彼の演説は各瞬間にオーケストラの協力を求めてゐる。突撃隊の唱歌なしにはヒトラー主義とは何物でもないといはれるほどである。

ナチス張りの文化統制への歩武を進めつつあるやうに見える我が國においても、この頃、國民歌謡といふものが作られ、ラヂオを通じて宣傳されたが、これは一向普及するに至らないやうである。いつも巷に氾濫してゐるのは『あゝそれなのに』といった種類の歌で、日本には文化統制が行はれてゐると考へてこの國へ來た外國人は、それらの流行歌を日本の國民歌謡と誤解するかも知れない。國民歌謡とは何よりも國民に愛される歌謡であり、音楽として優れたものでなければならぬのであつて、單に國民主義的イデオロギーを盛つたものではない。流行歌の撲滅のために小學校における音楽教育の向上をはかるといふのは立派な意見であるが、それがほんとに實現すれば今日のいはゆる國民歌謡も一緒に撲滅されてしまふであらう。

流行歌が頽廢的であるとはよくいはれることである。しかし頽廢的であるのは近年の流行歌に限らないので、一部の人がこれこそ國民歌謡であるといふかも知れない浪花節や詩吟などの調子

の基礎にも何か頽廢的なものがあるやうに感じられる。軍歌においてさへセンチメンタルな哀調が著しいことはいつか川端康成氏も指摘してゐた通りである。文句さへ勇壯活潑であれば好いといふわけでなく、音楽そのものの、従つてまた感情の性質が問題なのである。

日本文化の根柢に或る頽廢的な感情が横たはつてゐるのは注意すべきことで、その原因としては封建的なものの殘存その他種々のことを挙げ得るであらうが、文化の年齢といふことも考へてみなければならぬ。日本文化はヨーロッパ諸國の文化に比して遙かに古い文化なのである。これが若返るには外國文化と接觸する必要があるのであつて、この頃の青年の西洋音楽愛好などもその意味で健全な傾向として歡迎すべきことである。かやうな教養の基礎の上に日本主義的イデオロギーとは別に眞の國民歌謡が生れるであらう。

(五月十一日)

## 精神家

林首相は非常な精神家である。誰もそれを疑はないであらう。林首相は口を開けば必ず誠心誠意國政に當るといひ、また他に對して誠心誠意國事に盡すべきことを説く。とりわけ文部大臣に

は精神家が求められ、また近く設置される筈の文教審議會委員にも同様に精神家が求められてゐる。精神家に對する需要は絶對的であると見える。

さすが日本は東海の君子國といはれるだけあつて、精神家にはつねに事缺かないのである。しかるにかやうに無数の精神家の存在するところでは、精神家を探すが却つて困難であるといふパラドックスが生じる。現に、俗間の噂に依れば、自薦他薦の文部大臣候補者が、言ひ換へると最上級の「精神家」が、總選舉前には六十幾人とかあり、そして現在では八十幾人とかに殖えたとのことであるが、それにも拘らず一向文部大臣が決定しないところを見ると、精神家の中で精神家を探すことの困難が思はれるのである。

ポール・ヴァレリイは、政治とは擬制（フィクション）であると云つてゐる。擬制といふのはおよそ精神家とは反對のものである。政治は擬制として何よりも技術でなければならぬが、精神家は技術を輕蔑するといふことを特色としてゐる。技術はディレッタンティズムに對立する。しかるに政治領域のうち思想や教育に關することほどディレッタントの手で害はれ易いものはない。現に無数の文部大臣候補者が存在するといふことは、誰もが思想の問題だけはわかると自信する惡しきディレッタンティズムを示してゐる。精神家は本質的に主觀主義者として自信家であ

ることを特色とするのである。

擬制である政治をして支配せしめるためには大衆の心理を掴むことが必要であらう。しかるに精神家は最もしばしば獨善家であり、大衆の心理を理解しないのがつねである。まさに、精神家、精神を知らず、といはねばならぬ。そのうへ、大衆が彼から離れれば離れるほどますます「精神的」になるといふのが精神家の特色である。そのとき彼は自分の自信を失ふまいとしていよいよ獨善的になつて来る。

政治に對して懷疑的なヴァレリイは云つた、「あらゆる政治は利害關係を有する者の大部分の無關心を基礎としてゐる、この無關心なしには政治は可能でない」と。今日の内閣が存在し續けてゐるのは大衆の無關心に基くのであらうか。だが大衆はまさに政治に利害關係を有する者としていつまでも無關心ではゐられないであらう。それとも精神家的政治家はすべての國民が物質的生活のことなどは全く問題にしない純粹な精神家になることを要求してゐるのであらうか。

(五月十八日)

## 大衆との距離

統制の目的は統一であり、統一は強化を意味する。これはもちろん統制の理想的な定義で、實際においては統制は強化とは反對に萎縮を結果することが多い。統制は自然に生ずる統一でなく、外部から強制される統一である故である。外部からの強制によつて萎縮が生じないためには、統制される側の者が自由主義的訓練を経てゐなければならぬのであつて、この訓練の不足してゐる場合統制が萎縮を齎すのみであることは現に我々の目撃する通りである。かくてわが國においては統制と自由主義的訓練とが共に必要であるといふディレンマが存在する。

外部から強制される統一によつて國民が萎縮しないためには、統制する側においてはつきりした指導精神を持つてゐることが必要であるのはいふまでもない。しかし單に思想があるといふのみでなく、その思想が國民に十分納得できるものであることが必要である。それが自分に納得できるものであるならば、外部からの強制も單に外部のものとは感ぜられず、却つて自分が自身に與へる統制と考へられ、その場合統制はもはや統制でなく大衆の積極的な意志を意味するの

であつて、かくてこそ初めて統制は強化となり得るのである。

自分等がこんなに眞劍にやつてゐるのに國民がついて來ないといふのは怪しからん、といふやうな言葉をしばしば聞かされるのであるが、それは國民が眞劍でないからではない。今の時代に誰が眞劍にならないことがきよう。誰もみな眞劍になりたいのである。それなのに眞劍でないやうに見えるのは、大衆が納得し感激し得るやうな指導精神も政策も與へられてゐないからである。林内閣の一枚看板といはれる文教審議會の委員の顔觸れを見ても、あまりに古典的な存在で大衆には何の感興も生じないではないか。

政府の超然主義乃至獨善主義に對する政黨の批評は正しいであらう。しかし國民が政黨に満足しないのは、革新を標榜する政府から「現状維持」派と呼ばれる政黨も、政權を得ればこの「革新的」な政府と全く同様のことをするであらうと考へるからである。批評のための批評は十九世紀のものである。それは自由主義と多元論とを前提する。自由主義と共に批評の機能も變化し、批評は創造的な批評にならねばならぬ。言ひ換へると、政黨は政府に對する批評と一緒に積極的な政策を掲げて起たねばならぬ。

統制も批評も自己の限界が何處にあるかを考へないといふことが今日の政治の憂鬱の原因であ

る。そしてその限界は大衆との距離にある。

(五月二十五日)

## 官僚ディレッタントイズム

民間の諸會社への官吏の賣り込みに對する非難は既に久しいものであるにも拘らず、近年官僚政治の擡頭と共にますます増加の傾向にある。それは我が國になほ廣く殘存する「役得」の思想の延長とも見られ得るであらう。

かやうな賣り込みは、勿論、古手官吏のためであるばかりでなく、資本家も自己の利益の立場からそれに應じてゐるのである。そしてこの頃のやうに經濟統制が喧しくなつてくると、民間會社に古手官吏が入つてゐるといふことは、統制にとつて便宜であるとも考へられるが、また反對に彼等が資本家のために國家の統制に對する防壁の役をなすといふことも考へられる。いづれにしても彼等を通じて資本家と官僚との狎れ合ひがこつそり生じ易いことは想像し得ることである。

しかしそのやうな官吏が技術家である場合はまだしも弊害は尠い。彼等の地位を羨望して、内務省あたりの古手官吏があらゆる名の團體を組織し、地方の婦人や青年などから金を集め、自分

がその團體の理事等に納まらうとする傾向があるとすれば、困つたものである。

更に注目すべきことは、近頃各省で文化宣傳に關する事業が行はれると共に、或る人が「官僚ディレッタンティズム」と呼んでゐるやうな現象が生じてゐることである。例へば、政府の映畫事業である。これは軍部でも、文部、鐵道、外務等の諸省でも行つてゐる。軍部では民間の映畫會社を使つてただ監督するといふことが多いさうであるが、他の諸省では官吏がみづから事に當り、彼等のディレッタンティズムによつて害されることが少くないといはれてゐる。その結果、民衆にはちつとも面白くない寫眞が出来るだけでなく、「國辱的」といはれるやうなものさへ作られることになる。

かやうなことは政府自身の仕事の場合のみのことではない。文化統制とか思想統制とかの聲と共に次々に生れた半官半民——形式上はさうでないにしても實質的にはさうであるものをも含めて——の諸團體の仕事にも同様の官僚ディレッタンティズムの弊害が見られるやうである。たびたび問題を起した國辱映畫の如きはその現はれの一端に過ぎないのであつて、同様のことは世間にあまり知られてゐないことのうちにも多いであらう。

文化統制を行はうといふ場合にしても、民間の文化人を動かすのでなければ何事も成就されな

いのであつて、獨善は禁物である。

(六月六日)

## 政治と宗教

新内閣は各方面から一般に好感をもつて迎へられてゐるが、佛教界の期待もなかなか大きいやうである。近衛首相は傳教大師奉讃會會長等の地位にあり、また西本願寺、眞宗高田派本山とも關係があり、特に大谷尊由氏の入閣は佛教界最初のこととして祝はれてゐる。

前内閣の標榜した祭政一致は神道的色彩が強く、ために何となく壓迫を感じてゐた佛教界であるから、この新内閣の成立を歓迎するのも當然であらう。尤も、近衛内閣が佛教のために實際に何を爲し得るかは、問題である。第一、この内閣も永久に續くわけでなからうし、またこの内閣が今日の時代思潮をどれだけ轉換させることができるかも、疑問である。

佛教の振興は何よりも佛教家自身の責任でなければならぬ筈であるが、近年とかく政治に依頼するといふ風が見られる。かくの如き宗教の政治への從屬は、宗教家が排斥するところの精神の物質への從屬を示すものではなからうか。

林前文相が祭政一致を唱へると祭政一致の研究會を起して、いかに佛教をこの思想と妥協させるかに苦心し、聖徳太子の御名において佛教と國體との調和を考へた佛教界は、安井新文相の楠公精神において更に別の新しい問題を與へられるであらう。

宗教に對する我々の不満は、信仰を説く宗教そのものが近年甚だしく無信念になつてゐるといふことであり、この無信念は政治への宗教の際限のない妥協となつて現はれてゐる。

今日の獨裁政治が宗教にとつて有利なものでないことは、ソヴェトの宗教に對する態度は固より、ナチスの教會政策においても明瞭である。しかも宗教が政治的に統制され得るものでないことは、それらの國における宗教と教會との現狀が示してゐる。日本宗教のうち最も平民的な日蓮や親鸞などの生涯の歴史にしても、宗教が政治的統制に對して決して單に妥協的であつてはならぬことを教へてゐるであらう。

佛教は、今日、政治と宗教との關係について根本的に考ふべき位置に置かれてゐる。この問題についての深い反省のうちに宗教が新たに生きる道がある。しかるに佛教思想界には誰一人この重要な問題について徹底的に考へようとする人を見出されないのである。

(六月八日)

## 文化の權威

文士といへば、以前は、世間から變物扱ひされるのが普通であつた。この頃の文士にはそのやうな變物が次第に見當らなくなつた。單に文學者のみでない、學者、美術家、ジャーナリスト等、すべての文化人について同じことがいへるであらう。

昔の文化人が世間的に變物であつたといふことは、彼等の思想や行動が非社會的であつた爲めであると批評される。確かに彼等は非社會的であつたであらうが、その反面また彼等には自分の従事する仕事の權威についての自覺も強かつた。ジャーナリストにしても「無冠の帝王」といつた誇りをもつてゐたのである。我が國には古來藝術至上主義といふやうな思想は存しなかつたけれども、文化の權威についての自覺は十分にあつた。

近年文化の社會性が強調されてゐるのは固より正當なことであり、それと共に文化人の間にいはゆる變物が少くなつたのも結構なことである。しかし同時に文化人の誇りといふものが失はれ、文化の權威についての自覺が稀薄になつたといふことがないであらうか。政治家や官吏の手先に

なつて働くことに矛盾を感じず、自分のもつてゐるのは實は全くの小吏根性であるにも拘らず、それが文化の社會性であるとしても考へてゐるやうに見える學者や藝術家が多くなりつつあるのは悲しむべきことである。

かやうな傾向に反抗する爲めに再び藝術至上主義の如きものを唱へる者も見られるが、それは間違ひであつて、主張され維持さるべきものは文化の權威である。文化の擁護も、單に文化の政治的自由の點からのみでなく、文化の權威の點から考へられねばならぬ。

教育の方面では人格教育といふことが喧しくいはれ、安井文相も教育の方針は人間を作ることだと述べてゐる。それは固よりその通りであらうが、しかし今日教育家の間には小吏根性が浸潤し、文部省あたりの意志通りならまだしも、その意志以上にさへ極端なことをして忠勤振らうとするやうな無性格な者が多くなつた教育界において、果して人格教育ができるであらうか。以前には教育家にもなかなか變物がゐたが、そのやうな人が却つて立派な人間を作つたのである。教育家も自分の仕事の權威について考へねばならぬ。すべて文化的な仕事の價值は十年や廿年で決定されるものではない。

樽の中の哲人デイオゲネスとアレクサンドロス大王との話は、この社會的政治的時代において

もなほ顧みられるに足る教訓を含んでゐるのである。文化人の氣魄は文化の權威についての自覺から生れる。

(六月十五日)

### 「新全體主義」

自由主義の鬪將といはれた鳩山一郎氏が今度外遊することになった。氏の外遊は個人的心境に依るものであらうが、しかしその個人的心境のうちに時世がおのづから反映してゐないといふことは不可能である。

自由主義政黨であつた筈の民政黨では今度「新全體主義」といふものを標榜するに至つた。そのいはゆる「新」が何を意味し、いかなる點でそれが全體主義と異なるのであるか不明であるが、他に追隨して後から全體主義を唱へ始めると見られることを嫌つて「新」といふ字を頭につけたに過ぎないと考へて恐らく間違ひないであらう。

文壇や論壇では昨年あたりからはゆる日本的なものについて盛んに論ぜられたのであるが、偶然の符合といふか、ちやうど近衛内閣が成立する頃からその議論も下火になつてきた。日本的

なものについての議論が祭政一致を聲明した林内閣の時代に起り、そしてこの内閣の退却と運命を共にしたやうに見えるのは、皮肉のやうでもあるが、全く偶然であるともいはれないであらう。

近衛内閣は古典的な林内閣とは異り頗る現代的な聲明をもつて現はれたのであるが、この内閣はいはゆる日本主義が、現代的な言葉で表はすと、實は全體主義に他ならないといふ一事を示すために現はれたやうなものである。極めて明瞭であるやうに見えて實は甚だ曖昧であつた日本主義といふ古典語は、今後恐らく次第に遠退いて、全體主義といふ現代語が一層前面に出てくるであらう。いづれにしても意味は同じである。かくして日本も要するに世界の一環としての日本にほかならず、日本固有のものといふものが論者のいふほど重要でないことがいよいよ明かになるであらう。

ところが日本では今なほあらゆる外國品はハイカラでスマートなものとして好奇心をひいてゐるやうに、この全體主義といふ言葉も或る人々にはかなり魅力をもつてゐるのである。しかるにこの全體主義といふものが實質的には何であるか、それが大衆にはあまり有難いものではないといふことを誰の眼にも明かにするのは、多分現内閣の後に來るものであらう。それが物の順序である。

しかし日本では、外國のファッションに追隨しての全體主義と見られることを避けるために、新全體主義とでもいはれるかもしれないが、新とはこの場合ただ後から現はれたといふ意味であつて、性質上根本的に異なるのではない。全體主義を超越した眞の「日本的なもの」が出て世界をリードするやうなことが當分ありさうにもないことは、日本を眞に愛する者にとつて淋しいことである。

(六月二十二日)

## 心の準備

國民的感激の裡に成功したオリンピック大會東京招致も、その後の進展はあまり捗々しくなく、ファンをしていろいろ氣を揉ませてゐるやうである。

愚圖ついてゐた競技場問題がやつと解決をみて、神宮外苑競技場を擴張して使用することに決定したが、外苑評議員會の委員中にはこの擴張に就き、境内において不適當と認められる行爲に對し國體明徴の建前から種々の條件を附すべし、といふ「日本精神」の立場における強硬意見を唱へる者があり、成行きによつては大會に影響するところ少くない有様だと傳へられてゐる。即

ち例へばオリンピック・ベルとか聖火の如き外國流のものは日本の國體にふさはしいものに改めよ等々の議論が起つてゐることである。

然るにもかかる議論を徹底させてゆくならば、競技種目の中でも外國流のものは凡て排して我が國固有のものに變更せねばならぬことになり、かくて大會開催も結局不可能になつてしまはねばならぬ。オリンピックといふやうな西洋的なものを日本に招致したことがそもそも不都合なことだと云はねばならぬであらう。困つた話であるが、かかる議論がなかなか存在するところから考へると、いよいよ大會となつても遠來の客に對して不愉快を感じさせるやうな事柄がいろいろ生じて來はしないかと心配されるのである。

かくの如き國粹論者はよろしく明治天皇の御精神を、ひいては明治の時代精神そのものを顧みるべきである。五箇條の御誓文等を拜誦してみるべきである。明治の時代精神はまことに博大な、進取的なものであつた。偏狹な國粹主義は先づ明治神宮外苑からこそ追ひ拂はれねばならぬであらう。

オリンピック大會を迎へるにあたつては單に物の準備だけでは足りない。心の準備が大切である。この心の準備といふのは國際的精神の向上にほかならない。もしも競技の、文化の國際性の

觀念が虚妄であるならば、オリンピック大會開催の如きは畢竟無意味であり、無駄でなければならぬ。

オリンピック大會のことは別にしても、近來喧しくいはれてゐる國民體位の向上については、その精神がまた問題にされねばならない。單に準戰時體制——この語もあの非常時といふ謂はば日本固有の語がこの頃國際的意義を有する語に變つた例の一つと見られ得るものである——といふ見地からでは國民體位の眞の向上は期待されないのであつて、その根本には却つてもつと大きなヒューマニスティックな精神が流れてゐなければならぬのである。

(六月二十九日)

## 世界教育會議

東京帝大で開催される筈の世界教育會議も近づいてきた。この會議については、もし滿洲國が参加するのなら自分たちは出席しないといふ支那代表者の横槍も出たが、それも結局滿洲國参加といふことに決定したやうである。そしてそれは當然のことであつた。

胡適氏が滿洲國の参加を拒否したのは、教育會議を徒らに政治化するものであつて、正しく

ない。なにもかも政治的に、餘りに政治的になつてゐる今日、教育會議の如きは政治と無關係に行はれるところに却つて意味があり、現在の世界の重苦しい政治的狀態の中へ一陣の涼風を送り得るの感もせられるのである。

しかし世界教育會議が政治に無關係でなければならぬといふことは、そこで政治が論じられてはならぬといふことではない。ただそこでは政治が政治の見地から論じられることなく、教育の見地から論じられることが大切である。今日、世界各國の教育は著しく政治に従屬してゐる。かかる政治の教育に對する影響が検討され、そこから教育本來の精神において現實の政治に對する批判が行はれなければならない。政治と教育との關係の如き、現下の情勢から見ても、世界教育會議の最も重要な論題であるべきであり、殊にその中のハーマン・ジョルダン委員會の如きはその精神からいつてもこれを問題にすべきであると思ふ。

教育はもとより政治から完全に自由であり得ないであらう。教育が政治に制約されるのは當然であるにしても、政治と教育の精神とは必ずしも一致しない。政治は人間の本能や衝動に訴へることがつねに餘りに多い、それ故に教育が政治に従屬的になると、教育の意味は否定されてしまふ危険がある。政治に對する批判的力としての教育の意味が認識されねばならぬ、政治の力に對

する教育の獨自の力への信頼が今日の教育家から喪失しつつあるのではなからうか。

世界聯合教育會の主要な目的は「教育事業において國際的協調をなし、國際的善意を涵養し、且つ世界的平和を助長する」ことに存するが、現在の情勢はその會議を世界の全く片隅の出來事にしてしまはうとしてゐる。かかる時代にも拘らず我々は東京におけるこの會議が有効に進行することを期待する。世界各國の教育家が相會することは相互の理解を深めることによつて國際親善に資し得ることは勿論、各人が自國の特色を正しく自覺する機會にもなるのである。日本に西洋模倣の弊があつたとすれば、それは日本人が餘りに西洋人に接觸したためでなく、反對にその接觸の機會が餘りに少かつたためである。國際會議開催の意義は我が國において特別に大きいといはねばならぬ。

(七月二十日)

## 試験の矛盾

安井文相は中等學校の入學試験地獄緩和策として、筆記試験はなるべく一科目に限つて行ふといふ斷案を下し、各地方長官宛にその通牒が發せられた。東京府の如きでは、來年度の入學試験

は算術と讀方との二科目とすでに決定してあつたので、この通牒を如何に取扱ふかについて更めて協議してゐるとのことである。

入學試験一科目制は安井氏のいはば專賣特許であつて、氏が大阪府知事時代に管内各中等學校において國史一科目制を斷行したことは有名である。この一科目制に對しては當時すでに教育界でも一般社會でも種々の批評が加へられたのであるが、今それを全國的に行はうといふには自己の專賣特許であるといふ名目以上に何か確信があるのであらうか。

簡單にいへば、今日のやうな状態で入學試験が行はれる限り、一科目であらうが、二科目であらうが、三科目乃至四科目であらうが、結果は同じである。準備教育はのために廢せられないであらうし、兒童の負擔はそれによつて減じはしないであらう。試験を一科目にすれば、それ及落を決定し得るやうな答案の差異が殆どなくなり、従つて口頭試問などの方面に必要以上に重點がおかれ、その間に情實なども介入し易いのである。また科目數を減ずれば減ずるほど、今日試験準備によつて甚だしく支配されてゐる小學校では、その教育がますます偏頗なものになつてくるであらう。

入學試験の弊害をなくするには、現在の學校の内容を改善することが急務である。試験に落第

した者も、大抵どこかの學校へ結局は片附いてゐることから見て、中等學校の數は、私立までも合はせると、全體としてそんなに不足してゐない筈である。従つてすべての學校を皆が入りたがるやうな善い學校にして、どこかに偏することのないやうにすれば好いわけである。その際に私立學校に對し、一方營利主義を押しけると共に、他方積極的に補助を行ひ、公立のものと優劣なきまで質の向上を圖ることが大切である。

次に畫一主義を打破して各學校をして自由にその特色を發揮せしめ、その特色に應じて選擇されるやうなものにしなければならぬ。もちろん、これには各家庭が子供の特徴を理解してその性質に合つた學校を選択するといふこと、ただ公立だからといふので、とりわけ「有名」だからといふので有難がるやうなことがなくなるといふことが前提されてゐる。現在の如く學校そのものの内容が、入學試験と同じく畫一主義のもので甲乙丙と採點され得るやうな状態では、試験地獄は緩和され得ない。

(七月二十七日)

## 政黨と文化運動

皇紀二千六百年を目ざして新日本文化の建設を企てると稱する日本文化中央聯盟では、文部省の補助金も決定したので、去る八日結成式を行ひ、やがて新秋には盛大な發會式を擧げる豫定であるといはれてゐる。この聯盟の意圖するやうな文化統制が眞實の日本文化の發達に對して如何なる關係にあるかについては、既にしばしば論じたことであるから、ここに繰返さないであらう。この種の文化運動は實は政治運動に他ならないのである。

ここで注意したいと思ふことは、近年次第に盛んになつてきたこの種の文化運動の主唱者もしくは指導者がたいてい退職官吏或ひは貴族であつて、政黨人は殆ど關與してゐないといふ事實である。我々はそこに現代日本の政治の動向とその特質とを明瞭に認めることができるであらう。

ドイツもしくはロシアの例を擧げるまでもなく、現代の政治運動において文化運動は極めて重要な役割を演じてゐる。しかるに日本の政黨はかかる事實に無頓着であり、文化運動に對して甚だ無關心である。そこに、その今日の實質はともかくとして自由主義を傳統とする政黨の弱點が

あるといへるであらう。文化人の匂ひのする人間は政黨人の間に非常に少い。しかしそれは現在文化運動を起してゐる退職官吏や貴族においても全く同様である。従つて問題は文化運動についての認識の相違であり、そしてその點からいつても既成政黨は日本の政治の指導力となり得ないのである。

かやうな政黨も先般大學生に働き掛けようと考へたのであるが、それも要するに選舉の時に投票を掻き集めようといふ目的以上のものを有したとは思へない。選舉の地盤と投票の獲得のことばかり氣にしてゐるやうでは、政黨の更生など到底期待できないであらう。

自由主義の傳統に育つた政友會や民政黨はともかく、社會大衆黨の如きにおいても文化運動が輕視されてゐるやうに見えるのは不審であり、遺憾なことである。文化運動の現代政治運動にとつて有する意義については、この黨の指導者たちには十分な認識がなければならぬ筈である。もし日本の文化運動が退職官吏や貴族の手によつて指導されることを欲しないならば、彼等の運動の目的に同意しないのであるならば、今日、社會大衆黨は自己の文化運動を活潑に展開すべきであらう。

(八月十日)

## 大なる覺悟

我方の不擴大方針にも拘らず、支那側の無反省に依り事變は遂に擴大するに至つた。今や日本は未曾有の非常時に際會してゐる。我々は眞に舉國一致の實を擧げ、時艱の克服に當らなければならぬ。もとより舉國一致は附和雷同と同じでない。我々はつねに冷靜な且つ眞摯な態度をもつて時局に對處しなければならぬ。

かの日露戰爭當時、今の西園寺公が政友會議員總會において「舉國一致と附和雷同」の異なる所以を論じ、妄りに政府に盲從しつゝあつた議會に對して警告したことは記録に値ひする事實となつてゐる。即ち公は、今日の要は各々その立場に依り分に應じて眞面目に行動することにあると説き、當時の政府の施設を端的に評し、例へば「銀行救濟問題の如き如何なる感觸を國民に與へたか、これは輕々に看過すべきではない」と論じ、徒らに戰勝に酔うてその職責を忽せにすべからざる所以を喝破したのである。

ここに銀行救濟問題といふのは時の政府者が一部金融資本家と結託して「財界の信用維持」の

名のもとに六百萬圓といふ巨額を責任支出の違憲處分によつて大阪の第百三十銀行に貸與したといふ事件であつた。

我々は絶えず歴史から學ばなければならぬ。もちろん日露戰爭當時と今日とでは諸般の事情は大いに違つてゐるであらう。しかし違つてゐるとすれば、どう違つてゐるかを具さに觀察することは、時局に對する認識を深め覺悟を固める上に大切であらう。

我々は當時における第百三十銀行事件、旭川第七師團兵營建築費に關する不正事件等を想起することを好まない。しかし西園寺公のかの警告は教訓的である、舉國一致と附和雷同とを混同することのないやうにすることが肝要である。近く再び臨時議會が召集され、劃期的な諸法案が提出されようとしてゐる。「舉國一致」といふ美しい名に隠れて政黨がその職能と立場とを抛棄することのないやうに希望されるのである。

今や國民は、或ひは國防獻金に、或ひは出征兵士の家族救護に、非常な熱誠を示してゐる。政府から說かれる前に、求められる前に、國民は愛國の純情と奉公の赤誠とをもつて時局に處してゐるのである。政府も政黨もその責任はいよいよ重いといはねばならぬ。國民も固より大なる覺悟を要する。舉國一致の内容についても深い思慮がなければならず、銃後の護りの意味も決して

單一であり得ない。各人が時局に對する正確な認識をもち、聰明に、冷靜に、眞擊に、自己の職責を盡し、持久力を養ふことが大切である。

(八月十七日)

## 不運なオリンピック大會

日支事變擴大のためにオリンピック東京大會における馬術競技に選手を送り得ないと陸軍が聲明して以來、この大會の開催そのもののまでが一部で問題にされるやうになつた。これに對し副島伯等は、國際信義の立場から飽くまで東京大會を遂行せねばならぬと主張してゐるやうである。

根本に遡つて考へれば、もちろん、多大の犠牲を拂つてまでオリンピック大會を日本に招致せねばならぬ必要があつたかどうか、疑問であつたであらう。しかしあの招致運動の當時における、そしていよいよ東京開催が決定した際における、あの熱狂振りを我々は忘れはしないであらう。何事にも熱し易く冷め易いといふ國民の弱點を現はすやうなことになるてはならぬ。

一旦東京開催を引受けた以上、副島伯等の主張する如く、全責任をもつてこれを遂行することが國際信義の立場からいつて當然である。特に日支事變の勃發以來、國際的に極めてデリケート

な關係におかれてゐる日本としてはその覺悟がますます大切なわけである。近年、日本を外國に認識させる必要があるとして、そのために種々の機關も設置され、多くの費用を使つてきたのであるとすれば、その必要が今日においてこそ増してゐる場合、オリンピック大會を返上するといふが如きことは、これまでのそのやうな努力を無にすることに亦なるであらう。

そのうへ、オリンピック大會は單にそれのみのことでなく、皇紀二千六百年を目差して、どんな國際大會をも日本に招致しようといった風があり、すでに東京開催の決定してゐるものも一二に止まらないのであるが、それらの國際大會の上に及ぼす影響についても考慮しなければならぬ。

國民體位の向上は國防上の見地からもその重要性が大いに強調されてゐる。もとより我々はオリンピック大會が國民體位の向上にとつて直接の効果を有するとは考へないが、しかし大會はスポーツに對する國民の關心と理解とを高めることに役立ち、間接にせよ國民保健の問題に資し得るものである。

オリンピック大會の東京開催が決定した當時、私は本欄において、一九四〇年まで世界の平和が維持されるやうに努力することは、この大會を引受けた日本にとつて喜ばしい義務でなければならぬと述べたのであるが、今や支那側の無反省のために日支事變の擴大を見るに至つたことは

甚だ遺憾である。まことに不運なオリンピック大會である。しかし日本としては飽くまでも、戦争に強い者は平和的事業においても強力であるといふことを全世界に向つて示さなければならぬと思ふ。

(八月三十一日)

## 文化工作の前提

先般の議會において近衛首相は一議員の質問に答へて、對支文化工作の必要を述べた。私はこの首相の意見に賛同し、かつ重要性を認めるものである。

現在戦闘が繼續中であるのに、何の文化工作の必要があらう、と云ふ者もあるかも知れない。しかしこの戦闘の目的が支那を滅ぼしてしまふことにあるのではなく、却つて日支の提携を新たに建てることにあるからには、戦闘における一步前進は同時に文化工作における一步前進でなければならぬといへる。

文化工作の根本問題は如何なる思想を基礎として日支の提携を實現するかといふことである。その場合、先づ抗日思想を絶滅しなければならぬと云はれるであらう。まさにその通りであるが、

しかしそれは寧ろ戰鬪の目的であつて、文化工作はそれに止まることができぬ。文化工作を進めるには、一旦自分を支那の立場において抗日思想の意味を考へ、彼の立場をも包括し得るやうな博大な思想をもつことが必要である。從來のやうに日支親善といふ言葉を抽象的に繰返すのでなく、具體的な内容を有する積極的な思想を用意することが問題なのである。

支那の抗日思想に對するに日本が敵支思想をもつて臨むだけでは足りないのは云ふまでもなからう。戰鬪のためには敵支思想も必要なことは明かであるが、絶えずそれ以上のものをもつことを忘れないのでなければ、終局の目的である日支親善は實現されない。

國民精神總動員の主要な目的が國民をして堅忍持久の覺悟を堅めしめることになければならぬことは、かの議會における聖旨奉體東亞安定に關する決議案によつても示されてゐる。そしてそのためには、もとより單に國民をして敵支思想の血を沸かしめるに止まることなく、如何なる思想に基いて東亞の安定が企圖されるのであるかを國民に十分理解せしめなければならぬ。今日國民の心の裡には、今次の支那事變が解決したとして、さてその後何が來るかといふことに對する深憂が横たはつてゐることを知らねばならぬ。

我々が國民精神總動員に望むところは明朗な指導性である。それが國民をして思想的に徒らに

窮屈を感じしめるやうなものであつては、外に向つて東亞安定の文化工作の發展を期することも不可能であらう。精神運動といふものはとかく遣り過ぎになりがちなものである。今次の支那事變こそ日本の思想が單に「日本的なもの」に止まり得ないことを最も明瞭に要求してゐるのである。

(九月十四日)

## 事變と生活

支那事變は文化の諸方面に種々の影響を及ぼしつつあるが、直接には大衆の生活に變化を與へつつある。必要は人間を賢明にする。この頃いはれてゐる生活の合理化もそれである。

從來西洋カブレの、非日本的なものとせられてきたことがこの機會に次第に進出しつつあるのは生活の合理化の方向を考へる上において注目すべきことである。例へば、託兒所、共同炊事などが追々現實的になりつつあるといふ。これらのことから知られるやうに、婦人の勞働戰線は擴大しつつあり、そのことが日常生活全般に最も大きな變化を及ぼす結果になるのである。

もとより生活の合理化は單にいはゆる西洋化であり得ない。現に舶來品が來なくなると、これ

に代るものを日本で作ることが必要になり、また在來の日本的なものをもつてこれに代らしめることが必要になる。かやうなことは西洋的なものの日本化、日本的なものの西洋化の機會になる。そしてそれが實は日本の文化の恐らく唯一の健全な發展方向であつた筈である。

この頃いはれる生活の合理化は物價騰貴その他によつて大衆に強要されつつあるものである。それは政府のいはゆる「消費節約」の現はれにほかならない。實質は同じことでも、消費節約といふ消極的なスローガンと生活の合理化といふ積極性のあるスローガンとは國民に與へる心理的影響において差異がある。この點、官吏の智慧は遂に婦人雜誌の記者に及ばなかつた。政治も大衆的心理を捉へねばならぬ。そしてまた消費節約は生活の合理化を伴はなければ意味がないので、頻りに消費節約を唱へてゐる政府も、この際積極的に生活の合理化を指導すべきである。消費節約は舊い禁慾主義的道德の範圍に止まつてゐてはならない。必要は發明の母である。この機會に生活の合理化の仕方がいろいろ發見され、日常生活の根柢から新しい日本が作られてゆくやうにしなければならぬ。

尤も、この生活の合理化がいはゆる消費節約、従つて物價騰貴、物資缺乏等によつて強ひられてゐるものとすれば、必要は人間を賢明にするといつても、そこには限度のあることで、

右のやうな經濟的事情が一定の限度を越える場合には、消費節約はもはや如何なる生活の合理化としても現はれ得ず、却つて生活の非合理化を強要し、道徳的にも頽廢を生ずるに至るのは必然である。この點、政治家はもとより、生活の合理化の主唱者たちも深く考へなければならぬ。

(九月二十八日)

## 想像力と政治

北支における日本の軍事行動は大いに進展して、その後の明朗化のための政治工作もまた進捗しつつあると報道されてゐる。軍事行動の後に來るものが軍事行動と同様に、或ひはむしろそれ以上に重大であることは云ふまでもない。

ところで外國新聞の一記者は、日本は北支を占領しても政治的成功を收め得ない、なぜなら日本人にはイマジネーション（想像力）が缺けてゐるから、と評してゐる。我々はもちろんこの記者の言をそのまま受取り難い。軍事的に成功した日本は政治的にも成功しなければならず、また成功し得るものと信ずる。しかしそれにしても彼が日本の國民的性格を評したところはいはゆる

他山の石として我々の反省を要求し得るものがあらうと思ふ。

想像力に乏しいといふことは從來の日本人の一つの弱點である。日本の文學を見ても、豊かな想像力を示したものは極めて稀である。想像といへば單なる空想と同じやうに考へて排斥され、その知的な性質、その構想的な働きの意義は理解されないのがつねである。現實的であるといふことは日本人の著しい特徴であり、日本人ほど現實的なものはないとさへ云ふことができる。それは大きな長所には相違ないが、長所は同時に缺點であり得ることを考へねばならぬ。

想像力は他人の心理を理解するために必要である。それはまた思考の地平を廣くするためにも必要である。更にそれは創造的に構想するためにも必要である。そしてかやうな能力は政治にとつて必要なものである。例へば、日本人は外交が得意でないと云はれることにしても、想像力が乏しいために他の國民の心理の理解が行届かなかつたり、また國際世界といふものがつねに生々と頭の中に浮ばなかつたりすることに依るのではなからうか。世界といふものは全體として現實的に經驗し得るものでなく、想像力が働かなければ生きたものとして捉へられないものである。

近代社會の組織は次第にフィクショナル（擬制的）なものになつてゐる。土地のやうな現物に比して貨幣は擬制的なものであるが、社會の組織にかやうに擬制的なところが多くなつてゆく場

合、政治にとつても想像力がいよいよ必要になつてくるのである。政治は肉弾戦とは違つた性質のものである。

武力においてすぐれた日本は政治的才能においても今後大いに新しいものを發揮して、イマジネーションがないといふ批評を打ち破らなければならない。

(十月十二日)

## 冷靜と冷淡

今度の事變に對して一般に知識階級が、特に學生が、冷淡だといふ批評を折々聞かされる。我々は決してさうだとばかりは考へない。「冷淡」と「冷靜」とは區別されることが必要である。しかしまたこの區別は紙一重のものであるといふことに注意しなければならぬ。冷靜であることは他の人からは冷淡であるかのやうに見られるといふことがあるのみでなく、自分は冷靜であるつもりでゐても知らず識らず冷淡に變つてゐるといふこともあり得る。一體、知識階級は冷淡であるのか、冷靜であるのか。これは各人がよく考へてみなければならぬことである。

事變が始まつたからといつて、さあ戦争文學だ、さあ愛國哲學だ、といつて騒ぎ廻る者ばかり

では困るであらう。かやうなことでは我が國の文化の眞の進歩はあり得ない。今度の事變は、政府でもしばしば云つてゐる如く、決して突然に、また偶然に始まつたことではないのである。しかしインテリゲンチヤはこれに對して用意されてゐたであらうか。

或る人は私に問うていつた、古來日本人には時間の持續の觀念があるのであらうか、と。これは確かに我が國の全文化にとつて重要な問題であり、また銘々が自分自身において考へてみなければならぬ問題である。持續の觀念がないならば、人格の堅持も、思想の操守もあり得ない。すべては單に瞬間的なことになる。個性は失はれ、文化もその時々の流れのままに動搖して、大きな組織は作られない。支配するのは流行だけである。持續の觀念がないならば眞の冷靜といふこともあり得ないであらう。

支那事變は昨日今日に始まつたことではなく、また國民の堅忍持久を要求してゐる。更に重要なのは事變の後に來るものである。持續の觀念がないといふことは日本の文化の特色であるにしても、それは今度のやうな大事件にあたつては、これに對する認識の仕方においても行動の仕方においても弱點を現はし易いのである。

この事變が我が國の文化に對して大きな影響を及ぼすであらうといふことは想像するに難くは

ない。かやうな大事件に際してなほ冷靜であることが必要であるとすれば、それは何よりも今後に來るものに對して自己を十分に準備するためでなければならぬ。その準備に努めない者は冷靜であるといつても實は冷淡であるのである。前線において流されつつある兵士の貴い血を思へば、冷靜といふ口實のもとに冷淡であることは許されない筈である。

(十月十九日)

## 宣傳と教育

今は宣傳の時代である。目下戰爭中の日本や支那が宣傳の必要を感じてゐるのみでなく、殆ど全世界が宣傳に熱中してゐる。すでに宣傳戰の激しさはあの世界大戰當時を凌ぎつつある。このことは第二次世界大戰の來るのを告げるものであらうか。少くとも宣傳だけを見れば、第二次世界大戰はもう始まつてゐる。

宣傳はむろん外國に對する宣傳に限られない。對外宣傳と共に國內宣傳が行はれる。宣傳の主要な目的は統制にある。それ故に政治が獨裁の形態をとるに従つてその必要は一層大きいであらう。統制の必要であるやうに宣傳も必要であり、統制が悪いことではないやうに宣傳も悪いこと

ではない。

しかし危険なことは、宣傳と教育とが混同されるといふことである。宣傳は恰もそれが宣傳でないかのやうに行はれる場合最も有効であるところから、宣傳は教育或ひは啓蒙の外觀を粧ひたがるものである。啓蒙と稱して實は宣傳を行つてゐる場合が多く、また今日のやうな統制時代になると、從來の教育機關がいつの間にか宣傳機關に變質してゆくといふことも生じる。

けれども教育と宣傳とは同じでない。兩者は種々の點において異つてゐるが、とりわけ重要な區別は、教育はその目的の一部としても、その全體の効果としても、批判的精神を養はせるといふところにある。この點において教育と宣傳とは相反してゐる。宣傳は統制を實現するために批判的精神の活動を抑止しようとするからである。兩者を區別して考へることは、宣傳が教育或ひは啓蒙を粧うて行はれる時代においては特に大切である。

宣傳と教育とは相反する作用をなすものである故にこそ兩者は共に必要なものである。國民をただ宣傳に乗り易いものにしてしまふことは危険である。一つの宣傳に乗り易いものは他の逆の宣傳にも乗り易いものである。一國の教育家が悉く宣傳家になつてしまへば國は危いであらう。

この宣傳時代においても教育の本質と獨自の意義とは強調されねばならぬ。宣傳は國民の健全

な常識を破壊しがちである。日本人が宣傳下手であるといふこともその限り憂ふるに足りないであらう。宣傳時代においては國民は特に自己教育によつて健全な常識を保つことが大切である。戦争を終局の勝利と成功とに導くものは國民の健全な常識である。

(十一月六日)

### 忘れられた問題

戦争はあらゆるものを自己に従屬させる。戦争においては何よりも先づ勝たねばならず、凡てはこの一事に集中される。かやうな集中において他の問題は忘れられるであらう。

支那事變の始まる以前、解決しなければならぬ多くの問題が存在したことは、誰も容易に想起し得る。國民體位の向上、國民生活の安定等々から、オリンピック大會等々の如きに至るまで、問題は山積してゐたのである。事變の勃發はそれらの問題をすべて忘れさせてしまつたかのやうに見えた。しかし忘れられた問題は存在しない問題ではない。問題の存在する限り、一時は忘れられてゐても、やがて現はれて来るであらう。皇軍の目覺しい成功によつて戦局が著しく進展すると共に、そのやうな問題を再び考へねばならぬ時が來たかのやうに見える。

一時延期を傳へられた保健社會省の設置が現實の問題となつてきたのは、その一つの例である。實際、保健政策や社會政策の必要は事變と共に消失したわけではなく、寧ろ増大したといへるであらう。官吏の任用令や身分保障の改變が最近の問題になつてきたのも、他の一つの例である。この問題も既に事變前に盛んに論ぜられたものである。かくして一時忘れられたかの如き多くの問題がやがて、しかも新しい姿において、次々に現はれてくるであらう。

我々は支那事變が日本の發展にとつて有する大きな意義を認識しなければならぬ。それと同時に事變前にあのやうに喧しくいはれた問題が全く存在しなくなつたかのやうに考へる錯覺に陥つてはならぬ。事變と共に國內改革の必要は消滅したのではなく、却つてやがて倍加された力をもつて迫つてくるであらう。この現實に對して何人も安易な氣持でゐることを許されない。

思想の問題にしても、今日ではただ單に民族主義乃至國民主義と世界主義といつたやうな形で論争されてゐる。問題がそれだけのものではあれば解決はそんなに困難なことではない。しかし、例へばナチ主義は單なる國民主義でなくて「國民社會主義」といふ公稱をもつてゐる。問題は單に國民主義であるのではなく、また社會主義であり、更に國民主義と社會主義との結合である。國民主義と社會主義とは現實的に結び附くことができるか。「國民社會主義」といふのは現實にお

いては矛盾した概念ではないか。或ひはそれは一層多く國民主義的であるのか、一層本質的に社會主義的であるのか。これらに類する問題がやがて我が國においても眞劍に考へられねばならなくなるであらう。問題は存在しないのではない、忘れられてゐるのである。

(十一月二十三日)

### 眞實は尊い

新聞紙の傳へるところに依ると、ソヴェトの肅清工作は外交界にまで及んだやうである。一般に獨裁國については實情が知り難いのであるが、殊にソヴェトの眞相はなかなか分らない。従つて今度の肅清工作に對しても輕々しく判斷することは控へねばならぬが、それはソヴェトの外交が或る行詰りに出會ひ、轉換を必要とするに至つたことを示すと見られてゐる。

かやうな行詰りの原因についてもいろいろ云はれてゐる。例へば、駐支大使召還が報道されたとき、それは大使が支那の實力を誤測してゐたことが日本軍の迅速な進出によつて暴露したためであるといふ風にいはれた。この説にどれほど根據があるか分らないし、更にそれが駐支大使召

還の最大の理由であるかどうかは疑はしい。ただこの説は獨裁國においては眞實は傳へられ難いといふ一般的事情を豫想して成立つてゐる點で興味がある。

獨裁者の前では誰も彼の氣に入りさうなことで、彼の思想に都合の好ささうなことを云ひたがし、また云ふやうに強制されてゐる。獨裁國においては一定のイデオロギーが不動のものとして前提され、その見地からのみ物を見るのが許されてゐる。その觀察が事實に合はない場合においても、變化されるのは思想でなく、却つて事實に對して暴力が加へられる。これも事の眞偽は分らず、説の當否も確かでないが、今度の事變において支那が日本の實力の認識を誤つたのは日本に對するソヴェト的な認識の仕方が支那において普遍化してゐたためであると云ふ者がある。

しかし問題はソヴェトでもマルクス主義でもない。重要なのはかやうに眞實が傳へられず、眞實が知られないといふことは獨裁國の陥り易い缺點であるといふ一般的命題である。

ともかくソヴェト外交の行詰りや日本に對する支那の認識不足を右のやうに解釋しようと欲する者は、そこに獨裁國においては眞實を知るに困難であるといふ一般的前提があり、そして眞實を知ることとは何にもまして尊いといふ一般的結論があるといふことを考へねばならぬ。しかるに今日においてはかやうな一般的理論を引出して、特にこれを自分自身に當て嵌めて考へてみると

いふ合理的態度が多くの場合失はれてゐる。ジイドの『ソヴェト紀行』における批評はソヴェトに反省を與へなかつたが、それを利用するファッシストも同じ批評が或ひは遙かに多くの程度において自分自身に對しても妥當しはしないかを顧みることを全く忘れてゐるのである。自分はつねに例外だと考へる者に眞實は知られない。

(十一月三十日)

## 支那語の學修

支那語を中等學校の正科に入れよといふ意見が盛んになつてきた。今度北支から來朝した文化使節などもそれをいつてゐるやうである。たしかに支那語の普及は日支親善の一つの基礎として必要なことである。

由來支那人は語學に堪能であるらしい。西洋人は、日本人と支那人とを區別するのに、英語なりフランス語なりを流暢に話すかどうかを一つの標準としてゐる。そこで日本の留學生は、外國語が達者に話せるのは亡國の民の兆しであるなどと負け惜しみをいつたりするのである。日本の中等學校の正科として支那語を教へるよりも支那の國民に日本語を學んで貰つた方が近道である

かも知れない。尤も、それだからといつて、日本人が支那語を習ふ必要がなくなるわけではない。

わが國の中等學校では古くから漢文が正科として課せられてゐるのであるが、その漢文を支那音で教へるのが好いといふことは、すでに以前から若干の支那學者によつて唱へられてゐることであり、私も嘗て本欄においてそのことに觸れたことがある。今日、支那語の學修の必要が叫ばれるやうになつたとき、更めてそのことを考へてみる必要があらう。古典的な漢文と時文とは同じでないにしても、そのことは支那語の學修にも十分に役立つやうになし得ることである。

いつたい日本では昔から漢文が書かれ、漢詩が作られてきたのであるが、いざそれを讀む段になると、せつかく平仄を合せて作つた漢詩にしても支那音でなく、返り點を附けて日本流に讀んでゐる。これでは立派な漢文や漢詩を書くことを學ぶのも難しい筈である。またもし日本流に讀むのならば、最初から日本流に書き下してをればよかつたわけで、さうすれば土井晩翠流の新體詩など、明治を待たないでずっと早くから日本において發達してをり、今日詩といはれるものの日本文學史における地位も變つてゐたであらう。

日本人が漢文を書きながら日本流に讀んだといふところに、日本文化において占める支那文化の地位が窺はれるとともに、日本文化そのものの性質が察せられるやうである。惡くいへば、日

本人は我が強いので、そのために語學を學ぶことも下手であるといへるし、善くいへば、そこに日本人が亡國の民とはならない強さがあるともいへるであらう。

しかし今日では支那語が我々にとつて有する意義も變つてきた。そこにまた日本の文化そのものが變つてゆかねばならぬ理由も考へられるのである。

(十二月七日)

## 世界の秩序

南京陥落後において日本に差當り與へられた問題は、蔣介石政權を如何に取扱ふかといふことであつた。しかるにこの問題はそれだけで孤立したものでなく、全支那の、延いては東洋の全秩序を如何に構想するかといふことに關係してゐる。

支那事變は東洋に新しい秩序を齎さねばならぬであらう。それは單に暴支贖懲といふが如きことに盡きるものでなく、東洋の新しい秩序が元來の問題であつたのである。このことは今日ではもはや誰の眼にも明かである。かやうにして南京陥落は「東洋歴史の新しいページ」として迎へられた。戦争の目的は單に蔣介石政權を倒すといふが如きことに盡きるのでなく、東洋の新しい

秩序を建てることに存するであらう。

この新しい秩序については既に種々構想されてゐる。だがその際考へねばならぬことは、東洋の秩序の構想は世界の秩序の構想なしには不可能であるといふことである。

國際關係は現在日本にとつていよいよ微妙なものになつてゐるといはれる。我々はイギリスを恐れないであらうし、ソヴェトを恐れないであらう。しかしまた我々はイギリスを侮つてはならないであらうし、ソヴェトを侮つてはならないであらう。問題は世界の秩序を如何に構想するかといふことである。世界の秩序の構想なしにはイギリスに對することもできないであらうし、ソヴェトに對することもできないであらう。世界の秩序を構想することは東洋の秩序を構想するためにも必要である。

世界は新しい秩序に向つて動いてゐる。支那事變もその運動の一つの現はれであるといふことができる。この事變の主體たる日本は、東洋に新しい秩序を齎さうとする日本は、世界の新しい秩序について構想を有しなればならぬ。この新しい秩序の構想において持つ國と持たざる國といふが如き原理で果して十分であるか否か。

支那事變は東洋の片隅における事件に止まらないであらう。「東洋歴史の新しいページ」はや

がて「世界歴史の新しいページ」となり得る可能性をもつてゐる。現存する世界の秩序はいづれにしても崩壊すべき運命にある。しかし如何にしてか、また如何なる新しい秩序に向つてか。世界歴史の問題が單にはゆる大英帝國の没落といふが如きことに止まり得ないのは、東洋歴史の問題が單に蒋介石政權の没落といふが如きことに止まり得ないのと同様である。

(十二月二十一日)

## 北支文化の一礎石

外務省文化事業部では軍部の協力を得て、わが傳染病研究所にも比すべき一大衛生施設を明春早々北京に設置することに決定したやうである。まことに機宜を得た計畫であると思ふ。

支那といへば、南京蟲と一緒に、コレラ、ペスト、天然痘、發疹チフスなどの傳染病がすぐ聯想される有様であり、そのうへ今度の事變のためにかやうな疾病の危険が特に大きくなつてゐる場合、傳染病を中心とする研究機關が北支に設置されることは、甚だ喜ばしいことであるといはねばならぬ。

現在支那には醫者が少く、そしていまだに西洋醫學よりいはゆる漢方を信ずる者の方が多いのであるが、この際日本の力によつて近代醫學の價值が支那の大衆に理解されるやうになることは、支那の文化の發達のために望ましいことである。そしてそれと共に、はや西洋にも劣らないと稱せられる日本の醫學の力が支那において發揮されるに至ることは、日本文化のためにも好ましいことに相違ない。

更にこの衛生機關の設置は、大きく見れば、今後における北支文化工作に對して一般の方針を示唆すべきものであると思ふ。

即ち先づ、北支文化工作は支那の民衆に直接必要なものから、眞に彼等の利益のために行はねばならぬ。經濟上並びに政治上の問題に直接に關係を有しないやうなことが、少し永い目でみれば、却つて經濟上にも政治上にも大きな効果を及ぼすのである。目先の利益ばかりを考へるやうな態度は一擲してかかることが大切である。そしてこれは單に文化工作の上のことばかりでなく、實は、經濟上並びに政治上の問題についてもやはり同じことなのである。我が國の政策にはこの點において反省すべきものが多いのであつて、多少遠大な計畫を持ち出すと、單に大風呂敷を擴げるやうにいはれて排斥されてしまふ傾向があつたのである。

次に北支文化工作においては、今度計畫された衛生施設から考へられるやうに、日本的とか東洋的とか西洋的とかといったやうな名目に囚はれないで、現在の世界文化において最も價値のあり且つ支那の大衆の文化的向上にとつて最も必要なものを彼等の中へ持ち込むことに努力しなければならぬ。東洋流の漢方醫學では傳染病撲滅に對して効果を擧げることができないのである。大陸に發展しようといふ日本人には大陸的氣宇が必要である。

(十二月二十八日)

## 豫言の一年

「豫言の一年」といふのは、嘗てウエルズが、その一年間に書いたジャーナリスチックな論文を集めて出版した本に附けた名前である。この新年初めて書庫に入つた時ふとこの本が眼にとまり、私はそのうまい名前に興味を感じたのである。

豫言の一年！ 私はこの年、西紀一九三八年を、ジャーナリズムの立場において、かやうに呼ぶことができさうに思ふ。尤も、そのやうに呼ぶこと自體がすでに一つの豫言に屬してゐるのではあるが。

支那はどうなる？ ヨーロッパはどうなる？ 日英關係は？ そして日本の經濟は？ 等々に  
ついて、支那事變以來特に多くの豫言的議論がなされてきた。かやうな豫言的議論は今年におい  
て止まないのみでなく、恐らく更に甚だしく擴大するであらう。

今年が初めて豫言の年であるのではない、我々は既にかなり久しく豫言の時代にあるといつて  
好いであらう。數年前までは左翼の人々が資本主義の没落その他について様々な豫言をしてゐた。  
それに代つて最近ではまた右翼の人々が他の方向において種々の豫言に熱中してゐるのである。

豫言は現代の社會心理にふさはしく、その產物である。社會のうちに大きな變化、動搖、不安  
が存在した場合、つねに豫言は求められ、そして豫言は生れたからである。この時代において人  
は豫言的なもののほか喜ばない。人は科學では満足せず、科學ですらも豫言的になることを要求  
し、また豫言が科學に代るのである。

我々は豫言を全く無價値とは考へないであらう。すべての行動は何等か豫言的なものを必要と  
するといふことができる。豫言は神話となり、動搖と不安とのうちにある人心を統一して一つの  
方向に動かすことができるであらう。豫言は同様の社會心理から出てくる流言蜚語の如きものに  
比して或る積極性を有するだけ價値を有するともいひ得るのである。

しかしまた、この時代において豫言と科學とを區別し、科學の意義を忘れないことが肝要である。豫言は科學によつて統制されねばならず、科學はまた時には預言の解熱劑として用ひられねばならぬ。特に警戒を要することは、科學者が時代の風潮に感染して豫言者のになり、科學の名において豫言を行つてゐるといふことである。大切なことは反對に、かやうな豫言の時代においてこそ、科學者はいよいよ冷靜になり、批判的態度を持するといふことでなければならぬ。科學の政論化が科學者をいつのまにか豫言者に變へてゐるといふことに注意すべきであらう。

(一九三八年一月四日)

## 「黄禍」

西洋ではこの頃また黄禍といふことが云はれてゐるらしい。支那事變の發展と共に、日本は白人を東洋から驅逐する意志であるとか、南洋方面にまで野心を有するとか、その他さまざまの荒唐無稽なことが宣傳されて、黄禍論の復活となつたのである。

黄禍といふことは元來ひとつの神話である。この神話は、十三、四世紀における蒙古人の東歐

への侵入の記憶に淵源を有するのであるが、日清戦争における日本の勝利以後ヨーロッパで喧しく云はれるやうになつた。この神話の宣傳者として有名なのはドイツ皇帝ヴィルヘルム二世であつて、一八九五年彼の構想に成る「ヨーロッパ諸民族よ、汝等の最も神聖な財を防衛せよ」といふ繪によつて、黄禍といふことが一般に口にせられるやうになつた。

黄禍論は人種的な觀念、社會學者のいはゆる集合表象に訴へようとするものであるが、それは決して單に人種的な思想であるのではない。あのカイゼルの黄禍論にしても、實は、當時極東に向けられてゐたドイツの帝國主義的野心が日本の擡頭によつて脅かされたことから生じた幻想であつたといひ得るであらう。そして十九世紀末には黄禍論の張本人であつたドイツは、現在においては、ヒトラーの政治論も人種論を基礎としてゐるにも拘らず、日本と防共協定を結んでゐるのである。歴史を動かすものが單に人種といふが如きものでないことは、これによつても明かである。

いはゆる黄禍の内容も現實の政治情勢の變化に應じて變化してゐる。日清戦争や日露戦争の頃にはそれは日本の脅威を意味し、やがて一轉してそれは支那人や日本人のアングロサクソンの國及びその植民地への移住に對する排斥の聲となり、更に一轉してそれは白人の支配に對するすべ

ての有色人種の民族解放運動に向けられるに至り、そして今日ではまた再轉して日本の脅威を意味することになったのである。

黄禍論者にとつて最も恐しいことは、何といつても日本と支那との提携である筈である。ところが現在においては、支那が歐米に向つて日本の脅威を宣傳し、その黄禍論に油を注いでゐる状態であるといふことに注意しなければならぬ。またすべての黄禍論は黄色人種と白色人種との文明の相違を誇張するのであるが、これは歐米人の東洋文化についての理解の缺乏に基くことが多いであらう。無益な黄禍論を無くするには、世界史に關するいはゆるヨーロッパ主義の偏見を除くと共に、日本の意圖する日支提携の眞意を支那はもとより全世界に對して率直公明に理解させることが必要である。

(二月十三日)

## 長期戦の覺悟

いよいよ長期戦の覺悟を固めねばならぬ場合になつた。それはもちろん新しいことではなく、事變の當初からすでに豫想されてゐたことである。今更あらためて悲壯な氣持になることはない。

この悲壯がるといふことはわが國民の陥りやすい缺點であつて、長期戰の覺悟にとつては寧ろ無益であらう。何事につけても我々は悲壯がり過ぎるといふことがありはしないか。徒らに悲壯がることなく、却つて常に心のうちに餘裕を持つてゐてこそ長期戰に堪へ得るのである。

長期戰の覺悟として必要なのは強靱性である。長期戰となれば勢ひ局面は複雑化し、思ひ掛けないことの起つてくる可能性も殖えるわけであるが、これに處してゆくには強靱な精神が必要である。強いばかりではいけない、しなやかさがなければならぬ。一本調子といふだけでは足りない、打つ手をいくつも用意しておくことが大事である。

長期戰となるに従つて、文化といふものが戰爭にとつて如何に重要な意義をもつてゐるかが分つてくるであらう。あの歐洲大戰の時、いつもは柔弱な文化人として嘲笑されてゐたフランス人が如何に強靱に戰つたかを我々は想ひ起すであらう。文化人は弱いといはれる。確かにそのやうなところがあるであらう。文は決して剛直そのものではないからである。しかし文化は人間の心に彈力を與へ、しなやかにする。しなやかさをもたないやうな文化は存しない。そして長期戰にはこのしなやかさが大切である。野蠻人は長期戰には向かないのである。今度の事變は、或る意味では日本人がその素質、傳統、教養において如何なる程度の文化人であるかが試煉されること

であるといへるであらう。戦争と文化との關係は、單に軍需科學や軍需工業の方面においてのみ考へらるべきでなく、更に深く人間的文化、人間の身に附いた文化の方面においても考へられなければならぬ。

國民精神總動員にしても、一本調子であることは避くべきであらう。國民を緊張させることは確かに大切であるが、同時に國民の心からしなやかさやゆとりを奪ひ去つてしまふやうなことになるてはならない。餘りに一本調子であつては大局を見誤るといふことも生ずる。人間は久しく單調に堪へ得るものでない。また人間の心は何處を押しても鳴るのである。ただ一つの所ばかりを押してゐるのでは、全體としては却つて緊張してゐないことになるであらう。

(二月十八日)

## 官吏の再教育

官吏制度の改正とともに官吏再教育の必要が主張されてゐる。社會の進歩の線に沿うて官吏を再教育しなければならぬといふ説はもちろん正しい。ただその際、再教育の意味をしつかり考へ

てかからないと、その手段方法を誤り、所期の目的は達せられない。

教育といふことは人間の單に一定の時期のこと、何か特別のことであるのではない。我々の生活のすべてが我々にとつて教育の意味をもつことができ、立派な人物はそのことをつねに實踐してゐるのである。自分の仕事に責任を感じ、これを善くやつてゆかうとする意志のある者は、そのために必要な調査、研究、讀書等を怠らない筈である。従つて逆に考へると、官吏再教育の必要が生じたのは、この頃議會で論ぜられてゐるやうに官吏が自分の仕事に對して責任を重んじない傾向があるといふことに關係してゐる。ただ年功で昇進し得るので、失敗を避けることだけを心掛けて積極的に仕事をしようとはしない氣風が存在するために、勉強などする者が少くなつてゐることから、官吏再教育の必要が唱へられるやうになつたのである。

教育といふことはおよそ獨善とは反對のことである。獨善的であつては、他人から教育されることも、他人を教育することもできない。従つてまた逆にいへば、官吏の再教育は既に喧しくいはれてゐるやうな官僚獨善の弊が存在するところから必要になつてきたことである。

かくして官吏の無責任とか獨善とかいわれるものに官吏再教育の必要の生じた原因があるとすれば、先づこれらの原因を除去することが大切であつて、さもなければ再教育を行ふことも無

意味であり、またもしこれらの原因が除去されるならば、形式的に再教育を行ふ必要もなくなるであらう。官吏の再教育そのものも現在では官僚的形式的になる惧れがあり、さうなつては何等効果が無い。

再教育のために大學の講義を官吏に強制的に聽かせるといふやうなことは、すでにその形式化の第一歩ではなからうか。高等學校、専門學校等の教授の再教育のための内地留學と稱せられるものが果して實績を擧げてゐるかどうかを考へてみるが好い。再教育が實は慰勞の一種になつてしまふ危險もあるのである。學校だけが教育の場所であるかのやうに考へることがすでに形式主義である。役所に豊富な文庫でも備へて、官吏に讀書の習慣を養はせることなども好からう。形式に流れない教育方法の缺乏が今日の日本の社會において一般に痛感せられるのである。

(二月六日)

## 革新と實驗

どのやうな革新も實驗の意味をもつてゐる。しかし社會における實驗は自然科學における實驗

とは性質が違ふことに注意しなければならぬ。

自然科學者は、自分の研究室で、機械を使つて實驗する。彼の實驗が失敗したとしても、他の人間に迷惑を及ぼすことは無く、或ひは極めて少く、また幾度でも彼は同様の實驗を繰返すことができる。實驗が成功すれば、彼の抱いてゐた理論は證明を得て、廣汎な自然現象に對しつねに妥當するものとして示される。理論は實驗において檢證されることを要求してゐる。

しかるに社會現象については、これと同じ仕方で實驗を行ふことは不可能である。何等かの革新的な理論は未だ實驗を経てゐない理論であり、革新そのものがこの場合その實驗である。革新的な理論の正しさは革新の實行によつて證明されるのほかないと云ふことができる。けれどももしこの實驗が失敗すれば、それによつて多數の人間が迷惑を蒙ることになる。その上この實驗は繰返すことができない。なぜなら、一度實驗が失敗すれば、その失敗のために以前とは異なる新しい状態が作り出されることになるから。すべてが一回的であつて同じことが繰返されない歴史においては、實驗はつねに冒険である。

あらゆることが證明されたのち初めて革新に取り掛かるといふことはできない。革新的なものとは不確實なところがあるから革新的なのである。今世紀において世界の諸國で行はれた革命は

まことに大きな實驗であるが、その結果を確實に判斷し得るまでには至つてゐないであらう。我々はそれから學ばねばならぬにしても、それを直ちに我々の國で模倣しようといふことは一つの實驗以上に出ない。しかも歴史においては實驗は繰返され得ないものである故に、この實驗自身にも多くの創意を要するのである。公式主義的模倣は許されない。

社會における實驗は冒險であることを免れないとすれば、この實驗には勇氣を要することは勿論であるが、その冒險的などころを知性の働きによつて出来るだけ少くするといふ用意もまた大切である。この實驗においては多數の人間が賭けられてゐるのであるから。かやうな實驗家の最大の道徳は責任を重んずるといふことである。すべての政治家にとつて思慮は責任感から出てくる。しかも彼の實驗は大衆の協力がなければ決して成功しないのであるから、自分の實驗しようといふ理論、つまり革新の指導原理を積極的に掲げて大衆の支持を得るに努めることが要求されてゐる。

(二月八日)

## 理想の再生

先般行はれた警視廳のいはゆる不良學生狩に對して最も多く拍手を送つたのは學生を子供に持つ親たちであらう。私は彼等の心理に同情することができる。しかしこの機會に彼等にもまた反省すべきものがあることを忘れてはならぬ。

その子弟を學校に出す家庭に教育の理想といふものがあるであらうか。あの學生の赤化が頻りに傳へられた時以來、親たちは自分の子供に對する理想的な要求を全く棄ててしまつたやうに見える。赤化さへしなければ、たいていのことは見逃しても好いといった風が彼等の氣持に浸潤したのである。子供が讀書や研究に熱心であればむしろ赤化しはしないかといふ危懼を感じた。赤化の前に家庭は自信を無くし、理想を失つてしまつたのである。子供が偉くなるといふやうな漠然とした理想さへ失はれ、ただ「間違ひ」のないことのみが願はれた。赤化が殆ど見られなくなつた今日においても、家庭は同様に理想のない、自信のない状態を續けてをり、そしてそれがおのづから現代學生の心理に影響してゐるのである。

學校もまた同じである。頻々たる赤化事件以後、學校もまた自信を無くし、理想を失つてしまつた。學校においてもただ「無難な」學生を作ることのみにのみ力が注がれた。今日の學校のうちに果して理想が再生したかどうか、私は知らない。それは或ひは理想を説いてゐるのであらう。し

かし若し學生が、そのやうな學校も實踐的本質においては營利主義のものであることを承知してゐたら、どうであらう。今日の學生には物の裏を考へてみないやうな單純な人間は甚だ稀である。

家庭も學校もすでに十年以上も「無難な」學生を作ることになつてきたのであるが、その無難といふものが如何なるものであつたかが、現在「非常時」にあたつて明瞭にならざるを得なくなつたのである。それが今度のいはゆる不良學生狩の大きな教訓である。數千人に達するといふ彼等の多くは決して不良でなく、むしろ無難な青年であらう。私は彼等が身を滅してしまつたといふことをあまり聞かない。彼等は享樂の追求においても理想主義者でなくて現實主義者である。しかし無難な學生が非常時にふさはしい學生でないといふ一點については、私は當局の見解に賛成する。

私は現代學生の身についた現實主義を一概に排斥するものではない。しかし今日最も必要なことは、その現實主義の中からの理想の再生である。學生の氣風の革新にとつて根本的な問題は、享樂機關の驅逐でも取締の強化でもない。現實主義の極から理想が再生して來ることである。しかもこれは決して單に學生のみのことではない。

(二月二十二日)

## 宗派運動と全一運動

支那における文化工作に参加せよといふ主張と關聯して、このごろ佛教界においては全一運動といふものが提唱されてゐる。それは、宗派間の分離乃至相剋を克服して全教團が一體となつて活動せよといふ説である。全一運動と命名したのは誰であるにせよ、それが時代の思潮の反映であることは明瞭である。全一運動は今日、政黨を始め、到る處において叫ばれてゐる。全一運動はまさに時代のスローガンである。

事變前の佛教界においては反對に、宗派運動が發展しつつあるやうに見えた。法然とか、道元とか、傳教とか、各宗派の教祖讃仰が唱道され、これを中心として各教團が獨自の宗派的な運動を行ふといふ風が濃厚であつた。それは明治以後のいはゆる通佛教の思想に對する反動を意味した。しかるに事變の發展と共にそれに對する更に反動として全一運動が提唱されるやうになつたのである。この全一運動の指導精神は如何なるものであるか。それは再びあの通佛教の思想であることができないであらう。通佛教の思想は今日においてはもはや過去のものである。それは、

同じ時代に唱へられた萬教歸一の思想と同様、その時代の啓蒙思想、従つて合理主義、自由主義を基礎としてゐる。我々はもはや單純にかやうな思想に還へることはできぬ。教祖中心主義の宗派運動はかやうな思想に對立するものとして十分に意義を有したのである。今日全一運動が必要であるとすれば、その指導精神となるべき新しい統一的な思想が要求されてゐる。その思想は佛教界に果して存在するのであらうか。

全一運動の根據は政治的にあると云はれるであらう。その通りであるにしても、政治の理論は直ちに宗教の理論となることはできぬ。政治の後から蹤いてゆくだけでは文化の意義はない。宗教は宗教自身の思想を有しなければならぬ。すべての宗派宗團を一つに結合せしめ得る宗教思想とは如何なるものであるか。それを政治から借りてくるにしても、政治上の全一運動の思想が如何にして佛教の思想と合致し得るかについて吟味を要するであらう。

いづれにしても全一運動が展開されるためには教團組織の根本的な改革が必要である。この改革に對する用意は十分であるのか。國內における教團の改革、國民の不信心には全く眼を閉ぢて、支那においてのみ全一運動を行ひ、大衆の獲得に成功し得ると信ずることは不可能である。支那における文化工作を思想の貧困のために蹉跌せしめてはならぬ。

(三月五日)

## 政治と道徳

ナチスのヴァイン進軍の報を聞いたとき、私の記憶には、十年あまり前ミュンヘンからヴァインを訪ねた時のこの都の光景が浮んできた。その後オーストリアにはいろいろな政治的變化があった。しかし私のいつも想ひ起したのは、あの、まののびたドイツ語を話し、たるんだ表情をした、すべてに悠長なものごしのヴァインの街の人間である。

ドイツからこの都會に入つた者は、特に著しく、ここにはあらゆる精神的緊張が缺けてゐることを感ぜねばならなかつたであらう。精神のこの弛緩は無道徳を示してゐた。それは不道徳と同じでなく、頽廢と同じでない頽廢である。かやうな無道徳なヴァインを見たとき、その頃すでに存在した獨逸合邦の政治的思想はともかく、オーストリアが到底このまま獨立してゆくことは不可能であると感じねばならなかつた。

外國からの旅行者にとつて住み心地の好いのは、ヨーロッパではパリとヴァインであるといふことは、殆ど定評になつてゐるやうだ。もし東洋でそのやうな土地を挙げるとすれば、私はまづ

北京を考へることができようと思ふ。もちろん住み心地の好いといふ意味は、これら三都會においてそれぞれ異つてゐる。ヴィーンの住み心地の好さは何人からもその緊張を取り去る無道德に依るといへたであらう。

オーストリアにおける政治的變化がヴィーンの人間にどのような道德を新たに與へたか、私は知らない。ナチスはもちろんあの無道德を共產主義の影響に歸してゐるのであるが、しかしそれは單に政治的原因からのみ考へられることではない。むしろ逆に、風俗が、道德が、政治を決定する方面がある。我々は今ナチスのヴィーン進軍を耳にして、そのことの當否はどうであるにせよ、國民の人間の道德の狀態が一國の運命に重大な關係を有することを考へざるを得ない。

ナチス政權下においてあの道德的頹廢は克服されるであらうか。いづれにしても政治が人間の道德を再建し得るためには政治そのものが道德的でなければならぬ。現代の政治的行動主義の道德性について深く考へてみるべき場合である。

東洋においては古來、政治が道德の名において行はれるといふ傳統がある。これは美しい傳統であるが、それだけにまた、道德が失はれるとき政治も同時に失はれることになる。現在、我が國の政治の道德は如何なるものであらうか。國民の道德的現實は如何なる狀態にあるであらうか。

國民のモラルの現實に的確な理解をもつて結び附いた政治の必要が考へられるのである。

(三月十五日)

## 外國理解の困難

盟邦イタリアからの國民使節の來朝は我が國の朝野を擧げて歡迎するところである。我々は光榮ある歴史を有するイタリアに對してここに更めて敬意を表したいと思ふ。

これは日伊兩國の相互理解を深めるうへに絶好の機會である。支那事變に關し日本の立場を歐米人に理解させるために我が國はすでに國民使節たちを送つた。その多くはこのごろ追々歸朝したやうである。それらの國民使節派遣の効果について我々國民は遺憾ながらなほ審かにしないのであるが、その成績がどうであつたにせよ、今度のイタリア使節の來朝はそのことに幾倍して日本をほんとに理解して貰ふに好都合なことではなければならぬ。日本の政治的立場を説明するために使節を出すことも必要であらうが、外國人をして我々の文化に親しく接觸させることは親善の増進にとつて更に有意義なことである。相互の親善は公式的なことよりも日常的なことから進め

られることが多いといふことに注意しなければならぬ。

それにしても外國の文化を理解することは決して容易なことでない。イタリア使節一行のうちには「里別田稗太郎」といふ漢字の名を有するピエトロ・リヴェッタ伯の如き日本通の人もあるのであるが、そのリヴェッタ伯は、富士といふ語をH U Z I なる日本式ローマ字書きにしたのを批評して、それは以前のやうにF U J I と綴るべきであつて、この日本式綴り方には感心できないと話したとのことである。これは車中の漫談に過ぎないにしても、如何に外國を理解することが困難であるかを示してゐて、甚だ教訓的である。

日本語のローマ字綴り方については久しく種々の意見があつたのを、政府で統一して今の日本式ローマ字に定めたのであつて、これは日本が日本語独自の見地において作つたものである。外國人の立場からいへば、彼等の生國の異なるに従つて種々に發音されるであらうが、その凡てに一致するやうな綴り方が存在しないとすれば、日本語独自の立場を探るのが當然であらう。盟邦イタリアに適した綴り方をして、盟邦ドイツには適しないのである。我々はイタリア使節にこの日本の立場をよく理解して貰はねばならぬ。

ローマ字のことは一瑣事であるかも知れないが、我が國においてもリヴェッタ伯の批評に類す

る立場から外國の文化を批評し排撃して、ひとり得意になつてゐる場合が尠くないのではないか。深く省るべきことである。

(三月二十二日)

## 叱られる知識階級

知識階級が叱られてゐる。彼等はいつまでも「進歩的」といふやうな觀念にとらはれて現實を直視し得ないといつて叱られてゐる。知識階級を叱ることが一種の流行にさへなりつつある。

尤も、知識階級が叱られるのは今に始まらない。嘗ての左翼時代にも彼等を叱ることが流行した。今日再び彼等はいろいろな言葉で叱られてゐるのであるが、その意味は詮ずるところ、以前に「日和見的」といつて叱られたのと同じであると思ふ。

この時代において知識階級がかやうにいつも叱られてゐるとすれば、日和見的といふことは何かインテリゲンチヤに普通の特質であるであらうか。實際、インテリゲンチヤは行動家、とりわけ政治的行動家の眼には日和見的と映ずるやうなところを持つてゐる。知識階級は今日においても現實を見てをり、思想的にも考へてゐると私は信ずる。しかし彼等の知性が物を客觀的に、從

つて距離において見るものである限り、行動家からは何か日和見的と考へられるやうなものがあ  
り、また彼等も單なる行動のプログラムのやうなものでは決して思想的に満足させられないであ  
らう。

インテリゲンチヤを叱ることを好む者は誰よりもインテリゲンチヤ自身である。最も行動的な  
人は今日却つて彼等を賞めてゐる。出征した知識階級が如何に有能に戦つてゐるかは、その部隊  
長らによつて證言されてゐるではないか。日和見的に見えるインテリゲンチヤにしても、いざと  
なれば勇敢に行動し得るのである。

知識階級が日和見的であるといふことはもちろん單なる日和見主義であつてはならぬであら  
う。それは寧ろ物を距離において見るといふ知性の本質から來るものであり、従つて非常時にも  
「平時の如く」といふ精神となつて現はるべきものである。しかし今日こそ知識階級をも満足させ、  
彼等をも熱情的に引摺つてゆくやうな思想が生れなければならない。單に行動のプログラム即ち  
いはゆる國策の平面において知識階級を叱るばかりでなく、それを包んで超えたやうな眞の思想  
を作り出さなければならぬ。それ故に知性が十九世紀的な批評的立場から新世紀的な創造的立場  
に移ることが必要であり、この知性そのものの轉換こそ、いはゆる主義の轉向よりも更に根本的

に重要なことである。今日やたらに知識階級を叱つてゐる者に果してかやうな知性そのものの轉換が行はれてゐるであらうか。

(三月二十九日)

## 文化政策の水準

嘗て床次内相の時代であつたかに、國民精神を作興するについて浪花節の獎勵を考へたことがある。當時の輿論はこれを時代錯誤として笑つたやうに記憶してゐる。私は必ずしも浪花節の獎勵に反對するものではない。しかしそれが笑はれたのは、政府がその文化政策において國民の文化的水準を餘りに低く見たことに依るであらう。

文化政策にとつて重要なことは國民の文化的水準を的確に秤量するといふことである。教育する者は教育される者の知識の程度を正しく認識して掛らなければならぬ。しかるに我が國の文化政策においてつねに感ぜられる缺點は、それが大衆の文化的水準を餘りに低く見てゐるといふことではなからうか。

この認識不足のために文化を向上させる筈の文化政策が却つて文化を低下させることになつた

り、主唱者の努力にも拘らず一向効果が擧がらぬことになつたりしてゐる。しかもこの認識不足は、我が國においてはいはば「自然的な惡」である。我が國のやうに近代的文化が急速に發達した處では、年齢の差は教養の差を性質的に區劃し、老人が青年の文化的雰圍氣を理解するといふことは、彼が特別の文化人でない限り、まづ不可能に屬してゐる。文化上の革新には特に青年の力が與らねばならぬ所以である。

例へば、青年は音樂において大抵洋樂を好むやうに、映畫においても大抵洋畫ファンである。この頃彼等の憂鬱の一つは、輸入禁止によつて洋畫が追々見られなくなつてきたといふことであらう。私はあまり映畫を觀ないし、格別の洋畫ファンでもないが、映畫を單に娛樂と考へることには反對であり、洋畫の輸入は洋書の輸入と同じやうに取扱はれても好かりさうに思ふ。洋畫の輸入禁止が邦畫の發達にとつて好機會になるといふことも考へられ、それはまた最も望ましいことに相違ないが、それならそれで補助金その他の方法によつて洋畫ファンを惹ぎつけるやうな優秀な邦畫の製作をもつと積極的に奨勵しては如何であらう。これなど文化政策の水準を少し高いところに置けば、その必要が早速考へられることである。

國民の文化的水準を低く考へ過ぎるといふことは上からの統制の陥り易い缺點である。國民精

神總動員に關する從來の運動の如きも、國民の智的水準を低く見過ぎてゐるために効果が乏しかつたといふことがないであらうか。

(四月十二日)

## 「政界」の解消

輿論は新黨を待望してゐる。新黨の誕生が強力な革新の前提であるといはれてゐる。

かやうな新黨は勿論その名に値する實を具へてゐなければならぬ。既成政黨の變形に過ぎないものに新黨の名を藉すことは誰も躊躇するであらう。從來の新黨運動に附き物であつた策士の策動の如きものはこの際許容されないであらう。新黨の組織はもはや單にいはゆる「政界」内部の出來事であり得ない。

嘗て文壇の解消が唱へられ、今日それは殆ど常識になつてゐる。作家の文學活動は文壇のみを對象としてはならぬと一般に考へられるやうになつた。これは玄人に對する素人大衆の發言權の獲得を意味してゐる。

ちやうどそのやうに政界と稱する在來の玄人政治家の集團も解消されねばならぬし、また解

消さるべき運命にある。國民はもはや玄人臭い政治家に多くの關心も期待も持つてゐない。近衛公に對する國民の間の人氣の如きも、公の素人らしい好きに依るところがあると云へる。

いはゆる政黨解消運動にしても、無政黨運動であるのでなく、むしろ政界解消運動であるべきである。政治上の取引の場所と見られるやうな政界は解消され、すべての政治活動が素人である國民大衆の中に現はれなければならぬ。新黨運動は政黨運動としてよりも國民運動として出立し展開されねばならぬといふ今日一部の眞面目な主張にも理由があるであらう。政黨は本來素人の政治意識と結び附いたものであつたが、政權を取ることが唯一の關心事となることによつて、大衆とは離れた「政界」を形成するに至つたのである。

種々の形態、種々の方向における現代の獨裁政治は、政治家とは指導者であるといふ重要な觀念を普及させた。しかし政治の指導性の名は濫用され易い。指導者とは政界を目標とする者でなく、國民の中へ降りて來てこれを率ゐる者のことである。また彼は單に號令する者でなく寧ろ教育家でなければならぬ。しかも眞の教育家は彼が教育する者からまた教育されることを知つてゐるやうに、眞の指導者は素人から指導されないまでも示唆されることによつて彼等を眞に指導することを知つてゐる。

あらゆる方面において革新は素人を背景として出てくるものであり、また素人を力として行はれるものである。スコラ學派に對する新科學、アカデミズムに對する新藝術、すべてさうであつた。革新を妨げる者があるとすれば玄人であるのがつねである。

（四月十九日）

## 合理性と積極性

消費節約や貯蓄獎勵、國民精神總動員もいよいよ心のみでなく物を對象とするやうになつた。これは當然のことである。しかるに物が重要な問題になつて來ると共に、從來この動員の指導思想が陥りがちであつた單なる精神主義に對しても反省を加へねばならなくなつて來る。また心は非合理的なものによつて動かすことができるとしても、物は極めて合理的であるのに注意することが肝要である。

江戸つ子は宵越しの金を使はないといふやうに、日本人には金錢の問題に關して合理的であることを喜ばない氣風が残つてゐる。金錢について合理的であることは唯物主義であるかのやうに顰蹙される。同じ都會人でも、贅澤な消費の中心の如く思はれてゐるパリの人間、殊にその婦人

は貯蓄心をもつて有名である。消費節約や貯蓄を行ふためには合理的精神を養ふことが大切である。しかるに心の問題については非合理主義を鼓吹しながら物の問題についてのみ合理的にさせようといふのは不可能を求めるに近いであらう。

消費節約とか貯蓄とかといふ言葉は消極的なことに思はれるのが普通である。大いに稼いで大いに使ふといふのが積極的であらう。日本人は生活に對して消極的であるといはれてゐるが、それが我々の永續的な國民性であるかどうかは疑問であり、殊に大陸に發展しようといふのなら何事にも大いに積極的でなければならぬ筈である。しかるに消費節約や貯蓄といふやうなものに積極性を持たせるのは生活の合理化にほかならない。

今日の如く消費節約や貯蓄の必要が起らなかつたとしても、我々の生活には合理化さるべきものが尠くないと思ふ。問題はパーマネントの禁止といふやうなことにあるのではない。現代の風俗の全體、生活の全體が一定の理想に基いて組織的に合理化されることが大切なのであつて、それには經濟學者の頭のみでなく、藝術家の感覺や哲學者の智慧が必要である。消費節約や貯蓄奨励はこのやうに積極的に一定の文化理念をもつた新生活運動或ひは新文化運動として指導されねばならない。今日の政治家や官僚に果してこの用意があるか。

すべて消極的なことは非合理的になり易い。言論統制の如きも、ただ彈壓を事とするやうな消極的手段ではなく非合理的になる。合理的になることによつて消極から積極へ轉ずることがあらゆる方面において要求されてゐる。

(四月二十六日)

## 米國への關心

パネー號事件も圓滿に解決し、當時我が國民の送つた慰問金がアメリカ大使の發意によつて日米親善の史蹟保存等のために使はれることになつた。事變の中の微笑ましいエピソードである。パネー號事件の際における同情の發露は日米親善に對する我が國民の熱意を示すものである。また先般アメリカの或るエージェントを通じて日本の現代作家の作品が彼の地に紹介されるやうになつたことも悦ばしい。

かやうな出來事は別にして、この頃我が國のインテリゲンチヤの間においてアメリカに對する關心が本格的に高まつてくるのが認められるやうである。これは注目するに足る現象である。

黒船の渡來このかた日本とアメリカとは密接な關係をつづけてきた。我が國民の實生活はヨ―

ロッパのいづれの國からよりもアメリカから多く影響を受けてゐる。しかるに文化の方面ではこれまで日本のインテリゲンチヤはアメリカをとかく輕んずる傾向があつた。このアメリカニズム嫌惡は我が國に残存してゐる封建的なものに基くことが多かつたであらう。

世界の新しい文化を期待させるものとして一時ソヴェトとアメリカとを擧げることが常識になつた時においても、インテリゲンチヤの關心はソヴェトに集中されて、アメリカはそれほど深く顧みられなかつた。今日、日本の世界的使命について語られるやうになつたが、世界的大國民であらうと欲する者は世界から學ぶことを知らねばならぬ。

我々がアメリカから學ぶべきものは多いであらう。そのプラグマチズムの哲學は廿世紀の思想として大きな意義をもつてゐる。アメリカニズムを輕薄だといふ者は、ピューリタニズムの流をひく理想主義がアメリカに存在することを忘れてゐる。とりわけ最近ヨーロッパから追放された世界的學者の多くがアメリカに集つてゐるが、彼等がこの新しい環境において何を作り出すかを我々は注目せねばならぬであらう。

日本のインテリゲンチヤのアメリカに對する關心が増してきたことは我々の文化の新世代を語るものである。それは映畫や野球に表徴される文化が今や全く日本人の身についてきたことを意

味してゐるが、それと同時にアメリカに對する關心が精神的に本格化してきたところに重要な意義がある。

論壇の巨人田中王堂氏が逝いてから六星霜、この五月九日は七回忌に當つてゐる。氏はアメリカ思想の最も好い理解者であつた。最近文化人のアメリカに對する關心が次第に高まるにつれて氏の業績の新しさが思はれるのである。

(五月三日)

## 行動の哲學

先日或る人が訪ねて來て、日本精神について、これがオーソドックス（正統）であるといふやうな本を知らないかと問はれて、實は困つてしまつたのである。さやうなものはまだ出てゐないのではないかと思ふ。

客が歸つてから私は考へた。日本精神については近年無數に書かれてゐる。日本固有のものは何かといふことについても繰返し論じられてきた。ただその多くは日本精神とか日本の特殊性とかについて解釋を與へてゐるのみである。しかるに解釋の哲學と行動の哲學とは異らねばならぬ。

「哲學者は世界をただ種々に解釋してきただけだ、世界を變化することが問題であらうに」といふ言葉の意味を、この場合深く考へてみる必要がある。

解釋の哲學は過去から作られる。ひとは過去を考察することによつて日本的なものに種々の解釋を與へてゐる。しかしかやうな解釋の哲學が行動の哲學と異なることは、日本の特殊性についてあれほど頻りに語られてゐるにも拘らず、今日現實に行動されてゐることは、例へばナチス・ドイツの模倣に過ぎないものが極めて多いではないかといふ批評が絶えず出てゐるところからも知られるであらう。

最近我々がしばしば耳にするやうになつたのは、「革新」といふ言葉が濫用されてゐるといふ國民の聲である。何でもただ革新とさへいへば好いやうに考へられ、それがどのやうな目標に向つて、誰のために行はれようとしてゐるのか明かでない。革新といふ美名のもとに一部の人間、一部の階級の利益が求められるといふやうなことがあつてはならない。かやうに革新の意味が曖昧になり、革新の基準が必要になつてゐるやうに思はれるのも、行動の哲學が明瞭でないからである。

行動の哲學はつねに現在から出發する。過去の解釋はこれにとつて一つの材料となるに過ぎぬ。

日本精神といつてもこの場合、現在この國に生活してゐる國民大衆が現實に持つてゐる意識がそれなのである。彼等の感覺や意慾を一つの理想に向つて組織することが大切である。例へば現代文學について殆ど知らない國文學者が、今日の青年の心理について何も理解しない老人が、日本精神を説いたところで、それが行動の哲學となり得るであらうか。行動の哲學とは大衆によつて納得され、情熱をもつて愛される思想である。

今日、日本は極めて重大な行動に向つて踏み出してゐる。このとき解釋の哲學のみはびこつて行動の哲學がないとすれば、危いといはねばならぬ。

(五月十日)

### 科學思想の普及

メートル法の普及實行はかねて懸案となつてゐたのであるが、戰時體制に對應して規格を早急に統一する必要から、今回國家總動員法の一部施行を機として陸海軍の要望に依り軍需品及び軍需施設に關し猶豫期間を繰上げてメートル法が強制的に斷行されることになつた。

顧みれば、メートル法論議もすでに久しい。その實行に反對する意見は絶えなかつたのである

が、支那事變の勃發を機として、時代の思想の風潮に乗つて、それが俄然再び擡頭し、尺貫法に戻せとか、メートル法と尺貫法とを併用せよとかといふ議論が事新たに行はれるやうになり、或る地方においては折角これまで兒童にメートル法を教へ込んできた小學校教員たちを混亂させつつあつたとのことである。

しかし時代は動く。保守と反動とを踏みにじつて時代は動いてゆく。事變はメートル法の普及實行を急激に促進したのである。これは一つの例であり、同じやうな事實はあらゆる方面においていくらかも觀察することができらうであらう。事實は思想に先んずる。思想が事實に遅れてはならない。

航研機「世紀の翼」は世界記録を破つて堂々たる成功を収めた。これは我が全日本の感激である。科學日本の力について國民は新たな認識と自信とを得たであらう。これこそ國民精神總動員に資し得るまことに適切な快舉であつたといへるであらう。これは從來行はれてきた種々のイデオロギー的企てに數倍、否な數百倍、數千倍する効果をもつてゐる。一飛行機のうちに發揮されたのはまさに日本精神であり、誰がそれを日本精神でないと云ひ得るであらう。

時代は動く。航研機の成功のうちに我々は新しい日本精神、を、或ひは日本精神の新しい表現

を見る。この日本精神の新しい形式は非常時にとつて無關係なのでなく、反對に、斷じて必要なものであり、東洋平和の基礎ともなり得るものである。日本精神は「世紀の翼」に乘らなければならない。

この際政府は國民精神總動員において科學思想の普及に努力しなければならぬと思ふ。物資の節約などといつても、科學思想の普及なくしてはその徹底的效果を期待し得ないのである。あの歐洲大戰のときドイツがあれほどまで戦ひ得たのは國民の間に科學思想が普及してゐた爲めであることは、ここに更めて云ふまでもない。

(五月十七日)

## 遅れる政治

徐州陥落によつて日本の軍事行動は一段と進んだ。これに對して日本の政治は、内政において、外交において、遅れてゐるといふことがありはしないであらうか。政治が軍事行動に遅れるやうなことがあつてはならない。

有能な人間は無難な人間ではない、譽められもするが誹られもするのが常である。そこで無難

な人間、どこからも非難の出ないやうな人間を探らうとすれば、平凡な、積極的に悪いところもない代り積極的に善いところもない人間が選ばれることになる。それは官界、教育界等、各方面において見られる一般的な現象である。この頃「大正型」といふ言葉が使はれてゐるが、大正型とは私に言はせるとかやうに無難なことばかり求める傾向のことである。

政治も孤立した事實ではない。今日の政治のつまらなさも、ただ無難なことを求めるのに起因することが多いやうである。そしてこの傾向は今日いはゆる國內相剋を避ける必要からさらに助長されてゐる。しかも現在の如く極端に反動的な傾向の存在する場合、これに引摺られて政治は益々つまらなくならざるを得ない。例へば最近北支へ派遣された文化使節は、一新聞の評論子をして舊い文化國へ送るにふさはしい舊い顔觸れだと皮肉らしめたやうなものであるが、それも無難を求めた結果であらう。支那の知識階級は日本の文化の現状について日本人と同じやうに詳しく、恐らく日本の一部官僚諸氏よりも一層詳しく知つてゐるのだ。この事實を忘れないことが對支文化工作のすべての場合に必要である。

無用の國內相剋が避けられねばならぬことは云ふまでもない。しかしあらゆる場合に摩擦を避けようとすることは何等の革新も行はないことである。今日、一方において無難を求める大正型

政治が依然として濃厚であると共に、他方において東洋型大言壯語の復興が見られるのも困つたものである。實際、現代のやうな「政治的」時代にあつてはとかく大言壯語が喜ばれるのであるが、しかしかやうな「東洋的」大言壯語によつて日本の大衆はもはや踊らないであらう。大言壯語は決して昭和型ではあり得ない。今の日本が要求してゐるのは眞の勇氣を有し責任感を有する政治家である。

國內相剋は近代的な方法をもつて止揚されねばならぬ。即ちそれは輿論の形成に依らねばならぬ。そしてこれがまた革新の基礎でもある。眞の政治家は大衆の中から輿論を形成することを知つてゐる。輿論の形成を怠つてゐるならば、日本の政治は重大な危機に會することになるかも知れない。

(五月二十四日)

## 新文相への期待

荒木大將によつて伴食ならざる文部大臣が出來た。これは、その銓衡事情がどうであつたにせよ、ともかく歓迎すべきことである。新文相に對する國民の期待もその意味において大きいであ

らう。

荒木大將は「精神家」をもつて知られてゐる。地位と金とに執着する者の多い世の中で正真正銘の精神家であることは難事であるが、幸ひに新文相が精神家として國民に印象づけてゐるとすれば、文教上頼もしいことと云つて好い。ただ精神家の陥り易い單なる「精神主義」に陥らないやうに望まれるのである。國民精神總動員の如きも、最近、當初の精神主義を超えて物の問題の重要性を認識せざるを得なくなつてゐる場合である。

親任式の翌日、高等學校専門學校校長會議に早速出席した新文相は、「七十年の傳統何するものぞ」と叫んだと傳へられる。その革新の意氣は尊敬に値ひする。ただしかし七十年の傳統を打破するといふことは二百年前三百年前の傳統に還るといふが如き復古主義であつてはならない筈である。その令息をイギリスに留學させて教育した荒木大將は、そのやうな偏狹な國粹主義者であり得ない、と我々は信ずる。この文相が日本の教育界思想界に對しても同様に「善きパパ」であることを希望したのである。

この間或る新聞で、鳩山一郎氏は、氏の先般の外遊は氏の父君の遺志に依るものであり、今その遺志を實行して多大の利益を得たことに對して父君に深く感謝してゐた。その文章の中で氏は、

氏の外遊當時、日本の議會において官立大學の教授の多數が赤化してゐるかのやうな發言がなされ、それが外國に傳へられて日本に不利な印象を與へてゐるのを經驗したといふことを義憤を感じつつ書いてゐた。スターリンの名を挙げただけで一議員を除名した議會であり、多數の帝國大學教授が赤化してゐると云つても失言の取消を要求する者の一人もない議會である。しかも鳩山氏自身、あの瀧川教授事件當時の文相であつたことを考へてみると、政治家といふものが案外弱い者であることが分るやうに思はれる。この弱さは何に基くのであらうか。人間の強さ弱さについては先日も本欄で正宗白鳥氏が書いてゐた。現在の日本の求めてゐるのは眞の勇氣を有する政治家である。

新大臣は「大物」であるといはれてゐるが、大物は大物らしく大局の認識に立脚して、國家百年の計に屬する教育を、一時の流行や興奮に委ねることなく、おほらかに指導してゆくやうに期待されてゐるのである。

(五月三十一日)

## 革新の基準

革新といふ言葉の濫用が一部において感ぜられてゐる。何でもが無難作に革新といはれて、革新の基準は何處にあるのかが次第に曖昧になりつつある。革新といつても「またか」と國民が考へるやうになつては憂ふべきことである。

革新の名目で徒らに役所を擴張しようとしたり、革新を看板にして何か仕事を賣り込もうとしたりする者が存在しないか。かやうな者があるとすれば、彼等こそ最も時局認識に缺けてゐると云はねばならぬ。この非常時には一錢でも國費を無駄に使はないといふ覺悟がなければ、革新などできるものではない。手辨當で働かうといふ者が續々と出てくるやうになつたとき初めて眞の革新は行はれるであらう。

このやうな誠意の問題は別にして、更に重要なのは、何が革新の客觀的な基準であるかといふことである。

これまで西洋崇拜、歐米依存の傾向が餘りに甚だしかつたのに對して、日本の、東洋の獨自性

を主張することは、革新的であると考へられる。かやうに主として民族的な立場を重視するものを、私は革新の空間的な見方と名附けよう。從來の思想にこの空間的な見方が缺けてゐたとすれば、これを強調するのは革新の一つの基準と考へることができる。

しかしながら革新の空間的な見方と共に時間的な見方がなければならぬ。言ひ換へると、我々は世界史の如何なる時期に立つてゐるのであるかを省みることが必要である。この世界的な問題は資本主義の問題に集中する。資本主義の諸弊害を如何に克服するかがこの場合革新の基準である。

最近の歴史において革新といふ言葉が盛んに用ひられるやうになつたのは、あの二・二六事件以來のことであるが、そのとき革新の要點は資本主義に向けられてゐた。それだからこの風潮を迎へて、資本主義政黨といはれたものでさへもが資本主義の是正を唱へるに至つたのを我々は記憶してゐる。この事實の想起されることが必要であらう。

今日、革新といふことはただ空間的な見方に求められて時間的な見方が次第に忘れられつつあるのでなければ幸ひである。すべての統制が革新的であるとは云へない。統制にも種々の統制がある。革新の時間的な基準は支那事變の發展と共にいよいよ問題になつてくるであらうし、この

點において日本獨特の原理と方法とが生れるとき日本主義は世界史的な思想となり得るのである。

(六月七日)

## 國民への信賴

政府では今後經濟界の實狀について國民に知らせて協力を求めることになつたと云はれてゐる。今からでも遅くはない、當局がその點に氣附くに至つたのは結構なことである。

協力するためには認識が必要である。覺悟を定めるためには認識がなければならぬ。認識とは眞實を知ることである。上から押附けられたことを觀念的に繰返してゐるといふのはほんとの時局認識ではない。時局の實狀を知るといふことが時局認識なのである。眞實ほど貴いものはない、眞實を知ることによつて初めて何を爲すべきかが決まつてくる。しかるに從來時局認識といふものが單に觀念的なものになつてゐたところが尠くないやうに思はれる。

國民に實狀を知らせることは國民を信賴することである。この意味での國民に對する信賴が今まで乏しかつたといふことがないであらうか。人を信じて委すことができないのは日本人の一つ

の缺點であると云はれてゐるが、日本の政治にもこれに類する缺陷があつたやうに思ふ。

戦争は或る意味では最もデモクラチックなものである。下から力が盛り上つてくるといふことが大切である。そのためには先づ國民に對する信頼がなければならぬ。信頼しないで、信頼して打明けないでゐて協力を要求しても、十分の効果を擧げ得ないであらう。そして國民を信頼することがまた國民から信頼される所以でもある。かやうな信頼の關係が如何に大切であるかは、戰鬥に従事してゐる將校には最もよく理解されてゐる筈である。

政府が國民に信頼して實情を知らせるといふことは、種々の流言蜚語とそれから生ずる社會不安との源泉を絶つといふ意味においても重要である。事實は隠さうとしても隠しきれるものでなく、無理に隠さうとすれば流言蜚語を生じ、そのために人心は不安になり、不安な人心は更に新しい流言蜚語を作り出すのである。

すでに國民を信頼した政府はいま一步を進めて然るべきであらう。即ち國民をして現實の事態について論議を行はしめ、これを指導しつつ輿論を形成することに努めなければならぬ。國民を信頼して言論を許し、その中から輿論を作つてゆくといふことは、今後における種々の場合、特に事變に結末をつける場合に必要であらうと思ふ。輿論を作るといふことが國民の腹を作るとい

ふことなのである。

(六月十四日)

## 學生狩り論争

早稻田署管内の「學生狩り」がきっかけとなつて、學生の抗議、警視廳及び學校當局の見解の發表があり、一種の論争が行はれてゐる。我々から見れば、この論争は、過般の政友會總裁問題と同様、この非常時局に似つかぬ一風景である。或ひはかかる風景が諸所に展開されるところに、現在日本が非常時にある一つの證據が見られるやうである。

學生の行動にやたらに干渉するといふことは、あの思想事件の頻發以來、警察において馴致された風潮である。これに對して學校當局は、その頃默過して來たのみでなく、自己自身も次第に警察化したのである。教育の警察化は今日に至るまで存續してゐる傾向であり、そのために我が國の教育は甚だしく正常性を失つてゐる。

學生のうちに時局認識に缺けてゐる者の存在することは、警視廳あたりで云つてゐる通りであらう。しかしそれに就いては爲政者の側にも責任があるのであつて、時局の真相を知らせないで

るて、ただ觀念的に時局認識を説いたところで、學生に自覺を促すことは不可能である。

この際學校當局は、またもし警察が何等かの教育的責任を感じるならば警察も、教育の積極化を圖るべきである。教育は單なる取締りではない。喫茶店や麻雀クラブから學生を追拂つたにしても、下宿屋でごろごろしてゐるといふやうなものは困るであらう。教育を積極化するためには先づ學生に對して正直に時局の真相を知らせることが肝要である。

次にこの際學生の行動に自由を認めて、彼等の間に支那問題研究會、國際情勢研究會、時局懇談會などといった會が作られ、學生自身の自由な研究と討議とを通じて、時局に對する認識と思想とを獲得するやうにしなければならぬ。單に「自肅自戒」といつた消極的態度では足りない。會合は自發的なものであつて御用團體風のものであつてはならぬ。何かの會合を持たうとすれば、すぐに疑ひの眼で見えて禁壓するといふ傾向はよくない。學校の警察化の弊を一掃して學生を十分に信賴し、今日の歴史の要求する認識と思想とを眞劍に探索するといふ風潮を廣く學生の間に喚び起すことが大切であり、それには現在殆ど禁止同様の状態にある集會の自由を與へることが必要である。

今日インテリゲンチヤを満足させるやうな思想がないと云ふに止まつてゐてはならぬ。あちら

でもこちらでも思想探求の風潮が澎湃として起つて来るならば、その中におのづから指導的思想が形をとつて現はれて来るのである。

(六月二十一日)

## 世界的日本人

荒本文相は世界的日本人を作れと訓示した。學生主事諸氏に果してその意味が徹底したかどうか、疑はしい。文部省の吏僚諸氏にも、學校の校長諸先生にも、文相の趣旨が理解されるかどうか、心細い。それほど現在の日本の教育は世界的人間を作ることから離れてゐるのである。文相のいふ意味がどうであるにしても、それを自分の見識で獨創的に解釋して實踐に移すやうな役人や教師が果して幾許存在するか、疑問である。それほど現在の日本の教育は貧困を極めてゐるのである。

支那事變は世界的日本人の必要を感じしめるに至つた。或ひは支那事變は如何に日本に世界的人間が缺乏してゐるかを知らしめるに至つた。世界的人間の必要は今後ますます大きくなるであらう。教育の根本的革新が要求されてゐる。ところで近年教育界においても革新が叫ばれてゐる

が、その革新なるものは世界的日本人を作るのとは逆の方向において考へられてゐはしないか。歐化時代として現に盛んに非難されてゐる明治時代には却つて世界的日本人が存在した。世界的日本人は世界的思想を有するものでなければならぬ。

もとより今日、大アジア主義の如きものも唱へられてゐる。しかしそれは、日本といふ一つの圓の擴大としてアジアを考へようとするのであつて、更に高い次元から日本を考へようとするものではない。日本から世界を見るに止まらず、また世界から日本を見ることが大切である。單に「世界的日本人」になるといふのでなく、「日本の世界人」になることが必要なのである。

これまで「大陸的人間」といふものは、豪放とか豪膽とかといふ情意的方面からのみ考へられて、その知性においては寧ろ甚だ局限された人間であるのがつねであつた。今日、從來のいはゆる支那通に科學的な支那學者が代らねばならぬやうに、世界的日本人として現はるべきものは何よりもその知性において世界的な人間でなければならぬ。

國粹主義的傾向につれて、インテリゲンチヤはコスモポリタンであるとして非難されてゐたのであるが、世界的日本人の必要が知られるに従つて、そのインテリゲンチヤが日本にとつて重要な意義を有することが次第に分つてくるであらう。しかし日本のインテリゲンチヤはこれまで内

地を離れることを嫌ふ傾向が甚だしかつた。この傾向をなくして優秀なインテリゲンチヤが大陸へ出掛けることが今後眞の日支提携の基礎となるのである。

(六月二十八日)

## 統制の社會的意義

街ではいま中元の賣出しが行はれてゐる。百貨店を覗いてみると、國民精神總動員と書いた幕と並んで、中元大賣出しと記した多くの幕が賑かに張られてゐる。國民精神總動員とは物を買はないことであり、中元の贈答など一切廢止のことと考へてゐた者は、その光景に或る矛盾を感じてあらう。政府の消費節約の宣傳も、中元といふ社會的慣習の前には無力であるかのやうである。贈答は制限されたにしても、中元そのものは、金のある人間によつていはゆる買溜めに利用される危険さへあるやうに見える。

私は商人の立場を無視して中元の賣出しに反對しようといふのではない。それは客に對する商人のサーヴィスの意味をもつてゐるのであらう。尤も、凡てこのことが今日においては國民精神總動員の名において行はれる傾向があるのは、警戒すべきである。私が云ひたいのは、個人の生

活は、その消費の面においても、社會的に規定されてゐるといふことである。それは中元といふやうな社會的慣習に影響されてゐる。社會學者ゾンバルトは人間の種々の贅澤が資本主義と密接に關係してゐることを歴史的に明かにしてゐるが、個人の消費生活は社會の經濟制度に制約されるところが尠くないのである。

消費統制といつても、あれを廢めよ、これを廢めよといふ風に、個々の思ひ附きを述べるだけでは効果が乏しいであらう。消費統制は生活の合理化となつて積極的意義を見出さなければならず、そのためには全體の社會生活の根本に立入つて組織的に革新が行はなければならぬ。

經濟統制の擴大と強化につれて、經濟警察の制度が設けられるとのことである。これは社會の現状から見ても極めて必要なことに相違ない。けれども既に人々の指摘してゐる如く、それが弱い者いぢめにならないやうに注意することが最も大切であつて、そのためには經濟警察の任に當る者が現在の社會的經濟的機構について根本的な知識を有することが必要である。もしこの知識に基いて取締りが徹底してゆくならば、現在の社會の缺陷もこれによつて矯正されるに至るであらう。かくしてこそ統制は革新的意義を獲得することができるのであり、そのことが期待されてゐるのである。

(七月五日)

## 自然と人爲

先日文學界の同人で都會と農村といふ問題について話し合つたとき、日本にはまだほんとの都會文學は出てゐるのではないかといふ話であつた。都會人といはれる者も大抵農村出身であり、自分がさうでないにしてもせいぜい親の代に農村から都會に移つてきたに過ぎない。そこで、それらの都會人の中には、一方都會の好きなものがまだ十分身についてをらず、他方農村の好きなものも多く失つてゐるといふやうな中途半端な人間が尠くないやうに思はれる。現在の日本の文化においてこの種の過渡的な性質をいろいろの方面で見出すことができる。

この過渡的な文化から何處へ行くかが問題である。農村的なものはすべて封建的なものであるとすれば、問題は簡單である。そして農村的なものは資本主義的なものへ必ず移つてゆくとすれば、問題は簡單である。封建的なものは克服されねばならないであらうし、資本主義は農村の好いものを破壊せずにはおかないであらうから。文化の發達によつて農村の好いものが失はれないためには、資本主義の問題を完全に解決することが必要である。

日本には昔から西洋においてのやうに周圍に城壁をめぐらした都會といふものがなく、農村と都會とは融合的に發達してきた。これはたしかに日本文化の好いところであつたと云へるであらう。その世界觀においても日本人は、自然と人爲、自然と文化の間に鋭い對立を考へないで、自然を愛し自然に親しんで生活するといふのが特色であつた。

しかしこの特色も現在においては破壊されてゐる。先達ての關西の水害の如きも、自然を粗末にした報いであると云はれてゐる。このやうに自然に對する傳統的な態度が失はれる一方、なほ殘存してゐる自然に對する親和感から自然の好意に頼り過ぎ、自然に對して科學と技術とをもつて對するといふ態度がまだ十分發達してゐない。そこに過渡的な文化といふものの缺陷が現はれ、先達てのやうな水禍を生ずるのである。

かやうな過渡的な文化の缺陷を克服し、しかも傳統的な、自然と文化、都會と農村の融合といふ好いものを生かしてゆくことが大切である。そしてこれは資本主義を超えた高次の文化の理念を實現することによつて初めて可能になる。資本主義の問題を完全に解決することなしには、日本固有の美しいものも保存されず發達させられないのである。

(七月十二日)

## 「長期建設」

板垣陸相は「長期戦は長期建設である」と云つた。これはなかなか名言であると思ふ。そしてこれは支那に關してのみでなく、日本に就いても云はれ得ることである。支那において長期建設を行ふには、日本の主體的條件が整へられねばならず、そのためには日本においても長期建設の行はれることが必要である。しかもこの建設が革新を意味しなければならぬことは、日本においても支那においても同じである。

荒本文相は「五年十年といふ長期に互つて下駄履きでやつてゆけるか」と云つた。これもなかなか味のある言葉であると思ふ。いつたい、近頃名言はすべて武將の口から出るといふのは、如何なる理由に依るのであらうか。皮革その他の物資の缺乏は優秀な代用品の生産によつて補はれねばならず、そしてそのことは同時に建設的な意味を有することができる。優秀な代用品が作られる場合、それは戦後においても利用されるであらうし、またそれは日本の産業として外國へも輸出され得るであらうし、更にそれは科學理論の革新の契機ともなり得るであらうから。

長期戦が長期建設であるならば何よりも文化が必要である。武力だけでは建設はできない。代用品の發見や發明は科學の力に俟たねばならぬ。しかも長期建設には、とりわけ建設が革新を意味する場合、單に科學のみでなく、思想が、その他一切の文化が必要である。思想及び文化の方面においても長期の建設即ち革新が行はれねばならぬ。

長期建設には文化が必要であるといつても、時局を閑却した文化主義に意味があるといふのではない。却つて私の繰返していひたいのは、この時代が日本に課してゐる最も重大な問題と何等かの仕方で眞劍に取組むのでなければ、文化そのものの立場から考へても、今日いかなる永續的價值ある文化も生産され得ないといふことである。これはあらゆる文化人の銘記すべきことであらう。

由來、日本には文化主義とか文化至上主義とかといふものはなかつたと云はれる。その代りに文化を風流とかあそびとかと考へる傳統は強いのである。これは過去の日本において自然に對する技術的並びに科學的文化の發達しなかつたことも關係があるであらう。この時局において文化主義の如きものは清算されるにしても、他方文化を風流とかあそびとかと考へるのに類する心理が依然として殘存してゐるとすれば、これは更に困るであらう。長期建設の唱へられる今日、

何が知識階級に革新の氣魄を失はせてゐるか、深く反省されねばならぬ。

(七月十九日)

## 革新の連繫

この頃の新聞で一等面白いのは本紙の「讀者眼」のやうな投書欄である。そこだけが現在多少とも輿論を反映してゐるらしく思はれる。

この欄に繰返して現はれる讀者の意見は、今日革新を論ずる者にみづから革新するところがなといふことである。國民に向つて節約や貯金を説く者が果して國家の金を無駄に使はないやうに心掛けてゐるかといった意見である。革新は先づ自分から始めよといふのが國民の聲である。

これは單に道德的な要求として意義を有するのみではない。革新はすべて繋がり合ひ、一つの革新は他の革新を前提とするやうに結び附いてゐる故に、そのことが要求されるのである。革新は全面的に計畫的に行はれなければならぬ。

今度荒木文相は大學の總長や學部長の官選を提唱した。この提唱の當否はここで論じないが、現在の大學に革新の必要なことは我々も認める。文部省が大學の革新を主張することは間違つて

るない。だがその際忘れてならぬことは、文部省自身の革新の必要である。文部省そのものが明朗でないことは久しく評判されてゐることである。文部省がその儘であつて大學教授の身分がそれに左右されることになれば、文相の意圖するやうな派閥の打破はできないであらう。革新は大學と文部省と連繫的である。

文相の一投石によつて大學教授たちの間に大きな波紋が生じてゐるとのことである。それは確かに大學の本質に關する重要な問題である。ただ私がここで問ひたいのは、その問題に對して熱心な教授たちは、例へば先般行はれたいはゆる學生狩りの問題に對して同様の熱心さを示したであらうか。學生も大學の一部であり、學生の問題は大學の問題である。しかるに學生の教育と指導の本質に關するこの重要な問題は警察にまかせて知らぬ顔をしてゐた教授たちが、ひとたび自分の身分に關する危険のあることになる、俄然熱心になるのは如何なることであらうか。學生の問題と教授の問題とが連繫してゐることは、今や教授諸氏にも多分理解されるに至つたであらう。革新は同じ思想によつて行はれるのである。

今日の大學の不幸は、大學自身の革新についてさへ、これを指導する力を有しないことにある。指導性のはもはや大學を離れてしまつたやうである。革新の連繫を考へてゆくならば、大學の革新

の如きも社會全般の革新なしには不可能であることが分るであらう。

(八月二日)

### 民間意見の重要性

外務省文化事業部では對外文化宣傳の方法を變化し、從來の歌舞伎、活花、茶の湯、能などのいはゆる日本的なものの紹介から轉換して、今後は廣く「現代日本」の全文化を對象に非常時にふさはしい文化外交を行ふ方針を決定し、その手始めとして航研機の記録映畫を宣傳に採用することになつたやうである。

この轉換はもちろん正しく、結構なことである。ただ一つ、我々は當局のその點に氣附くことが餘りに遅かつたのを遺憾に思ふ。

すでに數年前、對外文化宣傳の必要が頻りに唱へられ、國際文化振興會などが出來た當時、專らいはゆる日本固有のものを海外に紹介しようとする傾向に對して、現在の日本の生きた文化を紹介すべきであるといふのが民間の意見であり、私の如きも本欄において一再ならずその點に觸れたのである。しかるにその意見は全く顧みられないのみか、非國家的思想に基くかのやうにさ

へ考へられたのであるが、數年後の今日やつとその意見通りになるに至つたといふのは皮肉である。

しかも新聞紙の傳へるところに依ると、外務省文化事業部をこのやうに轉向させたのは、目下我が國に滞在勉強中の各國政府の交換學生であるといふのも、從來の日本の外交振りを思はせるものがある。「日本へ來て何を學ばうと欲するか」との質問に對して、彼等は口をそろへて、「古典日本には關心がない、知りたいのは明治維新以後における現代日本の文化である」と答へたといはれてゐる。實際、これまで海外への宣傳に努力してきたやうなものは、今日の日本自身の大衆にとつても殆ど關係のないものである。かやうな宣傳に對しては國內の大衆も熱意をもつことができず、しかるに文化外交の如きものはゆる國民外交として、大衆の支持がなければ成功し得ないのである。序ながら、これら凡てのことは現在の支那における文化工作に對しても反省を要求することである。

もとより私は古典日本の重要性を否定するものではない。注意したいのは、日本の古典を今日の立場から如何に攝取するかが、我々自身の文化の問題として完全に解決されることが、その外國への宣傳にとつて前提であるといふことである。

右の對外文化宣傳の場合は、民間意見の尊重すべきことが明かになつた一つの例に過ぎない。輿論に聴くことが自主的外交にとつて必要であることも明瞭であらう。民間で云はれてゐることを取り上げるのは官吏の權威に關はるといつたやうな氣持が少しでもあつてはならぬ。

(八月九日)

### 研究機關への希望

今度東亞研究所が出来ることになつた。大陸政策とか東洋の新秩序の建設とかといつても、肝腎の調査が不十分であつたり、理論がなかつたりするのでは問題にならぬ。この際東亞研究所の設立を見るに至つたのは喜ばしいことである。

支那事變以來、この種の支那問題やアジア問題の調査研究の機關が、公けのもの、半ば公けのもの、私的のもの等、俄に多く出来たやうに聞いてゐる。勿論いくら多く出来ても結構なわけであるが、それらの機關相互の間の連絡、提携、更に進んで統合について考へることも必要ではないかと思ふ。そのことは調査や研究を完全にするために必要であるばかりでなく、それらの機關

が現在何よりも政策的な問題の研究に従事してゐるらしい事情から考へて、國策の統一を圖るためにも必要である。割據主義は到る處において見られる弊風であるが、それは調査研究の機關にあつては特に避くべきことである。割據主義は祕密主義、獨善主義等、種々の弊害を生ずるのである。

政策の研究が現在の急務であることは認められる。けれども餘りに政策的になると、調査研究の客觀性が失はれることになる。大陸の諸問題については性急な政策論に熱中する者が殊に多い今日、必要なのは却つて冷靜な、科學的な、理論的な研究である。理論的な研究は直ぐに結果の現はれるものではない。しかし効果を急ぐといふことは從來日本の多くの研究機關に見られた弊風であつて、そのために結局大きな効果が得られない場合が多いのである。結果を急いで基礎的な研究を怠ることのないやうにするのが肝要である。學問の意義がもつと一般に理解されるやうにならねばならぬ。

もう一つ希望したいことは、研究機關において研究された結果がなるべく多くの人の眼に觸れるやうに發表されることである。それがその機關に對する國民の關心をつなぐ所以であると共に、廣く批評を求めることは研究の進歩にとつて大切なことである。いつたい、日本の官廳には「祕」

と稱する文書が多過ぎる。我々の普通に讀んでゐる外國書が官廳で翻譯されると「祕」といふ印の捺した文書になつてゐることが屢々ある、と聞くのである。官僚的祕密主義は研究所の場合特にその目的を達する所以でない。

序に言つて置くならば、國民の誰でもが自由に出入し得る東亞圖書館の如きものが設けられることは、大陸に對する國民的な關心と理解とを深める上に必要であらう。（八月十六日）

## 職業と思想

人間の思想は多かれ少なかれ職業に左右されるものである。外交官には外交官流の、司法官には司法官流の思想がある。社會のいろいろな葛藤についても、職業と思想との關聯から考へると説明されることが意外に多いのではないかと思ふ。

昔支那に諸子百家といふものがあつて盛んに論爭したことはよく知られてゐる。漢書藝文志は百家の學を九の流派に區別し、そのもとをいづれも周の王宮に求めてゐる。例へば儒家者流は司徒の官から出たものであらうと云ひ、道家者流は史官から、陰陽家者流は羲和の官即ち天文を掌

る人から、法家者流は理官即ち治獄の官から出たものであらうと云つて説明してゐる。かやうな説明は歴史的事實としてそのまま受取れないにしても、官吏の種類に應じてそのイデオロギーが異なるといふこと、職掌と思想との間には一定の關聯があるといふことを考へたものと見れば面白い。

學問や思想の分化が社會的實踐的生活における職掌の分化に従つて生ずるといふことは西洋の歴史においても見られることである。これによつて學問は専門化するのであつて、外交官が外交官流の、軍人が軍人流の思想をもつといふのは勿論善いことである。けれどもその結果めいめいの考へ方が一面的になつて物を全體的に見ることが不可能になるといふことも、そこから生ずる。そのうへ悪い意味における職業意識といふものが加はれば、その弊害は大きいであらう。今日官僚出身でない政治家、その省出身でない大臣、職業的政治家でない政治家が必要とされるやうになつて來たのも、そのためである。しかし單に政治家や大臣のみではない、すべての官吏が自分の職掌的乃至職業的イデオロギーを超えて考へるやうになることが今日特に必要ではないかと思ふ。それが眞の意味における全體主義的な見方といふものであらう。自分の思想が職業に制約されてゐることに對する反省は誰にも大切である。

ところで九流百家の學のうちひとり儒教が現在にいたるまで大きな生命をもつてゐることに就いては種々の理由を擧げ得るであらうが、その最も重要なものは儒教の根柢にあるヒューマニズムであると思ふ。ヒューマニズムはもとより職業的イデオロギーを超えたものである。しかるに今日いはゆる全體主義の思想にはヒューマニズムが缺けてゐるのであつて、この點考へ直すべきものが多い。また對支文化工作において儒教を基礎とすることは現に行はれてゐることであるが、そのヒューマニズムの要素をもつと發展させてゆくことを考へなければ、單なる反動に墮する恐れがある。

(八月二十三日)

## 統制と倫理

先般池田藏相は木造建築の統制に關して、統制のための統制になつてはならぬと語つた。この非常時に家屋を新築するのは悪いといふことは倫理の問題であつて、經濟上その必要が認められない場合法律的に統制することは避くべきであるといふのである。

統制のための統制が善くないことは明かである。統制の不當な行き過ぎは慎まねばならぬ。し

かし統制と倫理とは決して無關係ではないであらう。今日もし統制の行き過ぎがあるとすれば、それはまづ役人が統制を「仕事」にするといふことがあるのに依ると云はれてゐる。統制のための統制は「仕事」のための統制である。従つてそこにまづ役人の倫理が問題になるであらう。

一般的にいつて、統制の行き過ぎは、統制が倫理化されると共に、倫理がその性質上潔癖になり易く、瑣末主義に陥り易いといふところから生じがちである。直接に經濟に關係する事柄以外においては特に統制の行き過ぎが生じ易いのも、そこでは倫理化が一層行はれ易いためである。

しかも今日の狀態は經濟と倫理とを二元的に考へることを不可能にしてゐる。經濟統制は精神動員として行はれつつある。それ故に統制のための統制の弊に陥らないやうにするには、統制の倫理の明瞭に示されることが必要である。經濟から抽象して倫理を説くことがなくならねばならないし、その倫理が經濟の發達を抑止するやうなものにならないことが肝要である。一般に統制の倫理の何であるかが確立されねばならぬ。

經濟と倫理とを二元的に考へることは自由主義時代の思想に過ぎないであらう。現代においては政治と經濟とを二元的に考へることができない如く、倫理と經濟とを二元的に考へることもできない。しかしまた政治が經濟を支配するといつても、政治は經濟の法則を無視することができ

ぬやうに、經濟が倫理化されるにしても、倫理は經濟の法則を無視することができぬ。

事變が終つても自由主義の經濟に戻らないことは云ふまでもない。さうであるならば、統制は今日戰爭遂行のために必要であると云ふ以上に、統制の倫理の如何なるものであるかが思想的に、原則的に明瞭にされねばならぬ。それは統制の行き過ぎ、經濟から抽象された倫理の過重の弊に陥らないために必要である。

(八月三十日)

## 天災の教訓

ことは天災が多いやうである。尤も今頃には毎年颱風の襲來を受けるのであるが、ことはそれが特に深く人心に印象されるのは事變中だからであらう。飛行機の襲來に備へる訓練は近來年毎に行はれてゐる。しかるにこの防空演習に對するほどの熱意を政府も國民も天災の防止に示してゐるであらうか。しかも自然の災害に對する豫防と戰爭の災害に對する豫防とは決して無關係ではないのである。

この間の暴風雨には、東京では水道の水が出なくなる、ラヂオの効力が最も發揮せらるべき時

にラヂオが聴かれなくなる、場所によつては數日間電燈がつかなくつた。かやうなことでは、もし萬一空襲を受けたとしたら如何であらうか。天災に對する防備を完全にするといふことは戰時の防備を完全にするためにも必要である。このことから考へて、毎年多額の費用をかけて行はれる防空演習が形式的でなく最も實質的なものになることを切望せざるを得ない。陸軍や海軍のみでなく、都市そのものに、國民の各戸に、實質的な防備力が具はるやうにすることが大切である。それには科學的な技術的な設備に對する配慮がもつとなされなければならない。

暴風雨があればきまつて鐵道が不通になるが、東京市の一地域の如きも、毎年數回きまつて水浸しになる。年々歳々同じことを繰返してゐて殆ど改善されないのである。かやうなことは諦めが好いといふ日本人の性質にも關係するであらうが、ただ諦めて済ますことのできぬ問題である。毎年天災のために蒙る莫大な損害を考へるならば、一時の間に合せでない徹底的な施設が計畫的に行はれて然るべきである。

そして根本においては國民の科學的精神の養成に努めることが、天災の防備に對してのみでなく、戰時の防備に對しても肝要であらう。諦めが好いといふことは日本人の一つの美質に相違ないが、そのために科學的精神が缺乏するやうなことがあつてはならぬ。天災は諦めて済むとして

も、戦時にはそれで済むであらうか。科學的な考へ方は人心の不安を無くすることができる。飛行機の襲撃の一つの目的は人心を不安に陥れることにありはれてゐるが、その場合の不安を少なくするためにも國民が科學的な考へ方をかねて養つておくことが大切であらう。

(九月六日)

## 淫祠邪教の蔓延

最近また淫祠邪教の蔓延が問題になつてゐる。警視廳特高部の發表に依ると、事變このかた疑似宗教は雨後の筍の如く簇生して事變前の十倍以上になり、おもて立つたものだけでも二百六十五を數へ、そのほかに祈禱師、巫女の類は數千人に上り、調査も満足にできないやうな状態であつて、その影響下にある民衆は夥しく多數であらうといはれてゐる。それらの疑似宗教は一般國民が無批判であるのにつけ込んで時局を喰ひ物にし、延いては反戦思想の溫床ともなる危険性をさへ有するといはれてゐる。

かやうな淫祠邪教は左右兩翼の思想とは違つて神憑り的な大衆性を有するだけその蔓延が憂慮

されてゐるのである。殊にそれらの最近の活動が主として應召家族を目標としてゐるのは注目すべきことであり、これに對する對策の急務であることを思はせる。

そのやうな對策として先づ必要なのは、國民の生活、とりわけ應召家族の生活に不安のないやうにすることであらう。およそ邪教といふものは現世の物質的利益を約束するものであり、そのために邪教と呼ばれてゐるのであるから、邪教に入るのを防ぐためには大衆の物質的生活について十分考慮することが肝要である。

次に事變下における邪教の蔓延は國民精神總動員の運動が大衆の中に深く入つてゐないことを示すものであつて、この運動の方針及び方法について最も眞剣に反省せらるべきことを要求してゐるのである。

しかしながら今日邪教の蔓延する心理には、生活の問題、思想の問題以外、もつと人間的なものがあるであらう。戦争は人間的なものを抑壓し、そしてそれは已むを得ぬことであるが、他面それだけまた人々をして深く人間的なものを求めさせるのである。單なる政治思想によつて人間は救はれることもできないし、またほんとに強くなることもできない。この人間心理を理解することが大切であつて、そこに宗教があり、哲學があり、文學があるのである。戦時においても宗

教や哲學や文學は固有の任務を有してゐる。

然るに今日の如く宗教がそのやうな本來の面目を忘れて徒らに政治的になつてゐては、邪教がその機に蔓延するのは自然であらう。嘗てあれほど喧しく邪教撲滅を叫んだ宗教が、現在そのことについて殆ど語らないのは不思議である。ただ政治的になることのみが眞に國家のために盡す所以ではない。これは宗教に限らず、文學も哲學も今日深く考へてみななければならぬことである。

(九月二十日)

## 新しい神話

ローゼンベルクは『廿世紀の神話』を書いて、ナチス・ドイツの聖典となつてゐる。今もし日本にかやうな廿世紀の神話が可能であるとすれば、その主題は「大陸」とか「東洋」とかといはれるものであらう。

しかし今日果して大陸とか東洋とかといふものは我々の「廿世紀の神話」として形成されてゐるであらうか。それは確かに一部の人のとつては既に久しく神話の意味を有してゐたであらう。

けれども一般の國民にとつては必ずしもさうではないやうに思はれる。そこに、もし欲するならば、思想家や文學者の大きな仕事が残されてゐると云へるであらう。

今の日本には新しい文學が要求されてゐる。そしてそれは普通に「戦争文學」の種類と考へられてゐる。そのやうな戦争文學の作品は既にいくつか戦線から送られて來たし、またそのやうな作品を書くために多數の文士や評論家が戦線へ派遣された。それはもちろん凡て結構なことである。戦つてゐる日本に戦争文學が求められ、また作られるといふのは當然のことである。しかし今日最も要求されてゐるのは單にいはゆる戦争文學でなく、むしろ新しい神話であり、戦争文學そのものも自分のうちに新しい神話を含まねばならぬと考へられるであらう。今度の事變の目的は東洋に新しい秩序を建設することにあるとすれば、戦争文學も單にいはゆる戦争文學に止まらないで、その中に「東洋」の神話が形成されなければならないであらう。さう考へるならば、不幸にして今度漢口に従軍することのできなかつた作家も歎くには當らないので、彼等にも極めて大きな課題が與へられてゐるのである。

今日の日本に必要なのは神話でなくて、思想であると云はれるであらう。確かにその通りである。神話と雖も今日においては思想的根柢なしには存在することが不可能である。神話とは思想

の一つの存在形態をいふのであつて、思想が客體的認識としてでなく主體的現象として存在する形態である。そして今日東洋といふのは世界史的な行動の主體として呼び掛けられるものであつて、客觀的原理としては東洋的なものは固より世界的なものでなければならぬ。即ち東洋といふ概念はそれ自身のうちに或る神話的なものを含んでゐる。

支那事變が世界史的意義を有すべきものであるとすれば、東洋に新しい神話が生れねばならぬ。一つの思想が神話として大衆の中に擴がり、その行動の力とならなければならぬと云ひ得るであらう。

(十月四日)

## 理論と行動

最近私は東京、京都、大阪において多くの青年インテリゲンチヤと親しく話す機會をもつた。そのときまつて出た質問は、今度の事變の目的は東洋に新文化を建設することにあると云はれてゐるが、その新しい文化の原理はどのやうなものであるか、それが積極的に示されなければ、インテリゲンチヤに向つて能動的になるやうに説いたところで無駄ではないかといふのである。

この議論は一應尤でもある。新しい世界観とか新しい文化とかと既に以前から繰返し叫ばれてゐるにも拘らず、それが體系として具體的に展開されたものに我々は未だ出會はない。なるほど新聞雑誌の上では「劃期的」とか「獨創的」とか「體系的」とかと批評される書物も毎月いくつか出てゐるが、果して辭令以上の意味を有するであらうか。體系的といふ言葉は我が國では教科書的に手際よく纏まつてゐるといふほどの意味に用ひられるやうである。劃期的とか獨創的とかと稱する思想が毎年或ひは毎月いくつか出るといふことはそれらが劃期的でも獨創的でもないことを示してゐるのであつて、何が劃期的であり獨創的であるかは長い歴史が決定することである。

言ひ換へると、要求されてゐる新しい世界観、新しい文化の原理は完成した體系としては未だ現はれてゐないのである。哲學はミネルヴァの梟であるとヘーゲルが云つたやうに、完成した思想體系は一つの時代の終りに近づいて初めて出てくるものである。今日はまさに新しい時代の端初に立つてゐるとすれば、完成した思想體系が未だ存在しないのは寧ろ當然であるといはれるであらう。

それ故に懷疑的で消極的なインテリゲンチヤの現在想起すべきことはいはゆる理論と實踐との辯證法であつて、理論は行動の發展につれて一步一步形成されてゆかねばならぬといふことであ

る。抽象的な可能性において理論を考へてゐる限り、我々は懷疑に止まるか現實の歴史に關係のない形式的な構成に終るのほかないであらう。完成した體系を求めること自體が現在では非歴史的なことであるとも云へる。先づ必要なのは新文化の形成の意慾においてインテリゲンチヤが協同するといふことである。

そして今日の日本が東洋に新文化を建設するといふ極めて大きな使命を有することを考へる場合、政府當局はこのインテリゲンチヤの活動に自由を與へるといふ度量を積極的に示さねばならぬであらう。禁壓政策によつては新しい文化の創造といふ大事業は到底考へられないのである。

(十月十一日)

## 國民心理の解明

子供雑誌が子供に與へる大きな影響を考へて「健全明朗な子供雑誌」を作るべく内務省では繪本を含めての全子供雑誌の統制に乗り出すことになつたと傳へられてゐる。特にその方針の一つとして、チャンコロなどと支那人を侮辱するやうな文句は一切禁じ、むしろ日本人と支那人とが

手を握つて新東亞を建設する日支提携を積極的に強調するやうに努めさせるとのことは、確かに適切な指導と云ひ得るであらう。

我々は支那と戦ひながら根本において支那人を憎んでゐない。そこに今度の事變の特殊性がある。一部の者から非難されたやうに國民が事變に對して冷淡であるかの如く見えたのも、かやうな國民の心理に基くのであつて、この國民心理のうちにおのづから今度の事變の特殊性が現はれてゐると云ふこともできるであらう。この特殊性の意義を積極的に闡明することをしないで、却つてこの事變を他の戦争と同じやうに考へ、ただ子供の喜びさうな面を取上げるといふのは、事變が終極的に目差すやうに將來日支提携して活動すべき人間の教育にとつて有害なことではなからぬ。

問題は必ずしも子供雑誌にのみ關係してゐない。政府でも事變の當初にいはれた「暴支膺懲」の如きスローガンが國民にアッピールすることの少なかつたのを考へて、近く事變處理の方針を新たに示すことになつたと云はれてゐる。ところで暴文膺懲の如き標語が國民の心を捉へ得なかつたのは、我々は支那と戦ひながら根本において支那人を憎んでゐないといふ國民心理を十分に理解せず、この國民心理のうちにおのづから表現されてゐる今度の事變の特殊な意義を國民の前

に積極的に闡明することを怠つた爲めである。

もとより國民自身も自己の心理に含まれる意義を必ずしも明確に把握してゐたわけではない。そこに彼等が從來消極的であるといはれた理由があつた。しかし國民は無意識的にせよ正しいものを持つてゐたのである。彼等の心理の意義を解明してこれを思想的に把握させることが大切である。それが眞に國民を教育する所以である。教育は彼等の持つてゐないものを與へることができぬ。教育とは人が無意識的に持つてゐるものの意義を明確に認識させることにほかならない。

子供に對して親支教育を行ふといつても新しい理論的基礎がなければならぬ。理論の必要は事變の進展と共にいよいよ増して來た。

(十月二十五日)

### 事變の進歩的意義

漢口陥落と共に事變は新段階に入つた。これまでは國民にとつて、廣東攻略とか漢口占領とかといふやうに、事變の目標が具體的に、また集中的に、眼前に與へられてゐた。しかるにこれからは同じではないであらう。そこに國民指導の地位にある者の最も深く考へねばならぬことがあ

る。

今や必要なことは、事變の積極的意義を國民の間に國民自身の信念になるまで浸潤させることである。とりわけこの事變の進歩的意義を掴み出し、國民のうちに夢を、新しい神話を、高い理想を植ゑなければならぬ。從來一般に云はれてきたことは事變の大いさに値ひすべく餘りに低調で消極的なことが多かつた。

事態は確かに變化しつつある。最近次第に廣く語られるやうになつた「東亞協同體」の思想の如き、事變の意義を一步積極的に把握したものと見ることが出来る。しかしこの思想も從來ありふれたブロック經濟の思想の如きものに止まることなく、新しい理論的基礎が與へられねばならぬ。日本が世界的に進歩的な役割を演ずることなしにはこの事變の發展的解決は不可能なのであつて、そのことの根本的に理解されることが肝要である。事變の進歩的意義の闡明は今や要求されてゐる國民再組織の思想的前提であり、且つそれは同時に日支提携のために支那人に呼び掛ける思想の根柢でなければならぬ。

事變の進歩的意義を理解する者は偏狹な思想ほど今日有害なものはないことを知るであらう。しかるに現在なほこの事變の積極的意義を理解してゐないが如き偏狹な思想の存在することは遺

憾である。例へば最近佛教家によつて問題にされてゐる國定教科書からの「釋迦」の削除の如き、また臺灣總督府の某官吏が聖德太子十七條憲法を歪曲して、その第二條にいふ「三寶」の「寶」は「法」であり「佛法僧」は「儒佛神」であるとし、明かに排佛的思想を述べたが如き、偏狹な日本主義の弊を示すものであつて、東亞協同體の理想に背馳するものといふべきであらう。

心ある者をして自己を日本主義者と稱することを躊躇させるやうなものに日本主義をしてはならぬ。進んで協力しようとする人々を廣く包容し得るやうな大思想なしには新秩序の建設は不可能である。

(十一月一日)

## 内鮮一體の強化

朝鮮總督府では半島統治の根柢をなす内鮮一體の大方針を在滿在支その他在外の半島人百卅萬の上にも具現せしめるやう今春來外務省と協議を重ねてゐたが、有田外相は南總督の施政方針を支持し、これを在外使臣に宣明して全半島人の人的地位の向上をはかることになつたといはれる。

滿洲事變以後、とりわけ今次の事變以來、半島人の間に帝國臣民としての自覺が高まつてきた

ことは新聞紙上に現はれた種々の事實によつても明かであるが、この際鮮内に止まらないで外地においても半島人の人的地位の向上をはかり、内鮮一體の趣旨を徹底させようといふのは適切なことである。

半島人の地位の向上は内鮮一體の基礎である。差別待遇が存在するやうではその理想は實現されない。この點について在鮮内地人の指導は第一の必要であるが、更に滿洲や支那、その他の外地においても内地人の半島人に對する認識が新たにせられねばならぬ。まづ内地人の側から半島人を差別待遇してゐるやうでは、彼等が他の外國人はもとより、滿洲國人、支那人などからも、内地人と同様に待遇される筈はなからう。帝國臣民としての半島人の自覺を強化するには彼等と内地人と同様に待遇することが大切である。人を道徳的にしようとする者はその人をまづ尊重することを忘れてはならぬ。

過日南總督の談話にもあつたやうに、日本が長期戰に對して持久力を有するのは何といつても食糧が十分にあるからであり、そしてそれは朝鮮における米の生産に負ふところが尠くないのである。この一つの點だけから考へても、この機會に我々は朝鮮に對する認識を新たに必要がある。

半島人の人的地位の向上は人道主義的な倫理の普及に俟たねばならぬであらう。しかし特に考ふべきことは、すべて人的地位の向上は經濟的並びに政治的地位の向上に關係するのであつて、半島人の人的地位の向上をはからうとする者は同時にその經濟的並びに政治的地位の向上に就いても考慮することを怠つてはならないであらう。

支那事變このかた東亞の一體性が次第に強調せられるやうになつた。もとより日滿支一體といふことと内鮮一體といふことはその一體性の意味において同じでない。けれども日滿支一體とか東亞協同體とかといつても、内鮮一體の實現が先決の前提であることは明かである。すべてのことは手近なところから始めなければならぬ。

(十一月八日)

## 不安な文化

帝大總長官選問題がともかく片附いて結構なことであると思つてゐたところ、今度は河合教授の問題が起つてきた。河合教授の問題の當不當について私はここで論じようとは思はない。私の憂へるのは、河合教授の問題が何等かの仕方で片附いたにしても、問題はそれで終結するのでな

く、同じやうな問題が次から次へと生じてくる危険を大學自身が絶えず感じてゐるといふことである。

かくて一つの問題が濟めば續いて他の問題が現はれるといふ有様で、大學がつねに不安な状態におかれてゐるといふことは、日本の文化にとつて甚だ困つたことではないかと思ふ。それでは教授も學生も落附いて勉強することができないであらう。問題は根本において一教授が如何に處置されるかといふことにあるのでなく、却つて大學がこのやうに始終不安な状態にさらされてゐるといふことである。もし大學がそれで安定するものであるならば、或る教授が如何に處置されるかといふが如きことは寧ろ小さな問題である。

大學がかやうに絶えず不安な状態におかれてゐるのは如何なる理由に依るのであらうか。その理由が實際的に突き止められて不安が根本的に取除かれることが必要であり、教授も落附いて研究に従事することができ、學生も安心して勉學することができるやうな状態が速かに來るやうにしなければならぬ。そのためには原則的にいつて當局の思想政策や文化政策の基準の確立され、明示されることが要求されてゐる。

問題は單に大學のみに關係してゐない。一般に政府の思想政策や文化政策の基準が明瞭でない

ところから、今日の文化はおよそ不安な状態におかれてゐるのではなからうか。そのためにインテリゲンチヤに折角時局に協力しようといふ意志があつても勢ひ後込みせざるを得ないといふ事情が存在しないであらうか。善き意志を有しながらインテリゲンチヤが今なほ消極的であることをやめない原因は何處にあるのであるか、當局はその原因について極めて具體的に検討してこれを除去することに努力すべきであらう。

過日の政府の聲明にもあつたやうに支那事變の解決は新文化の創造によつて可能になるのである、そのためにはインテリゲンチヤの協力が絶対に必要である。近來各方面において折角積極的に動き始めてきたインテリゲンチヤを再び後込みさせてしまふことのないやうに、當局の賢明にして確固たる處置が望ましいのである。

(十一月十五日)

### 思想を超ゆるもの

今の時代に思想が大切なことは云ふまでもない。思想の必要はどれほど強調されてもなほ足りないであらう。

然るに凡ての者が思想の重要性を確信するやうになつた今日、今度は逆に思想の限界を考へることが必要になつて来る。今日一種の「思想的」時代が現はれると共に思想の限界についての反省が失はれたといふことがないであらうか。思想の虜になつてしまふことが如何に人間を不幸にするかを、我々は例へば現在のスペインにおいて見る事ができるのであらう。思想が左右に分れて政治的に對立してゐる場合、ひとは思想の限界を忘れて思想の虜になつてしまひ易いのである。かくて支那事變にしても、これを單純に「思想戰爭」として規定することの危険を知らねばならぬ。この事變は確かに思想戰爭の意味を含んでゐる。しかしそれを思想戰爭として規定することに急にして思想の限界を考へない場合、種々の危険があるであらう。人間を解放すべき思想が逆に人間にとつて桎梏にならないやうに注意しなければならぬ。

人間が思想の虜になるといふのは、思想の、従つて知性のためであるよりも、却つて感情の、従つて非思想的なものの力に依るのである。思想の限界を認識させるものは寧ろ知性であり、それ故に思想の限界を認識することはそれ自身思想的なことに屬してゐる。かくてまた眞に思想を超越するものといはれ得るのは單に感情的なものであり得ないであらう。

思想を超越するものといふのは個々の具體的な形である。發明された個々の機械、具體的な技術

的形態は、抽象的な科學的理論を超ゆるものである。科學者と發明家との間には理論と形態との差異がある。詩學の規則に通じてみても、それだけでは藝術家として生きた形象を作ることはできないであらう。もちろん技術的形態も科學的法則を基礎とし、その限りすべての形態は合理的なものである。しかし形態が作られるには理論以上に想像力もしくは構想力が働かねばならぬ。形は具體的なものとしてつねに綜合的なものである。

今日の問題は、思想や主義であるよりも形態であるといふことができる。政治、經濟、文化のすべての方面において新しい形を構想し得る自由な精神が要求されてゐる。原則だけからは形は出て來ない。新時代の思想家にも政治家にも何等か藝術家的なところ、發明家的なところが必要である。理論の虜になつて具體的な形の構想が一層重要な問題であることを忘れてはならぬ。

(十一月二十二日)

## 日本文化の自主性

日獨文化協定の成立は、從來文化的に深い關係にあつた兩國にとつて慶賀すべきことである。

これによつて我が國が文化の各方面において受ける利益も尠くないであらう。

一般的にいへば、日獨文化協定の成立は文化に對する政治の優位の一つの例にほかならない。現代の特徴に屬するかくの如き政治の優位を我々は承認しなければならぬ。しかしかやうに政治の力を承認すればするだけ、逆に文化が政治に影響すべき必要がいよいよ感ぜられる。もしそれが無力のものであるならば放置してもよい、それが有力なものであればあるだけ、それに對して文化の影響することが必要であり、そのためには文化が自主性を失はないことが大切である。

この際特に考へねばならぬことはドイツ文化に對する日本文化の自主性である。近年日本主義とか日本精神とかと頻りにいはれてゐるにも拘らず、實際はドイツ模倣の傾向が著しかつたのであるが、こんど日獨文化協定の成立によつてその傾向が更に甚だしくなる惧れがないであらうか。かくては日本文化の自主性が奪はれ、それと共に創造性が失はれて「新文化の創造」などあり得ないであらう。

もとより我々はドイツ文化から學ばねばならぬ。しかしそれは飽くまでも自主的な立場においてでなければならぬ。自主的であることは創造的であるために必要であり、この自主性において我々は單に今日のナチス的文化からのみでなく過去のドイツの全文化から學ぶことを忘れてはな

らない。

外交そのものからいつても、外交は多角的でなければならぬ。この多角性は現にドイツの外交に見られることであつて、一方日獨文化協定を結んだドイツは同時に他方獨佛不侵共同宣言を行つた。しかるに今日我が國の外交は多角性を失ひ、強ひて自分を窮屈にしてゐるところがないであらうか。外交における自主性と多角性とは矛盾するものでなく、却つて眞に自主的な外交にして初めて多角的であることができる。

文化の自主性についても同様である。日本文化は自主的であることによつて全世界の文化と多角的に交流しなければならぬ。

(十一月二十九日)

## 續現代の記錄

倫理と政治 (三六五) 歲末の感想 (三六七) 理想と現實 (三六九) 文化人の使命 (三七二) 確信の問題 (三七三) 東亞協同體の現實性 (三七五) 全體主義と心理學 (三七七) 戰爭の清掃作用 (三七九) 全體主義と責任 (三八二) 祕密の漏洩 (三八四) 景氣と文化 (三八六) 職業觀念の變革 (三八八) 常識の效用 (三九〇) 論理の峻嚴 (三九二) 國民再組織の再吟味 (三九四) 品質の統制 (三九六) 政治的時期 (三九八) 不定な知識人 (四〇〇) 流言蜚語 (四〇二) 時の問題 (四〇四) 機構の單純化 (四〇六) 良書の基準 (四〇八) 音の統制 (四一〇) 國語の改良 (四一二) 革新と傳統 (四一四) 選擇の必要 (四一六) 人心一新の要 (四一八) 日本の自覺 (四二〇) 思想と現實 (四二二) 思想の不信 (四二四) 國民運動の起點 (四二六) 統制の自働性 (四二八) 雰圍氣の變化 (四三〇) 鍛鍊冬休 (四三二) 科學の普及 (四三四) 責任の道德 (四三六) 知識人の表情 (四三八) 消極的個人主義 (四四〇) 教育の實用化 (四四二) 重點主義 (四四四) 國民の持久力 (四四六) 「良藥忠言」 (四四九) 革新と國民 (四五二) 新しい經濟倫理 (四五三) 教育の不安 (四五五) 心に希望を (四五七) 思想の具體性 (四五九) 常識の變化 (四六一) 組織の持續性 (四六三) 取殘される思想 (四六六) 檢閲の責任 (四六八) 教育義務制案 (四七〇) 民族性と政治 (四七二) 事實の宣傳 (四七四) 指導者の反省 (四七六) 歸還將兵の動向 (四七八) 政治の倫理 (四八〇) 世界史の一瞬 (四八二) 科學的生活化 (四八四) 指導者の養成 (四八六) 敗者の教訓 (四八八) 新生活體制の基礎 (四九〇) 東西の新秩序 (四九二) 信賴關係の確立 (四九四) 流行と權威 (四九六) 一元化の問題 (四九八) 大國民の自覺 (五〇〇) 彩票の倫理 (五〇三) 住宅問題 (五〇五) 協和と指導 (五〇七) 文化政策の新しさ (五〇九) 人材の不足 (五一二) 新體制と青年 (五一四)



## 倫理と政治

いはゆる國民再組織に關する政府の方針も決定し、その新團體は「精神團體」として誕生することになつたと傳へられてゐる。國民再組織といふ以上、それは當然政治的意味のものである筈だと考へてゐた者は、既に或る失望を感じざるを得ないであらう。

もとより國民再組織が倫理運動であつてはならぬといふのではない、却つてそれは本質的に倫理運動であることを要求されてゐる。今日の政治は國民の倫理的力に俟つところが極めて多いのである。國民の倫理的力から游離し、従つていはば單に政治のための政治になつてゐたものを新たに國民の倫理的力と結合することが今日の政治であるといふことができる。國民再組織の目的もまたそこに存在する。

しかしながら國民再組織を單なる倫理運動に止めようと考へることは甚だ不十分である。從來の國民精神總動員が失敗に終つたのは、それが單なる倫理運動であつて國民に政治的目標を與へなかつた爲めである。從來の國民精神總動員の限界を克服するために新たに生れる國民再組織は

その點に鑑みて國民に對して具體的な政治的目標を明示しなければならない。政治的目標のない倫理は修身教科書の倫理に過ぎず、それでは國民を強力に動かし得ないことは既に試験済みである。まして最近次第に國民の政治的意識の昂揚してくるのが感ぜられる場合、政治性を除外した運動は失敗に終るべき運命にあるであらう。

既に屢々我々は次のやうな聲を聞く。事變以來國民はただ忠實に政府の命令に従つて舉國一致を實行してきた、今更何の必要があつて國民再組織などといふのであるか、と。確かに、單に倫理的な意味においては舉國一致は既に存在したのである。それがなほ消極的で不十分であつたとすれば、國民に明確な目標をもつた政治的意識が與へられてゐなかつた爲めである。このものを與へることによつて國民の倫理的力を倍加して集中的に昂揚させることが國民再組織の意義でなければならぬ。

國民再組織とは簡單にいへば國民の力を最大に發揮させるための運動である。そしてそれには何よりも先づ國民を信賴することが大切である。しかるに國民再組織を單に精神運動として規定することは、國民をなほ信賴してゐないこと、國民の力を必要としながら國民の力を恐れてゐることではないかとの疑惑を生ぜしめないであらうか。

政治を離れた倫理でなく、倫理を離れた政治でもなく、政治と倫理との統一が國民再組織の原則でなければならぬ。

(一九三八年十二月十四日)

## 歳末の感想

この一年における文化界を回顧して最も考へさせられることは、やはり政治と文化の問題である。すべての文化人は、欲すると欲せざるとに拘らず、この問題に直面せざるを得なくなつてきた。

我が國のインテリゲンチヤは果してこの政治と文化の問題に就いて解決を持つてゐるのであらうか。單純な人間は別として、多くのインテリゲンチヤは今もこの問題に對する態度が決つてゐないのではないかと思はれる。或ひは誘ひ出され、或ひは後込みし、或ひは諦め、或ひは勇氣づけられ、一進一退を繰返してゐるといふのが實際ではなからうか。政治と文化といふ退引ならぬ問題の前に立たされて、多數の者はなほ足踏みしてゐるといふのが現状ではないであらうか。

この一年を通じてみれば、我が國のインテリゲンチヤの態度にも多少の變化があつた。一般的にいへばそこには消極から積極への變化が認められる。しかしながらその積極性が果して政治と

文化の問題に對する確信ある解決の上に立つたものであるかどうかといへば疑問である。寧ろ多くの者はこの問題に就いて根本的に考へてみることもしないで右往左往してゐるのではなからうか。

最近インテリゲンチヤは積極的になつたと云はれるが、そのやうに積極的になることによつて、果して日本の文化そのものが内容的に眞に發展しつつあるのであらうか。外部に現はれた作品は別にしても、インテリゲンチヤ自身はそのやうに積極的になることによつて、果して自分の内心に充實を感じてゐるのであらうか。

政治と文化の問題はもとより文化人にのみ關することではなく、政治家にとつても極めて重要な問題である。しかるに我が國の政治家は果してこの問題に對して何等か根本的な解決を持つてゐるのであらうか。否、この問題について眞面目に考へてみようとする程“文化的な”政治家が果して日本に存在するのであらうか。そこに見られるのは單なる便宜主義である。政治家の便宜主義によつて文化が左右されることは危険であると云はねばならぬ。

政治と文化の問題、これは今年においてなほ未解決のままに残されて來年へ持ち越された重要な問題の一つである。今年の文化界を顧みて最も賑かであつたのは何といつても文化が政治に接

觸した部面であつた。しかし外面的な賑かさは本質的な問題の存在を消滅せしめたのではない。

(十二月二十九日)

## 理想と現實

新内閣に對する一般の豫想は、前の近衛内閣が理想にはしる傾向があつたのに對して、今度の内閣は現實的な政治を行ふであらうといふことにあるらしい。

近衛内閣はたしかに理想主義的であつた。それは理想的、餘りに理想的であるやうに見えた。しかし近衛内閣の缺陷は、それが理想主義的であつたところにあるといふよりも、寧ろその理想主義に實行力が伴はなかつたところにある。餘りに理想主義的であつたといふ譏りはあるにしても、これによつて近衛内閣は從來殆ど理想といふものを持たなかつた日本の政治に新しい型を作り出したといふ意義はあつたであらう。政治にともかく理想を持たせようとしたところに、近衛前首相の青年らしき、明朗さがあつたのであり、そこにまた國民は何か清新なものを感じたので

ある。

尤も近衛内閣には斷行力が乏しいといふ憾みがあつたのは事實である。この點において平沼内閣が現實的な政治を行ふやうに期待されるのは好いことに相違ない。けれどもそれが餘りに現實的になつて國民に何か陰鬱な感じを與へることのないやうに注意して貰ひたい。國民に希望を持たせることは必要である。政治は理想を失ふべきでなく、却つて理想を現實のうちに實現し得る行動性が期待されてゐるのである。

今日の日本の政治が理想主義に傾くのは或る意味では必然的なことである。それは東亞の新秩序の形成において指導的地位に立つべき日本にとつて當然のことである。單に現實的な政治は國內に對してはともかく東亞の諸民族に對して呼び掛けることができない。今日の日本の政治は單に内に呼び掛けるのみでなく、更に外に呼び掛け得るものでなければならぬといふことを理解すべきである。日本の政治が一定の理想を持たねばならなくなつたといふことは、日本の政治が世界的意義を持たねばならなくなつたことを示すものであつて、躍進日本に相應することである。

もちろん、ただ理想にはしることは戒めなければならぬ。この點において我々が平沼内閣に期待するところは大きい。現實主義的であることは必要なことであるが、ただその現實主義が國內

的見地にのみとらはれて、今日の日本の政治が國內のみでなく東亞の諸民族をつねに對象とするものであることの忘れられないことが大切である。

理想と現實、このいはば哲學的な問題を解決する新しい政治が新日本には要求されてゐるのである。

(一九三九年一月十一日)

## 文化人の使命

さきには従軍作家があり、また有馬前農相によつて農民文學懇談會の如きも設けられたが、今度拓務省では更に大陸文學生産のために作家を動員しようとしてゐる。このとき他方荒木文相は六帝大總長との懇談會において大學の新使命を説いて協力を要請した。かやうにして時局と文化人との關係は愈々密接なものになりつつある。

日本の、延いては東亞の運命にかかはるこの重大時期において文化人が協力すべき義務のあることは言ふまでもない。誰もこの義務を回避しないであらう。それだけまた文化人には信念と覺悟とが必要である。しかるにその時局的活動について既に國內においても現地においても種々の

批評が行はれてをり、中には文化の權威に關するものもあるといふ非難を聞くことは遺憾である。文化人の時局への協力は文化の權威を失墜させるやうなものであつてはならない、文化の權威の發揚することによつて初めて文化人は眞に時局に協力し得るのである。

由來わが國の文化人についてはその社會的意識乃至政治的意識の缺乏が殆ど定評のやうに言はれてきた。支那事變と共に彼等の間に政治的意識が俄に覺醒されるやうになつたのは甚だ結構なことであるが、併し俄作りのものにはとかく脆弱なところがあるものだ。その俄仕込みの政治的意識が文化の權威を失墜させることにならないやうに注意しなければならぬ。

特に時局に協力するといふことで文化人が安易な氣持になるといふことは警戒を要するであらう。安易な氣持からは如何なる眞の文化も生れ得ない。そこに批判とか懷疑とかといふもののある烈しさが必要とせられる理由があるのであつて、今日においてもこの烈しい精神が失はるべきでない。文化の權威を時局の力に委ねて安易な氣持になつてはならぬ。

今日わが國の文化が世界的なものにならねばならぬ場合、日本の文化が現在世界的水準から見ても如何なるものであるかについての嚴正な認識が要求されてゐる。自己批判は個人にとつても國家にとつても進歩の基礎であつて、ただいはば時局に便乗して自己批判を怠るやうなことがあつ

てはならない。日本の對支行動が日本の民族的エゴイズムによるものでないといふ精神文化の方面においても活かされることが大切である。時局への協力の名において文化人の固有の使命に對する自覺が失はれないやうに切望されるのである。

(二月十八日)

## 確信の問題

ある科學者の集まりで、もし各國の科學者が今後數年間互にその研究を伏せておくことになったら、その間に日本の科學者の仕事は西洋の科學者の仕事に勝つであらうかと尋ねたとき、「勝つ」とはつきり答へた者は一人も無かつた、といふことを或る科學者が書いてゐた。私はそれを讀んで慄然としたのである。

問題は確信の問題である。そして私の惧れるのは、今日何等確信のない理想論の行はれる傾向が甚だしくないかといふことである。

近年一部において「日本學」の建設が唱へられ、荒本文相も過日の帝大總長との懇談會においてそのことを述べたといはれる。わが國の獨自の學問が發達するのは固より極めて望ましいこと

である。しかし日本の學者は自己の良心において眞にそれに對する確信を有するのであらうか。

支那事變の發展は日本の政治に一つの理想を與へたやうに見える。そしてそれに影響されて文化人の間においても理想論の流行が生じた。理想を説くのは固より善いことであり、今日特に必要なことでもある。しかしそのやうに理想を説く者に果して確信があるのであらうか。

これまで我が國の文化人には自信が足りなかつたといへるであらう。そのために日本に獨自の文化の作られることが阻まれてゐたといふこともあつたであらう。確信は主觀的なものであるから無意味であると私は考へない、主觀的な確信も大いに必要である。我々は確信をもつて自分の仕事に従はなければならぬ。しかし今日理想を説いてゐる文化人の多くは、ただ政治に追隨して物を言つてゐるのであつて自分自身には何の確信も持つてゐないといふことがないであらうか。確信を伴はない理想は理想とはいへないであらう。自己の無確信を蔽ひ隠すために、現實の不安から眼を背けるために、徒らに理想論に耽るといふやうなことであつてはならぬ。誠實であることなしに如何なる眞の確信も生じないであらう。今日人々は如何なる過程を経て理想論に達したのであらうか。

新文化の創造は大言壯語の樂天觀ではなく、眞摯な文化人の地下室の仕事である。最も社會的

な仕事も孤獨に堪へ得る魂から生れるのである。時局に協力すると稱して安易な氣持になることが嚴に戒められねばならぬ。

(二月八日)

## 東亞協同體の現實性

ハンス・フライヤーといふドイツの社會學者は、ユートピアの歴史を論じた書物の中で、この世界と全く違つた世界は何處に存在するかといふことが、古來ユートピアを描いたすべての人々の前に横たはつてゐたと云つてゐる。彼等は彼等のユートピアを、空間的に遠い國に求めるか、時間的に遠い過去もしくは遠い未來に求めるかした。

しかるに交通が發達して世界の隅々が結び付けられた今日では、ユートピアを空間的に遠い處に求めることは無意味になつた。奇妙な人間や風習はたくさん見出されるにしても、單純に羨望すべきもの、努力に値するものは何處にも存在しないのである。またユートピアを遠い未來におくことは、如何にしてそこに達するかといふ問題を除外して空想に耽ることであり、そしてそれは遠い過去に理想郷を描くのと同じことである。

我々にとつて問題はつねに現在であり、現實である。また古來どのやうなユートピアも現實から作られてゐる。もしも牛が神々をもつてゐたら、牛は牛の姿にかたどつて神々を作つたであらうとクセノファネスは云つたが、すべてのユートピアはそれを考へる人間の現實に従つて作られるものである。

我々の立つてゐる現實は、いはば多くの現實の交切點であり、ユートピアといふものも我々の現實に交切する一つの、それ自身の現實にほかならない。ユートピアは到る處において現在のであり、あらゆる隅において始まつてゐる、とフライヤーは云つてゐる。ユートピアの像に従つて現實を形成しようとする意志がユートピア的思考の全歴史のうちに生きてをり、その本來の動力をなしてきた。

このごろ東亞協同體の思想に對する批評が現はれ、それが單なるユートピアに過ぎぬかの如く非難されてゐる。東亞協同體はもとより單純に現實をいふのではなからう。それは一種のユートピアであるとも云ひ得るが、しかしこのユートピアと雖も全く非現實的なものであるのではない。

支那事變といふ一つの現實はいはば多くの現實の交切點であり、この事變を如何なる現實の方向に向つて形成してゆくかが根本的な問題である。假にこの事變が主觀的な意圖においては帝國

主義戦争として始まつたにしても、その現實の中から他の一つの現實の可能性が示されるに至つたのである。東亞協同體はユートピアであるにしても、現實のうちに交切する一つの現實の意味を有してゐる。現實を固定的に見て、これと東亞協同體の思想とを比較して、その非現實性を論ずる者は、歴史的現實といふものの意味を知らないものと云はねばならぬ。歴史的現實とは單に客觀的なものでなく、そのうちには我々自身の現實形成の意志をも含む現實である。

(二月二十二日)

## 全體主義と心理學

いつのまにか全體主義といふ言葉が普及し、それが漠然と日本の指導原理であるかの如く考へられるやうになつた。この頃では日本主義そのものも全體主義に吸収されてしまひさうな傾向である。

全體主義といふ言葉は我が國では一般に極めて曖昧な意味に用ゐられてゐる。シュパン流の普遍主義とナチスの全體主義との區別さへ十分に考へられてゐない。むしろその意味の明確に限定

されてゐないことが全體主義といふ言葉の流行の原因となつてゐる。そのうへこの言葉の無難な使用には、我が國のインテリゲンチヤの政治的教養の缺乏、政治に關する思想上並びに實踐上の訓練の不足が見られるやうに思はれる。

最近、高等學校心理學教授要目改正案をめぐつて起つてゐる紛争の如きも、かやうな缺陷を示す一つの例である。即ち文部省の督學官がゲシュタルト（形態）心理學と全體主義の思想を結び付け「國家のために」といふ理由で、高等學校の教授要目をゲシュタルト心理學の立場から改正しようとしたのに對して、九州帝大を除く全帝大及び官私大が一致結束して反對を唱へてゐると新聞は報じてゐる。

その間に傳へられる「陰謀」は別にしても、ゲシュタルト心理學が全體主義の政治思想とどれほど密接な關係を有するか、疑問である。ソヴェトでもその唯物辯證法の立場からこの派の心理學を支持したことがあるのを我々は記憶してゐる。そして現にゲシュタルト心理學の有力な代表者たちはユダヤ人であるといふ理由でナチスによつて追放され、今はアメリカにゐるのである。機械論に反對して全體性を強調するといふだけなら、この派の心理學に限らず現代の心理學の大部分がさうであつて、デイルタイの心理學、クリューガーの心理學などを始めヴントの心理學で

さへさうであるといひ得るであらう。科學上の全體性の思想が直ちに全體主義の政治思想になり得るものではない。

しかしまた我々は公平にいつてゲシュタルト心理學の大きな功績を認めねばならぬ。高等學校の心理學をそれだけにするのは偏頗といはねばならぬが、しかしそれを「ユダヤ的」であるといふ口實のもとに排斥するのは、眞理を愛する科學者の態度とはいへない。官吏の「陰謀」はどこまでも糾弾さるべきであらうが、それをゲシュタルト心理學に對する政治的攻撃に轉ずることはみづから陰謀を行ふことである。

この事件に見られるのも科學の不當な政治化である。我々はこれを日本文化のために深く憂へるのである。

(三月八日)

## 戦争の清掃作用

戦争は清掃作用を行ふ。今度の事變も種々の方面において種々の意味における清掃作用を行つてゐるが、その最も重要なものは封建的なものの清掃であらう。

事變の及ぼす清掃作用は我が國において封建的なものがなほ最も多く殘存してゐた方面において最も著しい。我々はそれを特に農村において、また婦人の生活において見ることが出来る。多數の農民が今や産業、ことに軍需關係の産業に吸收されつつある。事變以來婦人の職業戰線は擴大され、銃後活動を通じて婦人の社會的地位は發展しつつある。かやうな變化はそれらの人々の生活に殘存してゐた封建的なものを清掃することになり、その結果は彼等のイデオロギーにも變化を生ずることになる。すでに、多數の農村の子弟が大陸へ行つて近代的戰爭を経験しつつあるといふ大きな事實は、彼等の考へ方を封建的局限性から解放することに役立つであらう。

封建的なものの清掃は今度の事變がもたらす結果のうち重要なものであり、我々はそこにこの事變の有する進歩的意義の一つを認めることができる。明治以來近代化したといはれる日本のうちにはなほ想像以上に多くの封建的なものが殘存してゐたのであるが、それが今度の事變を通じて清掃され、我が國が眞に近代化されるに至るといふことは、この事變の最も大きな意義に屬すると考へねばならぬであらう。

現在、事實として國民の生活のすべての方面において封建的なものが急速に清掃されつつあるのであるが、他方においては、特にイデオロギーの領域においては、却つて封建的なものが復活

させられつつあるといふことも事實である。しかしかやうな封建的イデオロギーの復活の努力は果して成功するであらうか。大衆の生活は現實に變化しつつあり、變化した生活は必然に彼等の思想に影響せざるを得ないとすれば、封建主義は究極においてもはや大衆の思想とはなり得ないやうに思はれる。

しかし今日、封建的なものの清掃と同時に資本主義文化の種々の弊害が擴大しつつあるのを我々は見てゐる。農村や家庭において保存されてゐたゲマインシャフト（共同社會）的生活の美しいものが破壊されてしまふ危険は大きくなつてゐる。封建的なものを破ると共に資本主義文化の諸弊害を越えて新しい制度を創造的に建設してゆくといふ目標のもとに革新を行ふことが、今日我々の目撃しつつある社會生活の大きな變化に對して必要なことである。（三月二十二日）

## 全體主義と責任

近代における個人主義の根本は責任の觀念であつた。個人とは責任の主體のことであつた。各人は自己に對してそのあらゆる行爲に責任を有するものとせられた。個人の自由の問題も責任の

觀念から考へられたのであつて、もしも自己が自由でないならば我々は自己の行爲に對して責任を負ふことを要しないと考へられるところから個人が責任あるものであるためには自由でなければならぬと考へられたのである。

その商取引においても契約に責任を負ひ、責任をもつて契約を履行するといふことが自由主義の主要な道徳であつた。この責任において個人主義や自由主義は決して單に勝手氣儘に振舞ふといふことを意味しなかつたのである。

政治上の自由主義の根本もまた責任の觀念であつた。議會政治もその本質においては責任の政治であつた。個人主義、自由主義、デモクラシイの墮落は、すべて責任の觀念の喪失に關係するといひ得るであらう。従つて今日いはゆる革新とは、道徳的には、責任の觀念の確立とその發展になければならぬ。

全體主義は個人主義、自由主義、デモクラシイを否定するものとして現はれた。しかし全體主義は責任の觀念を廢止するものでなく、却つて責任の觀念を發展させるものでなければならぬ。個人主義や自由主義においては個人は單に個人に對して責任を有するものであつたとすれば、全體主義においては個人は自己に對してのみでなく全體に對して責任あるものと考へられねばなら

ぬ。デモクラシーを否定して全體主義が獨裁の形をとつて現はれたといふことも、デモクラシーにおいて政治が無責任になつたのを責任ある政治に變へようとした限りにおいて意義があつたのである。

今日我が國の全體主義的風潮の中において特に考ふべきものはこの責任の觀念である。そのことは、よく言はれる如く自由主義が完全に發達しなかつた我が國においては、特に大切である。全體に名を藉りて個人の責任が回避され、悪い自由主義よりも一層無責任になるといふことがあつてはならぬ。ただ時流に従ふといふのが全體主義ではない、それは個人が自己の責任を回避することではない。自己の責任の觀念を有する者は自主的でなければならぬ。ただその自主的といふことが社會と國家に對する自己の責任と結び付けることが要求されてゐるのである。今日の全體主義的風潮の中において責任の道德が確立され發展させられなければならぬ。

(四月十九日)

## 祕密の漏洩

非常時には祕密といふものが國家の利害に特に大きな關係を持つてくる。祕密にせねばならぬ事柄が殖えるばかりでなく、祕密が守られねばならぬ必要も増してくるのである。各國はあらゆる手段に訴へて他國の祕密を探らうとする。スパイ戰は戰爭の重要な部分であるといひ得るほどである。

しかし祕密が守られねばならないのは單に對外的な關係においてのみではない。對内的にも非常時には祕密を守ることが全體の利益のために大切であつて、政府關係の諸會議、諸調査會、諸委員會等は特にその責任を有してゐる。例へば政府の經濟政策、就中物價統制の如き重要問題に關してなほ祕密にしておくべき事柄が一部に早く漏洩するやうなことがあるとすれば、それが投機に利用されるといふこともあり得るし、たとひそのことがない場合においても、委員會の決定事項などが一部にのみ早く分るといふやうなことがあれば、そこにおのづから感情も絡んできて、政府の期待する物價政策への全面的な協力に罅が入るといふことにもなり易いであらう。統制の

時代においては特に政府關係の諸機關が守るべき秘密を守り、その政策發表の方法についても一段と注意することが肝要である。

秘密が漏れるのは秘密を漏らす者があるからである。他の秘密を竊むスパイは、その行爲自體は卑しむべきであるにしても、自分の國家の爲めにする行爲として辯護されることもできるが、自分から秘密を漏らす者に至つては全く辯護の餘地がない。

なんでも秘密にしたがる心理となんでも秘密を漏らしたがる心理とは、相反するやうで實は一つのものであり、秘密の有する心理的魅力を示してゐる。なんでも秘密にしたがる者はなんでも秘密を聞きたがる者であり、またなんでも秘密を漏らしたがる者である。社會的にいつても、なんでも秘密にしたがる社會には、なんでも秘密を聞きたがる者が多く、またなんでも秘密を漏らしたがる者が多い。この風をなくするには公明な場所即ち輿論の發達が必要であり、輿論の發達した社會においては却つてよく秘密が守られるものである。官廳などにおいても「極秘」をなるべく少くするといふ氣持があつて初めて秘密を守る氣風が養はれるのである。

秘密を守ることが倫理的に大切なことは分つてゐても、秘密そのものはつねにこれに反して心理的に誘惑する。この心理的誘惑に勝つて秘密を守るといふことは、何よりも教養の問題である

と思ふ。守るべき祕密が守られるといふことは社會における教養の進歩の一つの重要な兆しである。

(四月二十六日)

## 景氣と文化

この頃よく賣れるのは決して本ばかりではないやうだ。美術界にも思はぬ花が咲いて、名のあつる畫家の作品など、天井知らずに暴騰を續けてゐるとのことである。

由來、成金時代は新畫時代といふのが美術商の間の通念であるらしい。新畫を狙ふのは骨董界では初歩の入門時代のことなので、新畫に人が集まつてくる時代は俄かに富裕階級が生じたことを示してゐる。ところが最近ではそのやうな新畫に熱中する者が激増し、かくて例へば大阪美術俱樂部未曾有の新畫専門の大賣立がこの二ヶ月間に三回續いたといふ新記録が作られてゐる。成金時代が來た兆しであらうか。

ともかく支那事變の當初と今日とでは注目すべき相違があることは事實である。事變の初めには戰爭中に美術品漁りでもあるまいとの遠慮から豫約された大賣立は悉く中止されたさうで、大

阪美術俱樂部などでも例年一千萬圓を超える賣立額が昨年は四百萬圓を割るといふ寂しさであつたのが、この頃になつて、軍需景氣が爆發したのであらうか、いはゆる新畫時代の奇現象が現はれてゐることである。この變化は美術界にのみ限られたことであらうか。

もちろん私はかやうな現象を一概に非難しようとは思はない。それによつて美術家たちが潤ふことであれば、ともかく喜ぶべきことである。またそれが成金景氣に依るものであるとしても、それは日本人の風流心とか美術愛好の國民性とかを現はすものであり、文化的向上に對する希求がすべての人間において如何に深いものであるかを語つてゐるであらう。

しかし文化的にいつても、そこにはまた大いに警戒すべきものがある。成金趣味の氾濫が美術界に悪影響を及ぼすといふことがないであらうか。文化は一種の贅澤であり、一國に經濟的餘裕がなければ文化は開花しないとしても、成金や成金趣味から眞の文化の生れ得ないことは確かである。これは單に美術界のみのことではない。昔は貧乏なものと決つてをり貧乏を得意にした文學者の間にも一種の成金が生じつつあるといはれる今日、すべての文化人には新たな反省が要求されてをり、政府の文化政策においても考ふべき問題がある。

更に根本に溯つて、もし云はれる通り新畫時代が成金時代であるとすれば、成金は今日如何に

して生じ得るのであらうか。統制、殊に物價統制が最も重要なことになつてゐる場合、いはゆる新畫景氣は深く検討すべき問題を提供してゐる。

(五月三日)

### 職業觀念の變革

先日、地方長官會議の席上、二三の知事から、股賑産業の影響で下級官吏に轉業者が續出してゐることが指摘され、速かにその對策を樹立すべきことが要望された。また同會議における訓示の中で荒木文相は、この頃喧しい小學校教員の不足の問題に論及した。これも軍需景氣の影響に依るものである。

實際、右のやうな事實、そしてそれに伴ふ官吏や教員の質の低下は、國家にとつて重大な問題である。その對策として一般に考へられるのは待遇改善であり、それは先づ是非實行されねばならぬことである。

けれども他方、右のやうな事實が主として股賑産業の影響に依るものであるとすれば、かくの如き影響を及ぼしつつある股賑産業そのものにも根本的な検討を加へ、その惡影響を除くことに

努めなければならぬ。その影響は經濟的なものであると共に道德的なものである。これを現在のままに放置しておいては、下級の官吏や教員の待遇改善も、その効果を擧げ得ないであらう。

下級官吏や小學校教員の待遇は以前からあまり善くはなかつた。それにも拘らず成り手があつたといふには、一つの理由として、そのやうな職業に結びついた身分的觀念が考へられるであらう。それらの職業は單に經濟的觀念からでなく身分的觀念から、即ち官吏や教員は他の職業の者よりも身分的に尊敬されるものであるといふ觀念から、選擇されたのである。

しかるに最近の社會的經濟的情勢はかやうな職業觀念を變革しつつある。職業の身分的觀念が毀れて經濟的乃至功利的觀念が次第に支配的になりつつある。かやうな變化はこの頃の學校卒業生の就職傾向のうちにも見られるであらう。職業の身分的觀念は封建的なものである。支那事變の影響の最大のものの一つとして私は封建的なものの清算といふことを擧げたいのであるが、これもその一つの場合である。

封建的な職業觀念の破壊されることはそれ自身としては善いことである。しかしそれがただ功利的な職業觀念に代るのは困つたことであつて、この觀念を更に變革して新しい職業觀念、職業の社會的機能的觀念と人格的使命的觀念との統一が確立されねばならぬ。この變革はもとより現

在の經濟機構の改革と結び付いて可能である。

(五月十日)

## 常識の效用

革新といつても常識が必要である。かう云へば、常識で間に合はなくなつたからこそ革新が必要になつたのではないか、と反對されるかも知れない。しかしさう云つても、これまで我が國においては常識が求めてゐる程度の革新でさへ行はれてゐるであらうか。

そればかりでなく、革新の基礎はやはり常識であると云ふことができる。いろいろの試み、いろいろの失敗の後につきよく常識へ戻つてくるといふことは、個人の生活においても社會の歴史においてもつねに見られることである。常識とはつまり長い間に鍛鍊されてきた試験済みの知識であり思想である。常識を單に保守的なものとのみ考へることは當らない。實際に革新が必要になつて來た時代においては、革新の行はねばならぬといふことが今度は常識になつてゐるものである。

非常時に失はれ易いのは常識である。國民は非常識になつてゐないのに、革新を唱へる者がと

かく非常識になつてゐるのである。何か新奇なことを云はなければ革新的でないかのやうに考へ、そして實は從來の西洋模倣の風に知らず識らず従つて、そのやうな新奇なものをドイツなどの外國から借りて來るといふが如きことは特に慎まなければならない。それが既にひとつの非常識である。革新家は自己の主觀的な情熱に驅られてかやうな非常識になり易いものである。しかし非常識であつては革新は行はれないであらう。なぜなら常識は觀念的に個人のうちにあるものでなく國民のうちにあるものであり、非常識であつては國民の協力を得ることができず、その協力なしには如何なる革新も成就されないから。常識を重んずるといふのは國民の力を重んずることである。

常識は或る客觀性を持つてゐる。それは實際生活において試験されてきたものであり、廣く國民の間で支持されてゐるものであり、それ自身組織的なものであるから。革新家が自分の意見を持つてゐるのは好いことであるが、その意見は絶えず常識と對質して作られたものであることが必要である。

すでに久しく我が國においては種々の革新的意見が現はれてゐるに拘らず、未だ本質的な革新は何も行はれてゐないとすれば、ここに一度常識に還つて考へ直してみることが必要なのではな

からうか。國民は革新を熱望してゐるのである、ただそれが非常識であることを好まないのである。常識の效用について反省しなければならぬ。

(五月十七日)

## 論理の峻嚴

依然として闇相場が行はれてゐるといふ。依然として闇取引が盛んであるといふ。法律は遂に現實に先立つことができないやうに見える。經濟警察の眼をかすめて、次から次へ新しい手段により闇相場の取引が行はれてゐるといふ。

この事態はもはや法律と警察の力だけでは抑止することができないといふので、國民の道徳的自覺の必要が新たに叫ばれるやうになつた。問題はそこで國民精神總動員に關係してくるであらう。闇取引が如何なる人々によつて最も盛んに行はれてゐるかを考へるならば、國民精神總動員は最も何處に向ふべきであるかが明瞭になる筈である。

しかしいはゆる闇相場も、自由主義經濟の原則からいへば、何等「闇相場」といふべきものではないことが注意されねばならぬ。それは自由主義の論理の必然的な歸結である。我々は現在の闇

相場においてこの論理の峻嚴さを今更の如く知らされるのである。單なる「心」によつてこの論理を破ることは不可能である。

もちろん國民の道德的自覺に訴へることは必要である。しかし道德にしても、それ自身齊合的な、組織的なもの、従つて論理を含むものでなければ無力である。國民精神總動員に對して我々が思想性を求める理由もそこにあるのであつて、單に個々の思ひ付だけでは今日の事態は救ひ難い。

一國の經濟にゆとりのある間はその論理も苛烈さを示さないが、ゆとりが少くなるに従つて論理は愈々その峻嚴さを現はしてくるものである。これは問題のインフレーションについても深く考へておくべきことであらう。

一つの論理に對抗し得るものは結局他の論理である。心とか心理とかいふものは固より大切ではあるが、このものもそれ自身論理的になるのでなければ、論理に對抗し得ない。求められてゐるのは單なる心理でなくて新しい論理であり、この論理が主體化され心理化することである。今日必要なのは自由主義に對する統制であることは明かであるが、この統制は自分自身新しい論理によつて組織されるのでなければ、遂に自由主義の論理に對抗し得ないであらう。

論理の峻嚴さが明瞭になり始めた今日において、論理を輕蔑し、すべてを「心」の問題として片付けようとする風があり、寧ろその風がインテリゲンチヤの間において甚だしくなりつつあることは、敗北主義の一種ではなからうか。闇相場の論理はこの際教訓的である。

(五月二十四日)

## 國民再組織の再吟味

改組後の國民精神總動員に對しては既にいろいろ批評が出てをり、またいろいろ希望が述べられてゐるやうである。何にしてもその運動が今日の日本において根幹的な重要性を有することは疑ひなく、それを如何に成功させるかに多くのものが懸つてゐることは明かである。

ここでは先づ依然として思想性が問題になつてゐる。思想性を問題にするのはインテリゲンチヤの偏執であるかのやうに言ふのは、顧みて他を言ふものであり、問題を回避することである。知識階級の動員は國民動員にとつて重要な意義を有するばかりでなく、思想性のない運動は國民に對して指導的であり得ず、國民の力を内部から盛り上らせることは不可能である。

肇國の精神といひ、八紘一字の精神といふ、それを力説することは誰も異論がない。八紘一字の精神は日本民族の永遠の理想、永遠の使命をいつたものである。必要なのは、その永遠の理想を歴史の現在の段階に相應して具體的に内容的に規定することである。永遠なものは時間に於て示され、ただ歴史を通じて實現される。歴史的に時代的に規定された思想が求められてゐるのであり、かやうな思想のみが現實に思想といはれ得るのであつて、永遠なものをそれだけとして語ることは神祕主義になつてしまふのほかないであらう。

しかし問題は思想のみでなく、組織の問題である。そして國民精神總動員を時局の現在の段階において、またその今後の發展の見通しのもとに效果的に遂行してゆくためには、國民再組織の問題がどうしても取り上げられねばならぬ必要がある。

國民再組織は近衛内閣の時分に唱へられて實行されずに終つた問題である。そのとき閣僚であつた木戸現内相は平沼内閣になつてから、それを取止めるやうに言明したと覺えてゐるが、時局のその後の發展は、國民精神總動員の完全な遂行といふ點からいつても、國民再組織の問題が今日再び熱心に再吟味さるべき必要を愈々明瞭にしてきたと思はれるのである。

國民精神總動員と國民再組織とは元來不可分であるべき性質のものである。その一方を不問に

付しておいて他方を成功させようとする事は無理であるのではないか。國民再組織の問題を日本の現實に相應した獨創的な仕方で解決することが今日の政治家に要求されてゐる能力である。

(五月三十一日)

## 品質の統制

次第に廣くスフ入りの品の使用が餘儀なくされるやうになつて、そのやうな品物の質が悪くて困るといふ聲が聞かれる。スフの如きものについてその品質の改良に最善の努力がなされねばならぬ。

しかるに斯ういふことが言はれてゐる。今日の狀態においてはその品質の改良は望まれない。どんな物を作つても賣れるのであるから、作る方では質を善くすることに努めない。例へばスフのやうなものでも、綿や毛と競争しなければならぬ時には、品質の向上に一生懸命になるが、そのやうな競争がない時には、その努力をしないといふのである。

かかる狀態においては品質の統制が必要である。物價の統制だけでは足りない、量的な統制の

みでなく、質の上での統制が行はねばならぬ。物價の問題はもとより大切であるが、それに心を奪はれて品質の統制を忘れてはならないのである。

しかるに量的な統制は外部の力によつて行ふことができるにしても、質の問題になると主として生産者自身の自覺に俟たねばならぬ事情にある。この自覺は從來の營利主義的な觀念の修正を基礎としなければならぬ。個人的な利潤本位の立場から公益の立場へ、考へ方の變つてくることが要求されてゐる。

需要が増して來ると品質が落ちるといふのが普遍的な状態である。これは物品にのみ限られない。文學書がよく賣れるといはれると、凡作愚作が氾濫するやうになる。それを讀まされた者は文學は詰らないと考へて顧みなくなり、やがて文學書は一般には賣れなくなるかも知れない。文學のやうなものの場合にはそれでも濟むが、日常生活の必需品に至つてはさうはいかぬ。何でもあるもので我慢して求めねばならないのである。生産者の社會的良心と、經濟の社會的意味についての考へ方の發展が特別に望まれるわけである。

需要が殖えて品質が下るといふことは、精神的並びに物質的生産物のみでなく、人的そのものにもそのやうな傾向がありはしないかと心配されるのである。人間の需要が多くなるに従つて、

各人が自己の向上發展に努力しないといふ傾向があつては困る。そのうへ惡貨が良貨を驅逐するといふ法則が現實に行はれるとすれば、甚だ憂ふべきことである。ここでも品質の統制が必要である。それは單に外部からの統制の問題でなく、内部からの統制の問題として、各人が良心を鋭くし、社會と國家に對する眞の責任を目覺しなければならぬのである。

(六月七日)

## 政治的時期

本年度の物動計畫も決定して、政府は國民の協力を求めてゐる。國民は一人残らずこれに協力しなければならぬ。唯一人の油斷から全體の不幸の生ずることがあり得るのを考へて、すべての國民は互に他の模範となるやうに心掛けねばならない。

國民に對して指導的地位にある者にはもちろん確信がなければならぬ。指導者自身に確信が缺けてゐるならば、國民は一體となつて動くものでなく、協力をためらつたり、なまけたりする者が生じ易いものである。指導者自身、その計畫に對して絶対に確信を有するものでなければならぬ。

今日統制經濟は經濟に對する政治の優位のもとに立つてゐる。統制經濟を規定するものは政治

である。だから政治的目標がはつきりしてゐなければ、經濟的目標もはつきりしない。先づ政治的目標を明確にすることが經濟的目標を明確にする所以である。

そこでまた國民の經濟的協力を強固にするためには國民に政治的目標が何處にあるのかを理解させねばならぬ。これまで國民のうちに經濟的協力をサボつたり、躊躇したりするやうな者がなほ存在したとすれば、政治的目標が「百億貯蓄」といふやうに具體的に示されてゐなかつたことに依るのではないかと思はれるのである。

國民を經濟的に協力させるためには、國民を政治的に協力させねばならない。政府の對歐洲政策が決定したと云はれても、國民には何のことだかサツパリ分らないやうな有様では、國民動員は眞に徹底することができない。外交を先づ國民的外交とならしめねばならぬ。國民の政治的協力への道を塞いではならないのである。

協力は政治的協力和經濟的協力和二重のものであつて一つのものである。政治的協力の道を考へないで經濟的協力を求めても完全であることができぬ。國民精神總動員と國民再組織の問題とは元來不可分のものであると我々が云つたのも、その意味である。具體的な政治的目標を示して國民の政治的協力を求めることは、あらゆる協力の前提であるといふ重要性を今日有してゐる。

時局はまさに政治的時期に入つてゐる。經濟統制が強化されるやうになればなるほど、我々はそのことを種々の意味においていよいよ強く感じるのである。

(六月十四日)

### 不定な知識人

この頃、いはゆる國策文學が下火になつて、藝術至上主義的文學の傾向が現はれてゐるといふ。また長篇小説の流行がすたれ始めて短篇小説の復活が唱へられてゐるといふ。かやうな變化は絶えず新しいものを求めるジャーナリズムの商業主義にも依るであらうが、單にそれだけであるとは考へられない。

もちろん國策文學の必要が外部においてなくなつたわけではなからう。その必要は益々増して來たとさへ云へる。それなのに既に國策文學の退潮が現はれたとすれば、これまで國策文學に熱中された時においても國策とか政治とかが甚だ安易に、また安價に考へられてゐたことが今になつて證明されたのではなからうか。

國策文學から藝術至上主義文學への變化は作家が内省的になつてきたためであるといはれてゐ

る。政治とか國策とかが内省的になると共に消えてしまふやうなものに過ぎないとすれば、日本にとつて心細いことと云はねばならぬ。人間の本質的な政治的存在性について深く考へてゆくならば、人間性の文學も政治的であることができ、かやうな文學にして政治に對して本質的な影響を與へることができる。政治性を有する文學といふのは單に政治から規定された文學のことではなく、反對に政治に作用するやうな文學であつて好いわけである。

この頃文學界の變化は今日なほ我が國のインテリゲンチヤが根本において不定な現象であつて、主體的に確立されたものでないことを示してゐる。かやうな不定性の他の、逆の現はれは、最近またインテリゲンチヤの間に次第に顯著になりつつある行動派ともいふべきものの主張である。この一派の者も本質的に不定な現象に屬してゐる。時代の客觀的な動きに對して適合し得なくなるに従つて彼等は益々焦躁し、あらゆる理論をもつて批評的であつて行動を妨害するもののやうに考へる。理論を否定することが一種の敗北主義であることを彼等は知らないのである。

インテリゲンチヤの組織されることが必要である。この重大な時期において彼等が不定な現象であるのは、彼等が組織されてゐないためである。しかし彼等を外部の力によつて組織すること考へてはならない。インテリゲンチヤは内的にしか眞に組織されないものである。彼等が自主

的に内部から組織されることに對して一層積極的な活動を期待すべきである。(六月二十一日)

### 流言蜚語

依然として流言蜚語が絶えないやうに思はれるのは甚だ遺憾である。流言蜚語は社會不安の原因であり、これに對する取締りを嚴重にすることが必要である。

インテリゲンチヤは物を合理的に考へてゆくもので、流言蜚語のやうな根柢のないものはインテリゲンチヤとはおよそ縁のないものと思はれるのに、彼等がむしろ流言蜚語の元である場合が尠くないといふのは困つたことである。それはインテリゲンチヤが今日次第に社會的に根柢のないものとなつてゐる一つの證據であるのであらうか。勿論今日インテリゲンチヤの社會的存在意義が消滅したのではなく、減少したのでもない。却つてそれは増大しさへしてゐるのである。そこで眞のインテリの後退は疑似インテリの跋扈となる危険がある。疑似インテリに踊らされねばならぬほどインテリが無信念、無思想になつて好いのであらうか。

流言蜚語はすべて不安の表現である。それを傳へる者はもとより、それを作る者も自分が不安

であるからそれを作るのである。流言蜚語は一定の社會的雰圍氣の中で生れるものであるが、それを自分の個人的な目的のために利用する者が存在することによつて益々惡質のものとなるのである。言ひ換へると、流言蜚語は單純な不安の表現に止まるのでなく、それを作る者、或ひはそれを傳へる者の意識的な乃至無意識的な利己的意圖と結び付いて不純にされてゐるのが常である。

流言蜚語をなくするには、すべての意見が知的な公共的な表現をとるやうにすることが肝要であるのはいふまでもないであらう。殊に政治は謀略だといふやうな考へ方があつては流言蜚語はなくならないであらう。謀略は謀略によつて倒れる如く、一つの流言蜚語が自分に都合なやうに見えるために許しておく者は、みづから他の流言蜚語に害されることになるのである。どのような流言蜚語でも存在することは決して健全な状態とはいへぬ。

政治も、外交も、思想對策も、最早謀略では眞の成功はあり得ない。それらはすべて國民の輿論を基礎にした公明なものでなければならぬ。國際的デマを粉碎して支那事變を眞の成功に導くためには、日本の政治が謀略でなくて公明な原理に立つてゐることを實踐的に知らせねばならず、またそのためには國民の積極的な協力の妨害となつてゐるやうな流言蜚語の如きものを絶滅しなければならぬ。

（七月五日）

## 時の問題

物價の騰貴はなかなか止まないやうである。物價問題は國民生活の安定にも關係する最も重大な問題である。

政府においては物價委員會を作り、その物價政策大綱が發表されてからでもよほど時を経たが、それがどのやうに具體化されたのか聞かないし、その間に一方、物價は遠慮なく騰つてゐる。このやうにして放任しておけば、統制は益々困難になるばかりである。一旦騰つた物價を引戻すといふことは殆ど不可能である。

すべて、時が大切である。とりわけ非常時においては時が大切である。非常時とは特別に時が大切であるやうな時期であるといふことができる。あらゆる時があらゆることにとつて同價値であるのではない。すでに自然は時を選ぶ。自然にも選ばれた時がある。この時に遅れてはならないのである。人間の行爲においては更に一層時が問題であり、行爲の價値は單にその内容によつてのみ決定されるのでなく、その半ば以上はそれが爲される時によつて決定されるのである。

とりわけ政治においては時が重要であり、時がすべてであるときへ言ひ得る。學者の研究室においては、結果に達することが半年遅れようと一年遅れようと、あまり問題でないかも知れない。併し今日物價委員會の如きものは學者の研究室の如きものであることができない。政治にとつては時が問題である。調査や研究はもとより必要であるが、それは平生に用意しておくべきことであつたのである。從來、委員會とか調査會とかは、政府の責任のがれのために作られた場合が少なくかつた。そのやうなことは今日もちろん許される筈がない。すべて困難な問題は一寸延ばしに延ばしておくといふやうなその日暮しの政治は最も無責任であるといはねばならぬ。

問題は時である。最近精動で學生の斷髮等々を決定したが、あのやうなことで支那事變の當初に斷然實行させてをれば、恐らく今日のやうな不平は起らずに濟んだであらう。それを漸く今日になつて、誰が考へても他にもつと重要なことが明かに存在する場合、實行させようとするから一層多く不満も生ずるのである。

時の問題はもちろん時の宜しきを得るといふことであり、従つてそれは場合によつては時を待つといふことである。徒らにあせるのもまた時を知らないものといはねばならぬ。

(七月十二日)

## 機構の單純化

統制の進展につれて民間人の官廳との交渉も頻繁になつてくるやうである。ところでその人々の話に依ると、或る一つの事柄について各省の間で、或ひは各局乃至各課の間で、方針が一定してゐないために困るといふ。

殊にそのためにわざわざ地方から出て來たのに結局要領を得ないで迷惑することも尠くないとのことである。かかることは今日の如く總てが急速に變化しつつある場合には已むを得ないにしても、なるべく無くしなければならぬはいふまでもない。

かやうな不統一の重要な原因の一つは最近特に官僚機構が膨脹してきたことにある。この膨脹は統制の擴大強化と關聯してゐる。しかるに機構が尨大なものになると共に、今度はそれを相互に連絡したり統制したりするための機關が必要になり、かくして機構は更に膨脹し、いはゆる尾大振はずといふ状態になる。この状態を改善しようとして新しい機關が作られると、今度はこれが更に一つの重荷になつて益々非能率的になるといふことが生ずるのである。

官廳の間の不統一は從來の繩張り意識が無くなるのでなければどうにもならないものである。繩張り意識があるために、それを連絡したり調整したりする機關が必要になることがあり、折角その機關が出来ても、その機能を十分に發揮し得ないことになるのである。

近年官僚機構は膨脹するばかりである。しかるに非常時に必要なのは却つて機構の單純化ではないであらうか。非常時とは機構の單純化が必要であるやうな時期であるといひ得るであらう。

實際、例へば五相會議は非常時になつて必要になつてきた内閣制度の單純化の一方法である。進んでは國務大臣と事務長官との區別によつて大臣をもつと少數にすることも考へられるであらう。機構の單純化は責任の所在を明かにして能率を擧げる方法である。

もちろん統制には機構の擴大を必要とする方面もあるであらうが、これとても、國民の自主的協同が強化されてくればその必要も減ずるのであつて、もし國民に協同の精神がないならば、いくら機構を擴大しても目的は達せられない。如何にして積極的な協同の精神を國民に植ゑつけるかが問題であり、それは固より機構の問題ではないのである。

(七月十九日)

## 良書の基準

あらゆる賑々しさにも拘らずどうにもならない文化の停頓を眞面目な文化人は感じてゐるやうである。今は靜觀の時だといはれるのも、そのためである。それは必ずしも消極的な言葉でなく、むしろそこに逞しい文化意志が隠されてゐるかも知れない。

文壇などにおいて老大家の活躍時代になつたといはれるのも、同じ事實に對する皮肉として受取られる。老大家の活動が特に目立つほど文學の停滯が著しくなつたのではなからうか。

ところで今文部省では國民の讀書指導を積極化することである。即ち全國地方長官並びに各種團體に對して、爾今文部省推薦圖書はその推薦理由を付して各府縣の公報その他の刊行物、各團體の機關誌等に毎月掲載するやう通達したといはれる。そのやうな良書推薦は既にラヂオによつても行はれてゐる。更に出版社に對しても良書の基準を示すことになつたといはれ、かくて將來は劃然と良書と惡書とを二分して國民の讀書指導に當る意圖を有すると傳へられてゐる。

それは惡書の横行が餘りに甚だしいためであらうか。良書推薦は結構であるが、推薦された本

はほんとに國民に親しまれてゐるであらうか。どんな傑作でも學校の教科書になると面白くないやうに、文部省推薦などとレッテルを貼られると却つて讀みたくなくなるといつた心理もあるものである。

いつたい良書と惡書とを劃然と區別する基準は如何なるものであらうか。世の中に惡書はないといふやうな極端な眞理はこの際問題にならないにしても、良書の基準といふものはなかなか難しい。出版當時には批評家に認められないで惡評を蒙つたものが、やがて立派な古典になつた例は稀でない。良書推薦は無論やつて好いことであるが、同時にその基準の困難についての自覺がなければならぬ。

すべて困難を知ることが大切である。學問の困難を知つてゐる者は良い學者であり、文學の困難を知つてゐる者は良い作家であり、批評の困難を知つてゐる者は良い批評家である。良書の規格化はそのやうな困難を蔽ひ隠す虞れがある。殊に官廳の仕事である場合、ただ無難を求めて眞の批評精神を失ふことになり易い。

現在のやうに文化の停頓が感じられてゐる時には、一面的な基準による良書普及の積極化は文化を益々固定化する危険さへあるのである。それが眞の創造的精神を阻害することにならぬやう

細心の注意を要する。文化の停頓と感ぜられてゐるものを克服してゆくことが今日の重大な問題である。

(七月二十六日)

## 音の統制

音の統制が行はれるといふのはよいことである。「隣のラヂオ」は以前からよく苦情の種であつたが、それも今度公けに注意されることになるといふのは結構である。

音の統制は近代都市における重要な問題の一つである。それは建築、交通機關、都市計畫にも關係する大きな問題である。外國の都會に比較して騒音の多い我が國の都會がもつと靜かな住み場所になるのは、身體上からも、精神上からも、必要なことである。

音の統制はもちろん音曲、音樂についても考へられるものである。そしてこの統制が今日では問題になつてゐる。

映畫、演劇、ラヂオ、レコードなどによつて、新作の音曲、歌謡が氾濫する。特に支那事變以來、時局をあてこんだ音曲、歌謡が續々と作られてゐる。そしてこれは國民精神作興の手段とし

て、官邊からも歡迎助長されてゐるやうである。だがそれら多數の歌謠のうちに果して幾許の傑作があるのであらうか。事變關係の歌で好いのは馬の歌だけだと云ふ者がある。ここにも確かに統制の必要があるのである。

眞に求められてゐるのは會社の商業主義のもとに作られる歌でなく、溢れる感激の發露であり藝術的に價値の高い作品である。もちろん傑作ばかりが現はれることを望めるわけではない。しかし粗製濫造の愚作惡作の氾濫はその影響からいつて考へねばならぬことである。文學の如き場合には自分で作品を讀まなければ影響されることもないが、外部から強制的に耳に入つて來る音樂の場合にはその影響が恐ろしいのである。

歌謠の取締りにおいては歌詞だけが問題であるのではなく、寧ろ重要なのはその音樂の性質である。文句は無難であつても、その曲の低調愚劣なものがある。歌詞にのみ拘泥して音樂の本來の性質を忘れてはならない。それにしても我が國の音樂はどうしてかう哀調を帶びたものばかりなのであらうか。時局關係の歌謠にしてもその音樂の根本において哀調を帶びたものが尠くないやうである。この哀調の特殊な哲學的意味について深く考へてみる必要がある。

古の聖人は音樂によつてその國の風俗人情を知り、そして國民教育における音樂の意義を重要

視した。興亞日本にふさはしい希望と活動と理想とに國民を鼓舞するやうな新しい音楽が作られなければならぬ。

(八月二日)

## 國語の改良

國語國字の問題についていろいろ論じられてゐる。それが今日の日本にとつて重要な問題であることはいふまでもない。ローマ字論、カナ文字論、振假名廢止論、等々説はいろいろあるが、問題は簡單でないやうである。

困難は、言葉の問題が單に機械的な便宜主義で片付けられないところにある。言葉は人間の生活と有機的に結び付いたものである。國民の生活が變らなければ國語も變らず、國民の生活が變れば國語もおのづから變つてゆくのである。國民の生活から抽象して國語の問題を考へることはできないわけであるが、從來の國語改良論には案外そのやうな抽象論が多いのではなからうか。國語の改良は國民生活の改良と結び付けて考へられねばならぬ。

言葉は思想の表現である。これは極めて簡單な眞理であるが、この簡單な眞理も從來の國語改

良論においては案外忘れられてゐるのではないかと思ふ。思想が變らなければ言葉も變らず、思想が變れば言葉もおのづから變るのである。言葉の問題は單語の問題であるよりも文章の問題であり、その根柢には思想の問題がある。

明治時代における文語體から口語體への發達は自由主義とかデモクラシーとかの發達と關係して可能であつた。新聞の論説が現在のやうに言文一致體になつたのも、普通選舉が唱へられた頃からであるとのことである。

早い話が、最近の政治の言葉に「秩序」とか「創造」とかといふともかく新しい言葉が現はれるやうになつたのは、前内閣における一種の思想的若さのためであり、平沼内閣になつてからその言葉が古めかしくなつたのも、この内閣の思想的年齢を示してゐるやうに思はれる。

國語の改良には思想の進歩が必要である。國民思想を何處へもつてゆくかは國語の改良にとつても大きな關係がある。思想の方向を確立しないで國語改良の方向を決定することができない。思想の上ではデモクラチックな思想とは反對の方向をとりながら、國語だけをデモクラチックな方向に改良することは不可能である。

國語改良論者が單に言語學的問題に止まらず、生活及び思想問題に深く留意することを希望し

たい。

(八月九日)

## 革新と傳統

學徒隊案をめぐつて文部省と大日本青年團との對立が傳へられてゐる。

支那事變の發展は必然の勢をもつて舊い傳統を破壊してゆく。欲すると欲せざるに拘らず革新は進行せざるを得ない。我々は今「青年團の危機」といはれるものに於てその一つの例を見るのである。

元來、青年團は、氏神の祭禮などを中心とした昔の若衆の組織から發達したものであつた。それは元來自然發生的なもので、村や町における共同社會（ゲマインシャフト）的生活の一表現として、それぞれ特色のある傳統を有するものであつた。尤もそれが大日本青年團に統一されていはゆる「官製青年團」になると共に、既にそのやうな共同社會的要素は次第に消滅してゆく傾向にあつたが、この傾向は今度の學徒隊編成によつて飛躍的に増大することになるであらう。

文部省は復古主義或ひは傳統主義の本尊のやうにいはれてゐる。その文部省が傳統破壊的と見

られるやうな學徒隊案を作るやうになつたのである。それは外國の模倣であり翻譯であるなどといつてもはじまらない。我々はそこに、世界が民族主義者の考へるのとは違つて遙かに統一的に動いてゐることを知り、またそこに、傳統主義に對しておかれてゐる必然的な限界を見るのである。

青年團はもと共同社會的生活の一表現であつた。その共同社會が封建的なものである限り、それは變化しなければならず、また變化してきた。しかし今日の革新の目標は、近代的ゲゼルシャフト（集合社會）を超えた新しいゲマインシャフト（共同社會）を作ることであるとすれば、青年團の傳統のうちに存するやうな共同社會的要素が新しい仕方で生かされねばならないのである。

共同社會的生活の表現であつた盆踊りや村芝居などがなくなつて映畫が農村青年の唯一の娛樂になつたり、全國一齊のラヂオ體操だけになつてしまふといふのは欺かほしいことである。盆踊りや村芝居に新しい形式と内容を與へ、地方の青年の生活に即した新しい舞踏會や劇團組織を作ることが大切な問題である。學徒隊の編成は盆踊りをラヂオ體操に變へてしまふといふ類のものになりはしないであらうか。

革新は必要であるのみでなく、必然である。しかし官僚的革新が抽象的なものになり易いこと

に注意しなければならぬ。共同社會的生活の傳統と革新との關係を正しく理解するならば、文部省と青年團との一層高い目標からの和合の道は存在する筈である。

(八月十六日)

## 選擇の必要

選擇の必要は、讀書の場合などにおいては恆にいはれてゐる。濫讀を避け、本を選択して精讀せよといふことは、讀書法における初歩的教訓である。また實際この教訓は守られて好いものである。

かやうに選擇の必要を説く意味は、讀書において自主的であれといふことでなければならぬ。どのやうな濫讀家も世の中のすべての本を讀むことができず、そこにおのづから選擇が行はれてゐるわけであるが、かやうな選擇には自主性がないから選擇とはいはれないのである。自主的であつて初めて選擇であり、自主的な人間は何事でも選擇して行ふのである。

ところでこの頃警視廳の騒音取締から考へることだが、讀書の場合には絶えず選擇の必要がいはれてゐるにも拘らず、ラヂオの聴取についてはそのことが殆ど全くいはれてゐない。朝から晩

までラヂオをかけつ放しにしてゐる家さへよくあるのである。「プログラムは選擇してお聴きを願ひます」と、毎日放送する必要がないであらうか。音の統制の上からいつても、人々が選擇して聴取するやうになることが希望されるわけである。ほんとに選擇して聴くことになれば、この頃のラヂオのプログラムのうち果していくつ聴くべきものがあるであらうか。

一冊の本の人間は恐ろしいといふ諺がある。彼は恐るべき獨斷家であるからである。しかし徒らに多く濫讀する人間は更に恐ろしい。彼には自己といふものがなくなり、自己のない人間は恐ろしいのである。ところで毎日ラヂオを無選擇に何でも聴いてゐる人はどうであらうか。彼は濫讀しながら結局一冊の本の人間と同じであり、最も恐るべきではないであらうか。かくして「自己のない獨斷家」といふ奇妙な「新しいタイプ」の人間が製造されてゐるやうに思はれる。

自主性がないから無選擇に何でも聴く。そして何でも無選擇に聴くことによつて益々自主性を失ふことになる。選擇の必要は自主性の必要である。我々は讀むことにおいても聴くことにおいても驚くべく健啖であるといはれる。その健啖が自主性のないことの現はれでないやうに望みたいのである。

自主性といへばまた直ちに自由主義だといつて非難されるかも知れないが、自主的な人にして

自分の行爲に責任をもち、誰もが信賴し得る人間であるのであつて、そのやうな人間が個人としても社會としても最も必要なのである。善い國民とは國策の實現を助ける者である、しかしまた善い國民とは國策を作ることを助ける者のことである。

(八月二十三日)

## 人心一新の要

平沼首相は内閣總辭職を執行するに際していつてゐる。「此の非常時局を突破せんとするに當つては局面を轉換し、人心を一新するを以て刻下の急務と信ずるものであります」と。

まことに人心を一新することは刻下の急務である。そのことは單に人が變つたといふだけでは出來ない。新しい政治が必要なのである。我々が新内閣に期待するものは人心を一新し得る新しい政治である。

この新しい政治は先づ支那事變の處理、日本の世界政策、國內改革等に關して政府の方針を明瞭にして國民に知らせることにある。平沼内閣は「對歐策」の破綻の責を負うて辭職することになつたのであるが、そのいはゆる「對歐策」の内容が如何なるものであるかは一般國民には明瞭

に知らされなかつたのである。國民もおほかた知つてゐるだらうとして曖昧にしておくといつた態度が善くないのである。すべてかやうな曖昧な遣り方がこれまで政治を頗る不明朗にしてゐた。人心を一新するためには明朗な政治が必要であり、それにはすべての問題について政府の行はうとするところをはつきりと國民に知らせなければならぬ。

對歐策の修正も問題であらうが最も根本的なことは支那事變の處理である。この方策が明確に決定しきへすればおのづから他の外交政策も決定する筈である。支那事變はどうするのだ、これが國民の最も知りたがつてゐることである。戰爭即ち長期建設であるといふのは全く正しいが、しかし「長期建設」の名によつて事變處理の具體的な方策を曖昧にしておくといふやうなことがあつてはならない。

人心を一新するには何といつても國內改革の斷行が必要である。これを行はなければ、支那事變の處理もできないし、自主的外交も不可能である。先づ手近なところで革新の實を示すといふことが人心を一新して東亞の新秩序建設に對して國民を邁進せしめる所以である。

獨ソ不侵略條約の與へた最大の教訓は、困難な問題を避けて一寸延ばしに延ばしてゐても結局無駄であるのを知らせたことである。それは自主的である必要を教へたといはれるが、困難な問

題を回避してゆくやうではもちろん自主的であることはできないであらう。時局の重大性は益々加はつてきた。自ら進んで困難な問題に正面からぶつかつてゆく勇氣のある政治家が出て來なければ、政治に對する國民の信頼は獲得されないであらう。

（八月三十日）

## 日本の自覺

ヨーロッパは遂に動亂に入つた。それは日本にとつて「神風」であるといはれてゐる。これは確かにさうであるといはれ得る。だが環境の好轉も主體がしつかりしてゐなければ役に立たぬ。こちらの態勢が調つてゐない場合、環境の變化は却つてただ内部の混亂を惹き起すのみである。

この際最も戒むべきことは環境の好轉に有頂天になつて自分を忘れることである。これまで私は、「世界を見よ」と繰り返していつて來た。しかし今こそ私は、「日本を見よ」といはなければならぬのである。かのことが必要であつたのと同じ理由によつて今このことが必要になつたのである。

支那事變の初め、これを日清、日露の戦役と同じやうに考へた人々があつた。その結果が如何

なるものであるかは既に理解することができた筈である。今日ヨーロッパの動亂を眺めてまた或る人々は嘗ての世界大戰時代における好況の再來を考へようとしてゐる。しかしそれが如何に性質の異なるものであるかはやがて明かになるであらう。

最も嚴肅な事實は、日本も既に以前から戰爭してゐるといふことである。ヨーロッパの動亂で支那事變が何處かへ吹つ飛んでしまつたかのやうに考へることは、久しく希望を求めてゐた人々に起り易い幻想であるが、かかる幻想にとらへられないことが肝要である。世界的に見ても、今度の大動亂はソヴェトの世界政策の成功を意味すると解釋することが可能でさへあるのだ。世界の明日の立場から考へても、支那の問題は全ヨーロッパの問題に比して決して小さくないどころか、更に大きいのである。

實體のない好景氣は恐るべきである。物資が不足し、勞働力が不足してゐる場合、その好景氣は果して實體のあるものであり得るであらうか。かやうな景氣に浮かされて、これまで折角抑制されて來たインフレーションが急速に進行するやうなことにでもなれば、國內體制は破壊されることになるであらう。今こそ國民の自肅自戒の最も大切な時が來たのである。

ヨーロッパの動亂のために好景氣に見舞はれようとしてゐるアメリカにおいて、ルーズヴェル

ト大統領は、「米國民は戦争で苦しむ列國民の犠牲において利益を求めることは道德上許し難い」といつてゐる。かかる人道主義的感情は別にしても、今日我が國民はヨーロッパの動亂に心を奪はれて日本の立場を忘れるやうなことがあつてはならぬ。今こそ我々は他の人々に替つて「日本の自覺」の必要を説かねばならないのである。

（九月六日）

## 思想と現實

最近のヨーロッパ情勢を眺めて感じることは思想と現實との或る乖離である。

ドイツとソヴェトとは思想的に全く對立し、氷炭相容れざるもののやうであつた。それが不侵略條約を結ぶに至つた。防共精神に貫かれたベルリン・ローマ樞軸として喧傳されたドイツとイタリアとの間も、その連繋がどれほど緊密なのか、今では疑はれるやうになつてゐる。かやうなことは單なるイデオロギーの上からは理解できず、現實の諸關係の認識に基いて初めて理解され得ることである。それは思想だけから考へると「複雑怪奇」に見えるにしても、現實を分析してゆけばその理由がわかることである。

平沼前内閣の「道義外交」は破綻した。だがいはゆる道義外交は道義的であつたが故に破綻したのではない。破綻の原因はむしろ、抽象的にイデオロギーに固執して現實を正視することを忘れ、或ひはイデオロギーの色眼鏡を通して現實を客觀的に捉へることができなかった所に存在する。もちろん思想は大切である。けれども思想のために現實があるのではなく、現實のために思想があるのである。思想は現實を正しく把握するためのものでなければならぬ。しかるに近年我が國においては餘りに思想の問題に拘泥して、思想を現實に適應させる弾力性が缺けてゐたのではないかと思ふ。

世界は自由主義、全體主義、共產主義に三分して抗争してゐるといはれてきた。これはその通りである。だがその對立を抽象的に固定して考へることは間違つてゐる。偏見なしに見る場合、現實はかかる抽象的な思想的對立を超えて或る共通のものに向つて進みつつあるといへるであらう。思想は不當に政治化されることによつて抽象的に固定され、現實に遅れつつあつた。殊に今度のヨーロッパの戦争が擴大する場合、從來いはれた思想的對立に如何なる變化の生ずるかが世界的に重要である。思想を固定的に考へることははや非現實的なことになつてゐる。不當な政治化から思想を解放して、いま一度自由な眼で現實を見直すべき場合である。

ナチスの轉向以來、我が國においても「現實政治」への轉換が一部で唱へられてゐる。だがもしその現實政治が俄に道義を無視して權謀術數に向ふことであるならば、甚だ危險であるといはねばならぬ。道義はどこまでも大切である。ただそれは現實から游離したものであつてはならないのである。そして現實政治は現實についての正確な認識を基礎とすべきものであつて、現實の認識の上につきり立つた上でのみ術數も或る意義を有し得るのである。（九月十三日）

## 思想の不信

この頃の新聞雜誌において著しくなつたのは思想に對する不信である。それは最近ドイツやソヴェト・ロシアの行動に、その主張してゐたイデオロギーと矛盾するものがあるかの如く考へられるやうになつて目立つて現はれてきた現象である。

この思想の不信はもちろん今に始まつたことではない。ただ從來は政治の思想性そのものを力説してゐた政治の力に壓せられて隠されてゐたのが、最近政治情勢の變化を機として表面に現はれるやうになつたのである。

思想に對する不信は思想の歴史のうちに古くから存在してゐる一つの思想である。しかし現在、思想に對する不信は如何なる性質のものであるか、その特殊な性質を吟味することが必要であると思ふ。

今日、思想に對する不信は思想に對する不信ではない、むしろ政治に對する不信である。政治の不信をそのものとして直接に表明することが妨げられてゐるために思想の不信として間接に表明されるのである。問題の思想といふのは政治上のイデオロギーなのであるから。これは政治家として深く考ふべきことである。

また從來思想について眞面目に考へたことがなく、ただ何かの必要のために思想の問題を論じてゐた者がその必要の失はれたやうに考へて今日俄に思想に對する不信を語つてゐるのである。自分の思想的無能力をこの際公然と告白してゐるやうなものである。これまで威儀を正してゐた者が急に尻をまくつて居直るといつた恰好である。いつたいこのやうに尻をまくつて居直るのは何か痛快なところがあり、日本人には特にそれを喜ぶといふ風がある。かやうな居直りが喜ばれるといふことは思想の發展に對する大きな妨害の一つである。

思想に對する不信によつて現はれてきた今日の現實主義こそ極めて危険なものであらう。それ

は政治上の無方針どころか敗北主義でさへあり得る。それは生活上のデカダンスを現はすものである。人間も世界も結局思想によつてのほか救はれないのであつて、思想のない現實を考へることは結局非現實的なことである。しかし今日思想に對する信頼は政治に對する信頼が建設されることによつてのほか回復されないものである。

(十月四日)

## 國民運動の起點

前内閣の終り頃、排英運動がだいぶん盛んであつた。あれは官製のものであつたともいふが、少くとも外形上は國民運動として展開されたものである。あの運動がかなり活潑になつたといふことは、わが國においても指導の仕方によつては國民運動の發展し得る可能性があることを示してゐる。これは、排英運動の當否を別にして、重要な教訓であつた。

今日、國內改革のことも、支那事變處理のことも、國民運動と結び付かねばならぬといふことは、殆ど常識論になつてゐる。その國民運動も明確な方針さへ與へられれば十分に發展し得る見込のあることは、先般の排英運動において一應示されたことである。日本では國民運動は起り得

ないなどといふのは、そのやうな政治の指導方針が確立してゐないことをいふにほかならない。

阿部内閣はヨーロッパ問題には介入せず専ら支那事變處理に邁進することを聲明した。いはゆる事變處理の具體的政策が如何なるものであるか、未だなほ明瞭でないが、汪兆銘氏の純正國民黨運動を支援するといふことは政府の方針としてだいたひ決定してゐるやうである。それならそれで、そこに國民運動の起點を求めてこれを發展させるといふことが今日適切なことではないかと思ふ。それは確かに國民運動の發足點となり得るものである。

汪兆銘運動の支持はわれわれの言葉に依れば東亞協同體の理論にその根據を求めねばならぬ。東亞協同體運動こそ新しい國民運動の起點となるべきものであり、またなり得るものである。過般の排英運動の例に徴しても、政府の肚さへ決まれば、東亞協同體運動が國民運動として發展し得ることは明瞭である。國民精神總動員もかやうな國民運動と結び付いて初めてその意義を發揮し得る。支那における宣撫事業の如きも、この國民運動の一翼として國民的に展開されることになれば、その効果も大きいであらう。

東亞協同體論についてはいろいろ非難もあるが、すべての理論は實踐と結び付いて發展するものであつて、東亞協同體論も國民運動にまで展開されるやうになれば、理論的にも飛躍的に發展

し得るのである。そのみでなく、最近のヨーロッパの情勢は東亞協同體論の世界史的必勝性を證明しつつある。

どのやうな政府が出来ても、國民の力を自覺するものでなければ、時局を打開することはできぬ。國民を信賴することのできない政治家は最も慘めな存在である。

(十月十一日)

## 統制の自働性

統制は益々強化されてゆく。それは戦争遂行のために絶対に要求されてゐることである。しかし統制を單に戦争のために必要なものと考へることは間違つてゐる。統制は經濟の新しい歴史的な形として捉へられねばならない。戦争はこの經濟の新しい形への變化を促進する機會となつたのに過ぎぬ。

統制をただ戦争のために必要なものと説くことは、事變さへ濟めば再び自由主義經濟に戻るかのやうな幻想を抱かせることになる。事變が濟んでも國防の必要は減じないといふ理由から統制の持續を説くことも不十分である。自由主義に代るべき經濟の新しい形として統制の積極的意義

を國民に理解させることが大切なのである。

事變とか國防とかの必要からのみ統制を説くのは、國民に對して單に犠牲を要求することになる。統制の犠牲になる人々に對して、日本は今戦争をしてゐるのだからそれ位の犠牲は當然だといふ風に當局はいつもいふのである。なるほど個人としては、社會のために自己を犠牲にするとは彼の道徳であるといへるであらう。けれども社會としては、個人に對して絶えず犠牲を要求するやうな社會は健全な社會とはいひ難い。統制によつて舊い組織が壊されるために犠牲になる人々を救ひ上げることのできる新しい組織を同時に作ることが統制の仕事である。「食へなければ大陸へ行け」といつたやうな無責任な放言をする官吏があるといふのは、民衆の立場に身をおいて考へないことであるのみでなく、統制の眞の意義を理解しないものといはねばならぬ。

統制の目的は、經濟の新しい體系を全體的に作り出して、この體系自身の有する力によつて自動的に統制が行はれるやうにすることにある。統制とは單に外部から壓力を加へることではない。體系に内在する自動的な統制力を發揮させるのでなければならぬ。外部からの權力はかやうな新しい形を作り出す過程において必要なものとして働くに過ぎない。統制が體系の力によつて自動的に行はれるやうになつた場合、統制と自由との對立はなくなるであらう。

統制が單に官權的取締となつてゐるのは、そのやうな全體的な統制の構想がなくて、ただ彼方此方と火のついたところを消して行かうとする火消しの統制の然らしめることである。これでは國民が不安になるのも無理はない。新しい經濟體制の基礎となるべき新しい經濟倫理に對して國民を教育するといふ重要な仕事もまるで閑却されてゐるのではないか。

（十月二十五日）

## 雰圍氣の變化

この頃我々の雰圍氣に或る變化が感ぜられるやうになつてきた。ひとはそれを現狀維持的氣分と稱し從來の革新的氣分に對する反動と見てゐる。政黨の時代が再び來るかの如く考へたり、どんな統制をも感情的に嫌つたり、ただ何でも事變の速く片付くことを望んだりするやうな風潮がそれを示してゐるといはれる。

かやうな雰圍氣の變化が一般國民の間においてさへ感ぜられるやうになつたのは注意すべきことである。それは確かに反動的な性質を具へてゐる。しかしそこに何か積極的なものがあるであらうか。

近年においては種々のことが新しい形において現はれるやうになつた。例へば頽廢の新しい形態といひ得るものがある。それは表面殆どなんら頽廢ではない。爲すべきことは爲され守るべきことは守られてゐるやうに見える。けれども内面においては、そこには良心もなく情熱もなく、従つてなんら積極的なものがないのである。昔の頽廢においては外的には破綻があつたにしても、内的には人間的なもの、積極的なものがあつた。これに比して今の頽廢は一層危険である。

ちやうどそのやうに、現在感ぜられる雰圍氣はそれ自身としては積極的なものを有しない。それは久しく革新が叫ばれながら實際には少しも革新が行はれなかつたり、統制といへばただ上からの官僚的統制であつたりした事に對する單なる反動に過ぎぬ。その消極性が現状維持的に見えるのであつて、そのために國民が現状維持派の味方であるかの如く考へる事は錯覺であらう。併し誰でも多かれ少かれ現状維持的な氣持を有するものだ。現在の雰圍氣が現状維持派に利用される惧れもあるのである。革新を妨げるものは從來の所謂革新派であるともいへるであらう。

心理的雰圍氣がどうであるにしても、現實においては革新の必要はいよいよ緊迫し、また事實としても革新は大いに進行しつつあるのだ。ここにおいて主觀的條件と客觀的情勢との間の乖離が著しくなつてきたといふのが今日の狀態でありこれが最も重大である。この乖離を除くことが

政治の進展にとつて要求されてゐる。しかしこれまでのやうに革新を唱へるのでは無意味であることも全く明瞭になつてきた。

阿部内閣は前内閣から「人心の一新」といふ任務を負はされた。しかるに人心の現状が右の如くであるとすれば、まことに憂慮すべきことである。國民の心理をしつかり擱んだ政治の轉換が必要である。

(十一月一日)

## 鍛鍊冬休

鍛鍊冬休といふ言葉は、石黒前文部次官時代の鍛鍊夏休といふ言葉につながるものである。その頃文部省では休むといふ觀念を排斥し學則を變更して爾後學校から夏休といふ言葉を抹殺しようといふ意氣込みであつた。今鍛鍊冬休が近づくにあつて、當局では實情に即してその再検討を行つてゐることである。

實際、今年の第一回鍛鍊夏休の結果をみると、種々の弊害もあつたのである。小學校ではその爲に病人を出したり、その時に入學試験準備をしたりすることがあつたし、私立學校の中には休

暇廢止に藉口して授業料を徴收したりする所もあつた。また大學理工科、實業専門、各種實業學校においては既に以前から休暇中に實習などをしてゐたのだから、鍛鍊休暇といつても一律に考へることは無意味であるのみか有害でさへある。

休暇廢止によつて迷惑を蒙る者に教師がある。休暇は教師にとつて自己の教養と研究の時間であり、新しい講義に對する準備の時間である。それは教育のためにも大切なことである。眞面目な教師であればあるほど休暇廢止を遺憾に思ふであらう。

また生徒學生にとつては休暇は學校で學び得ぬことを學ぶ時期である。休暇廢止は學校のみが教育の場所であるかの如く考へる間違つた觀念を知らず識らず前提してゐるのではなからうか。一般の農家や町家では休暇は子供が家事や家業の手傳をする時である。これは極めて重要な教育である。休暇が單に遊ぶ時であるといふのはサラリーマン的觀念に過ぎぬ。家事や家業の手傳をする必要のない者は自分で計畫を立てて讀書したり研究したりするやうに仕向けるのが好い。休暇は自主的な勉強にとつて最も好都合な時である。學生生徒の自發性を養ふことをしないで何事も命令的にやらせるといふことがこの頃の教育の精神であるらしいが、休暇廢止もその現はれではないであらうか。

休むといふ觀念をなくするといふことは小吏的な道德感に發するものである。休むといふことは自然の法則であり、それが道に従ふ事さへある。休むといふ觀念は宗教的な意味をさへ含んでゐる。休むことと怠けることは同じでない。休むことから深い考へも出て來るのであり、ただ働くことから精神的に奴隸的な思想しか生じないのではなからうか。

もちろん私は、經濟上或ひは軍事上の緊急の必要から休暇廢止をしなければならぬといふのなら、必ずしも反對するものではない。それが小吏的な道德觀念に基くとすれば、教育上弊害が多いことに注意しなければならぬ。

(十一月八日)

## 科學の普及

ノモンハン事件はいろいろな教訓を與へたといはれるが、中でも一致して認められてゐるのは、それが今日の戰爭における科學の重要性を現實に顯示したといふことである。

近代戰は科學戰である。もとより精神も大切であるが、特に優秀な武器が必要である。その大切な精神も、それが道德的精神であるべきことはもとよりであるが、特に科學的精神が必要であ

る。

道具は立派に使用されることによつてその効果を顯はすことができる。如何に優秀な武器が發明されても、操縦の仕方が拙劣であれば、その價值を發揮することができない。従つてすべての兵士が科學的知識を十分に具へてゐるといふことが必要なのである。兵士の間に科學的知識が普及してゐるならば、彼等自身戰爭に従事してゐるひまに種々の小發明、大發明をすらし得る可能性もある、先の歐洲大戰においてドイツはそのことを證明した。

かくて今日國防の見地からいつても科學の普及が最も大切なことは明かである。國民の間に文化が普及してゐてこそ天才も生れ得るのであつて、大衆の間における科學的關心の發達は科學上の天才の出現の地盤である。科學が技術の基礎であることは言ふまでもない。必要は發明の母であるとするば、今日我が國において種々の物資が不足してゐるといふ状態も、技術の發達にとつて好機會であるとも考へ得るであらう。もちろん必要からだけでは發明は生れないのであつて、そこには科學の發達と普及とが前提されてゐる。

かやうに科學の必要な今日、政府は果して科學の普及に對して十分の關心を持つてゐるであらうか。國民の道德的精神の涵養については極めて熱心であり、種々の方策が行はれてゐるのであ

るが、それに比して國民の科學的精神の養成については如何であらう。前者に熱心であるあまり、後者は無視され、そののみか後者に逆行したことさへ行はれてゐるやうに見える。

今日の軍事上並びに經濟上の必要は遂に政府をして科學動員を行はしめるに至つた。しかし科學の發達は少數の科學者にのみ依存するものでなく、また決して一朝一夕の仕事でないとすれば、科學動員の行はれるに至つた今日においては、また特に科學の普及に對する諸方策が同様に熱心に遂行されることが必要である。この必要は科學者自身によつても十分に自覺されねばならぬ。

科學の普及はもちろん單に結果として與へられる「科學的知識」の普及に止まるのではなく、科學的知識の根源であるところの「科學的精神」の普及でなければならぬ。（十一月十五日）

## 責任の道德

政府で自分が聲明した少數閣僚主義を拋棄して閣員の補充することにしたら、大臣病患者が輩出して識者は顰蹙してゐることである。いつたいこの閣員補充の根本の理由が公明でない。來るべき議會を切抜けるためであるともいはれるが、さうだとすれば、道具に使はれることを知

りつつ大臣になりたがる政黨人の心が我々には理解しかねる。

この困難な時代に最も責任ある地位に就くといふには、よほどの覺悟と確信が必要であらう。事變處理について、外交について、國內改革について、はつきりした見透しと政策とをもつてゐるのなければ、容易に大臣など引受けられない筈である。ところがいつでも、官僚にも政黨人にも、無數の大臣志願者が存在するといふのは、果してこの時局を自己の責任において最後まで乗り切る覺悟と確信のある者が無數にゐることを意味するのであらうか。

それならまことに頼もしいことであるが、事實はむしろ反對に、ただ大臣になりさへすれば好いので、後は出たとこ勝負でゆかうといふのであれば、甚だ無責任なことと言はねばならぬ。もし萬一にも、どうせ内閣の壽命は五ヶ月か十ヶ月なのだから、その間だけ何とか凌ぎさへすれば好いのだといったやうな氣持があるとしたら、最後はどうなるのであるか。大臣は辭職することができて、國民は辭職することができないのである。

もとより私は政治家が善意を有することを必ずしも疑ふものではない。しかしマックス・ウェーバーが言つたやうに政治家の道德は單なる「心情の道德」でなく「責任の道德」でなければならぬ。即ち政治家は自己の行爲の諸結果に對して責任を負ふべきであり、そのためには彼は自己の

行爲の將來における諸歸結について見透しをもつて處してゆかねばならぬ。責任の道德は認識を必要とするのである。

或ひは言ふかも知れぬ、今日のやうな状態において、例へば日本の財政經濟がどうなつてゆくか、誰が知り得るであらう、と。事情は確かに複雑である。しかしそれが複雑であるといふことは却つてそれを認識すべく我々を鼓舞する所以でなければならぬ。從來の經濟學が用をなさなくなつたとすれば、それは却つて經濟學者に新しい經濟學建設の光榮を擔ひ得る希望を與へることでなければならぬ。認識を拋棄することは人間性を拋棄することである。

新しい政治家、新しい學者、思想家等の出てくる條件は既に具はつてゐるやうに見えるに拘らず未だ現はれないといふのは何故であるか。そこにこそ日本の悩みの最も深い理由があるのでなければならぬ。

(十一月二十二日)

### 知識人の表情

この頃の文化界、思想や文學などの方面を見て誰もが感じてゐるのは、問題がなくなつたとい

ふことである。問題がなくなつたといふのは基本的な考へ方がなくなつたといふことである。だから批評も現象的とならざるを得ない。論争といふものも殆ど見られなくなつた。一つの基本的な考へ方に統一されたのでもなければ、互ひに對立する基本的な考へ方に分裂してゐるのでもない。だから批評も自づと追隨的とならざるを得ない。

問題がないといふのは、問題が出盡したことであると考へられるであらう。語るべき事は既に語り盡されてゐるかのやうに見える。問題は、それを綜合し、統一し、組織することにある、そこから更に新しい問題が出てくるであらう。だが、かやうな建設的な仕事は果してなされてゐるであらうか。例へば思想の方面において喧しく論じられてきた日本主義、日本的固有性、全體主義、三民主義等々について、人々は明瞭な觀念を與へられてゐるであらうか。すべては矢張り曖昧に止まつてゐるやうに思はれる。そしてその曖昧さのうちに互ひが一致してゐるやうな顔をしてゐる。この奇妙な一致の表情は極めて特徴的である。

もとより問題はなくなつてゐないどころか、新しい問題も出てきてゐる筈である。だが、新しいものに對する驚異の心が失はれてゐるやうに見える。例へば青年が人に物を訊く場合、彼等は老人の如くである。自分に問題があつて訊くのではなく、たゞ何を言ふか一つ聽いてみてやれとい

ふので訊くのである。だから反對するのでもなく、賛成するのでもなく、要するにどうでも好いのである。極めて小さいものにも驚異を感じる心が青年性であるが、さうした青年性は青年からさへも失はれてゐるやうである。

知識人のかやうな状態は、彼等が社會において指導する者であるといふ意識のなくなつたことを示してゐるであらう。知識階級が指導者であるといふことは、現實によつて否定されたやうに見える。しかし他方、知識人のそのやうな状態は、彼等がほんとに他から指導されてゐないことを示してゐる。もし知識人以外の誰かに知識階級を指導するといふ意志があつたとすれば、今日の現實は否定的な結果を現はしてゐるのである。

ところで右にいつた奇妙な一致の表情、それを我々はただ知識人の顔においてのみ見るのであらうか。

(十一月二十九日)

### 消極的個人主義

個人が社會に對して自分を主張するのが個人主義であるといはれる。しかし個人が社會から自

分を守らうとするのも一種の個人主義であつて、消極的個人主義と呼ぶことができる。個人主義は西洋のものであるといはれるが、この消極的個人主義は東洋にもあり、殊に支那人の間では發達してゐた。

最近經濟事情の激しい變化は種々の影響を示しつつあるが、中にもこの消極的個人主義を結果してゐる。個人の買溜めなど、その著しい例である。消費者が買溜めするのは、それによつて社會の變化から自分を守らうとするのである。東洋古來の消極的個人主義は隱逸の思想、無所有の思想となつたのであるが、それが現在では買溜めの思想などとなつて現はれるところに時代の變遷を見るべきであらうか。

消極的個人主義は社會に働きかけて社會を變化しようとするのでなく、社會の變化に消極的に適應しようとするのであるから、買溜めは更に買溜めを生むといふやうなことになる。しかし人間は結局社會的動物である。多くの人の買溜めによつて社會の經濟が破綻することになれば、買溜めする者もその影響を蒙らざるを得ない。環境に對する消極的な適應にはおのづから限度があるのであつて、却つて環境を變化することによつて環境に適應するといふところに昔も今も人類の進歩があるのである。

しかし消極的個人主義は主觀的で心理的であることを特徴としてゐる。現在の買溜めの如きも物資の不足等に對する心理的不安から出てゐるものが多い。インフレーションに對する心理的不安が大衆の間に浸潤するといふことはインフレーションを速める結果にもなるのである。

だから今日必要な對策の一つは物資の不足等といはれるものの實情とその眞の原因を國民に知らせることである。實情と原因を知らないで不安がつてをれば、不安はいよいよ増すばかりである。心理的不安を客觀的認識におきかへるところから環境を變化することによつて環境に適應するといふ人間本來の態度も出てくるのである。

従來支那人の消極的個人主義は政治を信賴することができなかつたために生じたといはれてきたが、今日我々の間に現はれ始めた消極的個人主義が政府の物價政策等に對する信賴が國民になつたために生じたのでなければ幸ひである。強力な政治主體のない統制は却つて混亂の原因となることを考へねばならぬ。

(十二月六日)

## 教育の實用化

教育の實用化は最近の著しい傾向である。それは確かに必要なことであるに相違ない。けれど、それは飽くまでも根本的な意味についての實用化でなければならぬ。

教育の實用化はまづ興亞講座の如きものの設置となつて現はれたが、今度さらに、文部省では著名な實業家たちを動員して、産業報國講座といふものを開設することになつたやうである。

近年、大學の如きも自治的乃至自主的なところがなくなり、何でも文部省の指圖で行はれる風があるのであるが、この産業報國講座の如きはまさにそれである。そして學園の權威を誰も問題にするものがないといふ有様である。學校はもはや自分で學生を教育する能力がないと見られることに甘んじてゐるのであらうか。教育の實用化が眞に必要なものであるなら、學校自身の手で實行すべきではないか。

いつたい産業報國講座で何を教へるのか知らないが、ラヂオ講演のやうなものになつてしまつて、學生を退屈させるやうなことがなければ仕合せである。賀屋元藏相の學識をもつてしてなほ、その大學における講義が失敗に終つたことを學生たちは語つてゐる。もとより今日のアカデミーを不當に尊重することは正しくないが、またそれを不當に輕視することも間違つてゐるのである。現在行はれつつある意味における教育の實用化は、要するに人から使はれて便利な人間を作る

ことになつてゐるやうである。それは人を使ふ人間、眞の指導者を作る教育とはなつてゐない。ところが今日必要なのは指導者の人物を作ることではなからうか。なるほど「人的資源」の不足が力説されてゐる。けれども、人的資源の不足とは單に人に使はれる人間の不足をいふのみでなく、實にまた眞に人を使ひ得る人間の不足を意味するのである。

我が國の教育は、これまで指導者の人物の教育を心がけなかつた。今日の官僚政治の弊害もそこに由來してゐるのである。そしてその官僚が教育の實用化として行はうとしてゐるものも、實は人から使はれて便利な人間を作ることにはほかならないやうに思はれる。

教育の實用化は、その本來の意味においては科學教育の徹底でなければならぬ。古い神學や形而上學から離れて、科學的精神を養成するところに教育の眞の實用化が存するのである。實用的教育と考へられる技術の教育も、科學を離れては根のないものである。

(十二月十三日)

## 重點主義

近頃しばしば重點主義といふことがいはれてゐる。この時局において、あれもこれともいふこ

とが出来ぬ以上、重點主義はまことに當然のことである。

問題は、果して重點主義が實行されてゐるか否かといふことである。百億を超える龐大な豫算を見ると、青木藏相の言明にも拘らず、實際に重點主義が行はれてゐるのかと、國民は疑ふのである。殊に官僚的セクシヨナリズムの存在を考へるとき、その疑ひが生ぜざるを得ない。セクシヨナリズムは、重點主義とは本質的に反對のものであるからである。

重點主義は政府にとつて必要であるのみでなく、國民にとつても大切である。今日における何よりも重點が、支那事變の處理にあることはいふまでもない。わが國が歐洲戰爭に不介入の方針を宣明したのも、かやうな重點主義の現はれである。ところがこのごろ、人が寄ると、すぐ米や炭の話に花が咲いて、恰も支那事變を忘れたかのやうであるのは、まことに遺憾なことといはねばならぬ。國民の關心を重點主義に導いてゆき得るやうな政治が要求されるのである。

買溜めに對して嚴重な取締りをするといふことは、固より結構であるが、これも重點主義でなければならぬ。一般國民が政府の政策に對する不安のために、自衛上やつてゐるやうな零細な買溜めに注目して、大口の買溜めや買占めをのがすやうなことがあつては、重點主義とはいひ難い。警官が戸別訪問をして、買溜めを調べるなどといふことは、重點主義の立場から、どうかと思は

れるのである。かやうなことによつて、昔、米を筆筒の中へ隠したといふやうなことが、再び行はれることにでもなれば、國民の道徳心に對する影響は重大である。國民心理に留意すべきことを要求されてゐる政府は特に國民の道徳心に着目しなければならぬ。

年末の街頭における酔っぱらひを、取締るといふことも賛成である。これは事變とは關はりなく、常にいはれてきた社會道徳上の問題である。しかしながら街頭の酔っぱらひにのみ注意して、大いに軍需景氣に浴してゐる人々の振舞ひを見のがすやうなことがあつては、重點主義とはいはれない。これは一方、統制の犠牲となつてゐる人々もあることを考へれば、深刻な社會問題、思想問題の原因となり得る重大なことである。

重點主義はあらゆる方面において徹底されねばならない。政府のみでなく、國民もその生活において、重點主義を守らなければならぬ。

(十二月二十日)

## 國民の持久力

日本人の持久力はよく問題にされてゐる。實際、日本人に耐久力が乏しく粘着力が少いといふ

事實は、いろいろ擧げることができであらう。しかし反對の例もあるのであつて、文化上においても、例へば水戸の大日本史、塙保己一の群書類從、或はまた稻生若水の庶物類纂、慈雲尊者の梵學津梁など尨大な著述が現はれてゐる。

いつたい國民性といふものは歴史的に作られるものであり政治的・經濟的・社會的條件に依存するところが多い。それらの條件の異なるに従つて國民性も種々異なる形をとつて現はれるのが普通である。

日本の國民に先天的に持久力があるかないかといふことは容易に決定し難い問題であるが、今日の日本に持久力が必要であるといふことは誰にも異論がない筈である。しかも國民に持久力を發揮させるには何よりもそれに適した政治的指導が行はれなければならぬ。

ところが今日の實際の事情はどうであらうか。簡単な話が男子の斷髪とか女子の電髪禁止とかは、一時ずいぶん喧しく云はれたものであるが、その結果はどうなつてゐるであらうか。あの頃官廳においても次官あたりが率先して髪を切つたところがあるが、最近では、いつの間にか髪を伸ばしてゐるものが多いといふことである。頭髪のことなど、實はどうでも好いことであるが爲すことに持久性がないのは困ることである。

この例からも考へられるやうに國民の持久力を發揮させるには、瑣末なことを喧しくいふのを止めて重點に力を集中させねばならない。特に不合理なことを強要しようとしても駄目である。不合理なことは持續しようがないのである。一時の興奮から極端なことを云つても永續するものではない。それは現狀維持といふことでなく現狀の改革も合理的な方向に合理的な方法で行はれねばならぬといふことである。國民の納得し得る政治がなければ國民の間に持續力は生じない。もちろん今日の事態においては無理も必要であらう。しかしその無理を行ふには國民が均等に犠牲を負擔するといふことが必要なのであつて、それがつまり無理の社會的合理化なのである。

汪兆銘氏の政權の誕生が近いと傳へられるが、それは事變處理の重要な段階であるにしても要するに一段階に過ぎない。國民の持久力に對する試煉は今後において益々加はつてくるであらうが、この點について精動あたりでも反省すべきものが多いであらう。支那の立場と日本の立場とではおのづから出て來る國民の持久力に差異があるのは自然であつて、日本においては一層賢明な政治が必要なのである。

(一九四〇年一月十日)

## 「良藥忠言」

新内閣の爲すべきことは客觀的に決められてゐる。だから誰が内閣を作つても同じ問題の解決に當らねばならぬわけで、ただその解決の能力があるかないかが重要な點である。

それでも新内閣に對して何か希望するとすれば、私は汪派の第一の理論家、周佛海氏の文章を想ひ起すのである。それは本年一月一日の上海の或る新聞に載つたものであるが、他の人々の新年に寄せる言葉がおほむね形式的で空虚である中に、周佛海氏の文章は内容があつて光つてゐた。氏は「良藥は口に苦けれど病に利あり、忠言は耳に逆へど行に利あり」といふ支那の古い諺によつて「良藥忠言」と題して、友好的精神から日本に對し批評を加へ、その改正を求めてゐる。和平を愛する多くの中國人は今も日本の誠意を疑つてゐるが、その原因は日本に誠意がないといふことなく、却つて全く日本の機構上、組織上、意見の統一上及び命令の執行上に缺陷があるといふことであると周佛海氏は述べ、三つの點を指摘してゐる。

一、左右が一致せず。これは組織及び機構における横の關係をいふので、組織が煩雜で機關が

重複してゐるといふことになる。甲の機關と乙の機關との意見が違ひ、いづれに従ふべきかを知らず、これがため日本全體の誠意が疑はれるやうになる。

二、上下が貫徹せず。これは同一機構内における縦の關係を指すので、上級機關の命令が下級機關に達すると決してそのまま實行されず、甚だしいのになると全く實行されないために、上級機關の誠意が打消されてしまふのである。

三、前後が連接せず。これは時間的關係をいふので、後任者は自分の功績を顯はさうとして常に前任者の施設を全部ひつくりかへしてしまふ。そこで事務上に連繋がなく、誤解が発生することになるのである。

周佛海氏の右の忠言は、遺憾ながら、適切なものと認めざるを得ないやうに思ふ。第一の點は特に思想の不統一に基いてをり、他の點は主として組織及び機構に關係してゐる。しかもかやうな缺陷は、單に對支工作においてのみでなく、國內行政においても見られるのである。それは統制のことなどで民間人が官僚と接觸する場合いつも經驗してゐることである。

新内閣が考慮し糾正し改善すべきものがそこにある。新内閣にとつても當然第一の目標であるべき事變處理のためにも、また差し迫つて要求されてゐる内政上の諸問題の解決のためにも、そ

の實行が必要である。

(二月十七日)

## 革新と國民

このごろ内閣の更迭を機會に、革新派とか現狀維持派とかといふことが、また喧しくいはれるやうになつた。いはゆる革新派からは、米内内閣は現狀維持的色彩が強いといふ批評を受けてゐるやうだ。

革新派といひ現狀維持派といふ、それがいつたい何を意味するのか、國民一般にはよくわからないのである。米内内閣はだいたい國民に好感をもたれてゐるらしいが、さうかといつて國民が現狀維持的なのであらうか。現狀維持と革新との對立は、國際的には、持てる者と持たざる者との對立を意味すると思へられてゐるが、國內においても同じに考へてよいのであるか。國際的見地と國內的見地とは思想において異つてよいのであるか。

外交の上では、革新派と現狀維持派との區別は、親獨親ソと親英親米との區別と見られてゐるが、しからばその見地に關聯して内政問題に如何なるプログラムがあり、それに如何なる差異が

あるのであらうか。一般的にいつて、近年、外交問題だけを抽象して、その立場からのみ、ただ形式的に、現状維持派とか革新派とかと區別するといふやうな傾向が強いのである。支那問題については理想的なことをいつても、その物差しで國內問題をどう考へてゐるのか、明瞭でないことが多い。だから、どういふのが革新派で、どういふのが現状維持派であるのか、國民には符牒としてしかわからない。兩者の主張が國民生活の實際にどういふ差異を生ずることになるのか、なんら具體的に説明されてゐないからである。

革新の必要であることはいふまでもないが、それを國民に理解させるには、外交問題だけを抽象するのでなく、國內問題を含めての具體的なプログラムを示すことが必要である。いはゆる革新派と現状維持派との競り合ひも單に一局部で行はれてゐて、國民には何の關係もないものになつてゐる。すべてが何か陰謀的に感ぜられるのも當然である。

政治は依然として國民と關係のないところで行はれてゐる。これは、現状維持派であらうと革新派であらうと、變りがない。しかもその國民と關係のないところで行はれてゐる政治の結果は、すべて國民にふりかかつてくるのである。眞の革新とは何であるか。政治が國民の中に入つてゆくことである。そのことに努力しない限り、いはゆる革新派も革新的であるとして國民には受取

られないのである。

(二月二十四日)

## 新しい經濟倫理

新内閣になつて精動の改組とその活動方針の更新がまた問題になつてゐるやうである。精動は最近やや持てあまし氣味になつてゐたのではないかと思はれるが、もちろん精動の必要が減じたわけではなく、むしろその逆である。

精動の新しい活動方針として、戰時經濟道德の振興に主眼をおくべしとの意見が閣内にあると傳へられてゐる。現在の國內問題の重點が經濟問題であることを考へれば、それは全く正當な意見であるといはねばならぬ。闇相場や闇取引の横行は、國民の道德意識を毀損しつつある。インフレーションの浸潤が、道德生活を腐蝕する危険も大きい。根本的にいへば、自由主義經濟から統制經濟への轉換は、それに相應する新しい經濟倫理の確立を要求してゐるのである。實際、統制に對する反感といふものが、この新しい經濟倫理の缺けてゐるために生じてゐる場合は多いであらう。

「戦争によつて何人も利得すべからず」といふのは、ヒトラー總統の言葉である。それはドイツの戦時經濟道徳を現はしたものだといへるが、いつたい日本の戦時經濟道徳は、如何なるものであらうか。その觀念が明瞭でなければ、精動で戦時經濟道徳の振興に努力するといつても、これまで同様、效果は期待されないのである。これまでにおいても、節約せよとか、貯金せよとか、闇取引をするなとかと、十分しばしば叫ばれてきた筈である。その成績から考へて、今後單にそれを繰返しても、無駄なことは明かである。

新しい經濟倫理は、經濟に對して外部から加はつてくるものであることができない。從來の慈善事業とか、社會事業とかのやうに、經濟機構の根本には營利心といふものを認めながら、ただそれから生ずる弊害を矯正するために、經濟外の活動として、道徳が付け加はるといふのであつてはならぬ。倫理は經濟の内部になればならず、經濟の倫理は同時に經濟の論理であるべきである。しかもそれが倫理といはれるのは、經濟そのものが純粹に物質的な過程でなくて、その中に人間が入つてをり、人間の主體的な自覺による自主的活動が、經濟過程に對して重要な關係を有するためである。

新しい經濟倫理は、經濟の新しい形に即して說かれねばならぬ。經濟機構をもとのままにして

において、それを補足するために道德に愬へるといふやうなことでは、効果が擧らない。國民に對して經濟倫理の說教を始める前に、先づ新しい經濟の全體的な見透しを描き出して示すことが必要である。

(二月三十一日)

## 教育の不安

新制度による入學試験は着手され内申書も既に提出済みとなつたやうである。この學科試験廢止に對してはいろいろ反對があつたが、最近には、來年はまた學科試験が復活されるといふ噂さへ出た。そんなことは無論あるべき筈のものでない。入學試験の方法がたびたび變るといふことはこれまで小學校教育に不安を與へてゐたのである。新制度の缺陷がその實施によつて明かになるにしても、ひたすらその矯正に努力して、改革の精神を徹底させる方向にどこまでも進まねばならぬ。

問題は内申書とか口頭試問とかにある。そしてそれらが不安に感ぜられてゐるのは、根本に遡つて考へると、教育の自立性が喪失してゐるところにある。

だいいち、これまで上級の學校しかもいはゆる「善い」學校に幾人入學できるか、といふことにのみ教員が頭を悩ましてゐたのは、小學校教育に自立性が缺けてゐた證據である。内申書や口頭試験に疑惑がもたれてゐるのも、生徒の親の地位や財産などによつてそれらが影響されはしないかと惧れられるためであつて、ここでも教育の自立性が問題になつてゐるのである。その他種々の場合に、教育の自立性の缺乏が教育の不安の原因となつてゐることが見出されるであらう。

現在、教育の不安として、入學試験などよりも一層重大なことは、教員の轉職の増加と教員志望者の減少である。それは教員の不足のみでなく、その質の低下を必然的に結果するのであつて、これは第二の國民の養成上、まことに憂慮すべき事態である。

教員の轉職の増加や教員志望者の減少は、主として經濟上の問題に基いてゐる、近頃問題を作した東京市における教員の家庭教授の如きも、恐らく同じ原因に由來するであらう。教育の自立性も經濟上の問題と關係がなくはない。かくて教員の優遇方法について、眞面目に考へねばならぬことは當然である。いつたいわが國のいはゆる自由職業的インテリゲンチヤは經濟的に恵まれることが餘りに少く、そのために文化の向上が阻害されてゐる場合は多いのであり、またそのために今日彼らの間に、金錢に對して甚だ卑屈であるといふ態度も生じてゐるのである。

しかしながら右のやうな教育の不安は、單に經濟上の問題でなく、また特に倫理上の、經濟倫理上の問題である。或る田舎では、農村の好況時代には安月給取りといつて教員を輕蔑し、そして一旦農業恐慌時代になると、あんなに澤山月給を取るといつて教員を叱責したといふ話を聞いたが、これは經濟倫理の問題に觸れてゐる。

經濟の新しい形に即して、新しい經濟倫理を確立する必要は、今日の教育の不安を見ただけでも明瞭である。教員に向つてただ抽象的に倫理を説いても無駄である。教育の不安を除くためにも、國家經濟の新しい形が現はれねばならぬ。

(二月七日)

### 心に希望を

月收七十圓以下のものに一定の條件のもとに、二圓の手當を支給すると、政府で決定した。その二圓が現在、木炭何貫目にあたり、大根何本にあたるなどといつて批評するものもあるが、たとひ僅かにしても、有るは無いにまざるに相違ない。ともかく、二圓は二圓であるのである。

二圓は二圓であるといふのは論理であるが、願くばこの論理が一貫することを期待したい。今

月の二圓が、來月は一圓九十錢の値打しかなくなることはないやうに、言ひ換へると、このうへ物價騰貴を來たすことのないやうにすることが、肝要である。今月は七十圓で買へた物が、來月になると七十二圓かかるといふのでは、今度は二圓以上の手當を出さねばならなくなつてくる。

私はここで、經濟學の常識を復習しようと欲するのではない。むしろ私は、人はパンのみにて生くるものにあらず、といひたいのである。而も物價が從來の如く連續的に昂騰してゆけば、二圓の錢も石に等しくならぬとも限らない。

この時に最も大切なことは、國民の心に希望を與へることである。二圓の手當を支給することについては、我々も大いに必要を認めるものであるが、それと同時に忘れてならぬことは、心に希望を與へることであり、これは金錢で量ることのできぬ價值をもつてゐる。心に希望さへあれば、人間はどんな苦難にも堪へてゆくことができるものであるから。

私はもちろん、單なる精神主義を説かうとするのではない。いはゆる精神主義が、その反面露骨な唯物主義でしかないことを、各人は自己の周圍において餘りに屢々經驗してゐる筈である。闇相場が常識にならうとしてゐる世の中に如何なる精神主義があり得るであらうか。

ここで私の注意したいのは、最近漸く顯著になりつつある經濟主義的偏向である。經濟の問題

が、今日極めて緊要な問題であることは、いふまでもない。しかしそのことから、經濟主義への偏向が生ずることは危険である。むしろ現在大切な認識は、經濟の問題も或る意味で政治の問題であり、政治の力に依らなければ、經濟の改革も不可能であるといふことである。そのことを、何よりも闇相場が實證してゐる。經濟に對して、つねに政治の力の加はることが必要であるといふのではない。新しい機構で經濟が自働的に動き始めるやうにするには、現在政治の力に俟つことが多いのである。

心に希望をもたらずものは、政治である。經濟主義的偏向が目立つて現はれつつあるとき、特にこのことをいつておかねばならぬ。

(二月二十一日)

## 思想の具體性

斎藤隆夫氏の問題についていろいろ意見を聞くのであるが、いつたいどう判斷してよいのであるか。判斷の基礎となるべきものが公表されてゐないので噂に據るのほかに、ところが噂は噂する人の主觀に彩られてゐるのがつねであるから、困るのである。

新聞に依ると、斎藤氏も今次の事變が聖戰であることを認めてゐるやうである。しかしそれだからといつて、むろん直ちに斎藤氏が辯護さるべきわけではない。問題は言葉でなくてその具體的な内容如何にある。そしてその點で斎藤氏の除名を主張してゐる人々も、彼等は如何なるものを持つてゐるのであるか。われわれ國民はその具體的なものが聞きたいのである。自分で具體的なものを持たないでただ便乘的に強硬論を唱へてゐるのでは、やがて同様の問題が繰返されないとは保證できないのである。

思想は元來具體的なものである。例へば政治について、經濟について、また文化について、具體的な意見があつて初めて思想である。その根柢に哲學といふものを考へるにしても、その哲學は政治哲學や經濟哲學、また文化哲學を含むものとして初めて完全な哲學であることができる。

しかるに今日では思想といふものが何かそれだけのものとして存在するかのやうに考へる風が愈々盛んである。だから問題は單に言葉だけのことになる。われわれはそのやうな、言葉に過ぎぬ言葉を餘りに多く詰め込まれてゐないであらうか。

思想が抽象的に存在するかのかの如く思ふところから、思想の問題については誰もがひとかどの専門家として發言し得るかのやうに考へる誤解が廣く存在してゐる。科學や技術に關することはも

とより、財政や經濟に關することについては、専門家といふものを不當に恐れる傾向が存在する一方、思想の問題になると今度は誰もが専門家の如く振舞ひたがる傾向がある。そこでまたどんな問題をもいはゆる思想の問題として取り上げてくるといふ傾向が生じてゐる。

思想戰といふものも、今後のそれは單なる思想のみのものでなく現實の政治や經濟と結び付き、その中に入つて行はれねばならぬ。わが國において思想の統一がないといふ原因の一つも、思想といふものが抽象的な場面で闘はれてゐるところにある。

斎藤事件の現在の姿は、抽象的な名目における一致が必ずしも具體的な内容における一致でないことを示したものだといふべく、従つてかやうな事件は今日わが國で思想といはれてゐるものの性質に鑑みて、今後も起り得る可能性のあることを示したものに他ならぬ。（二月二十八日）

## 常識の變化

非常時は常識が無力にされ、破壊される時である。これまでの常識では間に合はなくなるから、非常時といはれるのであらう。けれども常識の惰性はなかなか強く、現實が變化して、從來の常

識がこれに對しては、もはや非常識となつてゐる場合においても、なほ常識として通用しようとするものである。

常識は現實の生活の中から生れた知識であり、従つて何よりも現實の生活の變化が常識を變化させる。殊に最近の生活諸事情は、國民の常識を次第に著しく變化させつつある。例へば金と物との關係についての常識の變化である。金があつても物が買へないといふことを、國民の各自は、現實の生活において大なり小なり經驗し、金よりも物を重要と考へる風が作られつつある。

國民の常識はかやうに變化しつつあるのに、政府の政策を見るとその變化がないやうに思はれるのは、指導的立場に立つものとして如何であらう。例へば、石炭の増産のために補助金や獎勵金を出すといふことは、金よりも物を重要と考へる新しい常識に對して、依然として舊い常識の立場にとどまるのではなからうか。

補助金や獎勵金を出しても、會社の懷ろ具合を良くするだけで、増産の成績は擧がらないといふ議論が的中しなければ幸ひである。少くともそれは、すべての經濟活動は營利を唯一の目的とするものであるといふ、舊い常識から出た政策であるといはれるであらう。

議會に對して國民が冷淡であるのも、國民の常識が變化しつつあるのに、議員も政府も一步も

舊い常識の範圍を出ない駢引に終始してゐるためである。「興亞議會」の面目は、いつたい何處に見出されるのであるか。

指導者よりも被指導者が進んでゐるといふ現象は、今日あらゆる方面において認められる。精動の現状などもその例ではないであらうか。指導者といふものの常識を變化して、指導者が指導されるといふことにならなければ、眞の指導者は出て來ないのである。

新しい常識を作つてゆくには、今日の狀態が一時的なものでないといふこと、言ひ換へると、非常時がもはや非常時でなく、新しい常態となるべきものをそのうちに含んでゐるといふことを認識することが大切である。

しかるに常識は豫見し得るものではない。豫見し得るのは科學であり、思想である。それが今日必要なのである。それは新しい常識の成長のためにも必要である。

(三月六日)

## 組織の持続性

戦時内閣はなるべく變らないのが善い。その他の組織にしても、戦時中はなるべく變らないや

うにすべきである。内に一貫したものがあつて、外に向つても一貫して行動することができるのである。

ところが支那事變以來、國內における組織が餘りにしばしば變化してゐないであらうか。傳へられるところに依ると中央物價委員會も今度改組されるし、また國民精神總動員の組織も變更されるのである。精動にしても、物價委員會にしても、從來の成績から見て、改組の必要があることは確かである。

しかし他方から考へると、内閣が變るたびに、それらの組織を何とか變へねばならぬかのやうに思ふことは間違つてゐる。それは官僚的な考へ方に屬してゐる。官僚は、ひとつの地位に就くと、何か自分の仕事といふものを示すために、前任者のやつて來たことを無理にでも變更したがるのがつねである。變更することが必ずしも悪いといふのではない。しかし一旦變更する以上、自分がその地位を離れても、變更しないで濟むやうな確固不動のものを作る覺悟で十分慎重に、見透しのあるものを作ることが大切なのである。

次に日本人の悪い癖として、一旦人を頼んだ以上、その人をどこまでも信用してやらせるといふことがなく、少しやらせてみて、うまくゆかないと、直ぐに取り代へるといふ風がある。他を

信賴して永い目で見るといふことがないところから生ずる不利益は特に從來大陸の經營においてすでに十分に經驗されてゐることである。精動の如きにしてもあんなに度々改組で脅かされてゐるのでは落付いて一貫した活動を展開してゆくことができないであらう。もちろん、現在、精動や物價委員會などに改組の必要がないといふのではない。その必要は大いにあるのである。しかしそれらが度々改組されねばならぬといふことは、從來單に間に合せのものを作つて來たことを示してゐる。その無責任な態度の責任が追及されねばならぬ。内閣そのものにしても一時の凌ぎに作るといふ風がないであらうか。

日本は今、持續的な組織を必要としてゐる。好い加減なことでやつてゆけないことは日々益々明瞭になつてゐる。崩れるものは早く崩すが善い。そしてそのあとに、一日も早く將來のある、發展性のある組織の基礎をおかねばならぬ。現在のやうに動搖つねならぬ状態においては國民の精神消耗の結果が恐ろしいのである。

(三月十三日)

## 取残される思想

いつかの近衛公の言葉を俟つまでもなく、今の日本の最も重要な問題が經濟問題であることは明かである。この問題は人々の毎日の生活に關係してゐるので、誰も無關心であることができない。しかるにかやうに經濟問題が全面的に人々の前に立ち現はれるに従つて、從來「思想」といはれてきたものが取残されてゆく傾向が見られはしないであらうか。

例へば現在、闇取引が横行してゐるといふが、この現象の何處に「日本的」なものがあるであらうか。自由主義經濟の建て前からいへば、闇相場は、それが必然的な現象であり、従つて「世界的」といふ意味のものなのである。いくら日本精神を説いても、一方において闇取引が普遍的に行はれてゐる限り、その思想は宙に浮いたものである。

以前から我々は現實的な意味における日本精神は現在の日本人の行動そのもののうちにあるといつてきたのであるが、今日の經濟現象の何處に日本の特殊性があるのかと問ひたいのである。

もちろん我々は、日本主義の思想に反對するものではない。ただそれが從來のままであつては、

今の日本から取残されてしまふことになり、「思想」といふものは満腹してゐる時の贅澤物に過ぎず、空腹になれば問題でないといふことにはしないかと虞れられるのである。さうでないやうにするためには、それは現在の社會的・經濟的問題を解決し得るやうな具體的な内容をもつたものにならなければならぬ。

今日、思想が取残されてゆく傾向があるからといつて、思想の必要がなくなつたわけではなく、思想といふものが新しい形で現はれて來なければならぬことを示してゐるのである。

例へば、安藤正純氏が議會で三民主義について質問してゐたが、現在三民主義の問題はジャーナリズムの上では既に人氣がなくなつてしまつてゐるやうであるにしても、今や支那に新中央政府が成立しようといふとき、實はその現實的な重要性をもつてきたのであり、今後益々重要性を加へてくるであらう。しかし我々はこの問題について明確な認識を與へられてゐるであらうか。

従來「思想」といはれてゐたものが取残されてゆくに從つて、今日の社會的・經濟的現實の中から新しい「思想問題」が現はれてくる傾向は高まりつつある。この問題を完全に解決し得る日本の思想にして世界的意義を有し得るのである。

(三月二十日)

## 検閲の責任

この頃検閲の問題が著述家や出版業者の新たな關心となつてゐる。從來公刊されてきた書物が時勢の變化によつて發禁になり、そのうへ著者が罪に問はれるといふことは過去にも例があるが、最近また同様の追及を受けてゐる者がある。ところが更に議會における問答に依つて、右翼的思想家として知られる某氏にも、目下類似の問題のあることが明かになつた。

私はその人々の歴史觀に必ずしも贊成するものではない。また私は研究の發表に無制限の自由があるなどと考へるものではない。そして何人も自分の意見を公にする以上、その社會的影響に對して責任を負ふべきことは當然である。

尤も國民が健全な常識を持つてをれば、どんな思想でも、とりわけそれが以前全く違つた社會情勢下において書かれたことを考へるとき、國民の判斷はそれによつて迷はされることはないであらう。そして私は日本國民がそのやうな健全な常識を持つてゐるものと信じてゐる。

しかし多數の人間のうちには批判力のない者もあり得るとすれば、從來發行を許されてゐた書

物が時勢の變化に伴つて禁止されることは當然であらうが、處分は發禁だけで足りるのではないかと思はれる。そのうへ著者や發行人の罪を問ふといふことは酷に過ぎはしないであらうか。

もし彼らの責任を追及しなければならぬといふのであれば、從來その發行を許可してきた檢閲當局の責任もまた同じやうに追及されねばならぬことになりはしないか。著述家や出版業者を追及しながら官吏の責任は全く不問に付するのは片手落ではないか。法は公平であるべきであり、公平であつて權威があるのである。のみならずそれによつて、有爲の學者、思想家等を徒らに葬ることは、人物經濟の上からも甚だ遺憾なことといはねばならぬ。

更に考ふべきことは、時世の推移に従つて檢閲の方針には變化があり得るとしても、もしそこに何らの基準もないとすれば、それはすべての著述家にただ時世のままに移り變ることを要求するに等しいであらう。かくては曲學阿世の徒のみ多くなり、その結果は却つて國民思想に惡影響を及ぼすことになりはしないか。檢閲當局は、國家の悠久なる文化の向上に對する眞の責任感から、常に確固たる基準を把持してゐることが望ましいのである。

(三月二十七日)

## 教育義務制案

教育の改革にとつて大きな問題の一つは小學校教員の問題である。それは既に現在においても、經濟界の影響にもとづく教員の轉職の増加及び教員志願者の減少による教員の不足と質の低下となつて現はれてゐる。そしてその解決は教員の優遇といふ經濟的問題を含んでゐるのである。

しかし教員の問題は義務教育年限の延長とともに現はれてくるであらう。即ちその年限が八年に延長されると、それに伴つて教員の質の向上が必要になり、従つて師範學校を専門學校程度に高めねばならぬことになつてゐる。さうなると勢ひ教員の初任給から上げねばならず、そこにまた經濟的問題が出てくるのである。

教育費は從來市町村財政にとつて大きな負擔になつてをり、ためにその國庫支辨の問題も起つてゐるのであるが、それが全部國庫支辨になるとしても、教員の俸給を上げることが勘定に入れると、國家の負擔は甚だ重いであらう。

この場合、或る人が問題解決の方法として私に話したところには傾聴に値するものがあると思

はれる。その意見を簡単に紹介すると、専任の教員は大いに優遇するが、數を少くし、その代りに一般國民のうち小學校で教へ得るだけの學識と經驗のある者を國家で登録しておいて、必要に應じて、一定の期間、義務的に教育に従事させるといふのである。恰もすべての健康な男子が兵役の義務を有すると同じやうに、すべての優秀な國民は教育の義務を有することになる。それは現在のいはゆる義務教育制に對する教育義務制ともいふべきものである。

元來、教育に専門家はなない筈である。善い農民、善い商人、善い産業家等、すべての善い國民はみな立派な教育家であり得る筈である。國民教育はそれらの人の手で行はれることによつて却つて實際に即した有益なものになるであらう。師範學校を出た者だけが教育家の資格があるといふのは形式主義の考へ方に過ぎない。國民教育はむしろすべての善い國民によつて行はれねばならぬ。

もちろん専門に教育のことを研究し、専門に教育に従事する者が不要であるといふのではない。ただそこにすべての善い國民が義務的に參加して、善い農民が農業を、善い商人が商業を教へるといふ風になれば、學校と社會との關係は密接になり、眞の國民教育が行はれることになり、經濟的問題も同時に解決されるのである。かやうな教育義務制によつて國民の教育に對する關心は

高められるであらうし、またその機會を利用して國民再教育を実施することもできるのである。

(四月三日)

## 民族性と政治

改組還都といふのは支那新中央政府の合言葉である。それは汪政權の新しい出發の第一步を示してゐる。

上海から南京へ來て、首都飯店に落着いた時、私は先づ還都といふ言葉の如何に實感に充ちたものであるかを知つた。中山北路にあるこのホテルの一室から眺めると、紫金山が陽の光を浴びて紫に輝いてゐる。菜の花が咲き、蛙の聲が聞えて來る。池では女が洗濯をしてをり、釣をする人がある。京都か奈良の春が思ひ出される長閑さだ。旅人である私にさへ還都といった喜びが同感されるのである。

旅に出る前、私は支那の民族性といふものについて、いろいろ聞き、またいろいろ讀んできた。上海に來てからも、支那過と稱する多くの日本人が、支那人のことをいろいろと話し、我々はも

つと彼等の心理を知らねばならぬと論じてゐるのに出會つた。その議論はもちろん間違つてゐないし、一般的にはもつと強調される必要があるであらう。それにも拘らず、私自身が知つたのは、何處でも同じ人情であつた。そして今南京に來て、變らぬ自然に接して再び考へたのは、やはり變らぬ人情である。

支那人を利用し若しくは支配するには、支那の民族性を知らねばならぬであらう。マキャヴェリ自身が示してゐるやうに、マキャヴェリズムにとつては彼等の心理といふものの把握が必要である。併し支那人とほんとに提携してゆくには、却つて變らぬ人情を基礎にすることが一層大切なのではないかと考へられるのである。支那人の心理を捉へよといふ主張の根柢には、寧ろ支那人を利用し若しくは支配しようといふ舊い觀念が知らず識らず前提されてゐるのではないかと思はれるところがある。

もちろん、それぞれの國民に民族性の差異があることは確かである。だがこの民族性といふものは、決して單に自然的なものでなく、長い間の政治の結果である。そして今後日本と支那とが提携してゆくには、支那の民族性が新しい政治によつて變化されねばならぬ。しかしこの新しい政治は寧ろ變らぬ人情を基調としたものでなければならぬのではなからうか。

日支提携の發展のためには支那の民族性が變らねばならぬが、それとともに日本の民族性も變らねばならぬといふことは、支那に來てみて一層はつきりと感ずることである。しかも日本の民族性の改造にとつても日本の政治の改新が何よりも必要なことである。

(四月十日)

## 事實の宣傳

宣傳には事實の宣傳と思想の宣傳とが區別されるであらう。この二つの種類の宣傳があらゆる場合に相俟つて、宣傳はその力を發揮し得るのである。ところでこれまで支那に對する日本の宣傳は、主として思想の宣傳に力が注がれてゐたやうである。しかるに支那に新中央政府が出來た今後において、特に必要なのは事實の宣傳ではないかと思ふ。もちろん事實の宣傳は思想の宣傳を伴ふことによつて愈々効果的となるのである。

事實の宣傳には、言ふまでもなく、宣傳の基礎となり得るやうな事實が先づ作られねばならぬ。それはその本質上、思想の宣傳のやうに抽象的でなく、具體的であることを要求されてゐる。それは眼に見ることのできる實證的事實に關してゐる。しかしながら、もし宣傳されるやうな事實

が全面的に出来上つてゐるとすれば、もはや事實の宣傳は不必要になる道理であるから、それが必要であるといふことは、そのやうな事實が未だ全般的には存在しないといふこと、また存在し得ないやうな事情にあるといふこと、を意味するのである。従つて事實の宣傳にとつて必要なことは、先づ典型的な事實がいれば象徴的に作られるといふことであらう。言ひ換へると、例へば模範地區といふやうなものが作られて、その地域内において先づ理想的な事實の形の示されることが必要なのである。

事實の宣傳が必要であるからといつて、その事實を一時に全面的に作り上げようとすれば却つて失敗に終るであらう。なぜなら事實の宣傳が必要であるといふことは既に言つた如く、その事實が未だ全般的には存在し得ないやうな事情にあるといふことを意味するのであるから。かやうにして事實の宣傳にとつて肝要なことは、限りある力を分散することなく一局部に集中して、模範的な事實を先づいはば象徴的に作り上げるといふことである。この點において事實の宣傳は、思想の宣傳がつねに全面的でなければならぬのと異つてゐるであらう。

國內における宣傳についても全く同じであつて、そこには思想の宣傳と共に事實の宣傳が大切である。そしてこの場合にも從來思想の宣傳に偏してゐたのに對して、今や事實の宣傳に力が注

がねばならず、そのためには國內改革の模範的な事實が先づいはば象徴的に大衆の眼の前に示されなければならないのである。

（四月十七日）

### 指導者の反省

事變の初めの頃支那から戻つて來た人々が國民に緊張が足りないといつて憤慨することが多かつた。これに對して、それは寧ろ日本に餘裕がある證據だといつて辯護する者も少くなかつたのである。

ところで、最近私は支那から歸つて日本の土を踏んだ途端、私自身やはり、もつと國民が緊張しなければならぬと強く感じた。日本はこれでよいのかといふ氣持が起るのを、私は禁じ得なかつたのである。

去年あたりは、田舎の人が都會を見てその風潮を慨歎してゐたやうであつた。しかるにこの頃では、逆に都會の者が見物に歩き廻る田舎の人に對して非難の眼を向けるといふ有様である。もちろん私は、慰安や享樂をあなたがち攻撃するものではない。それは活動の元氣を養ふために或る

程度必要なことである。根本の問題は國民の氣力如何である。

溫泉場などの話を聞くと、事變の起つた最初の年は客が非常に少なかったさうであるが、第二年目、第三年目と次第に殖えて、昨今では全く悲鳴をあげるほどの景氣だといふことである。いはゆるインフレもさることながら、國民の緊張が次第に弛緩していつたと思はれるふしも多いのである。

恐ろしいのは國民の無氣力である。事變以來外面的には態勢は漸次整つてきたやうであるが、その反面氣力の衰へが感ぜられないであらうか。

革新はつねにいはれてきたにしても、それも要するに立身出世の方便に過ぎなかつたのではないか。愛國心でさへ内にこもつた眞の情熱でなく、ただ他人に見せるためのものとなつてゐたといふことがないか。今日の狀態を考へるとき、國民性そのものが問題であることを深く感じるのである。國民性の改造が最も根本的な問題であるやうに思ふ。

ところで今日の狀態は何に由來するのであるか。その原因は遠く從來の指導者の長い間の思想方針が不十分であつたことに基くのである。その思想方針を根本的に轉換して新しく出直さなければ、この狀態を改善することはできない。しかるに實際においては、今日國民を非難する者の

多くは却つてただ從來の思想方針を押し進めることしか考へてゐないのではなからうか。指導者が眞に己れを空しくして國民心理の現實を直視しつつ、深く反省しなければならぬ秋である。

(四月二十四日)

## 歸還將兵の動向

最近軍部では利潤統制に關する見解を發表して注目を惹いたが、今度支那派遣軍總司令部で天長の佳節を期し「派遣軍將兵に告ぐ」と題するパンフレットが全軍に配布されたといふことはまた重要である。それは事變の意義を明快に述べ、派遣軍將兵が同時に東亞新秩序の建設戰士たるべきことを示した劃期的な文章である。

特に注目を要するのは、その中の「交代歸還將兵に告ぐ」といふ一項であらう。即ちそこには「若しこの英靈を冒瀆するやうな國內の醜狀、國民の無自覺あらば敢然として起ち皇運を扶翼し奉り聖戰の目的貫徹に向つて國內を導くの覺悟を必要とするは言を俟たない所である」といはれてゐるのである。

戦後國內の諸事情の發展によつて歸還將兵の動向が大きな關係をもつてゐるといふことは、夙に事變の當初から一部の者が指摘してきたことであつた。ところで今、國內には「醜狀」とおぼしきもの「無自覺」と感じられるものがないであらうか。とりわけ歸還將兵の眼をもつて見れば、慨嘆すべきもの、憤慨に値ひするものがないとはいはれないであらう。戦火の中で鍛へられ、大陸の経験で養はれた精神によつて改革の期待せらるべきものは多いであらう。

ただししかしこの際希望したいのは、眼に觸れる現象に囚はれないで、その根本の原因であるところの實體を深く掘むといふことである。如何なる場合にも歸還者といふものには表面の現象が強く印象されるといふのが自然の傾向であるからである。しかるに單に現象にのみ目を着けてゐては、改革といつても、無益な瑣末主義に陥り、重點を逸することになるのは、從來いはゆる革新において國民の餘りに屢々経験してきたことである。

眞の改革には現象の背後にある實體を掘むことが必要である。そのためには印象に囚はれ感情にはしることなく、忍耐をもつて冷靜に現實を分析しなければならぬ。改革そのものが單に現象的であつてはならないからである。すべての改革にあたり、とかく偏狹で性急になり易いのはゆる島國根性を棄てて、大局的に持續的にやつてゆくといふことは、深く大陸を経験した者の何よ

りも考ふべきことであらう。「大陸の經驗」でさへもが「島國的に」發現する虞れがあるのである。

歸還將兵の動向は今後の日本にとつて極めて重大な關係にある。それは國內情勢が複雑になつてゆくに從つて愈々重要性を加へるであらう。諸氏の大陸の經驗が正しく生かされることこそ最も大切なことである。

(五月一日)

## 政治の倫理

經濟倫理といふ言葉が一つの新しい流行語となつてゐる。それは今度の地方長官會議などでも現れるほど一般化してきた。尤も言葉が流行してゐるからといつて、實體が確立されてゐるわけではなく、むしろ言葉の流行によつて實體に關する問題が蔽ひ隠されてしまふ危険さへあるのである。

新經濟倫理の確立はたしかに必要である。だが先づその内容について明確な觀念が與へられねばならぬ。もしそれが單なる倫理主義を意味するとしたなら、既に從來の精動あたりの成績から

見て明かであるやうに、經濟倫理論は無力である。新しい經濟倫理は經濟機構そのものの中にあつて、その改革と結び付いたものでなければならぬ。機構を變へないでにおいて觀念だけを變へようとしても無駄である。

言ふまでもなく經濟機構には人間が伴つてゐる。従つて人間の觀念を變へるといふことは、機構を變へ、その作用を發揮させる上に大切であり、經濟倫理の強調される所以もそこにあるであらう。

だが人間についていへば、人間を動かすものは經濟であるよりも政治である。人を動かさなければ物も動かないといふことは最近の經濟事情において益々明瞭になつてきたことであるが、その人を動かすことができないのは政治がないからである。今日の情勢は物の動員とともに人の動員を必要としてゐる。しかもそれは單に經濟的力としての人間を動かすことでなく、政治的力としての人間を動かすことである。國民を政治的力として動かさなければ國民を經濟的力として動かすこともできないといふことは、既に今日までの經驗において十分に實證されてきたことである。

統制經濟は少くとも現在の段階においては政治が經濟に對して指導的であるといふことを意味

してゐる。もし政治に指導力がないなら、經濟倫理といつてみても人間を倫理的に動かすことはできない。經濟の倫理は政治の倫理によつて裏打ちされることを要求するのである。

もちろん經濟倫理は大切である。しかし國民に向つて經濟倫理を説くことによつて、政治の責任者が政治の倫理を忘れるやうなことがあつてはならぬ。經濟倫理といふ言葉は政治の責任を他に轉嫁するために作り出されたものではなからう。政治倫理が定まつて經濟倫理も定まる。國民には經濟倫理のみが問題であつて、政治倫理は無關係であるなどといふ間違つた考へがあるべきではない。

(五月八日)

## 世界史の一瞬

歐洲戰爭が本格化してくるに従つて、豫言が益々活潑になつてきた。イタリアは參戰するか、アメリカは參戰するか。ドイツが勝つか、英佛が勝つか。ヨーロッパ文化の將來は如何になるか、世界の新秩序とは何であるか。これら大小種々の問題について、様々の見透しが述べられてゐる。見透しはこの場合つねに豫言的調子を帯びてゐる。

ヨーロッパ戦争の發展について見透しを得るに努めることは、日本の將來にとつて大切である。見透しは冷靜な、客觀的なものであつて見透しである。しかるに最近、その見透しと稱するものが次第に熱を帶び、主觀的となり、餘りに性急になりつつあるのが感じられないであらうか。

嘗てマルクス主義が流行したとき、同じやうな性急な見透し、豫言が流行した。資本主義の沒落について、世界革命について、それが明日にでも迫つてゐるかの如く、客觀的見透しと稱する實は主觀的希望が豫言者的な口調で述べられた。この性急な見透しが、多くの有爲な青年を犠牲にしたのである。

同じやうな性急な見方が支那事變についてもあつた。この事變の世界史的意義とか東亞の新秩序とかが、數ヶ月、數年のうちに實現され得るものであるかの如き見透しが一部で行はれたのである。かやうな性急な考へ方が無意味で、危険でさへあることは、事變の現在の段階に至つて最早十分に明瞭になつた筈である。しかるに今またヨーロッパ戦争について同様の見透しと稱するものが、嘗てのマルクス主義流行時代におけると同じ性急さをもつて、今度は或る一部の人々の間に盛んに行はれてゐるのは、注意すべきことであらう。

世界史は急がない、といふのはヘーゲルの言葉である。個人の一生とは違つて、世界史は十分

に時間をもつてゐるのであるから、急ぐ必要はないのである。十年、廿年は世界史にとつて一瞬に過ぎない。世界史の時間を個人の一生の時間で量つてはならぬ。

もとより我々はヘーゲル流の歴史觀の客觀主義的誤謬に陷つてはならないであらう。世界史の時間は個人の一生の時間とは單位を異にするにしても、それはやはり瞬間から瞬間へと歩むのである。「バスに乗り遅れない」やうにすることは大切である。性急な見透しによつて誤らないと共に、あらゆる場合に處し得る國內體制を速かに整へておくことが必要なのである。

(五月二十二日)

## 科學の生活化

ヨーロッパ戰爭の勝利がいつれの側に惠まれるかはなほ豫斷を許さぬにしても、ドイツの目覺しい進撃振りは驚歎に値する。ナチズムを好むと好まざるとに拘らず、ドイツに味方すると否とに拘らずそこに學ぶべきものは多いであらう。

ドイツの成功の原因として先づ擧げられるのは、その武器の威力である。もちろん武器だけが

問題であるのではない。その戦闘精神の旺盛がまたドイツ軍の成功の原因であるといはれてゐる。だが旺盛な戦闘精神そのものも優秀な武器に負ふところがあるのである。人間は彼自身としては必ずしも強いものではない。弱い人間も武器を身に着けるならば、猛獸に向つても勇敢に戦ふことができる。そのやうに、軍隊にしても精銳な武器によつて自信ができ、勇氣づけられるものである。

武器は偶然に出てくるのではなく、科學の產物である。従つて武器を身に着けるといふことはつまり科學を身に着けるといふことにほかならぬ。ドイツの科學の威力は既に前の世界大戰において示されたのであるが、今次の歐洲戰爭はそれを更に一層明瞭に示すに至つた。

ところで一國の科學の發達は單に少數の科學者の力に依るのでなく、國民全體に科學が普及することによつて達せられる。大衆の間に科學が普及して初めて優れた科學者も現はれ得るのである。近代の軍隊の力もかやうな科學の普及の與るところが多いであらう。

ドイツの新武器は世界を刺戟し、我が國においても科學者が武器の研究に動員されるやうになつた。しかるにこの際考ふべきことは、軍事科學はただそれだけで發達し得るものでなく、科學のあらゆる方面の發達を前提するといふことと共に、科學の發達は科學が國民の間に入り、その

生活の中に融け込むことによつて可能であるといふことである。ドイツの科學の發達はドイツ人の日常生活のうちに家庭の臺所の隅にいたるまで、科學が入つてゐることによるのである。

科學の生活化が必要である。近年我が國の小學校教育においては數學は生活に近づけられてかなり面目を新たにすると認められるが、理科その他においてはまだその努力が足りないと思はれる。科學を單に科學として孤立させるのでなく、人間生活のあらゆる方面に浸透させ、科學的精神の養成をもつて新日本建設の一基礎とすべきである。

(五月二十九日)

### 指導者の養成

國民學校案の實施については種々の問題があるが、中にも重要なのは教員の問題である。すべて制度は人を俟つてその機能を發揮することができる。いくら制度を變へても、その人を得なければ效用は現はれず、却つて弊害を生ずることにさへなるのである。せつかく義務教育年限を延長し、教授内容を改正しても、それに適した教員がゐなければ無意味である。國民學校案の實施にあつて、この新しい制度を有効に運用し得る教師は果して十分にゐるのであらうか。

教員の養成が先決問題である。先づ適格の教員を作つて、しかるのち國民學校案を實行に移すべきではないか。

言ひ換へると、師範教育の改善が先立たなければならぬ。そしてこれは經費その他の點からいつても、國民學校案の實施よりも容易であらう。教師が元の儘で新しい制度を行はうとすれば、却つて弊害の起る惧れさへある。殊に新しい學校内容や教授法についてはなほ多くの問題が残されてゐるのであつて、これを仔細に検討する上からいつても師範學校の改革が先決問題であるべき筈である。

組織と共に人が變らなければならない。これは現にいはゆる新黨組織の問題についてよくいはれてゐることであつて、既成政黨の人々を寄せ集めて舉國黨といふものを作らうとしても、根本的に新しいものは生れてこないで、むしろ弊害の現はれてくる危険が多いといふのと同じ關係にある。

舉國黨は指導者の政黨でなければならぬであらうが、一般に指導者の養成について我が國では永い間眞面目に考へられなかつたのである。大學の如きも指導者の養成について深く考へることなく、サラリーマン養成の機關となり、それが今日の政治の貧困の一つの原因となつてゐるので

ある。固よりはゆる政治家や官僚のみが指導者であるのではない。教員の養成を後にして國民學校案を實施しようといふが如きことも、指導者養成に注意を拂つてゐない一つの證據である。

指導者は國民の間に到る處において作られなければならぬ。單にいはゆる政治家や官僚のみが指導者であるかの如く考へて、國民の間に指導者を作らうとしないのは指導者養成の精神に反することといはねばならぬ。舉國一致の政黨組織が提唱されてゐる今日、眞の指導者養成について眞劍に考ふべきである。

(六月五日)

## 敗者の教訓

ペタン將軍はフランスの敗因について、國民が犠牲の精神を失ひ、享樂的になつてゐたことを擧げた。一九一八年以後のフランスの状態を多少とも知つてゐる者は、この指摘の道德的に過ぎることがないのを認めるであらう。

それにしてもフランスの敗北は、餘りにだらしがなかつた。長期戦になれば必ず勝てるといふ前世界大戰の経験から生じた國民の常識が、彼らを支へて最後まで踏ん張るであらうと一般に豫

想されてゐた。しかるに實は國民がかやうな常識の上に安心して晝寢をしてゐたことが寧ろ彼らの今度の敗北の原因でなかつたであらうか。少くともフランスの指導者たちがそのやうな常識に頼つて戰爭を始めたところに誤算があつた。彼らは自己の國民がもはや元の國民の如くではないことを認識しなかつたのである。

政治家は自己の國民の現實を知らねばならぬ。その場合常識に頼ることは危険である。常識は本性上固定的なものであつて、現在を過去と同じに考へ易く、變化する現實を正確に認識することを妨げるからである。これがヨーロッパの戰爭における敗者の我々に與へる重要な教訓の一つである。

最近わが國においてはドイツの勝利から教訓を受取るべきことが頻りに唱へられてゐる。これは疑ひもなく大切なことである。そこに我々の學ばねばならぬものは多いであらう。けれども勝者の教訓に従ふといふことは、單なる模倣になりがちな自然の傾向をもつてゐることに注意しなければならぬ。徒らに勝者の榮光に眩惑されて、その模倣も根柢的なものに觸れることなく、單に外面的、形式的に陥り易いのである。ただ到達せられた結果のみを眞似て、それに至る過程から根本的に學ばないとすれば危険である。自己認識を忘れて、英雄や天才の形だけを模倣して破

滅した例は、個人の生涯においても少くない。勝者の教訓に比して敗者の教訓は、我々がこれに冷静に批判的に對し得るだけ、一層有益な場合が多いのである。

政治家は國民の現實を正確に認識しなければならぬ。もちろん彼は、假に自己の取扱ふ材料が満足なものでないにしても歎くには當らない。最上の政治家は國民性を自己の目的に適するやうに改造することを知つてゐる。國民性の改造が重要な仕事であることはヨーロッパの與へる切實な教訓である。

(六月二十六日)

### 新生活體制の基礎

國民生活の新しい形式がいよいよ緊要な問題になつてきた。生活の刷新といふことはもちろん事變の始まると共に唱へられたのであるが、從來は何といつても眞劍味が缺けてゐた。我が國の經濟にまだ餘裕があつたためであらう。

しかしそれも米の問題が現はれた頃から次第に眞劍味を加へて、精勵においても國民生活の刷新について眞面目に考へるやうになつた。殊に最近、國際情勢の變化は物動の新編成を必要とす

るに至り、民需の抑制はますます強化され、贅澤品の製造販賣の如きは禁止を見ることになつた。今や物動と精動とが即應して進まねばならぬ事情が明かになつたのである。

生活の刷新といつても單に外から強要されたものである場合、國民はただ消極的になるといふに止まるであらう。與へられた諸條件の變化に對して積極的に新しい生活を設計してゆくといふ新しい生活精神の現はれることが肝要である。從來いはゆる生活の刷新は、ともすれば國民を萎縮させる傾向があつた。生活の不自由を生活の合理化によつて打開すべきことも説かれたが、單なる合理化は消極化となりがちである。國民生活の中に創造的精神が現はれ、新しい生活様式が設計されねばならぬ。いはゆる新文化の創造は單に新しい藝術や哲學などの創造をのみいふのではなく、何よりも國民生活の新しい形式の創造を意味すべきである。

しかるに國民の新しい生活設計がなされ得るために先づ必要なことは、國家の經濟が計畫的になるといふことである。國民に向つて生活の刷新を説く者はつねにこの點を忘れてはならないであらう。

次に大切なのは組織である。新生活體制の組織なしには國民生活の刷新は十分な効果を擧げ得ないのである。この新生活體制は國民を單に形式的に束縛し、かくて國民を萎縮させるやうなも

のであつてはならず、新しい生活精神によつて生かされたものでなければならぬ。それにはこの新生活體制が下からの創意的な政治的協力の方式としての國民再編成との聯關において考へられることが必要であらう。しかも國民再編成はまた經濟再編成と不可分のものでなければならぬ。新しい生活精神は新しい國民組織の中からのみ生れ得るのである。

傳へられるところの隣組制度の法制化にあたつては右の點が考慮さるべきであると思ふ。

(七月三日)

## 東西の新秩序

阿部全權大使と新中央政府との間に日支國交調整會談が始まつた。あまりに長く待たされてゐた國民は、その結果がそれだけ輝かしいものであることを期待してゐる。

阿部大使の渡支以來、ヨーロッパの情勢には大きな變化があつた。今後更に多くの變化が見られるであらう。歴史の歩みは一直線でなく、ジグザクである。けれどもそれは決してただ氣紛れでなく、根本の方向には或る定まつたものがある。日本としては世界史の必然的動向に立脚し、

その時々的情勢の變化に徒らに左右されることなく、東亞新秩序の建設に邁進しなければならぬ。機會主義的であつては、眞に機會を利用することもできないであらう。

ドイツの勝利は、ヨーロッパにおける新秩序の形成を促進した。ドイツもまた新秩序について考へざるを得ない状態になつたやうに見える。去る五月十三日『フェルキツシャー・ベオバハター』に發表されたアルフレット・ローゼンベルクの「ヨーロッパ革命」といふ論文は、その意味において興味深いものがある（『中央公論』七月號譯載）。ローゼンベルクは從來、民族の血の神話とドイツ民族の絶對性を説いてきた人であるが、今や彼はヨーロッパ協同體を主張し、全體主義から協同主義へ轉向するに至つた。それはヨーロッパ戦争の始まると共にわれわれが豫想したことである。現實の必要はのつびきならず思想の發展を促したのである。

ところで少くとも思想だけについていへば、新秩序論、協同體論、全體主義を超えた協同主義は、ドイツに一步先んじてわが國においてこれまで既に唱へられてゐるものである。日本の知識階級はそのことをいくらか自負し、新たに自信をもつても好いであらう。

尤もわが國では、思想についても外國から來たものでないと容易に信用しないといふ風が今もある。しかし一層重大なことは、思想があつても、それを實踐に移し得る政治體制がないといふ

ことであらう。日本には思想がないといはれてゐるが、問題はそこにあるのではなく、むしろ政治体制の整はないために、思想がないといはれるやうな状態が生じてゐるのである。それ故に新政治体制の樹立は、知識階級にとつても重要な意味をもつてゐる。

ヨーロッパ協同體がドイツによつて實現されるか否かは問ふところではない。日本としてはひたすら國內の政治體制を整へて東亞新秩序の建設に邁進し、世界に先驅して世界を指導するといふ大きな抱負と覺悟がなければならぬ。

(七月十日)

## 信賴關係の確立

第二次近衛内閣はいよいよ成立を見た。近衛公はいはゆる新政治體制の中心人物として輿望を擔ふ人である。新内閣の出現は新體制への前進を意味するものとして歓迎すべきことである。

新政治體制はもちろん新内閣の組織をもつて終るものではない。それとこれを混同してはならぬ。新内閣の成立は新體制への一段階でしかない。それは重要な一段階であるにしても、要するに一段階に過ぎぬといふことを忘れてはならぬ。新政治體制は、新しい政府、新しい政黨、新

しい國民組織といふ三つのものを包括し、その三位一體の上に初めて完成する。それら三つのものを互ひに混同することなく區別すると共にそれらを有機的聯關において把握することが肝要である。

新内閣に對しては多くの希望が寄せられてゐる。ここで私も一つ希望を述べることが許されるならば、私は特に政治における信賴關係の確立を擧げたいと思ふ。

新しい國民道德の樹立は新政治體制の重要な任務の一つである。國民心理の問題といひ、新經濟倫理の問題といひ、國民性の改造の問題といふものは、總てこれに關聯してゐる。然るにかやうな新しい道德は政治における信賴關係を基礎として成立する。信賴關係なしには如何なる眞の道德もあり得ないであらう。

政治に對する國民の信賴の缺乏は從來しばしば指摘されてきた。買ひ溜め、賣り惜み、闇取引等の原因もそこにあるといはれてゐる。この際輿望を擔うて起つた近衛公を首班とする新内閣に期待したいものは、何よりも政治に對する國民の信賴の回復であり、増進である。そのために必要なことが責任ある政治を行ふことであるのは、常に論じられてきた通りである。

しかし信賴は相互的であるのを考へることが大切である。それは政府に對する國民の信賴であ

ると共に、國民に對する政府の信賴でなければならぬ。そしてこの國民に對する信賴の缺乏もまた從來しばしば指摘されてきた事である。國民を愛し國民を信ずることによつて、國民を道德的にする事ができる。人間は誰でも、他から信賴されてゐると思ふ時、道德的に行爲する責任を感じるものである。いはゆる官僚統制の弊をなくするためには、先づ國民を信賴しなければならぬ。國民を信賴することによつて初めて國民の協力を期待することもできる。

新しい政治體制とはかくの如き信賴關係の表現であるものをいふのである。

(七月二十四日)

## 流行と權威

事變このかた、本の賣行が非常に好いといはれてゐる。これは喜ぶべきことに相違ないが、しかしその賣行の様子をみると、讀者の本に對する鑑識力乃至批判力が疑問であるといはれてゐる。自分で識別し選擇するといふことが少くなつて、何か流行となつてゐるもの、何か權威といはれてゐるものに無造作に頼るといふことが多くなつた。鑑識力の低下は流行が力を得る原因であり、

また流行は權威らしいものを作り出す原因になる。

流行と權威とが區別されねばならぬことは明かである。權威あるものは眞理でなければならぬが、流行は眞理と虚偽との別なく行はれ得るからである。流行と權威との區別はかやうに明瞭であるにも拘らず、人々に眞偽の判別力が缺けてをり、流行に追隨する風が盛んな所では、何でも流行するものが權威あるものであるかのやうな誤解を生じ易いのである。

我が國ほど權威といふものの多いところはない、と或る人が言つた。もしその通りであるとすれば、それが殘存せる封建思想の現れでないかといふこと、そしてまたそれが流行によつて作られたものでないかといふことを考へてみなければならぬ。流行の波は容易に權威を作ることができる。しかしそれはまた容易に權威を運び去るであらう。流行は次から次へ多くの權威を作る、しかもそのことによつて流行は却つて眞の權威を蔽ひ隠してしまひ易いのである。

今日、我が國には權威が必要とされてゐる。權威ある學問、權威ある思想、權威ある藝術、そして何よりも權威ある政治、——すべて權威あるものが要求されてゐる。あらゆる方面における自由主義體制から新體制への移行には、新しい權威の確立がなければならぬ。或る意味において、新體制は自由主義に對して權威主義の立場に立つものである。しかしこの新しい權威主義は封建

的な、自由主義以前の權威主義とは全く性質の異なるものでなければならぬ。權威に對する要求が封建主義の復活とならないやうに注意することが肝要である。

人々は、權威ある言葉、權威ある行動を切實に求めてゐる。本が賣れるといふことも、一面そのやうな要求の現れと見られ得るであらう。しかしそのために、我々は自己の鑑識力や批判力を失つて流行に追隨し、單に流行によつて作られた權威といふものに身を委ねることを慎むべきである。

新しい眞の權威は如何にして生れ得るか、——これが新體制の根本問題の一つである。

(七月三十一日)

## 一元化の問題

一元化といふ語は今日の合言葉の一つとなつてゐる。あらゆる方面の改革において一元化はたしかに必要である。統制の問題は或る意味では一元化の問題に歸着する。従つてその語が今日かやうに流行してゐるのも偶然ではないといへるであらう。

しかし現在種々の言葉が、その眞に何を意味するかを理解しないで、流行語として使はれてゐることが多いのに注意しなければならぬ。それはただ流行することによつて既に自明のことの如く思はれるやうになり、何等その意味を追求しないといふ傾向が生じる。自分でその眞の内容を理解してゐない言葉を盛んに使用するといふことが今日の流行となつてゐる。尤も、これは今の時代に自然の現象であつて、これによつて革新的雰圍氣が作られる。しかし革新は單に雰圍氣の問題でなく、實行の問題でなければならぬとすれば、いはゆる一元化についてもその意味を正しく把握すべきであり、そしてそれには多少の「哲學」が必要なのである。

一元化の問題は或る意味では單純化の問題である。分立することによつて複雑になつてゐるのを、統合することによつて單純にするといふのが一元化である。しかるに従來の實際を見ると、既存の機關の一元化のために新しい機關が作られても、それがその機能を發揮し得ないで、却つてただ分立するものが一つ殖えるといふ結果になり、その關係がますます複雑になるといつた場合が稀れでない。これはその際既存の機關に對して徹底的な改廢が行はれないからであり、そしてこれは既存の機關に屬する人々に自己犠牲の精神が缺けてゐるのに依るのである。機構の單純化は特に非常時に必要な能率化のために大切であり、そしてそれは非常時にふさはしい自己犠牲

の精神があつて初めて實現されることができ。

機構の一元化は系統を明かにし責任の所在を明かにすることである。従つて少しでも責任回避の態度がある限り、一元化は徹底し得ない。從來頻りに一元化が叫ばれながら、事實は反對に、いはゆる屋上更に屋を重ね、機構のみが徒らに尨大になつたといふのは、當事者に責任觀念が稀薄であつたといふことにも關係があるであらう。

しかし單純化は劃一化ではない。眞の一元化は却つてそのもとにあるものの機能或ひは職能の分化を明瞭することによつて實現され得るのであり、それが單純化といふことの眞の意味である。機能の分化が徹底しないところからセクシヨナリズムも生ずるのであり、かくて一元化も行はれ難いのである。現實における職能の分化を無視した劃一的形式的一元化はものを無力にすることであり、統制において最も警戒すべきである。

(八月七日)

## 大國民の自覺

事の大小輕重を判別することは、あらゆる場合に必要であるが、道徳の場合特に大切である。

この場合、その判別には多少とも洗煉された感覺を要するだけ、一層各人の心掛けが大切なのである。

この頃交通機關の混雜は周知の事實であるが、この混雜を更に甚だしくしてゐるものは乗客の無規律である。これは過日横須賀線での經驗であるが、電車が驛に着く前既に座席は一つもなくなつてゐて、あわてて乗り込んで坐れないことは一目で明瞭であるにも拘らず、皆が我れ勝ちに乘らうとして押し合ひ、悲鳴をあげる女があり、子供など押し潰されさうであつた。そんなに競争して乗つてもそのために生ずる混雜の結果、全體の乗客が乗り終るに要する時間は決して短縮されはしないであらう。その時私の友人は墓口をすられてしまつた。誰かズボンのポケットに手を觸れてゐるやうな感じがしたが力一杯あとから押してこられるので、手を後に廻してみることもできなかつたのである。

戦場において勇敢であつたり、防空訓練において規律正しかつたりすることだけが、愛國心でなければ、國民道徳でもない。今日その言葉は流行しなくなつたやうだが、從來社會道徳とか公徳とかといはれてゐたものが守られることも、愛國心の立派な表現であり、國民道徳の大切な要素である。非常時に最も肝要な道徳は規律である。非常時は無秩序、無規律になり易い時であ

るのだから。銃後において戦線の兵士を忍ぶといふことも、軍隊においてのやうに規律を守るといふことでなければならぬ。

汽車や電車などの乗り降りにおいて規律正しくするといふが如きことは小事であると考へてはならぬ。他人を押し退けて我れ勝ちに乗り込まうとする人間が、他の處で買溜め、買占め、闇取引などに狂奔しない人間であるとは私には考へられないのである。いはゆる公德は「新國民道德」といはれるものの最も重要な要素であるべきである。そして社會道德が守られないのは、大國民としての自覺が缺けてゐるからであると思ふ。新國民道德とは大國民の自覺に基いた道德でなければならぬ。

「大東亞共榮圈」の建設を理想とする日本國民にとつて必要なのは何よりも大國民の自覺である。しかるに今日なほ一方において社會道德が缺如してゐるとともに、他方において徒らに小事に拘泥して喧しくいふ瑣末主義が流行してゐるのは反省すべきことであらう。小さく見えることにも大きな意義を有するものがあり、大きく見えることにも小さな意義しか有しないものがあるといふことについて正しい認識をもつことが大國民に必要な教養である。

(八月十四日)

## 彩票の倫理

滿洲へ來て最初に私の前に現はれたのは彩票の倫理の問題であつた。

今度滿洲國では遊資吸收策として、頭彩十萬圓といふ一枚十圓の特別裕民彩票を發行することになつてゐる。これに對して熱河省協和會から反對の火の手があたり、問題を起すに至つた。反對の理由は、頭彩十萬圓といふのは餘りに民衆の射倖心を唆るもので、その結果は民衆を窮迫に陥れ、國策に惡影響を及ぼすといふのである。民衆を窮迫に陥れるとは、農民や勞働者が税金も納めないで購入することを恐れたものであらう。

これに對して經濟部では、反對者は最近の金融狀態を知らないのであつて、今後必要とあれば頭彩廿萬圓の彩票だつて出す肚だといつてゐるやうだ。また協和會本部でも、反對者は親の心子知らずといふもので、十圓彩票消化の目標が有産階級にあることを忘れてゐるといつてゐる。

同様の問題は日本においても初め報國債券について起つたのであつて、それは國民の射倖心を唆り道德上有害であるといふ反對論が出て、そのために純然たる富籤とは異なる現在の報國債券の

形をとることになつたと記憶してゐる。

經濟的な見地においては、一等十萬圓、更に廿萬圓といふやうな彩票の發行も必要であると考へられるであらう。しかしまた倫理的な見地においては、それが民衆の射倖心を刺戟して有害であるといふ反對論にも理由があるやうに思はれる。そこに經濟の論理と倫理との間に一致しないものがある。そしてまさにこの乖離が彩票の倫理にとつて根本の問題なのである。一方彩票の問題を單に倫理的な見地から取り上げることが抽象的であるといはねばならぬが、他方經濟の論理の歸結或ひは寧ろ前提が反倫理的であるのは容認し難いといはねばならぬであらう。

彩票の倫理の問題は、經濟の倫理と論理とが一致すべきことを意味してゐる。この問題は、經濟の新しい形を作つてゆくことによつてのほか根本的には解決され得ないのであつて、民衆の射倖心を唆るが如き彩票の發賣を必要としないやうな經濟の新しい體制を作ることが根本的に大切である。この目的に達する過程における現在の實證的な段階に相應する手段として彩票も倫理的に認められ得るのである。

新しい體制といつても、現實の狀態を無視して作られ得るものではないのである。實證的に經濟の各面の現實の段階に立脚するといふことは計畫經濟にとつても、寧ろ計畫經濟にとつてこ

そ肝要なのであつて、その點について實證的なところが缺けてゐることが今日の統制の弊害といはれるものの大きな原因ではあるまいか。統制は論理的であると同時に實證的でなければならぬ。

（八月二十日）

## 住宅問題

住宅の問題は人類と共に古いが、いはゆる住宅問題は近代的な問題であり、最も近代的な問題の一つである。それは日本でも重大な問題になつてゐるが滿洲國でも同様である。

この春支那を旅行して私の得た結論は支那の問題は日本に關する限り國內の問題と同じであり、ただ彼處では戦争の現地であるだけにそれが擴大されて見えるといふことであつた。今また滿洲に來て私が感じたのは滿洲の問題も多くは日本のそれと同じであり、ただ此處では新しい國であるだけにそれが擴大されて眼に映ずるといふことである。住宅問題はその一例である。

殊に新京の住宅難は甚だしいやうだ。新京では約二萬戸の住宅が不足してをり、そのうち今年一萬五千戸を建てる豫定のところ、資材の關係で七千戸ほどしか建たないとのことである。官

廳や會社に勤めてゐる人で家のないのが多く六疊の室に三人起居してゐるといふやうな有様である。一體、住宅は常に八パーセントくらゐ空家があつて圓滑にゆくといはれてゐるのである。

かやうな住宅拂底は一面から考へると滿洲國の急激な發展を示すもので、寧ろ喜ぶべき現象である。しかし折角意氣込んで來ても住む家がなくては落着いて働くこともできないであらう。腰を据ゑて仕事をさせるには先づ氣持の好い住宅を供給することが肝要である。新たに赴任して來ても家がないために家族を呼び寄せることができず、二重の生活を餘儀なくされて經濟的負擔に苦しんでゐる者もあるやうである。

住宅問題は經濟的問題であるばかりでなく、道德的問題でもある。狭い室に幾人も一緒に住んでゐては勤め先から歸つても休息も讀書もできず、また家族と別れて住んでゐるのでは生活に潤ひがなくなり、かくて勢ひ享樂街が繁昌することになる。享樂街の肅正は滿洲國でも喧しくいはれてゐるが、それには住宅問題の解決が差し當つて必要なのである。

もちろん當局はその解決に努力してをり官舎や社宅が次第に建てられてゐる。ところがその建築が劃一的で、いかにも殺風景であるのはまた考ふべきことである。イタリアからの訪問團がそれらの住宅を眺めて、あれは何の倉庫かと尋ねたといふ話がある。同じ資材を使つても工夫すれ

ばもつと風趣のある建築ができる筈だと思ふ。遠く母國を離れてをれば感情もすさみ易いのであるから、せめて住宅は趣味豊かなものにするのが大切である。統制と劃一主義とを混同してはならない。

滿洲國に來て見て私は今更の如く住宅問題の重要性を感じたのである。

（新京にて、八月二十八日）

## 協和と指導

このごろ滿洲國では協和と指導といふことが更めて議論されてゐるやうだ。私はこちらでその問題について種々の方面の人から意見をきかされたものである。

由來、滿洲國は五族協和をもつて發足してゐる。ところが協和といふのでは滿人を甘やかすことになつて、うまくゆかない。協和などといふのは日本人にありがちなセンチメンタリズムに過ぎず、協和でなくて指導でなければならぬといふのである。

これはすこしまへ日本においても東亞協同體論について問題になつた點である。協同體論は日

本民族の指導性を否定するものだといふやうな非難の出たことがあつたのである。

もし協和といふことがただ合議的に多數決にでもよつてやつてゆくといふが如きことであるとすれば、それは明かにさうした非難に値ひするであらう。今日そのやうな自由主義的な考へ方が止揚されねばならぬことは當然である。東亞の新秩序は日本民族の指導のもとに建設さるべきものである。しかしながらそれは民族的エゴイズムであつてはならず、指導の目標はどこまでも民族協和でなければならぬ。

そして指導において大切なのは指導する者が實際にその資格を具へてゐるといふことである。ただ命令によつて服従させるといふのでなく實力によつて信従させるといふのでなければならぬ。しかも最も肝要なことは單にイデオロギーをもつて指導するといふのでなく寧ろ實踐を通じて指導してゆくといふことである。滿洲においてほんとに民族協和に成功してゐる日本人の例をみても、それは例へば農業の技術を自分にもつてゐてその土地の農民から信賴され、彼等を生活的に指導してゐる人々なのである。抽象的なイデオロギーを詰め込んだ人間でなく技術を身につけた人間を、大陸は求めてゐるのである。

指導といふとただ號令で人を動かすことであるかのやうに考へるのは外國の全體主義の悪い影

響に過ぎないであらう。東洋古來の政治思想は一種の指導政治の思想であるが、しかしそれは修身齊家といふやうに、指導者として立ち得る資格を先づ自分に養ひ、そして實生活に即して身近かなところから實踐してゆくといふことを本質としてゐるのである。西洋に見られるが如き超越的な權威主義は東洋思想の傳統のうちにはなく、却つてここでは人性の自然に従ふといふことを重んじたのである。

西洋流の自由主義を止揚した協和と、西洋流の全體主義を止揚した指導とは、根本において一致するのである。

(九月四日)

## 文化政策の新しさ

新體制も次第に具體化してゆく。永い間理論に過ぎなかつたものが愈々現實となることになつたのである。

ここに私は理論といふものの大きな意義を考へる。國民再組織とか新國民組織とかといふ名で理論として論じられてきた事は決して無駄ではなかつたのである。もちろん、實際に出來あがる

新體制は從來理論として主張されてゐたものと完全には一致しないであらう。またそれが理論として唱へられてゐた間は觀念的であるとして非難されるやうな性質のものであつたのも已むを得ない。しかしそのためにそれが無用でなかつたことは今にして明かである。

新國民組織と共に要求されるのは新しい政治である。新しい政治は種々の方面から考へられるであらう。しかし政治の新しさにとつて今日最も考慮すべきものは文化政策である。外國の新しい政治をみても文化政策には大いに力をいれてゐるのであるが、我が國においては今特にそれが肝要であると思ふ。

元來、日本の政治は久しく文化政策に對する理解を缺きこれを無視乃至輕視してきたのである。文化政策といふと單なる取締に墮したり一面的に思想對策に偏したりする傾向があつた。故にもし今日の新體制が文化政策に對して眞に積極的であるならば政治に全く新しいものを加へ、政治を魅力あるものにする事ができる。文化政策にとつて基本的な條件は、文化といふものの豊富さを理解することである。この理解があつて初めて眞の文化政策が行はれ政治に明朗性と滋味とを與へることになる。文化政策の貧困は最も根本的には文化の豊富さについての無理解から來るのである。

日本の新體制に對しては滿洲國の協和會なども大きな關心を示してゐるが、その滿洲國では最近次第に文化政策の重要性が理解されてきたやうだ。ことに私が深く興味を覺えたのは滿洲國でも地方にゐて滿系に接觸することの最も多い人々が文化政策の必要を最も痛切に感じてゐるといふことである。この人々は例へば滿系のための讀物がないことをうつつたへてゐる。實際、新京あたりの滿人街などでも路傍で講談式のを賣つてゐる所に洋車曳きがうづくまつて讀み耽つてゐるのを見ると、その意見の適切であることがわかる。面白い讀み物を通して日本の文化に接觸させることは、抽象的な滿洲建國精神論をきかせることよりも遙かに有益であらう。それは滿系の國民學校教師の日本視察旅行が大きな効果を收めてゐることからも察知され得るのである。

新體制の新しいさを文化政策に求めることは努力に値することである。　（九月十一日）

## 人材の不足

滿洲國でも日本と同じに人材の不足が嘆ぜられてゐる。元來全く新しい國家として建設され、新體制をもつて出發した滿洲國においては、それに適した人が得難く、人材不足の嘆はおのづか

ら大きいであらう。日本においても新體制となれば人物の拂底が更に甚だしく感ぜられるに相違ない。

尤もいはゆる人物拂底は、實際に人がないのではなく、あつても用ひないところから生じてゐるといふこともある。用ひるべき人を用ひないのは偏見に囚はれてゐるためである。偏見とは既成の意見をいふ。かかる既成のものを除くことが新體制をして眞に新體制たらしめる所以である。

もちろん人材が實際に不足してゐることも事實であらう。その原因は、嘗て本欄で指摘したこともあるやうに、從來の教育の缺陷、特にそれが指導者の養成に留意しなかつたことにある。この指導者教育は、滿洲國においてのやうに日本人が他の民族を指導すべき地位にあるのを考へる場合、日本の大陸政策の上からも重要なことである。滿系の人にはせると、人材の不足は日系のことであつて滿系ではさうでないといふのは、意味深長である。

ところで今滿洲國を旅行して私の感じたことは、人材がないといはれるこの國においても地方へ行くと、なかなか立派な日本人がゐるといふことである。彼等の多くは建國當時から或ひはそれ以前から地方にゐて眞剣に民衆のために働き民衆から愛敬されてゐる。彼等の地についた仕事を見ると、ほんとに頭がさがるのである。私は主として學校を見て歩いてゐるが、その感想を

率直に述べるならば、概して下級の學校の教員ほど善く、高等の學校の教師ほど駄目なやうな觀がある。そして私のおそれるのは、かやうに地方にゐて眞劍に働いてゐる人々の努力が、地方の實情に疎い中央の官吏の一片の命令で臺無しにされてしまふやうなことがありはしないかといふことである。實際、その例がなくもないのを聞くのである。

かやうなことは滿洲國のみでなく日本においてもあるのではあるまいか。中央の人間はもつと地方の人材に注目し、彼等の仕事を尊重しなければならぬ。私など田舎で生れ田舎で育つた者でありながら、とかく地方を忘れがちであつたことを今更の如く感じるのである。

新體制においては中央の組織に重點をおくといふ意見が強いらしいが、それは統制の見地から必要であるにしても、地方の人材が眞劍に築いてきたものに對して謙遜な態度をもつて臨み、これを命令一つで毀してしまふやうなことのないことが望ましいのである。統制時代においても謙遜が徳であることには變りはないのである。

(九月十八日)

## 新體制と青年

新體制にとつて青年は重要な意義を有してゐる。革新は或る意味でつねに青年のものであるといひ得るからである。青年層を握み得るか否かが、今出來ようとしてゐる新體制が成功するか否かの分れ目であると言へいひ得るであらう。

滿洲國に來て氣持が好いことは、その官吏の多くが若いことだ。若いだけに物わかりが速く、萬事できばきしてゐる。尤も滿洲閣下といふやうな言葉が出來てゐるところをみると、貫祿の足りない高官もゐるのであらう。けれどもまた貫祿といふものが年齢に關係しないことも、滿洲國においてわかるのである。最初から新體制で出發したこの國の發展には青年の力が必要であつた。むろん單なる年齢が問題であるのではない。世の中には青年らしくない青年があり、年をとつても青年らしい人間もゐる。青年とは一つの世代を意味するとすれば、世代を形成するのは單なる年齢でなく、その年齢の人間が經驗する社會的、文化的環境がそれに大きな關係を有するのである。

先達て私は海拉爾から二百キロ許り奥のナラムトといふ白系露人の部落を見に行つたが、そのとき旗公署の人の話に、彼等のうち中堅層であるべき廿代の青年がいちばん駄目だといふことであつた。といふのは、これらの青年は親たちのやうにボルシェヴィキから實際に迫害された経験がないためにそれに對する敵愾心も乏しく、また彼等は親たちが逃げ廻つてゐる間に大きくなつたために教育を受けてをらず、教育がないために宣傳に乗り易いといふのである。滿洲國としては、彼等よりも現在國民學校で教育されつつある少年たちに期待しなければならぬといふ意見であつた。

この例からも知られる如く、青年といつても單に年齢が問題であるのではなく、その具體的な歴史的 성격が問題であるのである。いま日本の新體制において青年が重要な意義を有することは疑ひないけれども、その青年層の現實の歴史的 성격が如何なるものであるかを理解することは、彼等に對する指導にとつて極めて大切なことでなければならぬ。容易に煽動に乗る者が最も頼もしい青年であるとはいひ得ないであらう。他方如何なる煽動にも動かないやうな青年にも期待することはできないであらう。

新體制は青年の眞の指導者を見出さなければならぬ。それは今日の若い世代の歴史的現實を深

く理解してゐる人の間に見出される。そしてそれは誰よりも青年自身であるであらう。

(九月二十五日)

## コラム『東京だより』他

コラム『東京だより』

日滿支一般(五二九) 文化發達の契機(五二二) 自然と文化(五二三) 大陸科學の建設(五二六) 創造への轉機(五二八)  
大陸的日本人(五三二) 再教育の必要(五三三) 知性人の態度(五三六) 日本主義の發展(五三八) 文化の鬭爭(五四〇)  
婦人の進出(五四三) 日滿官吏の交流(五四五) 日本の場合(五四八) 「廿世紀の思想」(五五〇)  
コラム『窓外』

報道と理論(五五三) 法律の限界(五五四) 國策の意義(五五六) 思想の前提(五五八) 平素の用意(五六〇) 人的資材  
活用(五六二) 思想と制度(五六三) 批評と創造(五六五) 感情の處理(五六六) 四箇年の經驗(五六八) 文化の力(五七〇)  
コラム『一朝一夕』

重點主義と均衡(五七三) 統制下の個人(五七五) 府縣ブロックの反省(五七七) 時間の新體制(五七九) 流言蜚語の拂拭(五八一)  
文化上の國土計畫(五八三) 生活正義の實現(五八五) 日本人の複雑性(五八七) 神經戰への用意(五八九) 戰爭の見方(五九二)  
コラム『大池小波』

悲劇の問題(五九四) 學術の協同と綜合(五九五)

コラム『銃眼』

日本とドイツ精神(五九八) 教師の小吏根性(六〇〇)



# コラム 『東京だより』

## 日滿支一體

日滿支一體といふことが新しい日本の合言葉となつてゐる。それは今日においては最早や單なる空想でなく、却て一つの現實を現してゐる。それが單なる空想であつた間は日滿支一體といふことはただ美しい觀念であることが出來た。然るにそれが一つの現實になつた今日、それは極めて深刻な意味における現實になつたのである。なぜなら、それは最も現實的な「問題」として現實になつたのであるから。

日本、滿洲、支那は、經濟上のブロックとして一體をなすといふのみではない。それ等は思想及び文化方面においても相互に關係し、相互に作用し合ひ、今や一體として考察されねばならなくなつてゐる。そしてこの方面においては特に明かに、いはゆる東洋の統一は今日まさに「問題」の統一を意味し、統一的に解決されねばならぬ問題として與へられてゐるのである。

試みに民族主義の問題をとつて見よう。日本の國內においては盛んに民族主義が唱へられてゐる。然るにもし日本が民族主義をもつて支那における文化工作の原理にしようとすれば、忽ち矛盾に出會はざるを得ないであらう。なぜなら支那における三民主義はまさに民族主義を標榜してゐるのであつて、日本と支那とが共に民族主義を持して動かない限り兩國は永久に相争ふのほかないからである。日滿支一體の思想は單なる民族主義を超えた原理によつて東洋に新しい秩序が建設されることを要求してゐる。支那事變は必然的に日本國內の思想に影響し、近年流行の民族主義思想の限界を認識させずには措かないであらう。すでに滿洲國においては五族協和を理想としてゐる。

尤も、日滿支一體の思想はまた抽象的な普遍主義であつてはならぬ。特殊性を無視して劃一的にやつてゆくといふことは日本人の潔癖といはれるものなどに關係して實踐的にも陥り易い危険である。それぞれの民族の特殊性を尊重しつつ、それらを超えて統一する高い原理を把持することが問題なのである。

日滿支の統一は現在の段階においては最も現實的な問題の統一であるといふことが常に記憶されねばならぬ。支那事變といふ大きな問題は日本に國內改革といふ大きな問題を同時に課してゐる。

る。國內改革の問題はこの事變によつて消滅するものでもなければ、延期され得るものでもなく、却て全く逆である。外地は内地の革新の推進力となるのであり、またならねばならぬ。國內改革なくして支那事變の如何なる解決も可能でない。しかも國內改革の指導精神は、一般的原理としては、支那における建設的工作の指導精神と同一でなければならぬ。對支文化工作の原則を探索するといふことは國內改革の原則を探索するといふことと同じである。兩者を何かく全く別のことであるかのやうに考へることは、抽象的な普遍主義が間違つてゐる以上に間違つてをり、今日最も危険なことであると云はねばならぬ。

(一九三八年七月十八日)

### 文化發達の契機

一國の文化の發達にとつて他國の文化の影響が重要な關係を有することは歴史の示す事實である。孤立しては何物も發達し得ない。日本の文化も、古くは支那及びインドの文化から、近くは西洋の文化から影響されて發達して來たのである。

しかるに日本の場合特徴的なことは、日本と諸外國との間における文化の影響の關係が從來殆ど全く一方的であつて、相互的でなかつたといふことである。即ちこれまで日本の文化は、東洋

の範圍内においても、支那やインドの文化から影響されたが、逆に日本の文化がインドはもとより支那の文化に同様に影響したといふことはなかつた。影響は一方的であつて相互的でなく、眞の意味における文化の交流が存しなかつたのである。そこに東洋文化の統一が西歐文化の統一と同じやうな意味において存在しなかつた一つの理由が見出される。

従來の歴史において日本が殆ど一方的に外國の文化から影響されるに止まつてゐたといふことは、地理的に、政治的に、種々の原因があるであらう。それは文化そのものの上から見ても、日本の文化に特殊な性格を與へてゐる。日本の文化の重要な特色と考へられる純粹性といふことも恐らくそれに基くところが多い。日本の文化は純粹であつても型が小さいと云はれるが、この後の點もまたそれに基いてゐる。

日本の文化が従來の制限を破つて大きなものに發展するためには、それが國外へ出てゆくことが必要である。外國の文化を自己のうちに流れ込ませて蒸溜するに止まらないで、逆に自己が外國の文化の中へ入つて戰ふことが必要である。影響が一方的に終らないで眞の意味における交流にまで發展する事が必要である。

そして今、日本はまさにその時期に達したのである。滿洲や支那における日本の政治的進出は

日本の文化が大陸へ伸びる機會を作つたのであるが、このことは文化そのものの立場から見ても、日本の文化に質的な變化と發展の機會となるのでなければならぬ。

日本の文化を大陸へ伸ばすに當つて、元のままの形でこれを大陸へ移さうとしても成功しないであらう。日本の文化自身がその際大陸に適應するやうに質的な變化を遂げねばならず、しかもこの變化が質的な向上發展であることが要求されてゐるのである。日本の文化が今日逆に支那の文化に影響を及ぼすやうになつて茲に東洋文化の統一が可能になるのであるが、そのことは決して單に所謂日本的なものの量的な空間的な擴大といふことに止まり得るものでなく、却つて質的に時間的に變化し發展した新しい日本文化の創造によつて初めて可能になるのである。大陸への進出は日本の文化にとつて重大な試煉であり、しかもそれは根本において新しい文化の創造の問題として過去の如何なる日本人でもなく實に我々の世代の責任に屬するのである。

(七月二十日)

## 自然と文化

さきほど關東に水害があつてから間もなく關西も同じやうに水禍に見舞はれた。この時局にこ

の不幸を見たのはまことに遺憾なことである。自然の前に人間が如何に無力であるかが今更痛感されるのである。

しかし自然に屈服することに甘んずるのは文明人の恥辱である。文明とは人間による自然の征服と利用を意味してゐる。人間は自然の環境に適應しつつ生活するのであるが、この適應は人間が自主的に自然に働き掛けてこれを變化するところに成立するものにして初めて文化と云はれ得る。

この間も或る北海道の人が話してゐたことであるが、函館は天然の良港だといふので港灣工事がとかく輕視され、そのために函館の發達が遅れてきた。このやうに日本人には自然に頼り過ぎる傾向がある。それは先般の水害においても感じられることである。自然に恵まれてゐるといつても、自然に頼り過ぎると、却つて文化の發達は阻害されることになる。

自然に頼り過ぎるといふことは、廣く考へると、日本人の自然觀や人生觀とも深い關係があるやうに思はれる。由來日本人は自然と人間とを融合的に考へてきた。西洋人が自然と人間とを鋭く對立させ人間中心主義的な考へ方をもつてゐるに反して、東洋人は自然と人間とを調和的に見る獨特の自然主義的な考へ方をもつてゐる。

自然と人間とを對立的に見る西洋人は人間を抽象化することによつて却つて唯物主義の弊に陥つた。しかしそれだけまた彼等は自然を支配するための科學や技術を發達させ、自然の脅威に對して人間生活を防衛する事に努力したのである。これに反して東洋人は自然と人間とを調和的に考へることによつて獨特の精神主義を把持してゐるのであるが、しかしまたそのために自然に對する科學や技術において遅れて來たのである。

自然と人間との關係についての東洋的な具體的な見方はどこまでも生かして行かなければならぬ。しかし同時に近代の科學的な技術によつて自然の災害から人間生活を防衛するやうに心掛けることが大切である。人間は技術によつて自然を征服すると普通にいはれてゐるが、技術の自然に對する關係は單なる征服ではないのである。自然はこれに服従するのでなければ征服されない、といふのはベーコンの有名な言葉である。自然の征服は同時に自然への服従であり、自然の支配は同時に自然との協力である。ただ自然を搾取することは自然を利用する最上の方法ではない。自然に對する人間の技術は自然の支配を通じて自然への一層高い適應、一層高い調和を求めることである。技術は自然をしてその本性を發揮せしめ、自己を完成せしめる。しかもそれは人間の本性に屬する理性を發揮することによつて可能にせられる。もし技術の發達が自然や人間を

荒廢させることがあるとすれば、それは技術そのものの罪でなくて社會制度の罪である。

(七月二十一日)

## 大陸科學の建設

支那事變もすでに一年を過ぎた。事變はいはゆる第三期に入り、板垣陸相の云つたやうに「長期建設」が問題になつてゐる。

この一年の間に日本においては支那に關する書物が多數に出版された。その中には翻譯もあり、舊刊の覆刻されたものもあるが、新たに書かれたものも尠くない。私はその方面の専門家ではないが、近來努めてそれらの書物に目を通し、更に若干の外國書をも讀んで見た。その際私の感じたことは、これまで日本の支那通と呼ばれる人々の物の見方が非科學的なことである。それらの本は讀み物としては相當に面白く、また種々様々の知識を與へてくれはするが全體として科學的に出來てゐないやうである。

中には科學的に書かれてゐると思はれるものもある。しかしそれらは如何にも獨創性に乏しいやうに感じられる。それらは根本的な見方において、或ひは英米の、或ひはソヴェートの、或ひ

はフランスの、支那研究に依存してゐる。かくの如く獨創性に乏しいといふことは、單に私の感じであるだけでなく、専門の支那研究家に尋ねてみても、確にさうであるとのことである。支那問題についてさへ我々は遺憾ながら外國人の研究から最も多く學び得るといふ状態である。

日本は今大陸において未曾有の行動を起してゐる。この行動はアジアに新しい秩序を建設すべき行動だとせられてゐる。日本の行動はかくの如く世界的使命を有するものとして全く獨創的な行動である。獨創的な行動には獨創的な認識が伴はねばならぬ。獨創的な認識なしに眞に獨創的な行動を成就することはできない。しかるに若し日本にいつまでも獨創的な支那認識が缺けてゐるとしたならば如何であらうか。

獨創的な認識といつても、もとより單に主觀的なものであることを許されない。認識は認識として科學性を持たねばならぬ。單に主觀的な意見ならば、我々はあるほど持つてゐるのである。今度の事變以來ひとつの著るしい傾向は、新聞雜誌に現れる支那論の多くが政論的になつたことであり、これは當然のことであるにしても、そのやうな政論乃至政策論の極めて陥り易い缺點は、それが主觀的なものとなり、自己の希望を現實とすりかへるといふことである。我々の必要とするのは客觀的な科學的な支那研究である。

例へばイギリスがそのインド經營にあたつて如何に周到なインド研究を遂げたかを我々は想起する。もとよりイギリスのインドに對する場合、それは植民地侵略であつた。日本は支那に對して何等侵略の意圖を有するものでなく、共に携へて新しい秩序を東洋に建設しようとしてゐるのである。この行動の獨創性は獨創的な認識を必要とするのであるが、それが認識である限り科學的でなければならぬことは云ふまでもない。

日本はいま新しい大陸科學を必要としてゐる。それは少數の人間の力によつて建設され得るものでなく、多數の人間の協力を要求してゐる。種々の點においてこの研究に便宜を有する在滿の諸君がこの新しい大陸科學の建設に關心を持たれることが切望されるのである。それは諸君の特別の義務でさへある。

(七月三十日)

### 創造への轉機

國民の生活様式の變化が次第に目につくやうになつてきた。それは物資統制や物資節約の結果であり、また一面物價騰貴の影響でもある。戰爭の作用が國民生活の内部に浸透し始めたのである。

この場合、吾々は戦争の作用に對してただ消極的に我慢することだけで満足すべきでない。この機會を捉へて吾々は進んで生活の合理化を計らなければならない。どんな人の生活にも、よく考へて見れば無駄のあるものである。この無駄が、吾々の生活にとつて負擔となり、吾々の活動の能率を低下させてゐることが多い。節約が合理的に行はれて全般の生活の合理化となる場合、吾々の活動の能率は増加することになる。節約を單に消極的な意味のものに止めておかないで、新しい合理的な生活様式の創造にまで發展させるやうにしなければならぬ。

無駄があるところに美しさがあると云はれるかも知れない。合理化は生活から美を奪つてしまふやうに見える。しかしながら贅澤を美と考へるのはブルジョワ的な觀念であつて、このやうな觀念こそ否定されねばならぬものである。新しい藝術が合理的なものの美しさを見出さうとしてゐるやうに、新しい生活は合理的なものうちに美を發見しなければならない。それはもちろん單なる節約によつてできることでなく、節約が新しい生活様式の創造への轉機になることによつて初めて可能である。

到るところ創造が要求されてゐる。物資が缺乏したからといつて、原始的な生活に還ることが問題であるのではない。もちろん文明といはれるもののうちには餘りに不自然で健全な生活を害

してゐるものもあるのであつて、かやうな場合には原始的なもの、自然的なものに還るのが好いことである。しかし一層重要なことは、戦争のために缺乏した物資に代り得るものを新たに作り出すといふことである。さもなくば生活の貧困化が生ずるのみであつて、合理化は不可能であり、生活における新しい美を創造するといふことなど思ひも及ばぬであらう。物資の缺乏も單なる「代用品」以上の新しい物資の發見と發明への契機となることが要求されてゐるのである。

問題は物資にのみ限られてゐない。戦争の必要とする種々なる統制は、新しい經濟秩序の、新しい社會秩序の創造への轉機とならなければならぬ。事變さへ濟めば元の秩序に還るかのやうに思つて、事變の間だけ何とか我慢してをれば好いと考へるのは、事實としても間違つてをり、理想とすることもできない。今度の事變の眞の解決の道は「長期建設」にあると云はれてゐる。而もこの場合建設とは舊い秩序をそのまま持つてくることであることができぬ。建設はただ革新によつてのみ、即ち新しい秩序の創造によつてのみ可能であり、これによつてのみこの事變が負はされた新アジアの建設といふ使命は達せられるのである。

戦争が破壊的であることは否定できない。破壊を創造への轉機となし得るか否かによつて戦争の意義は定まるのであり、そこに吾々の責任が存してゐるのである。

(七月三十一日)

## 大陸的日本人

社會の轉換期には新しいタイプの人間が生れねばならないし、また生れるであらう。變化する社會は新しいタイプの人間を必要とするし、また變化する社會の中から新しいタイプの人間が生れて來るものである。

人間タイプの創造は文學の仕事である。過去の偉大な文學作品はつねに人間の新しいタイプを創造してきた。しかるにこの革新の叫ばれる時代において、日本の文學は果して要求される新しい人間のタイプを創造してゐるであらうか。まさにこの點から見ても、現在の文學はなほ甚だ貧困であると云はねばならぬ。人間タイプの創造はまた哲學の仕事でもある。哲學もまたこの時代の求めてゐる人間理想を構成しなければならぬ。今日いはゆる人間學は、元來、この社會の轉換期において崩壊しつつある舊い人間タイプに對して新しい人間理想を確立すべき任務を有するものである。しかるに我が國の講壇哲學の手にかかると、かやうな人間學も時代の要求とは何等關はりのないものにされてしまふ。

新しいタイプの人間の創造はしかし單に文學や哲學のみの仕事ではない。それは實にこの轉換

期の社會に生きる凡ての人々の生活的な課題である。その時代に對して積極的に働き掛けようとする者は、自己の人間を變革し、自己を新しい人間として主體的に確立しなければならぬ。現代日本が必要とするのは大陸的人間だと云はれてゐる。しかし單なる大陸的人間が要求されてゐるのではない。新しいタイプの大陸的人間が要求されてゐるのである。

從來とても大陸に居住する日本人のすべてが大陸的人間であつたわけではない。彼等の中にはゆる出稼ぎ根性の人間が尠くなかつた。滿洲の如き土地へ行くことを植民地へ出稼ぎにゆくことであるかのやうに考へる者が多かつた。かやうな人間が大陸的人間でないことは云ふまでもない。かやうな考へ方は滿洲國の成立以來清算さるべき筈であり、そこに滿洲國成立の一つの意義があるのである。

從來の大陸的日本人にはその感情なり意志なりにおいてなかなか立派な人間があつた。ただ惜しいことには、彼等の多くはその知性において局限されてをり、科學や思想、その他文化的なものにおいて缺陷があつたやうである。新しいタイプの大陸的人間は舊いタイプの大陸的人間の持つてゐる立派なものを繼がねばならぬことは勿論であるが、なほその上に特にその知性においてすぐれた人でなければならぬ。ともすれば失はれ易い文化的意欲を強く持ち續け、つとめて思想

的なものに接觸して攝取することが肝要である。そして何よりも大切なことは、東洋における日本の世界史的使命についてつねに理論的な自覺を持つといふことである。

新しい建設に向つて進みつつある滿洲國においてはすでに内地では見られないやうな新しいタイプの日本人が作られてゐると聞いて、我々は頼もしく思つてゐる。來るべき新しい日本人のモデルになり得るやうな人間がそこから生れてくるのは望ましいことである。

(八月二日)

## 再教育の必要

この頃各方面で再教育の必要が唱へられてゐる。これは今に始まることでなく、既に事變前においていはゆる革新の聲が高まると共に官吏の再教育、教員の再教育などが叫ばれたことがある。官吏や教員の再教育がどれほど眞剣に考へられ、どれほど一般的に行はれたかは疑問であるが、この頃の再教育論は多くの現實性をもつてゐるやうである。

再教育の必要は種々の社會的事情から生じてゐる。傷痍軍人の優遇は今後の日本において大きな問題であるが、傷痍軍人に適する新しい職業のための再教育が要求されてゐる。これは國家の事業としてぜひやらねばならぬことである。次に綿、皮革、金屬等に對する統制の結果生じた失

業者の轉業の問題がある。その轉業が果してどの程度に可能であるかは現在大きな問題であるが、いづれにしても轉業の場合には再教育の必要が生じてくる。

更に最近實施されようとしてゐるものに、いはゆる青白きインテリの再教育がある。東京市社會局では今度失業インテリゲンチヤのために職業輔導所を開設することになった。それは知識階級の失業者を集めて精神的にも技術的にも再教育を行ひ「國策型」に叩き直して滿洲、北支、中支に送らうといふのである。これはまことに結構なことである。從來滿洲や支那は内地の失業者の「落ちてゆく」處であるかのやうに考へられる傾向がないでなかつた。

しかし今日では滿洲や支那はもはや單に日本の過剩人口のはけ場ではない。「植民」といふ言葉さへ既に不適當になつてゐる。従つて今日、内地失業のインテリゲンチヤをそこへ送るにあつても、そのまま送るのでなく、再教育を行つて眞に大陸の開拓者の資格を有する人間に鍛へ直して送らなければならぬ。日本の大陸居住者から「落武者」の意識を驅逐し、新しい希望と抱負とを代りに注入することが大切である。

この再教育において技術は甚だ重要な意味をもつてゐる。日本は最も優秀な技術を大陸へ持ち込まなければならない。これはつねに記憶すべきことである。イデオロギーだけを問題にして、

ただ氣焰を揚げてゐるといふのでは困るであらう。イデオロギーよりも技術が先であることに注意しなければならぬ。もとより思想教育が重要でないといふのではない。しかし思想のことについては、その問題の困難を理解しないで、餘りに簡単に考へることは却つて弊害を生ずる。何よりも忘れてならぬことは特にいはゆる「大陸向き」の思想といふが如きものの存在しないことである。滿洲や支那へ持ち込むべき思想は内地においても教育の必要がある思想でなければならぬ。

従つて思想上の再教育をいふならば、それは單に新に大陸へ行く人々のみでなく、現に大陸で働いてゐる人々にも、また内地で働いてゐる人々にも必要である。この思想、言ひ換へるとアジアに新しい秩序を齎すべき思想は如何なるものであらうか。一般的なことは分つてゐても、これを體系化するの容易なことではない。思想の問題についてはその困難を正しく自覺して、新しい探求の精神を活潑にすることが大切である。それが獨斷の傾向の流行してゐる今日、凡ての人々にとつて必要な思想上の再教育の第一の仕事である。

(八月二十二日)

## 知性人の態度

物を書くことが次第に難しくなってきたが、いつたいこの時代に我々はどのやうな心構へをもてば好いのか、と私は屢々質問されます。これに對する私の答へは簡單です。お互に支那人に笑はれないやうな物を書かうではないか、と私はいつも答へます。

それはまた私が現在他の人の文章を評價する基準でもあるのです。それは簡単な基準ではありませんが、しかし近來新聞雜誌等に現れる文章の中には、支那人がこれを讀めば輕蔑されさうなものが尠くないやうに思われます。まことに困つたことです。

事變前には非常に多くの支那人が我々の書くものを讀んでゐました。現在では減つたに相違ありませんが、それでもいくらかは讀まれてゐることでせうし、そしてその場合にはきつと以前よりも注意深く讀まれてゐることであらうと思ひます。否、そのことに關はりなく我々はいつでも支那人から輕蔑されないやうな物を書くことを心掛けねばなりません。

支那の讀者を念頭において物を書くなどと云へば、我々を叱る愛國者もあることであらうと思ひます。けれども愛國心がこのやうな仕方でのみ現れるのは善いことではありません。今度の事

變の目的は日支の間に究極的な親善の關係を確立することにある筈です。そしてこの事變の唯一の解決の道は「長期建設」にあるとも云はれてゐます。我々が協力すべき、また協力し得ることは實にこの長期建設の方面であつて、それには差當り支那人から輕蔑されないやうにするといふ心構へが大切です。我々が日本の立場に立つて物をいふのはもとより當然のことですが、しかしそれは支那人を納得させ得るやうな議論でなければなりません。支那人に笑はれるやうな物を書くことは決して「國策の線に沿ふ」所以ではありません。しかるに國策の線に沿ふと稱する人々が支那人から輕蔑されさうな文章を平氣で書いてゐるのはどうしたことであらう。

いつたい日本の著述家は讀者を念頭において物を書かない風があるといはれてゐます。そのやうな態度が彼等を獨善的にするのです。それは著述における官僚主義とも呼ぶことが出来るでせう。讀者を念頭において物を書く場合にも、これまでその讀者は日本人だけに限られてゐました。そのことが日本人の思想や藝術を狭いもの、小さいものにしてゐたといふことがあつたともいへるでせう。しかし今後我々は少くとも支那人を念頭において仕事をするやうにしてゆかねばならぬと思ひます。それは日本文化の發展にとつて大切なことです。

支那人から輕蔑されないやうにするといふ心構へは、單に物を書く上だけでなく、我々のすべ

ての行爲にとつて大切なことであります。荒本文相は「世界的日本人」になれと云ひましたが、支那人をチャンコロ扱にしてゐるやうでは到底世界的日本人になることができません。他人を輕蔑することは自分を輕蔑することです。世界的日本人となるためには先づ支那人に笑はれないやうにしなければなりません。支那人をほんとの意味で愛することを學ぶのは、從來日本人の惡風とされてゐる西洋崇拜を打破する上においても役立ち得ることであると思ひます。

(八月二十五日)

## 日本主義の發展

日本主義といはれる思想にとつて今日飛躍的な發展が必要になつてゐる。いつたい日本主義は支那事變の前に現れたものであるが、すべての思想はその現れた當時の事情に制約されるものであるとすれば、支那事變と共に甚だしく事情の變つた今日、日本主義の思想にとつてもこれに相應する發展がなければならぬ筈である。

尤も或る意味では日本主義は今日においてその必要を増してきたとも云へるであらう。即ち事變の進行は我が國民の思想的統一が益々鞏固にされることを要求してゐるのであるが、その目的

にはさしあたり日本主義が最も適切な思想であるやうに思はれる。しかしひとたび對支工作といふ問題を考へるならば、從來のやうな日本主義では不十分であるやうに思はれるのである。

この場合、日本の國內は日本主義でゆき、支那に對しては何か別の思想でゆくといふやうな考へ方も存在するのであるが、それは間違つてゐる。今度の事變の意義は、思想の問題についてもかやうに二元的に考へることが不可能になつたところにあるのであつて、日滿支一體といはれる意味もそこになければならぬ。

日本主義はこれまで日本固有のものを強調することに努めてきた。そのことは從來の事情においては意味のないことではなかつたにしても、支那事變と共に事情は大いに變化してきた。日本固有のものを求めようとすれば勢ひ復古主義にならざるを得ない。なぜなら現代の日本の文化は實質的に西洋の影響を著しく受けてゐるからである。しかるにそのやうな復古主義は現在大陸に發展しようとする日本の進歩的な、乃至進取的な行動に對して矛盾を生じてくるであらう。

今日支那における思想工作として最も困難な點は支那の民族主義を如何にするかといふことである。これは現に中支などで思想工作に實際に従事してゐる人々が語つてゐることである。支那の民族主義は既に事變の前から盛んであり、三民主義の中でもその民族主義の思想が特に力説さ

れてきたのであるが、この傾向は事變と共に益々強化されてゐる。事變がそのことを必然的ならしめてゐるのである。この場合に日本主義がまた從來のやうに民族主義を力説してゐるのでは、日支提携は困難であらう。日本主義は單なる民族主義を超えたものにまで發展するのだから、今日の思想であり得ない。

日本とドイツとは事情が異つてゐる。ドイツの場合には國外に多數のドイツ人が土着的に存在してゐるから、民族の統一を唱へることはそれら國外のドイツ人に呼び掛けることになり、大ドイツの發展に役立ち得るにしても、日本の場合には民族主義をもつて呼び掛け得る人間を支那において有するわけではない。この差異に注意することが肝要である。

支那事變は一方日本の國內においては民族主義の益々強調せらるべき理由を作り出すと共に、他方支那に對しては單なる民族主義に止まり得ない理由を作り出すに至つた。この矛盾を如何に解決するかといふことに日本主義の自己止揚による自己發展の重要な契機が與へられてゐるのである。

(九月二十八日)

## 文化の闘争

支那の文化には蠱惑性ともいふべきものがあるやうである。永く支那に住んだ人は皆その不思議な魅力について語つてゐる。支那の文化には人の心を蕩けさせ溺れさせるやうな力があるやうである。昔から度々他の民族の侵入を受けながら、それらの征服者を却つて自分に同化してしまつたといはれるのも、支那文化の有するそのやうな力に依るのであらう。これは今日本人の注意を要することである。

今後日本の文化は支那の文化と闘つてゆかねばならぬ。武力による戦争が終熄した後においても文化による闘争があるのである。この闘争は永い間繼續するものであつて、この闘争において敗北するやうなことがあれば武力の戦争における勝利も結局その意義を失ふことになる。文化上の闘争は平和な手段によつて行はれるのであるが、それが闘争であることにおいては變りがない。支那の文化がもつてゐる蠱惑性に對して日本の文化は如何なる力をもつて戦ふべきであらうか。知性の力に依るのほかないと私は考へる。

いつたい海に接することの多い國の文化は知的なところが多いやうに思はれる。イギリスの文化とロシアの文化、フランスの文化とドイツの文化といふやうに比較してみても、そのことが知られるやうに思ふ。西洋の知的文化が地中海の沿岸に初めて現れたといふことも偶然でない。そ

して日本の文化にはギリシアの文化に似た知的なところがあり、また特に支那の文化に對する日本の文化の特色はその知的なところにあると思はれる。このごろでは日本においても非合理主義が盛んに唱へられてゐるが、それは西洋思想の影響に依るのであつて、日本人は元來知的な民族である。

文化の鬭争は文化の發展の契機になることができる。ギリシア人があのやうに立派な文化を作つたのは、ギリシア民族の優秀性にも基くであらうが、それが當時の地中海沿岸に存在した種々の文化と鬭ひつつ益々自己の知的な性質を發達させていつたためではないかと思ふ。實際、文化の鬭争はそのうちにおける知性の發達に役立つものである。狭い範圍の人間だけなら、また同質的な人間だけなら、氣分的に理解し合ふこともできるのであるが、廣い範圍の人間、異質的な人間に對して自分の力を示すためには知性の力、論理の力に依らねばならない。日本人は直觀的であつて論理的でないと云はれるけれども知性と直觀、直觀と論理を抽象的に分離することは間違つてゐる。ギリシア人においては知性も理論も直觀的なものであつたものである。

今後日本の文化が支那の文化と鬭つてゆくためには日本の文化の知的な性質が深く反省されなければならぬ。從來この點についての反省が缺けてをり、特に最近の非合理主義的傾向がこの

點を益々曖昧にしてゐるのは好くない。また日本の文化は支那の文化に對する鬭争を自分の知的な要素の發展の契機にしてゆかねばならぬ。そしてかやうにして東洋に知的な文化が發達することは支那の文化の今後の發展にとつても好い影響を與へることになるのである。(十月六日)

## 婦人の進出

支那事變が始まつてから現れた種々の社會的變化のうち著るしいものの一つは婦人の進出である。この傾向は今後恐らく更に増大してゆくであらう。歐洲大戰はヨーロッパにおける婦人の社會的進出に一時期を劃したと云はれてゐるが、現在我が國においても同様の事實が見られ、そしてそれは事變後の社會に重要な變化をもたらすに至るであらう。

かやうな婦人の進出にも種々のものがある。出征軍人の歡送、その家族の慰問等、まづ直接に事變に關係したものがある。それらの誰の眼にも付く事實のほかに、今はあまり注意されてゐないが事變後においてその重大性が明瞭に認められてくるであらうと思はれるやうな、職業と實生活とに關係した無數の事實がある。またいはゆる「大陸の花嫁」の如き婦人の滿洲への進出も今後益々重要な問題になつてくるであらう。

それらのことと共に、ここに一つ注意したいのは北京生活學校のことである。それは自由學園の女子卒業生によつて經營され、支那の若い娘を集めて日常生活に必要な知識と訓練とを與へてゐるのであるが、この種の婦人の大陸への進出はこの頃の文士の漢口従軍にも決して劣らない意味をもつてゐる。それは小規模のものであるにしても、對支文化工作全般に對して種々の敎訓を含んでゐるやうに思はれる。

傳へられるところに依ると北京の生活學校はなほ危險のある地域において活動してゐるとのことである。かやうに勇敢に立ち働くことができるのは、支那人を信賴してゐるからであると云へるであらう。實際、この支那人に對する信賴がすべての文化工作にとつて前提でなければならぬ。そして支那人に信賴を持つためには彼等の好いところを理解することが必要であり、チャンコロ式支那人觀が訂正されなければならない。支那人を信賴することなしには、新しい東亞の建設といふ今次の事變の大きな目的は達成されないのである。

對支文化工作といつても、生活の問題が基礎である。この點において北京生活學校が支那人の日常生活を文化的に向上させることに努めてゐるのは適切であると思ふ。對支文化工作が問題にされる場合、思想のことが喧しくいはれ過ぎるのが常である。思想の問題はもとより極めて重要

ではあるが、ただそのことのみ喧しくいつて生活の問題を忘れるならば全く抽象的なものになってしまう。殊に支那人のやうに「生活派」とでも云ひ得るやうな人生觀世界觀をもつてゐる民族に對しては、その點に注意することが大切である。對支文化工作の第一の問題は支那人の生活を善くしてやることでなければならぬ。文化と生活とを分離しないで生活即ち文化といふやうに考へることが古來東洋の特色であるのであるが、近年思想問題が喧しくなつてくると共に、日本主義とか東洋精神とかといふ人々の間において却て思想を生活から抽象して考へるやうなことが生じてゐはしないか、注意しなければならぬ。

北京生活學校が自分の力で活動してゐるのは全く組織の力である。婦人も組織されるならば社會的な力になることができる。北京生活學校は特に滿洲にゐる日本婦人の活動に對して種々の示唆を與へるであらうと思ふ。

(十月七日)

## 日滿官吏の交流

このごろ内地においては各省官吏の交流といふことが問題になつてゐる。そこには確に正しい思想があるであらう。今日の政治に必要なのは綜合性でありまた統一性である。しかも日本の從

來の政治に最も缺けてゐたのはまさにこのものであつた。政治の綜合性と統一性との實現されるためには官吏が綜合的な知識と經驗とを有することが大切であり、單に自分の省の立場にのみ局限されず全體的な見地から必要な仕事が決行され遂行されるやうにならねばならぬ。それには各省官吏の交流は適切な方法であるといへるであらう。これまで豫算の分捕りなどに見られたやうな各省の割據主義が矯正されなければならない。

現代は或る意味において綜合の時代と稱することができ、獨裁政治にはもちろん種々の弊害があるけれども、それは從來の自由主義の政治が陥つてゐた割據主義を破つて政治の綜合性と統一性を實現し得るといふところに一つの意義を有するであらう。ひとり政治においてのみでなく、現代文化のあらゆる方面において綜合性と統一性が要求されてゐる。新しい全體主義が必とせられる理由はそこからも考へられるであらう。

しかしながら現在の状態で各省官吏の交流が行はれる場合、それは單に人事の融通の便宜のために、官吏の出世主義のために利用される危険がある。そのために一つの仕事に身を入れてやるといふことがなくなり易い。かやうな弊害は既に從來も著しく認められたものであるが、各省官吏の交流が行はれることによつてその弊害が一層助長されることになり易いのである。その弊害

をなくするためには官吏の頭を根本的に改造して掛からねばならぬ。人間の改造なしには制度の改革もほんとは行はれないのである。

各省官吏の交流の問題はともかく、我々が實現を希望することは、在滿の日本人官吏と内地の官吏との交流である。これは各省の間に考へなくても、一つの省の内部においても考へ得ることである。

日滿官吏の交流が行はれるやうになり、將來内地において重要な地位に就くべき官吏はぜひ一度は滿洲國で働かねばならぬといふことになれば、滿洲國の側にしても有能な日本人官吏を得ることが極めて容易になるであらう。また主として滿洲國で仕事を爲すべき官吏も時に東京で働くといふことになれば文化的に遅れる心配はなくなるであらう。

いはゆる東亞協同體の建設が政治においても、經濟においても、文化においても、今日の新しい理念になつてゐる。この理念の實現されるためには日滿支の間にあらゆる活潑な交流が行はれるやうにならなければならない。そして差當り日滿官吏の交流が要求されてゐる。日滿一體の政治が可能になり、日本の政治も滿洲國の政治も孤立的、割據的になることなく、つねに一つの全體的な立場に立つて綜合的、統一的行はれるやうになるためには、まづ日滿官吏の交流が必要

であると思ふ。

(十二月二十四日)

## 日本の場合

東亞の新秩序の建設が今事變の目的として掲げられてゐる。この新秩序は次第に一般に東亞協同體と呼ばれるやうになつた。かやうな新秩序の實現されるためには凡てのものが根柢から新しくならねばならぬのは當然である。

東亞協同體といつても固より東亞の諸民族がただいはば合議的に作り得るものではない。その建設において日本民族は指導的な地位に立つてゐる。そのことは單に日本民族の權利であるのではなく、東亞の天地に未曾有の歴史的行動を起した日本民族の義務でもある。しかしながら東亞協同體の建設において指導的であるといふことと征服的であるといふことは決して同じではない。もし日本に征服の意圖があれば、それは東亞協同體の理念と矛盾するのであつて、日本がみづから進んでかやうな理念を掲げることは不可能であらう。東亞協同體は云ふまでもなく東亞の諸民族の共存共榮を目的としてゐる。

日本の指導のもとに建設される東亞の新秩序には、日本自身も協同的にその中へ入つてゆかね

ばならぬものである故に、日本の政治も經濟も文化もすべてこの東亞協同體といふ一つの新しい全體の立場から改造されることが要求されてゐる。この新しい全體の見地に立つた國內改革を行はないで、東亞の新秩序を建設することは不可能であり、その建設において日本が指導的であることはできないであらう。東亞協同體の建設に支那の根本的な改造が必要であることは勿論である。しかし同様の改造が日本にとつては必要でないかの如き錯覺に陥らないやうに十分に注意することが大切である。

このことは特に日本の文化について考へられねばならぬ。日本の文化が舊來のままに止まる限り東亞協同體の建設は成就されないであらう。日本の文化も變化し發展してゆかなければならぬ。日本の保守主義によつては東亞協同體は建設されず、その保守主義はこの際日本の征服主義を意味するやうに誤解される危険をもつてゐる。偏狹な日本主義を滿洲や支那に押つけるといふことは窮極において成功し得る可能性がないのみでなく、東亞協同體の精神に反することでもある。

日本には日本独自の文化がなければならぬやうに、滿洲にも滿洲独自の文化の發達するのが當然であり、また支那に對しては支那文化の獨自性が認められなければならぬ。もとより滿洲の文化や支那の文化が日本の文化の刺戟によつて發達するといふことは望ましいことであり、それに

よつて日本は指導的地位を占めるのであるが、この關係は文化の場合決して壓制的なものであることができぬ。ただ一色に塗りつぶすことは協同の本質ではないであらう。

東亞の新秩序の建設において指導者であることは日本の責任である。それは日本民族の光榮ある歴史的使命である。しかしそのことが日本の文化上における保守主義や壓制主義を意味することにならないやうに留意することが我々にとつて特に大切である。

(十一月三十日)

### 「廿世紀の思想」

二十世紀の思想とは如何なるものであらうか。それは形式的に云へば「中間の思想」であり、また「第三の秩序」である、と私は考へる。二十世紀の思想が中間の思想であり、また第三の秩序であるといふのは如何なる意味であらうか。

近代社會は中世のカトリック主義、つまり教會的世界主義を破つて現れた國民主義と共に始まつた。しかしこの國民主義は單なる特殊主義であつたのでなく、同時に自己のうちに世界的原理を胚胎してゐたのである。自由主義、個人主義、合理主義といはれるものがそれであつて、それが近代的世界の普遍的原理である。その普遍性に従つて近代社會の發展の過程において中世の教

會的世界主義とは異なる一つの新しい世界主義が現れてきた。この近代的世界主義は諸民族のそれぞれの特殊性を認めないことによつて抽象的なものになつてゐる。否、この世界主義は、恰も個人主義の立場においては社會が抽象的なものであるやうに、同じ近代の原理の上に立つことによつて世界を抽象的なものにしたのであり、眞の世界主義ではないのである。

現代はまさにこの抽象的な近代的世界主義の破れる時代であるといへるであらう。しかしながら近代的世界主義を破つて新たに現るべきものは最早や單なる民族主義乃至國民主義であり得ない。民族主義とか國民主義とかは却て中世的世界主義の破れた近代の初めに固有なものであつたのである。現代において民族主義もしくは國民主義の有する意義は近代の抽象的な世界主義に對する否定の契機になることにあつて、落付くべきところは最早や民族主義や國民主義であることができぬ。それは勿論いはゆる世界主義でもない。それはいはば民族と世界との中間にあるもの、單なる民族主義でもなく單なる世界主義でもない第三の秩序である。今日東亞協同體といふやうな新しい一つの全體の構想される重要な意義を我々はそこに認めることができるであらう。

東亞協同體の原理は近代的な個人主義や自由主義でなくて全體主義でなければならぬ。けれどもそれは民族を超えて形成される一つの新しい事として、これまでナチス流の全體主義が民族主

義であつて非合理主義であつたのに對し、その原理は一層合理的なものであることが必要である。なぜなら民族と民族とを結び得る思想は、一民族の内部においては可能であるやうな祕教的なものでなくて合理的なものでなければならぬからである。それはローゼンベルクのいはゆる「二十世紀の神話」でなくてまさに「二十世紀の思想」でなければならぬ。二十世紀の思想は單なる合理主義であり得ないと同様、單なる非合理主義でもなく、却て第三の秩序のものであることを要求されてゐる。

しかも東亞協同體といふやうな第三の秩序は、近代の國民主義が同時に普遍的原理を胚胎してゐたやうに、同時に自己のうちに新しい世界的原理を含んでゐなければならぬ。さもなければ、それが世界史的意義を有することは不可能であると云はねばならぬ。

(十二月二日)

# コラム『窓外』

## 報道と理論

一時非常な人氣であつたニュース映畫も、この頃はそれほどでなくなつたやうである。寫眞に制限があるためであるらしい。勿論ニュースに對する大衆の關心がなくなつたわけではなく、反對にこのやうな時代には出来るだけ多くのニュースを得たいといふのが一般の心理である。

非常時においてはニュースに對する關心が大きくなるものであるが、そのために却つて理論的意識が弱くなる惧れがある。個々のニュースに氣を取られ過ぎるのである。しかし自分に理論を持つてゐなければ、ニュースの意味も正確に理解されない筈だ。殊に報道が制限されてゐる場合、この缺陷を補ふものは理論である。報道の自由がない時には流言蜚語の如きものも生じ易いのであるが、その場合ニュースに對して判斷を行ひ得るのは理論である。今日のやうな統制時代においては與へられたニュースに對して自分で更に統制を行つて理解することが必要になつてゐ

るが、この統制を行ひ得るものは理論である。

理論は經驗に基いて作られる。ニュースも經驗の一形式ではあるが、しかし經驗から理論を作るためには、永い間の經驗を綜合して考察しなければならぬ。今日の現實を的確に把握しようと思へば、最近十年の歴史を精細に考查することが絶対に必要である。ところが現在、數百年前の日本については喧しく云はれてゐるにしても、最近十年の歴史を公平に反省することは忘れられてゐることが尠くない。

われわれの經驗にはとりわけ思想的經驗がある。最近十年の間に實に多くの問題、多くの批判が持ち出された。それらの問題や批判を無視して今日如何なる革新的な理論も考へられないであらう。

時代は百八十度轉回したといふ。しかしそれらの問題が全く消滅したのではなく、それらの批判が全く無意味になつたのではない。理論や思想でさへもが單なるニュースの如く取扱はれるといふことが、日本文化の弱點ではないか。

(一九三八年四月二十八日)

## 法律の限界

先般東京で行はれたいはゆる學生狩りにひつかつた學生に對して、或る署長は、君たちは三流どころで、一流の不良は決してひつかかりはしない、と云つたといふ話を聞いた。私はこの言葉を抑へて、警察の無責任を詰らうといふのではない、寧ろその正直なことに感心したい位である。

最近物資統制の強化に伴つて經濟警察が設けられることになつたが、これも三流どころをいぢめることになつて、一流の不良は法律の網を脱するといふやうなことがないか、注意を要する。尤も、萬一かやうなことがあるにしても、我々は警察を咎めることはできない。その責めは現在の經濟機構そのものにあるのである。

暴利を貪るとか、買溜めに狂奔するとか、物資に關することは法律で取締ることができるとしても、他の方面即ち精神そのものの取締りは法律ではどうすることもできぬ。

しかもこの精神の動員が根本なのであつて、今日買溜めをしたり暴利を貪つたりする不心得な人間が存在するといふことは、從來の國民精神總動員運動が精神の方面においても實は徹底してゐなかつたといふことを示すものである。精神の動員も從來その官僚主義的傾向に相應して法律的形式であつたといふことがないであらうか。

國民を精神的思想的にほんとに動員するためには、先づ國民に支那事變の意義を極めて具體的に理解させなければならぬ。そして次に事變と關聯して遂行せられざるを得なくなつてゐる革新の眞の意義について、國民に理解を與へなければならぬ。革新といはれるものが單なる變化でなく、如何にして國民の生活の發展の契機になり得るかが最も具體的に明かにせられなければならぬ。かやうにして國民に新しい希望を持たせることが大切なのであつて、希望さへあれば人間はどんな苦難にも喜んで堪へ忍びうるのである。

(七月二十一日)

## 國策の意義

先日或る外交官がこんな話をしてゐた。西洋では他の國を國として攻撃することはやらないで、攻撃する場合にはその國の時の政府或ひは特定の政治家を攻撃する、例へばイギリスを攻撃しないでチェンバレン内閣を攻撃する、フランスを攻撃しないでダラディエを攻撃するといった風である。

かやうにして自分に都合の悪い内閣を倒し、氣に入らない政治家を退かせて、その國の政策が轉換されることを企てるのである。しかるに日本においてはチェンバレンを攻撃しないでイギリ

スが全體として悪いかのやうにイギリスを攻撃する。これは外交上不利なことである。

もつとも日本も今日では支那に對しては變つてゐる。すなはち日本は支那の民衆を敵にするのではなく蔣介石政權を打倒するのであるといつてゐる。これは外交における一つの進歩と考へることができらうであらう、同様の考へ方がイギリスその他の國に對してもなされることが望ましいと思ふ。

ところで右の如く一つの國とその國の時の政府或ひは特定の政治家の政策とを區別して考へるといふことは國內の政治の場合においても必要である。國策といふものと或る政治家もしくはその時々々の政府の政策とは區別して考へられねばならぬ。國策といふものはその時々々の政府の政策を越えて持續するものであり、すべての國民の信念にまでなつたものでなければならぬ。その時々々の政策は國策を實現するためのものであり、政府の政策が變つても國策は變らないといふことがあり得る。

この頃國策といふ言葉が濫用されてゐはしないであらうか。政府の政策が何でも國策と呼ばれ、従つて神聖化され、これを批評することはすべて國策に反することであるかのやうに考へられる傾向がありはしないであらうか。むしろ個々の政策に對して正しい批評を行ふことが眞に國策に

協力する所以であると云はれるであらう。政策の批評がなければ國策の確立も、發展も、その眞の實現もないと云ひ得るであらう。

(八月十四日)

### 思想の前提

思想のことが喧しく云はれるやうになつてから既に久しい。それはもちろん正當なことである。現代において思想の問題が重要であることに就いては誰にも異議がないであらう。しかしながら思想のことが喧しく云はれば云はれるだけ一層注意しなければならぬのは、思想の前提である。

ここに思想の前提といふものには先づ技術がある。技術は思想の力が發揮されるための前提である。どれほど國民が思想的に統一されたにしても、技術、とりわけ經濟的な、生産的な技術に缺けたところがあるならば國は危いであらう。そのみでなく、技術は思想を獲得するための前提である。正しい思想に到達するためには技術が論理的思考に對する訓練や科學的方法に對する習熟が必要である。しかるに今日、思想のことを喧しく云つてゐる人々に果してかやうな技術が十分に具つてゐるであらうか。

更に思想の前提としての良心の問題がある。思想を語る者は良心的でなければならぬ。何等の良心もなく、ただ時世に従つて或ひは右し或ひは左する人間は眞の思想家でなく、「職業的思想家」の惡しきものである。

しかるに思想のことが喧しく云はれる時代にはこのやうな「職業的思想家」の輩出する危険が多い。何人も自己の良心に従つて思想に就かねばならぬ。最後まで頼みになるのは良心的な思想である。現在の状態から考へて重要なのは、どのやうな思想を口にしてゐるかといふことよりも、その人が眞に良心的であるかどうかといふことである。

今後世の中がどのやうになつてゆくかを見透すことは容易でない。しかしどのやうな時代になるにしても、我々にとつて最後まで力となり得るのは技術と良心とである。技術家はつねに良心的に仕事することを要求されてゐる、非良心的な技術家に對しては自然が直ちに復讐するであらう。しかるに技術よりも遙かに多く良心と結び付いてゐるやうに見える思想においては却つて、非良心的に振舞ふことが可能であるといふことに注意しなければならぬ。

(九月十五日)

## 平素の用意

このごろ京都へ行つて私は再び先年の關西の暴風のことを想ひ起させられた。あのとき大きな樹木がたくさん倒されて町の美觀を損じたのであるが、その被害が回復されてゐないのである。都ホテルのヴェランダから眺めた景色は相變らず美しかったが、それでも大きな樹木が少くなつたためにその美のこまやかさが減じ、何となく荒れた感じを受けたのである。樹木は三年や五年で大きくなるものではない。五十年前百年前の人の心盡しが今日の美となるのである。

またこの事變で馬が徵發されて行つたために農村では馬の不足が生じてゐるとのことである。しかも馬は自動車などのやうに急に作ることができないのであつて、自然の生長を待たねばならぬ。自然は飛躍しないとすれば、平素の用意が肝要である。

しかし自動車などにしても、實は俄に作られるものでなく、長い間の人智の進歩の堆積の產物である。今度の事變のために生じた物資の不足に對して代用品の生産が獎勵されてゐるが、代用品の發明にしても平素から科學が普及し發達してゐるのでなければ急に出來ないことである。歐洲大戰の頃ドイツにおいては物資缺乏が却つて化學工業の進歩の原因になつたと云はれてゐる

が、それはもちろん平時からつねに科學が獎勵されてゐたおかげである。自然の生長に飛躍がないやうに、文化も俄か造りでは出来ないのである。

かやうにして今日においても文化が重要な關心事でなければならぬことは明かである。今は戰爭中であるから文化的活動が停頓するのも已むを得ないと云ふが如きは、今度の事變が長期建設であるといふことの眞義を解しないものと云はねばならぬ。

この事變が長期建設であるとすれば、現在も平時と同様文化に對する關心の高揚されることが大切である。生活における節約を獎勵するのは好い、しかしそのために文化的な意慾まで抑壓してしまふことにならないやうに注意しなければならぬ。

(十月十五日)

## 人的資材活用

戰時體制下において我が國の經濟は金の經濟に對して物の經濟が重要性を増してきた。しかるに物資が重要な問題になつてくると、科學や技術の意義が更めて認識されねばならなくなり、ここに科學者とか技術家とかの人的資材の問題が生じてくる。

この時局において人的資材が重要であるのは、もとより科學者や技術家の場合に限られないで

あらう。政治、經濟、文化のあらゆる方面において人的資材の必要が感ぜられてゐるのである。或る者は我が國には人的資材が缺乏してゐるかのやうに云ふ。けれども我々はさうは信じない。我が國に缺けてゐるのは人的資材そのものではなく、却つて人的資材の活用之法である。今日果して物的資材の活用に熱心であるほど人的資材の活用に對して熱意が示されてゐるであらうか。人的資材の活用にとつて妨害となつてゐるものに文官任用令がある。文官任用令の改正は人的資材の活用のために要求されてゐる。しかし人的資材の活用は單にそのやうな制度上の問題であるのみでなく、政治家や官吏のモラルの問題でもある。

ただ型にはまつた人間を求めるのでは人的資材は活用されないであらう。非常時は型破りの人間を必要とする。型破りの人間が必要とされるからこそ非常時なのである。ただ無難な人間を求めるのでは人的資材は活用されないであらう。非凡な人間は無難な人間でないといふのが寧ろ普通である。

由來潔癖は日本人の特性であるといはれてゐるが、その潔癖が政治的に現はれる場合特に偏狹になり易い。過去の過失を洗ひ立てたり、既に轉向した者を「擬裝轉向」ではないかと疑つたりしてゐては、人的資材を無駄にしてしまふばかりである。今日大切なのは、種々の人間を包容し

て、それぞれの道において活用する雅量である。

人的資材として最も重要であるのは云ふまでもなく國民大衆である。國民大衆の力を活用するには國民大衆を信頼しなければならないのであつて、國民の力を必要としながら國民の力の盛り上つてくるのをひそかに恐れるといふやうな心理があつてはならない。

(一九三九年一月十二日)

## 思想と制度

人間の身に染み込んだ思想はなかなか除き難いものである。それは自分自身には思想として自覺されないやうな思想であるからだ。それは個人に屬するといふよりも身分とか職業とか、すべて制度と一つになつた思想であるからである。

この議會でまた取り上げられた官僚獨善といふことのうちにも、かやうに官僚の身に染み込んだ思想がある。それは先般平沼首相の吏道刷新に關する訓示の中にさへ認められ得るものである。即ち官吏は「國民の模範」であるといふ思想の如きがそれである。

國民の模範であるもの、國民の模範となるべきものは、何も官吏に限らないであらう。國民に

とつて模範であるものは到るところ國民の間に、國民の各層、あらゆる職業の人の間にある。我々は、理髪屋のうちにも、洗濯屋のうちにも、我々の模範とすべき人物を見出し得る。そしてまた國民の誰もが國民の模範となるやう努力しなければならぬのである。

それなのに、官吏だけが「國民の模範」であり得るかのやうにいふのは、官尊民卑の封建的思想を残存せしめてゐるものといはねばならぬ。かやうなことでは「總親和」は完全であり得ないであらう。吏道の刷新は、官吏は國民の模範であるといふやうな意識からでなく、もつとヒューマンな、人道的な氣持から出立するのでなければ不可能である。

人間の身に染み込んだ思想、自分自身には思想として自覺されないやうな思想を除くには、ただ頭を變へようとするだけでは駄目で、制度から變へてゆくことが必要である。制度そのものが一つの思想であり、思想の現はれである。吏道の刷新は訓示だけでは出来ないのです、官吏制度の改革に依らねばならぬ。

そして問題は官吏にのみ關しない。國民精神總動員といつても、何か精神を注入しようとするだけでは無力であつて、社會の諸制度の改革、國民の再編制を俟つて初めて効果的に行はれ得るのである。

(三月十三日)

## 批評と創造

言葉も時代によつて變るものだ。支那事變の影響のもとにいろいろの言葉が新たに流行するやうになつたが、「創造」という言葉もその一つである。

以前唯物論の流行した時代には、この創造といふ言葉は觀念論に屬するもののやうに見られて嫌惡された。或る時私が「文化の創造」と書いたらそれは創造でなく「生産」だといつて攻撃されたのを覚えてゐる。とにかくその頃は創造といふ言葉はあまり見られず、流行したのはかへつて「批判」といふ言葉であつた。

しかるに最近では反對に創造といふ言葉が流行して、批判とか批評とかは一概に嫌惡されるやうになつた。そこに時世の變遷を認めることができるであらう。

もちろん今日創造が強調されるのは適切なことであり、必要なことである。しかし批評と創造とを抽象的に分離して、批評を無用と考へることは間違つてゐる。全く無前提なところから物を作ることは不可能である以上、現存するものに對する批評は創造にとつて缺くことができず、創造はつねに批評と結び付かねばならぬ。

もつとも少し注意してみると、この批評嫌惡時代にも一種の批評は、しかも強烈に存在するのである。即ち民衆は自肅、つまり自己批評を要求され、その私生活に至るまで、不斷に批評を受けてゐる。ただ反對に、民衆を批評する側は、自己に對する批評を封じ、自己批評に乏しく獨善的になつてゐる。

かやうにして批評が一方的であることは、單に批評されるのみの民衆の間に虚無的な氣持を起させる危険がある。そして虚無的な人々の内部に鬱積するのほかない批評は、非創造的な、ただ批評のための批評となりやすい。他方、自己に對する批評を拒否する獨善的な態度においても眞の創造は不可能である。批評精神が旺盛であることは社會の健全性を示すもので、批評が一方的でなく相互的になり、かくして官民相率ゐて新しい國策を創造することが必要な場合である。批評と創造との關係が全面的に具體的に把握されねばならない。

(八月二十二日)

### 感情の處理

淺間丸事件は我が國民の感情を甚だしく刺戟した。法理論はどうであらうと、この事件に憤慨しない者はないであらう。それは國家の威信に關する問題である。

我々は今、あの去年の天津事件當時の國民の反英感情の昂揚を想起するのである。當時の興奮した感情は、その後どうなつてゐたであらうか。それは適切に正當に處理されてきたであらうか。激昂した感情が鎮まると共に、大多數の者の腦裡から對英問題は消え失せてしまつてはゐなかつたであらうか。今日に至るまで繼續されてゐる天津會談に對して、人々は當時と同様の關心をもつてゐないではないか、と恐れられるのである。

我が國民は熱し易く冷め易いといはれてゐる。もしそれが我々の性質であるとすれば、容易に熱しもしないが容易に冷めもしないイギリス人を相手にするには不適當であるであらう。イギリスに對するには、現に支那事變に處すると同様、何よりも持久力が必要である。支那においては千年が一年である、とイギリスの哲學者バートランド・ラッセルがいつてゐる。支那人は決して急がない、そしてイギリス人も同様である。

個人の生活において感情の處理の仕方が大切であることは誰も知つてゐる。人生論は感情處理の方法論であるといつてもいいくらいである。しかるにこれは個人が自己に對する、また他人に對する場合のみの問題ではない。國民が他の國に對する場合においても、如何に感情を處理するかは重要な問題である。

感情を正しく處理するためには知性が働かねばならぬ。對英問題にしても、一時の興奮にのみ身を委ねることなく、先づ日本の現實を直視し、國際情勢の見透しの上に、東亞新秩序の建設にとつてさしあたつての必要の立場から、今の興奮した感情を適切に處理してゆかねばならぬ。ただ徒らに感情的になると却つて自主性を失ひ、他から利用される危険があるのである。

(一九四〇年二月四日)

## 四箇年の經驗

支那事變もやがて四周年になる。その間に我々は實に多くのことを經驗してきた。過去の如何なる時代においても、同じ期間にこれほど多くのことを經驗したことはないであらう。

四箇年の經驗といふものは無視し得ない重みをもつてゐる。そこに現在の政治のむつかしさもある。例へば政府で何か言ふ、或は何かをする、すると國民はすぐにこの四箇年の經驗に基いてこれを判斷し、これを評價するやうになつてゐる。それだから政府としても、このやうに經驗を積んできた國民が納得し得るやうなことが、過去の經驗から考へて合理的なことをやつてゆかねばならなくなつてゐるのである。

感情的な興奮は永續するものではない。新しいことも慣れるに従つて刺激がなくなる。さうして誰もが反省的になる。これは善いことであるが同時に危険なことでもある。いろいろなことを経験して反省的になつた者は、どのやうなことにも興味がもてなくなり熱中することができなくなる惧れがある。さういふことにならないやうに深く警戒することが肝要である。

そこで大切なことはこの四箇年の経験を積極的に活かすといふことである。経験の重みに壓倒されてしまふと消極的になる。経験に壓倒されないためには、思想とか理論とかいふものを持たねばならぬ。もとより單なる理想論、抽象論が役に立たないことは、これまた四箇年の経験によつて教へられたことであらう。この経験に基いて、経験の中から思想なり理論なりを引き出してくるといふことが大切である。経験を活かすものはそのやうな理論乃至思想であつて、これを基礎にして積極的な活動が可能になる。政府においても過去の経験を十分に検討して、明確で具體的な事變處理の方針を明かにしなければならぬ。

この四箇年の間に我々は、國內的にも、國際的にもいろいろな變化を経験して來た。しかしそれは單に複雑怪奇などといふべきものでなく、そこにやはり一貫して必然的なものが認められると思ふ。

經驗を活かせ！　これが支那事變四周年を迎へるに當つて言ひたいことである。

(一九四一年六月二十六日)

## 文化の力

高度國防國家の理念は、あらゆるものが國防力の意義を有することを意味するものであらう。一見國防と無關係であるかの如きものもなほ國防的意義を有するといふことが、この理念の示すところである。そしてこれはまた近代戰が總力戰であるといはれる理由でもある。

種々の文化のうち科學の如きは國防との關係が明瞭である。近代戰は科學戰として特徴付けられてゐる。高度國防國家の立場から科學の振興が緊要であることはいふまでもない。しかるに文學の如きは從來國防と沒交渉のやうに見られてきたのであるが、それが實は國防力としての意義を有すると考へるのが高度國防國家の思想である。

今日の文化政策の立場が國防力としての文化に存するのは當然である。ところで國防力としての文化を考へる場合、注意すべきことは、例へば「國防文學」と名付けられる種類のもののみが國防的意義を有するのではないといふことである。むしろ國防と無關係であるかのやうに見える

種類の文學もなほ國防力として重要であることを理解することが、高度國防國家の理念において要求せられるのである。

文學は精神の糧である。それは人間の心に慰めや、潤ひや、落着きを與へる。このやうな精神の糧は戰時の國民生活においても必要であり、それによつて國民は物質的生活における缺乏に堪へることができ、心のゆとりをもつて非常時に處してゆくことができる。國民の持久力を養ふ上において文學は特に重要な力である。

我が國の現狀を顧みて科學書の普及が大切であることは論ずるまでもなく明かである。ところで殆どすべての人は文學書から讀書に入るであらう。先づ文學書によつて讀書することを覚え、それから他の種類の書物を讀むやうになるのが一般である。もし文學書が少くなると人々は容易に讀書の習慣を得ることなく、従つてせつかく科學書を普及しようとしてもその目的を達することが困難であらう。この點から考へても、不要不急であるかのやうに見える文學書の出版の決してさうでないことが理解されるであらう。すべて文化上においては餘りに功利的に考へることは却つて功利性を失ふことになるのである。

最近の出版において純文學の書物がいささか繼子扱ひされる傾向のある場合、文化の力がどこ

にあるかについて一層深い考察が必要である。

(十月二日)

# コラム 『一朝一夕』

## 重點主義と均衡

先日相撲を觀に行つて感じたことがある。双葉山の人氣はいくらか落ちたらしいが、強い事は相變らず強い。双葉山が強い理由は玄人にいはせると色々あるであらうがわれわれ素人が見て感じるのは彼の身體が力士としていかにも均整がとれてゐることである。背丈の高い割に肉附がとばしかつたり、肩の張つてゐる割に腹が小さかつたりする者があるなかに、双葉山の身體はよく均整がとれてゐるやうに思はれた。そしてこれが彼の強い一つの理由でないかと感じた。

これはいつも考へられることである。ほんとに強いといふのは、特殊の部分だけが發達してゐるのでなく、全體が均整的に發達してゐるものである。運動の選手などで意外に若くて死ぬものも多い。體操の目的としてゐるのは身體の均整のある發達である。このやうな體操は精神についても考へることができ、修養といふのはいはば精神の體操によつてわれわれの心において理性と

情念との間に調和或ひは均整を作り出すことである。同じことが個人についてのみでなく、社會についても考へられるであらう。ほんとに強い國といふのは、單に軍事だけに強い國ではない。政治がこれに伴はねばならないし、更に經濟や文化がこれに伴はねばならないであらう。

近年重點主義といふものがとなへられてゐるのはもちろん理由のあることである。現に戰爭をしてゐる日本としては、戰爭目的の上から緊要なものに重點をおかねばならないのは當然である。しかしながら、どれほど重點主義が必要であるにしてもそこにはまた均整或ひは均衡といふ大切な問題があることを忘れてはならない。重點は軍需産業にあるからといつて、そのために平和産業はただ犠牲にすればよいと考へてはならない。重點主義によつて國民生活を規正するといふのは正しいにしても、その爲に國民生活の安定について考へる事を忘れてはならない。

いはゆる重點主義は、重點主義以外のものは何でも犠牲にしてよいといふことでなく、新たに重點となるものを中心として新しい均衡を作り出すといふことでなければならぬ。大切なのはこの新しい均衡を作り出すことである。均衡が必要になつたのではない。ただ均衡の中心となるものが移動したといふだけである。

文化についても、いはゆる重點主義の立場から、文化は不要であると考へることが間違つてゐ

るのはもちろん、ただ時局に直接關係のあるものだけを認めて、他はすべて不急不要のものとして排することは間違つてゐる。問題はここでも新しい均衡である。政治家は國家の體操ともいふべきものを理解しなければならぬ。

(一九四二年五月二十七日)

## 統制下の個人

科學技術の新體制要綱が發表されて、統制はこの方面でも強化されることになつた。これまで日本の科學は個々分散的に研究されて、仕事の協同に缺けてゐた事を考へると、一定の組織のもとに學者の活動を集中し、統合しようといふ新體制は大いに意味がある事といはねばならぬ。

元來、學問上の共同研究といふものは、近代における科學的方法の確立を俟つて可能になつたのである。すなはち近代科學における觀察、實驗、推理等の方法は主觀的、獨斷的なものでなく、誰でもが自分の頭で理解し、自分の手で檢證し得るやうな客觀的なものである。かやうに客觀的なものであるから、全體の研究を分割して、各人がそれぞれの場面で働くことによつて協同するといふこともできるのである。この點、近代科學は、封建時代の學問とは本質的に異なつてゐる。同じことが政治上の協同についても考へられるであらう。今日いはゆる一億一心の國民的協同

が大切なことは異論のあり得ないことであるが、ただそのやうな協同が完全であるためには政府の政策に國民の誰もが理解し得るやうな客觀性とか、一貫性とかがなければならぬ。その意味での科學性、或ひは近代性が政治に要求されるのである。

ところで一つの全體主義的機構によつて學者の研究を統合するにしても、その統制下にある個々の學者が學問的良心を失はないで研究してゆく有能な人間でないならば、成績を擧げることではない。組織はもちろん重要ではあるが、組織の中に入る個々の人間がしつかりしてゐなければ組織のために彼等は却つてつぶされてしまふことになるであらう。組織の威光で自分の無能を隠したり、組織の壓力で自分の良心を曲げたりするやうなことがあつては研究の進歩があり得ないことは、自然のやうな客觀的なものを研究する學問の場合特に明瞭である。

政治においてもやはり同じことがいへるであらう。全體主義的な政治は、個々の國民がしつかりした人間であることを必要とするのである。わが國において統制經濟が困難であるのも、弱小な商工業が餘りに多いことによるといはれてゐる。國民のめいめいが立派でなければ全體主義は完全であることができず、却つて國民を無力化してしまふことになる。それが封建的政治と現代の全體主義との異なる點であつて、この全體主義が自由主義の後のものであるからといつて決し

て個人の完成が不要になつたのではない。特に自由主義が十分に發達しないで終つたといはれる日本の場合、今の世においても各人がめいめい働きのある、強い、立派な人間になるやうに心がけることが大切であつて、それで初めて職域奉公ができるのである。

(六月八日)

### 府縣ブロックの反省

府縣經濟ブロックが國民生活が無用に窮屈にしてゐる事が各方面で指摘されてゐる、この問題はいろいろ重要な示唆を含んでゐると思ふ。

元來、今日ブロックといふものはアウトアルキーの理念と結びついてゐる。つまり一定の經濟圈を設定し、その内部に於て自給自足を行はうといふのであつて、そこにおのづから閉鎖性が生じてくる。かやうな閉鎖的な自給自足は、それ自體として考へると、封建時代における經濟がそれであつたといひ得るであらう。それは局限された生産力、狹隘な交通、固定した社會關係に基いて成立したのであり、逆にそのやうな局限性、狹隘性、固定性を結果した。自由主義經濟は、生産力の増大、交通の發達等によつて、かくの如き封建的閉鎖性を破つて發展したのである。然しその結果また經濟は全く無統制、無計畫なものになつてしまつた。

いはゆるブロック經濟はある意味においては經濟の中世的な形の復活である。そこにわれわれは今日他の方面においていろいろみられる「新しい中世」といふものを認めることができるであらう。しかしながらこの場合においても、それは單なる中世の復活でなく、却つて新しいものの創造でなければならぬ。既に自由主義時代を経てきた今日の經濟はますます世界的になつてゐる。従つて、ブロックといつても封建的狹隘性のものであることは不可能である。今日は國といふものでさへ經濟單位としては狹小になり、廣域經濟といふことがいはれる時代である。世界がますます世界的になつた現在、ブロックといつても單に閉鎖的でなく、同時に開放的でなければならぬ。日本としても大東亞共榮圈といふ廣域經濟を考へてゐる場合、國內において府縣ブロックの如きものを考へることは經濟を封建的な閉鎖性と狹隘性に逆轉させる危險が多いのである。

同じことが文化の方面についていはれ得るであらう。日本文化とか日本精神とかを強調することはもちろん極めて大切であるが、封建的閉鎖的にならないやうに注意することが肝要である。日本文化の特殊性を考へるばかりでなく、東亞文化の全體について考へねばならぬ。自由主義の抽象的な世界主義は克服さるべきものであるが、しかし日本文化といひ、さらに東亞文化といつても封建的閉鎖性に陥ることなく、同時に世界文化に向つて開放されてゐなければならぬ。今日、

地方文化といふものが強調されてゐる場合、府縣經濟ブロックの問題に關聯して文化上において  
も反省を要するものがあるであらう。

(六月二十六日)

### 時間の新體制

節約は今日の國民の最も大きな道德である。從來節約と考へられたのは主として金錢の節約であつた。物資の節約といふことはあまり考へられず、考へられたにしても、金錢の節約といふ見地からであつた。物資の節約のそれ自身として重要であることが一般に理解されるやうになつたのは最近のことである。そして金錢の節約も逆に物資の節約といふ見地から考へられるやうになつた。それと同時に、節約が單に個人のためのものでなく、それがまた國家のためであるといふことが強調されるやうになつたのである。

然るに金錢の節約や、物資の節約と共に、今日特に力説されねばならぬのは時間の節約である。從來しばしば日本人は時間の觀念に乏しいと言はれて來た。今日では幾分改善されたにしても、まだまだ時間の節約は充分に行はれてゐるとは言ひ難い。「時は金なり」といふが、金錢の節約といふことも、時間の節約の見地から考へられねばならない。金錢の浪費は、物資の濫費になる

のみでなく、時間の空費になるのである。

時間の空費はそれだけ我々の生産性の減少を結果するのであつて、生産力の擴充が何よりも重要である今日、特に深く考へねばならぬことである。また時間は一般に我々の生活を量る最も基本的な尺度であつて、時間を尊重することは生活において秩序を尊重することである。生活の無秩序は極めてしばしば時間の觀念の缺乏から生じてゐる。生活の新體制は、先づ時間の尊重からといはねばならぬであらう。

時間の尊重といふ點で今日考ふべき現實の問題は、わが國家には會といふものが餘りに多いことである。筆者の如きでさへ、案内される會にすべて出席するとしたら、殆ど連日そのために時間をつぶさねばならぬことになり、時には、二つ三つと會の重なる日もある。殊に新體制がいはれるやうになつてから、會が多くなつた。しかもその會に出てみると、集まるのはいつも同じやうな顔觸れで、いつも同じやうなことを話してゐるに過ぎぬことが多い。かやうなことは各方面において普通のことではないかと思ふ。とりわけ官僚の關係する方面ではそれが甚だしいのではないか。調査會とか委員會とかいふものが多く、そのために却つて非能率的になり、責任の所在も不明になつて、效果も擧がらないといふことは、從來もよく言はれたことであるが、一向改ま

つてゐないのではないかと思ふ。會が多いのは時間の空費である。官界新體制として最も要望されてゐる事務の簡捷化といふことも時間節約の觀念の徹底によつて達せられる。自分の時間を大切にすると共に、他人の時間を尊重することが肝要である。

(七月六日)

### 流言蜚語の拂拭

相變らず流言蜚語が多いといふのは寒心すべきことである。流言蜚語は社會の秩序を破壊するものであるが、戦時においては殊にその害が大きい。それは國民を不安に陥れることによつてその團結を破壊するのである。戦時における流言蜚語が如何に恐るべきものであるかは、たとへばモーロアの『フランス敗れたり』を讀んだ人の誰もが氣附いたことであらう。

流言蜚語をなくするに最も必要なことは、物を科學的にみることを學ぶといふことである。原因結果の關係を認識し、あり得べき事と、あり得べからざることを判斷し得る人にとつては、流言蜚語は存在し得ないであらう。戦争といふやうな非常時においては物の見方がとかく現象的に流れて科學的でなくなり、そのために流言蜚語を生じやすいのであつて、かやうな時こそ特に物を科學的に考へてゆくことが肝要である。科學的な考へ方が國防國家體制の基礎であることは、

この一事からも理解されるであらう。

過般の翼賛會の中央協力會議において、國民にもつとものを知らせよといふ要求が諸方面から出たやうであるが、それは流言蜚語をなくするためにも甚だ必要な事である。政府は國民にもつとものを知らせなければならぬ。ただし、もし國民に科學的に考へる力が缺けてゐるとしたら、ものを知らせる事は却つて流言蜚語を生ずる原因になるだけである。

流言蜚語のうちでも單純に無知から出てゐるものは比較的その害も少く、拂拭することも容易である。暫らく時が経てばそれは自然に消滅してゆくから。しかるに何らか爲めにするところがあつて巧妙に用意され、執拗に散布されてゐるものは、それほど容易に消滅し難い。戰爭中においては各國とも宣傳に力を盡すのであるが、そこから生ずる流言蜚語もなかなか多い。流言蜚語はスパイ的な宣傳であるといふ事ができるであらう。流言蜚語にのせられることはスパイにかかることである。

流言蜚語をなくする最も手近な方法は、自分が聞いても他人に絶対に傳へないといふことである。流言蜚語は傳へられるに従つて大きくなる。そして人間は、殊にものを十分に知らされてゐない場合、自分の聞いた事は何でも特別のニュースであるかの如く他人に話したがるものである。

が、かやうな誘惑に打ち克つことが大切である。近來隣組の常會などが流言蜚語の製造所になつたり傳播所になつたりすることがあるかの如く聞くのであるが、治安上からも、防諜上からも、十分に注意を要することである。

(七月十六日)

## 文化上の國土計畫

最近私も東京に住んでゐる者でも新刊書が手に入らなくて困ることがあるのであるが地方の人には特にその歎きが甚だしいやうである。これは一方讀書熱が旺盛になつてきたのにも拘らず、用紙統制で本の發行部數が制限されてゐることに基くのであるが、それにしてもその配給が中央と地方とで餘りに不均衡であるのは宜しくないことである。殊に地方文化の發達がやかましくいはれてゐる折柄、地方への書物の出廻りが全く悪いといふのは見逃せない問題である。新設された配給會社などで地方の讀書狀況を調査して計畫的な配給を行ふことが要望される次第である。

地方における圖書の不足につけても文化上の國土計畫の必要が感じられる。國土計畫は今日國防の見地からも一般に重要な問題になつてゐる。その際さしあたり考へられることは、從來あまりに一ヶ所に集中してゐる産業の如きを分散させるといふことである。これは萬一空襲を受ける

やうなことがあつた場合、被害を少くするために必要である。しかるにこのやうな分散は文化上の國土計畫においてまた大切なことである。

例へば圖書について見ても、日本の出版業は殆ど全く東京に集中してゐる。そのために現在のやうに日本の品不足の傾向が出てくると、地方の人には愈々行きわたらないといふことが生ずるのである。これがもし例へばドイツにおいてのやうに、ベルリンにも、ライプチツヒにも、ミュンヘンにも、ケルンにもといふ風に、各地方に立派な出版書肆があるならば、地方の居住者の讀書慾の如きも一層よく満足させられ得るはずである。

もちろん出版書肆の分散の如きはそれだけとして考へられ得ることなく、そのためには地方の大學を盛んにするとか、現在あまりに東京に集中してゐる高等教育機關を地方に分散させることが必要であらう。そしてそのやうに分散することによつて大學の如きもそれぞれの特徴を發揮して發達し得ることになるのである。分散の必要はあらゆる文化について認められることである。

ここにも「新しい中世」といふやうなものが考へられるであらう。近代の中央集權主義に對して、中世では各藩の如きがそれぞれ中心になつて獨自の教育なり文化なりが發達してゐた。もちろん今日文化の分散といつても決して封建的な閉鎖性や分權主義の復活であつてはならない。地

方に分散する一方、近代的な開放性や中央集權主義をどこまでも活かした全く新しい形を創造するといふことがあらゆる國土計畫における根本理念でなければならぬ。

(八月二日)

### 生活正義の實現

今月の興亞奉公日に大政翼贊會では「生活正義」といふ題目を掲げてその實現を期した。生活正義といふのは耳新しい言葉で、語呂も悪いが、意味するものは去る七月新發足の興亞奉公日に取り上げられた集團化、協同化による生活新設計の内容であるとすれば、その實現は當然すべての國民の努力すべきことである。

翼贊會で生活正義に關する事柄として擧げてゐるものをみると、明朗な商業道德の樹立、買溜め、賣惜しみ、闇取引等の排撃、生活費の切詰めと最低豫算の確立、共同貯蓄の強化、社交様式の規準化、夏季における交通緩和への協力などで、いづれも結構であるが、いささか機械的な羅列で、問題の取り上げ方がやや表面的であるやうに思はれる。具體的であるのはよいことであるが、もつと根本の考へ方を示すことも大切であらう。さうでないと、生活正義といふものも形式的な、末梢的なものになる惧れがある。

昔から正義は特に社會的な徳と考へられてきた。すなはち正義は個人が自分自身において自分で實現し得るものでなく、すべての人が社會的に社會において實現すべき徳である。簡単にいふと、正義は社會的諸關係そのものうちにある。戦時負擔の均衡、物資分配の公平、取引の公正等、人間生活の社會的諸關係のうちに正義が考へられる。ヒットラーの「戦争で一人の成金のできることも許されない」といふ言葉は正義感の現れである。ある者は儉約してゐるのに、他の者は贅澤してゐるといふが如きことは正義に反する。

かやうにして生活正義といふものは、近衛公が第一次の組閣の際に宣言した「社會正義」を基礎にして考へられることであつて、社會正義を離れては生活正義も考へられない。生活正義といふ耳新しい言葉のために根本の社會正義の問題を忘れてはならぬ。他に向つて犠牲を要求する者が自分では犠牲を回避するやうなことがあつては正義に反するわけで、何事も率先して實行することが正義の要求である。正義は單に個人的にでなく社會的全體的に實現される徳であるから、生活正義にとつて根本的に重要なことは國民生活の協同化である。

生活正義といふ場合、日常生活のことが考へられてゐるやうであるが、われわれの極めて日常的な生活も元來社會的なものである。それは經濟的・政治的諸關係によつて規定されてゐる。従つ

て生活正義が實現されるためには、經濟や政治に於る正義が實現されなければならない。昔から正義は特に社會的な徳と考へられたところから、正義は國家の力によつて實現されるものと考へられて來た。つまり強力な政治が必要なわけであつて、これに國民が協力することによつて生活正義といふものも眞に實現されるに至るのである。

(八月六日)

### 日本人の複雑性

先日或る雜誌の座談會に出たら、日本人の複雑さといふことについて話が出た。その時は立ち入つて検討されないでしまつたが、これは日本の現在を考へる上に重要な關係がある事柄ではないかと思ふ。

たとへば、日本人は熱し易く冷め易い國民であるといはれる。確かにさういはれてよいところがあるのである。けれども他方事變後既に四年以上を経て來た今日を考へると、日本人にもなかなか持久力があると感ぜざるを得ない。今後についても、私は日本人の持久力は安心できると思つてゐる。しかし必ずしも國民に、政治に對する信頼が十分にあるわけではないであらう。むしろ國民の多數は絶えず一層強い政治力を求めてきたし、現に求めてゐる。それでゐて、國民はい

つもおとなしく政府についていつてゐるのである。その心理といふものは複雑で、決して一本調子ではない。

日本人の複雑さを考へる場合、私は徳川三百年がこのやうな日本的性格を作るにあづかるところが大きいやうに思ふ。近年、日本的性格を論じるのに古代に溯つて考へることが普通になつてゐるが、理想を求めるにはもちろんさうでなければならぬけれども、今日の現實の日本人の性格においては徳川時代からの傳統によるものが多いのである。日本人の複雑さといふものも徳川時代に作られて、それがいはゆる日本資本主義の後進性と關聯して、新しい要素を加へながら今日まで繼がれてゐるのである。

複雑であるといふことは、それだけ適應性が大きいことである。どのやうな境遇におかれても、それに適應して生きてゆくといふには、單純でなく複雑でなければならぬ。複雑であるといふことは、それだけ心が練れてゐることでもある。日本人が現實的であるといふことも、それに關係があるであらう。そこから持久力も生じるのであるが、しかし他方、その複雑さは消極性と停滞性をともなひ易い。その適應の仕方は單に消極的ではないにしても——單に消極的であるなら複雑とはいはれない——積極性の重要な要素である集中性、感激性を失ひがちである。今日の日

本の前進のためには、そのやうな消極性と停滯性を、特にそれが封建的性質を帯びてゐる場合、克服してゆくことが必要である。

日本の政治の難しさも、かやうに複雑な國民心理の上に政治が行はねばならぬところにある。しかし他方、現在日本人の複雑さといふものは政治の影響によることも多いのであつて、複雑さを超えて國民を一層積極的行動的にするやうな感激のある政治、明瞭な一貫した方針のある政治が要求されるのである。

(八月二十日)

### 神經戰への用意

近代戰のひとつの特色は神經戰にある。戰爭の種々の形態が今日においては神經戰の意義を含んでゐる。例へば宣傳といふものも、敵を不安にし、心の落着きを失はせるといふ目的に使はれる。また空襲の如きも、それが與へる實害のみでなく、むしろその實害以上に敵の神經を疲らせ、一般的な神經衰弱の状態を惹き起すことを目的としてゐるのであらう。

臨戰態勢といふことの叫ばれる現在、先づ必要なことが物的準備を整へるにあるのはいふまでもない。事變以來すでに四ヶ年以上を經過してゐるのに、各家庭の防空設備の如きがなほ完全で

ないといふのは遺憾な事である。これは、今までわが國土が一度も爆彈にさらされたことがないところから、現に戰爭をしてゐながら戰爭といふものが甚だ觀念的に考へられてゐたことによるであらう。またその原因は、從來あるゆる方面に抽象的な精神主義が支配してゐたところにもあるであらう。今やそのやうな觀念的な、或ひは精神主義的な考へ方を超えて、戰爭に對する物理的な實質的な準備が急速に進められなければならないのである。

しかしながら他方、今日極めて大切なことは、國民の各自が神經戰に對する用意を整へるといふことである。その用意は十分であるとはいへないやうに思ふ。種々の流言蜚語の生じてゐるのは、そこに何か不安があるためではなからうか。隣組の常會などがそのやうな流言蜚語の製造所乃至傳達所になつてゐるといふが如きは、神經戰の重大性に對する認識が國民の間に行きわたつてゐないためではあるまいか。或ひはまた臨戰態勢といふことでひどく興奮して妙に張り切つてゐるといふやうなことも、神經戰に對する用意を知らないものといはねばならぬであらう。もちろん緊張は絶対に必要である。しかしそれが神經質にならないやうにすることが肝要である。妙な張り切り方は不和の原因となり、他の人間をも徒らに神經質にするものである。つねに心のゆとりがなければならぬ。過日、柳川翼贊會副總裁が國民に落着きを持てといはれたのは、まこと

に適切な注意であつた。恐るべきものは一般的な神經興奮とその反面の神經衰弱である。

神經戰への用意として大切なことは、あらゆる事柄に對して合理的に、科學的に考へてゆくといふ事である。常に理性を失はないで、あり得べきこととあり得べからざることとを區別しなければならぬ。これは今日の如く國際間の宣傳が盛んなときには殊に大切である。その宣傳にのせられて絶えず一喜一憂して心の落着きをなくするやうなことがあつてはならない。宣傳戰が神經戰であることを理解することは、神經戰に對するときに必要な用意である。（八月三十一日）

## 戰爭の見方

事變以來、軍人が物を書いて意見を述べるが多くなつたのは當然の現象であらう。その中にはもちろん批評の餘地のあるものもあるが傾聴に値するものも尠くない。殊に戰爭に關することでは、さすがに専門家だけのことはあると思はせるものがあるのである。

私の最近讀んで特に興味深く感じたのは、濱田吉治郎海軍中將の「政策・戰略・戰術」（『國防教育』十月號）といふ小論文であつた。その中で濱田中將はまづ、今日のやうな廣域にわたる戰爭においては、局部の勝敗では全局の勝敗は決定しないので、個々の戰鬪のために全體の戰爭を

忘れてはならぬと注意してゐる。これは簡単な眞理であるが、日々の新聞のセンセイショナルな記事を見てゐると、とかく忘れられがちになるのであつて、つねに注意を怠つてはならないことである。

次に濱田中將は、海陸を包括する大戦略の必要を詳しく述べてゐる。日露戦争における乃木將軍の旅順攻略は、ロシアの東洋艦隊を自滅に導いたものであり、逆に東郷元帥の日本海海戦は滿洲におけるわが陸軍の後方を安全にしたもので、陸軍戦略の一部である。今度の戦争においても、ドイツが勝利を得るためには、イギリスの海軍を全く無力にしてしまふことができればならぬといふのである。

ところで、濱田中將によるとイギリスの政治家にはこのやうな戦略的知識を持つてゐる人が傳統的に多く、殊に戦時の首相になつた人は、みな大戦略家でもあつた。ナポレオン戦争時代のピット然り、前大戦のロイド・ジョージ然り、チャーチル然りである。もちろんヒットラー總統も決してこれに劣るものとは思はれない。顧みてわが國の政治家はどうであらうか、「敵の悪口をいっただけでは敵は參らない。イギリスの悪罵はよく聞くことだが、志氣振作のための敵を罵ることの必要な場合もあるとは思ふけれど、敵性國家の長所を知つて、これに對する對策を講ずるこ

ともまた極めて必要なことである」と濱田中將は論じてゐる。

國防の上からいふと、戰術は一部分であつて、戰術の上に戰略があり、戰略の上にさらに國家の政策がある。戰術・戰略・政策が密接な關係を保ち、相互に合致しなければならぬことを濱田中將は強調してゐるのである。戰爭と政治とは一つのものでなければならず、戰爭を政治的にみることを忘れてはならない。

今日、重要なことは、政治家はもちろん、すべての國民が戰爭の眞の見方を知つてゐることである。個々のニュースに徒らに心を奪はれることなく、戰爭を全體の立場から正しくみることを知つてゐるといふことは、高度國防に協力するために極めて大切なことである。(十月五日)

## コラム 『大波小波』

### 悲劇の問題

先年ドイツから派遣されて日本へ来てゐたシュプランガーの「如何にして國民的性格を把握するか」といふ論文の最後に次のやうに書いてある。

「民族の最も豊かな姿は偉大な悲劇的文學のうちに現はれ、他のどこにも同様の純粹さと深さにおいて現はれない。或る民族がもはや何等偉大な悲劇をその最も内面的な所から作り出し得ない場合、その民族は究極の深みにおいて既に崩壊してゐるのでないかと氣遣はねばならぬ。英雄的な行動と英雄的な悩みとは相伴ふ。その結果はつねに悲劇的なものである。諸民族よ、何を汝等が悲劇的として體驗し、如何にそれを切抜けたかを語れ、何を汝等がそれから悲劇の姿において表現し得たかを示せ、さうすれば私は、汝等が如何なるものであるかを告げよう。」

この要求に對して我々日本人、殊に文學者は如何に應ふべきであらうか。ともかく今日わが國

の文學には悲劇的なものが餘りに乏しいやうである。それはことさら回避されてゐるやうにさへ見える。たとへば日支相戦ふは「東洋の悲劇」であるといはれる。しかしそれは果して眞に悲劇的として體驗されてゐるであらうか。數年前不安とか危機とかを言ひながらそれが何等内面化されなかつたやうに、今日もまたそのやうであるのか。

それとも我々はシュプランガーの説においてドイツ精神と日本精神との根本的な差異を見るべきであるか。——危機意識、悲劇的精神とかについて深く考へてみなければならぬ。

(一九四一年十一月三日)

### 學術の協同と綜合

日本の歴史は大きな飛躍をしてゐる。わが學術思想界にも同じく飛躍がなければならぬ。これはもちろん、徒らに大言壯語したり或ひは只他に號令したりすることで出来るものではなく、各人が絶えず自省して研究に精進することによつてのみ可能である。

先づ必要なのは協同である。官私、派閥、専門、その他種々の人間的感情にもとづく對立や反感を一掃して、眞の協同が行はねばならぬ。すべての智能を國家的見地から最も能率的に働か

せる工夫が大切である。遊休設備があつてはならぬやうに、遊休人間といふものがあつてはならない。

要求されるのは研究において實踐的であるといふことである。即ち我々は日本の現實が直面してゐる問題の解決に眞剣に努力しなければならぬ。これはもちろん單にいはゆる實際的な問題にのみ没頭することではない。大東亞戰爭の目的が新秩序の建設にある以上、そこに當然新しい理論がなければならぬのであつて、純粹に理論的な問題の研究も重要である。ただその理論は現實から游離することなく、現實の中から形成されてこなければならぬ。従つてまた實證的研究家と理論家との間にもつと密接な連繋がなければならないと思ふ。

研究の協同と關聯して大切なのは學術思想における新しい綜合である。これまで例へば日本の研究、支那の研究、歐米の研究等の間に協同が缺けてゐて、その諸成果を大きく綜合して新しいものを作るといふ努力が足りなかつた。今日必要なのはただ東亞の研究のみで歐米の研究の如きは無用だと考へる者があるとすれば、間違つてゐる。新しい日本の綜合こそ要求されてゐるのであつて、我々の建設すべき新秩序が世界史的意義を有するとはその意味である。戰爭のために諸外國から切り離されてゐるといふことは、わが學術思想界にとつて獨自のものを作好機會で

あるともいへるが、同時に獨善に陥らないやうに戒心しなければならない。

(一九四二年一月四日)

## コラム 『銃眼』

### 日本とドイツ精神

近年、日本精神といふことが頻にいはれ、その特殊性について喧しく論ぜられ、西洋思想の排斥さへも唱へられてゐるに拘らず、日本精神とドイツ精神との差異は餘り語られてゐないやうである。むしろ今日行はれてゐるのはドイツの模倣に過ぎぬものが多いと批評されるほどである。かやうなことはいはゆる日本精神が甚だ政治的なものであることを考へさせる。

もし政治が國民性を基礎にしてゆかねばならぬとすれば、日本精神とドイツ精神との差異を知ることが重要でなければならぬ。ドイツ精神の上に立つといふナチス的政治が果して我が國民性に適するかどうかが問題である。

ナチズムは何でも規格的事であることを好むドイツ人の性質に基くといはれてゐる。これも一つの説明である。しかし私は、もつと根本的なものはドイツ人における悲劇的精神ではないかと思

ふ。歴史は悲劇であるといふ思想は全くドイツ的である。この頃のナチスの書物を見てもこのやうな悲劇の觀念、そして運命の觀念が到る處に見出されまた感ぜられる。古代ギリシアと音樂——ドイツ人の愛する二つの——の精神を悲劇の精神と考へたニーチェにナチスの思想の源泉が求められるのも偶然でない。

しかるに日本人に缺けてゐるのはまさに此の悲劇の精神である。日本的といはれる心中の如きも悲劇的ではない。日本人にも一種の運命觀はあるが、悲劇的ではない。日本精神とドイツ精神とがこのやうに異なつてゐるとすれば、日本においてナチスの獨裁政治は可能であらうか。

日本と支那とは提携してゆかねばならない、それだのに今兩國は血腥い戰爭をしてゐる。これほど大きな悲劇はない。支那事變は日本の經驗したいづれの戰爭よりも重大であり、それが國民生活に及ぼす歸結も極めて深刻であるに相違ない。しかし日本人は今眞に悲劇を感じてゐるであらうか。誤解のないやうに云つておかねばならぬが、悲劇はいはゆる悲觀と同じでない。ナチスの獨裁政治は果して日本の國民性に適するであらうか。(五月十七日 年不詳)

## 教師の小吏根性

小學校の生徒に對して國防獻金を行はせたとき、板ノ間稼ぎをする子供が出た。また彼等に對して物資節約を獎勵したとき、墓所の鐵柵を盗む者が出た。これは東京で生じた事件であるが、すべての教育家の反省しなければならぬ問題を含んでゐる。

子供に愛國心を起させ、貯蓄心を養はせることは、もちろん大切である。しかしその精神を取らないで形式に墮する場合、弊害は大きい。しかもこの弊害はこの頃特に教師の小吏根性に基くことが尠くないやうに思はれる。自分の利益のために上長の意を迎へて外に見える成績だけを善くしようといふのは小吏根性であるが、そのやうな小吏根性が官界ばかりでなく教育界にも充滿してゐるやうに思はれるのである。

親からあり餘る小遣を貰つて浪費してゐる子供に對して獻金や貯蓄を強制的に行はせることに意味がある。けれども、そのやうな餘裕のないのみか日常の生活にさへ事缺く貧しい家庭の兒童に對して同じやうな義務を説くことは幼い者の心を種々に傷つけることになるのである。現に東京市を初め全國において今も多數の缺食兒童が存在してゐる。まづ彼等のことを心配するのが、

國民精神總動員の一つとして保健の重要性が力説されてゐる場合、先決問題ではないか。

官僚獨善の弊害はすでに久しく叫ばれてゐるが、かやうな弊害の存在するものも、一面から見れば、國民がその存在を許すほど不見識であるためである。とりわけ教育界における小吏根性の官僚獨善を助長してゐることが多い。およそ社會の諸現象は孤立したものでなく、一方に或る事實が存在すれば他方に必ずそれに相應ずる事實の存在するものである。すべての者が大國民にふさはしく見識のある人間となることが今日大陸に飛躍しようといふ日本にとつて要求されてゐる場合、國民教育に最も深い關係を有する教師の間において、國民精神總動員の運動以來、小吏根性が特に著しく目立つやうになつてゐはしないであらうか。

(六月十二日 年不詳)



※「意」「受」「起」「授」「博」「勇」は、旧字体と混ざっているが新字に統一する。

※カタカナ表記で、不統一である「ジイド」と「ジード」、「ソヴェート」と「ソヴェト」、「ディレッタンチズム」と「ディレッタンティズム」、「デモクラシー」と「デモクラシイ」、「ヒューマニスチック」と「ヒューマニスティック」、「ヒットラー」と「ヒトラー」、それぞれそのままである。また、次もそのままである。「ヴィーン」「ヴィジョン」「ヴィルヘルム」「ヴェランダ」「ヴァント」「コンミニズム」「サーヴィス」「デモクラチック」「シルレル」「ムソリーニ」。

## 後記

第十六巻編者久野収によると、本巻は三つの部分からなる。単行本として作品社から出版された『時代と道徳』『現代の記録』と、出版はされなかったが、同じく新聞時評を集めたものである。その2著と「続現代の記録」と題されたものは、読売新聞の『一日一題』欄に寄稿されたものである。『東京だより』は、『大新京日報』と思われる満州の新聞に寄稿されたものと久野収は記している。

『窓外』は、『新愛知』夕刊、『一朝一夕』は、『名古屋新聞』夕刊、『大波小波』は、『都新聞』（東京新聞の前身）、『銃眼』は、『河北新報?』に寄稿されたものである。

久野収によると、『時代と道徳』（1935（昭和10）年12月刊）を西田幾多郎が推賞し、田邊元も「民間で苦斗する知性でなければ書くことが出来ない批評精神のモデルだ」と激賞したという。また、戸坂潤の『思想時評』、中井正一の週間文化新聞『土曜日』の巻頭言などとの相互比較も重要であろうといい、さらに、エルンスト・ブロッホの抵抗的思想評論『現代の遺産』、ヴァルテル・ペンヤミンの抵抗的文化評論『イルミネーション』『新しい天使』との相互比較も興味深いだろうという。

底本：三木清全集第十六巻 1968.1.17 岩波書店刊

作成者：石井彰文

作成日：2009.2.14

修正日：2009.4.30; 一字修正「新段階」→「階」

後記